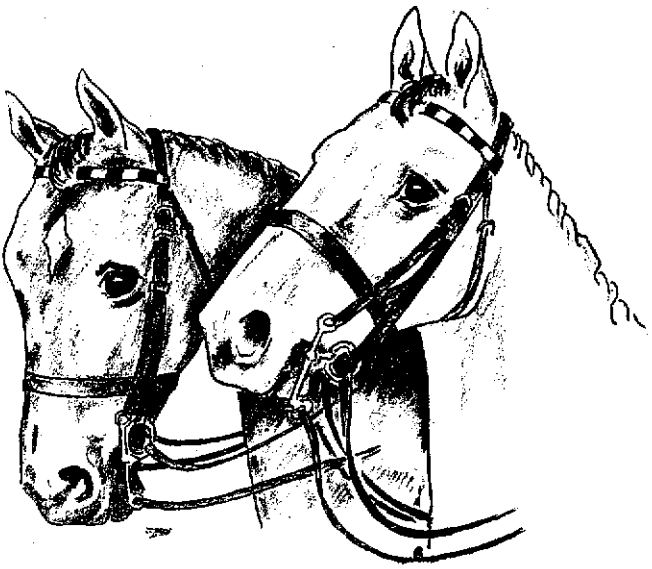


北海道大學馬術部三十年史

1961



北海道大学体育会馬術部

目次

序……吉田亨

三十年史発刊にあたって……（一）
北海道大学体育会長　杉野目晴貞

馬術部三十年史発刊に当って……（三）
馬術部長　太秦康光

馬術部三十年史に寄せて……（六）
学生部長　田口啓作

馬術部発足当時の想い出……（八）
初代部長　永井一夫

過去十年……（九）
馬術部顧問　松本久喜

うら若き日の悦びを……（一三）
三五年度主将　大場善明

新らしき時代を迎えるに当って……（一七）
三六年度主将　千葉祐記

解説……（二五）
編集委員

年報

昭和五年度……（一八）
昭和六年度……（三二）
昭和七年度……（三二）
昭和八年度……（三四）
昭和九年度……（三五）
昭和十年度……（三七）
昭和十一年度……（三八）
昭和十二年度……（四〇）
昭和十三年度……（四二）
昭和十四年度……（四三）

以上編集委員

昭和十五年度……石井和彦……（四六）
昭和十六年度……岡田光夫……（四七）
昭和十七、十八年度……編集委員……（五〇）
昭和十九年度……小林正英……（五一）
昭和二十、二十一年度……編集委員……（五三）
昭和二十六、二十七年度……古谷昌司……（五四）
昭和二十八、二十九年度……鎌田正人……（六一）

















昭和三十年度……大久保利彦（六五）
昭和三十一年度……荒川清（六八）
昭和三十二年度……樋口正明（六九）
昭和三十三年度……生田勝一（七四）
昭和三十四年度……森本悌次（七九）
桜尾会馬術部設立のこと……小林誠平（八一）
在京O・B会結成について……樋口正明（八二）

▽回　想△

乗馬会の思い出……平山常介（八五）
北大乗馬会時代を省て……中野友二郎（八六）
在部当時を顧みて……東園基文（八九）
第十一回全日本馬術選手権大会の想い出……菅間威（九二）
部員時代の思い出……滋賀秀明（九五）
昭和十二年の思い出……山下正亮（九七）
思い出すままに……桶本勝登（一〇〇）
昭和26・27年頃……斎藤善一（一〇四）
馬達のことなど……下飯坂隆（一〇六）
随想……鎌田正人（一〇九）
雑感……乾直道（一一七）
一米七〇糎の壁……森本悌次（一一九）
国体自馬中障に優勝するまで……大場善明（一二四）
お嬢さん奮闘記……佐藤典子（一三三）
散重念……半沢道郎（一三七）

今日この頃

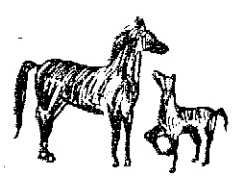
街乗の記……原重一（一四一）
自馬繋養管理の現況……広岡暢夫（一四三）
最近の練習状況……小山毅（一四七）
部日誌より……志水一允（一五三）
合宿参加の記……荒木伸也（一六一）

諸記錄

グラビア……三浦清一郎
自馬紹介……玉沢一晴（一七一）
戦績表……大場善明（一八三）
カップ写真……大場善明（一九九）
住所録……小島武（二〇六）
北大馬術部規約……（二〇四）
カット……渡辺正明・恩田正臣・滝沢迪子
写真撮影……榎本幸人・三浦清一郎・宮崎健

■編集後記■





北海道大学馬術部三十年の歩み

――その昔
青春の糧として
馬を愛して生きた
先人達の尊い足跡
努力に培われた豊かな日々を讃えるに代えて



北海道大学馬術部十年誌
（昭和十五年度発行）



昭和十五年度発行



昭和十八年度発行



昭和十六年度発行

戦後馬術部復活後の部報

昭和三十年度発行



昭和三十一年度発行



昭和三十二年度発行



昭和三十三年度発行



昭和三十四年度発行



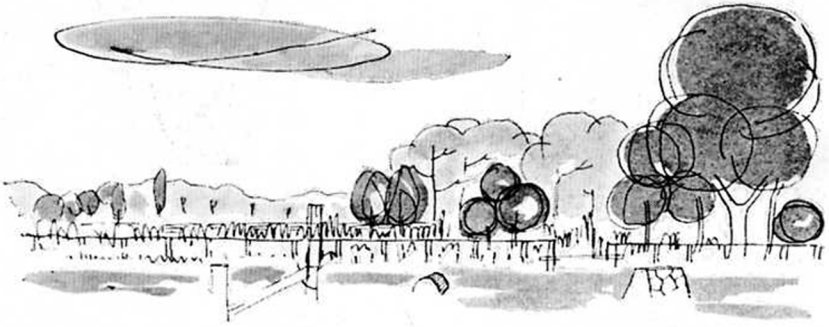
馬術部の四季

限りない　季節の変転

春は　花々と　光の中に　憧れや　願いやを秘めて　若々しい
息吹きに溢れて帰ってくる

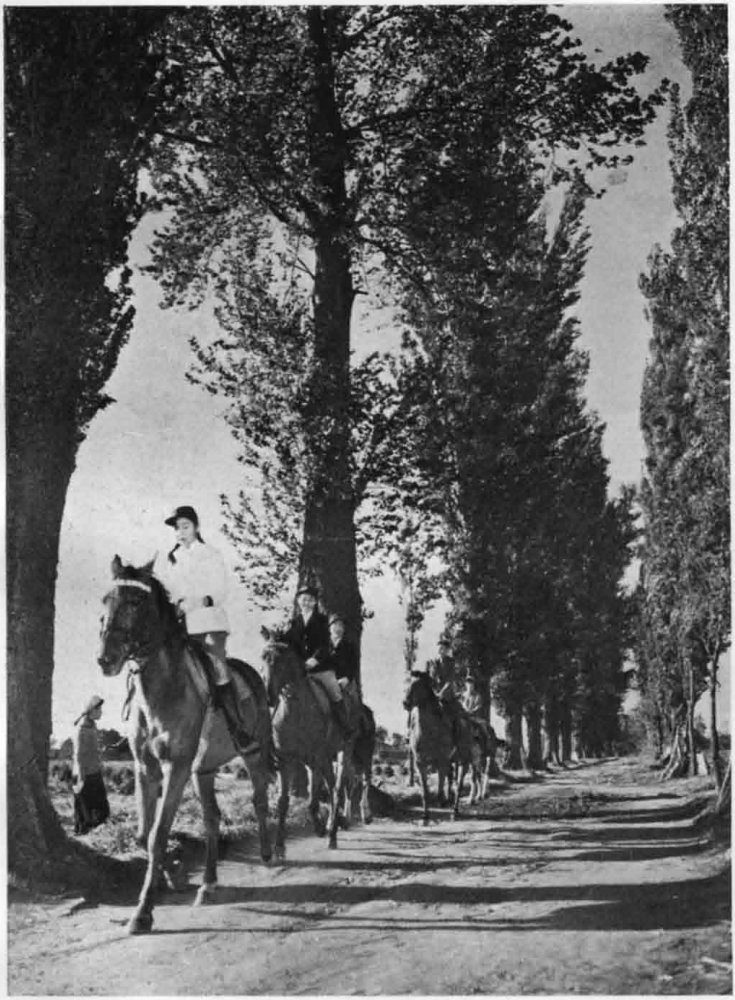
秋は　舞い散る銀杏や　スペード型のポプラの葉蔭に
馬達は　遙かなる旅人の思いを知る

静かな雪に　冬が来る
やすらぎと　懐しさとが帰ってくる



春

太陽は万物に　恵みをたれ　馬達の長い影法師をひいている大地も凍てついた冬の季節から解放されて　草々も柔らかな芽を育くむ。
孤独と沈滞は去って　明るい春！　雲雀は高く！　ポプラの梢はるかに。



ポプラ並木にて

北海道大学馬術部女子部員及同好会員　（朝日新聞社撮影）

朝の練習開始





練習終了



春季部内競技会（五月）
名物　パン喰競争



山々には雪が消え残っている
五月の　微風の中の
爽々しい　部班運動練習

夏

陽ざしが強くなって　こぶしや　たんぽぽの花が消えると　草原は
白い野茨に飾られる。
札幌に　夏が来る。
馬達のたてがみは　風に流れて黄金色に光り　青空に明るい嘶きは
吸われる。



北大構内ポプラ並木にて
北涼号母子
（正面建物は北大農学部）

合宿

とうもろこしが畑に実る
こんもりと　並木の奥に　牧草の山のいくつか……
一年坊主は初めて拍車をつける
馬術部の生活は　今こそそのピークに達する。



ポプラ並木　道路工事作業終了後の記念撮影

マラソン！
アブミ上げー
　道路工事！
　乾草上げ！

すいみんと　飯と　語らいと
が　すべての疲れを癒してくれる



乾草上げ作業

夏になれば
北国の陽ざしも強い
透き徹った大空の下で
白いタオルを首に巻いた若者達は
干し草の埃と　汗にまみれる
女子部員達の運ぶ
冷い水の旨さ

砂糖が入っていたらなあ！
時々　こんなことも考える
ことだろう

合宿の炊事当番は　悲劇の
主人公を演ずる
馬術部には
遠い昔から〝炊当は人ではない〟と
いう言い伝えがあるとか？



食事の仕度に余念のない炊事当番



夏のパドック風景　馬をつないで帰る一年生達

夏の日

昼の休みになると
部員達はどこからともなく
楡の木影　緑の芝生へやってくる
馬達に水を飲ませ
小暗い森へ　つなぎに行く
あとを絶えぬ観光客
涼しく光る少女達の瞳の中を
何か　照れくさく　誇らしく
馬と並んで行く

昭和33年から北大が主催で始められた全日本女子学生馬術大会も今年は四回目を迎えた。
夏の北大馬場に熱戦を繰り広げる各校女子選手。



第四回全日本女子学生馬術大会
於　北大馬場
早稲田大学　田中選手
北斗号

秋

夏の白い雲が流れ去ると　北国の秋は早い
黄ばんだ木々の葉や　取残された牧草の山に　風だけが静かに過ぎて行く



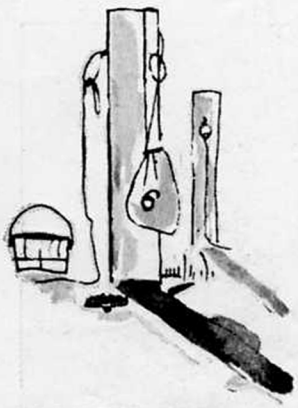
ポプラ並木の奥に続く細道は
アカシアの並木道！
そして
道が尽きると
広い牧草地になる
秋も深まる頃
峰々だけが　白い衣をまとう
若者達は
ぬかるみを避けて
くさはらに　馬を駆る

夏から秋へ　馬術部の生活は「合宿」と「遠征」とに明け暮れる

戦い！――そこでは常に勝者でなければならない！



東京遠征





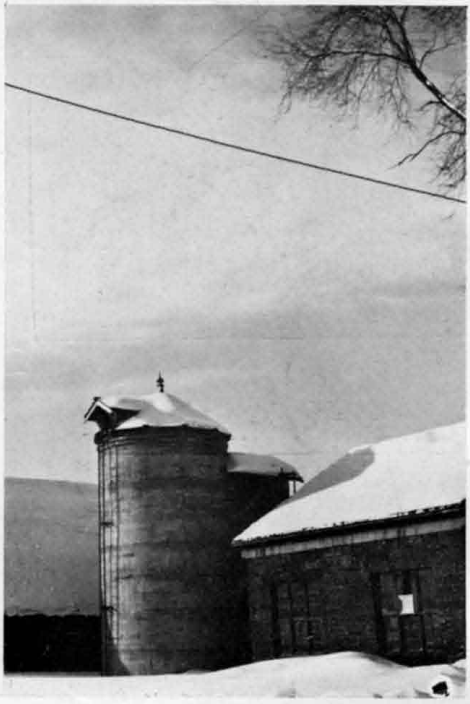
日高遠征合宿
北大実験牧場に於て
「ドンカー」にのる風景

晩秋から　初冬の頃
一年間の多彩な行事も　どうやら
終りを告げると
下級生達が　遠乗りや　遠足に
浮々と心を躍らせる日が訪れる



冬

雪の夜は　ストーブが　赤々と燃えて
若者達は　湯気の立つ馬鈴薯に舌づつみをうちながら語り合う
馬達は　温い干し草の香の中に　新しい春を夢む
渺茫たる冬は　厳しい吹雪の中にも静寂と安らぎとを運んでくる



冬の馬術部部室附近

鉛色の空が　今日も重く広がって
エルムの鐘も　遠くまで響かない
サイロの頂きに到る長い鉄梯子が
淋しく　影を曳いてるだけで……
鉛色の空が　今日も重く広がって——



雪に埋れたパドック
正面ポプラの彼方が厳冬の手稲山



銃を背負ってのアルバイト

映画
「敵中横断三百里」
ロケーションの一コマ



厳冬！

吹雪は馬場も　並木道も　草原も　雪で埋める

部員達は

吹きつける粉雪にもめげず

人通りを避けて

そこここの道で練習を続ける

道路騎乗の季節

クラーク会館附近にて

右正面　手稲山

左正面　三角山

馬術部部旗



幾たびか北大馬術部栄光の
道の先頭を歩んだ緑の部旗



戦後の卒業記念メダル

モノグラム

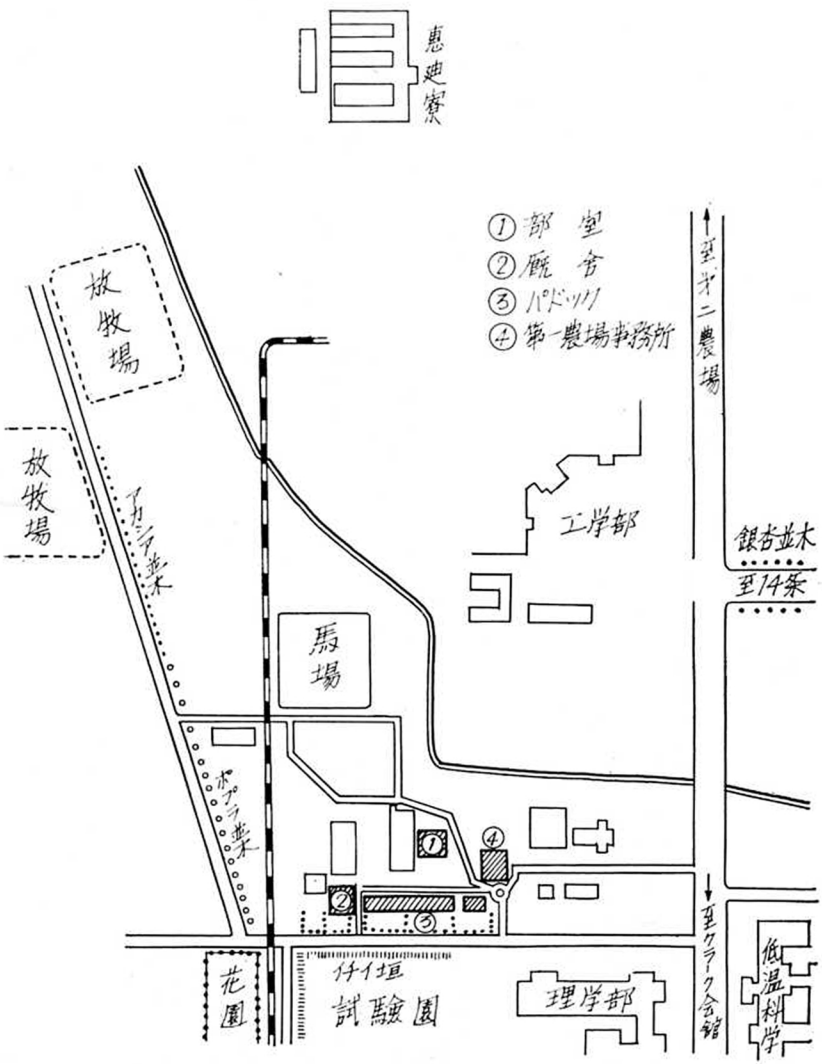


ペナント



（モノグラム・ペナントに関する歴史は、巻末に説明をつけました。）

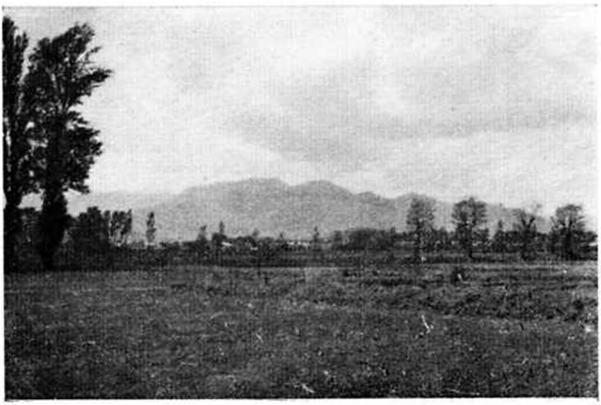
北海道大学馬術部案内図



我が北大馬術部は、昭和五年の創立以来、ここに三十年の歩みをしるすに至った。この間、大宇宙は、千変万化、著しい進歩発展を示している。そしてまた、我が馬術部も、幾多のいばらの道をたどり、数かずの変遷を経ながらも、力強い歩みを続けて来た。

しかし、時移り人変わるとも、馬を愛し馬を通じての心は、常に一つのものであろう。

今日の歴史をひもとく前に、先人達の残していった若き血潮と力の、汗と涙の結晶に心したい。そして、よりよき美珠(たま)と磨かんと、我われもまた、喜んで若き情熱と涙をそそごうではないか。



三十年史発刊にあたって

北海道大学体育会長
杉野目晴貞

光輝ある北海道大学体育会馬術部が、昭和五年、北海道帝国大学文武会馬術部として創立されてから三十年をむかえ、このたび、三十年史の編纂をみるにいたったことは誠に意義深いものがあります。

創立以来、わが馬術部は、名部長を戴き、部員諸君のたゆまざる精進により赫々たる輝かしい業績を挙げられて、今や、北海道のみならず全日本の馬術部にまで発展したことは欣幸にたえないところであります。

わが馬術部の歴史を繙けば、昭和五年、初代部長永井一夫教授のもとに、第七回全国高等学校馬術競技大会（インターハイ）において予科が第二位を獲得したのをはじめ、翌昭和六年には第二代部長高松正信教授のもとに、第三回全日本学生馬術選手権大会で、東園（旧姓伊達）氏が優勝しております。また、昭和九年には黒沢亮助教授が第三代部長となり、昭和十二年帝大連盟馬術定期戦（現国立七大学馬術定期戦）を結成した際、その第一回大会に優勝し、昭和十四年に現在の部長である太秦康光教授が就任されたのであります。昭和十九年から二十五年までの七年間、戦争その他困難な悪条件にもとづく部活動の中断があったにも拘らず、昭和二十六年、古谷、渡槻、下飯坂氏等を中心に完全なスポーツ団体として再出発、爾来、昭和三十年の戦後第四回より連続四年にわたる国立七大学馬術定期戦優勝をはじめ、東北・北海道地区学生馬術大会、東日本学生馬術争覇戦、全日本女

子学生馬術大会、国民体育大会、全日本馬術大会、関東北女子学生馬術大会等々の優勝をはじめとして、殆んどあらゆる大会に参加してその度毎に優秀なる成績をおさめ、一段とその名声を高めてまいったのであります。

この輝やかしい成績も、実に歴代の名部長をはじめとする全部員諸君のあふるるばかりの熱意とたゆまざる努力との結晶であり、又「人間同志よりも理解出来る存在であると同時に、学びつくすことの出来ない存在でもある。」といわれている『馬』と、毎日、寝食を共にし苦楽をわけあって生活して来たことにより得た愛情と科学的研究心の賜といえるのであります。「騎手と馬とは合わせて四眼となるが、六脚とはならない。」という言葉がある様に、人と馬とが二心同体（DUPU LICH CORDE）となって競技することが出来るのも、実に、この努力があればこそであります。よく「馬術は非常に費用のかかるものであり、貴族趣味である。」などという人がありますが、わが馬術部員の日常の訓練状態を一見すればその偏見は立所に消え、『馬』を通じて人間性をたかめるところにその重大な意義があり、全人教育の一つの場をそこに見出すことができるのであります。わが馬術部は、健全な学生々活を全うすべく、全人教育の一環としての課外活動を通じ、乗馬技術の向上による資質の啓発と、スポーツマン精神の培養による人格の陶冶につとめるとともに、あわせて馬事思想の普及に努め、ひいては日本馬術界に寄与せんとするところにその意義をもっております。三年後に行なわれる東京オリンピック大会を契機に、国際的な大会にも出場しうる機会がますます増えてゆく気運にあることはまことに結構なよろこばしいことであります。

創立三十周年にあたり、良き先輩諸兄によって培われた逞しい不屈のフロンテイア・スピリットをもって、今後とも大いに研鑽をつまれ、わが馬術部がいよいよ発展し、国際舞台においても大いに活躍されるよう希ってやまないものであります。

馬術部三十年史発刊に当って

馬術部長　太秦康光

昭和十五年という年はいろいろの意味で思い出の年であった。この年は皇紀二千六百年というので国をあげての記念式典が行なわれたし、私の属する日本化学会は札幌で始めて全国的な年会を開催した。一方われわれの理学部は開学十周年に相当したからこれまた祝賀の式典をやった。私が馬術部長に就任したのもこの年の四月であるが、わが馬術部も昭和五年設立以来十年を経過したので北大馬術部十年誌を刊行した。偶々この年の夏にはインターハイで北大予科が優勝、更に全日本でも昨年ヨーロッパで惜しくも客死された菅間威君が出場、見事制覇の偉業をなしとげたのであるからわが部にとっては正に最良の年であったといえよう。

爾来二十年の歳月は夢と流れた。十年一昔という言葉があるが、馬術部創立もはや三昔となったわけである。しかし十年誌発行後のこの二十年はただの二十年ではなかった。そこには苦しいいばらの道もあったし、けわしい山坂もあった。よくぞたどり来しとも思われる二十年ともいえるが、とにかくにもここに三十年史を刊行する運びとなったことはめでたい限りである。

昭和十六年太平洋戦争に突入してからは、すべてがいわゆる戦時体制となった。今まで文武会馬術部といわれたものが、北大報国会鍛錬部騎道班といういかめしい名前に変わり、馬術部長は騎道班長となった。戦前第一農場の厩舎にいた乗馬は十頭余り、これは農学部畜産学科で乗馬演習が正課となっていたのでそのための馬であったが、戦況が苛烈となるにつれて馬糧にも次第に事を欠く有

様となり、これらの馬も一頭減り二頭減り、障碍飛越で盛んに活躍した見るからにスマートだった宮武号などもあわれ癈馬のうき目をみるようになった。月寒にあった歩兵二十五連隊には相当数の輓馬がいて、わが部の練習にも提供されていたが、その二十五連隊もやがてカラフトに移駐し、部の練習はいよいよ窮屈となった。乗馬の不足もさることながら、当時の状況としては、勤労動員、空襲、疎開と実際馬術の競技どころではなくなったのである。

次に来たものは敗戦、そして戦後の空白時代であり、ここにわが部でも開店休業にもひとしい何年かが続いた。その間にも熱心な人達は競馬場などに出かけて何とかして練習をしようという涙ぐましい努力もなされたけれども、何といっても馬のない馬術部では花々しい活躍を期待する方が無理であろう。

昭和二十九年の夏には札幌で第九回の国体が開かれた。大会に先だって地元で二十頭の馬を用意しなくてはならなかったので、冬のうちから既に準備が進められ、二人の調教の専門家も来道準備は着々と進められた。夏までには調教もどうやらでき上がり、大会も無事盛会裡に終了したが、この二十頭のうちには案外いい馬もいたので、大会参加の選手の中からもこれらの馬を購入したいという希望さえ出たようである。折角苦心して整えた馬がちりぢりに分散してしまうのは惜しいことなので、札幌乗馬クラブでもそのうちの五、六頭を譲り受ける計画が進められて来た。そこでわが馬術部でもまたこれらの乗馬を受けいれて、多年の懸案であった自馬繋養の夢を実現させたいという声がもり上がった。私も農学部の松本教授などと相談の上当時の学長島先生にお願いしてその了解を得、ここにいよいよ自馬六頭を持てるようになったのである。

自馬を持つということは並大抵のことではない。私も昔騎兵連隊にいたことがあるが、起床ラッパから消灯ラッパまで徹頭徹尾馬馬馬である。水飼、飼付、馬手入れからボロ掻き、寝藁の出し入れと馬のお守に終始し、からだの芯まで馬のにおいがしみこむようにならなければ一人前の馬のりにはなれない。自馬を飼うとなって一番心配したのはこの世話をやり通せるかどうかということで

あったが、しかしそれは幸いにも杞憂であったようである。体暇も正月も返上しての部員諸君の精進ぶりにはここに改めて敬意を表したい。ここ数年、わが部の戦果はまことにかがやかしい。わが国の学生馬術界に北大ありといっても、あえて言い過ぎではないと思うが、それは馬場での練習も勿論であるが、部員一同の親身も及ばぬ馬の世話も与って大きいものがあると信ずる。馬場で馬をのりまわすだけが馬術ではないのである。

前にも書いたように、私が馬術部長となったのが昭和十五年で、爾来二十年この席を汚しているが、この間の思い出はこんこんと尽きない。戦争中鍛錬会と称して理学部の運動会をやったことがある。その時私が前述の宮武号にのって、化学科の馬乗りの諸君数名と供覧馬術をやって喝采を博したこともある。旭川の騎兵七連隊前の障碍馬場は全国的にも有名なものであったが、ここで毎年北海道乗馬大会が開かれていた。その最後の大会は昭和十八年の夏であったろうか。私は北大ＯＢとして化学の西村雅吉君と山本義則君と一しょに出場、三人共大へんに調子がよく、殊に私は十二の障碍を無減点で飛び、師団長カップと優勝旗を獲得した。西村君は今ミネソタの大学で勉強中であるが、山本君は南方で戦死してしまい、当時のことを語りあうこともはやできないのは残念である。五、六年前のこと、円山の動物園で夕方閉園後に新入部員の歓迎会があったが、開会定刻に行ったのは私一人、チンパンジーを相手に待てどくらせど部員は一向に現われず、定刻に遅れること四十分余にして漸く委員の諸君がやって来た。分単位に動いている自分としてはこの時間の空費に無精に腹がたって、委員諸君の顔を見ると思わず動物園中に響くような大声でどなりつけてしまった。どなった後はケロリとして部員諸君と共に飲めや歌えの大騒ぎとなったが、冷酒を散々あふった後で最後に胴上げをやられ、アルコールにはかなりの自信のある筈の私もすっかりグロッキーになった。ライオン顔まけのドラ声で叱りつけたかたきを見事とられた訳である。この時のことは今でも当時の諸君から時々聞かされて冷汗を流すが、こんな微苦笑的な事件も今日となってはやはりなつかしい思い出の一つである。

今年もわが部の選手諸君は国体で立派な戦果をあげた。今後も若い諸君によってこの栄誉は永く保たれて行くことを信じるが、ここまでになるには学校当局の並々ならぬ支援、先輩諸兄の物心両面の御鞭撻、それに札幌乗馬クラブ、銀鞍クラブ、札幌競馬場その他各方面の一方ならざる御協力が与って力のあったことを忘れてはならない。筆をおくに当って今後共これらの方々の一段の御後援をお願いする次第である。

馬術部三十年史に寄せて

学生部長　田口啓作

私も子供の頃、馬を飼っている家に過した関係で、しぜん馬に親しんだ。はじめはススキのような長い草のはしを握り、手を伸ばしてこわごわ食べさせたりしていたが、慣れるにつれてフスマや塩を直接手のひらから馬の口へもって行けるようになった。軟らかいなまあたたかい馬の唇がむずむず掌をくすぐっているような感触と、目がしらに目やにのかたまりをつけ、大きな眼を細め、親しみ深い顔付でパクつく様子はなんとも言えないかわいいものだった。

小学校の高学年になってからは手綱を短く持って、馬の長い顔に押されたりしながらひき歩いたり、切通し道の土手から馬の背にのぼってゆっくり歩かせたり、ある時はドコンドコンと尻に響くかけ足にしたり、またある時はあれがギヤロップであったろうと思う程の速さで走らせたこともあった。

ともかく子供の頃親しんだ馬は歩きがけの数分はいつもビッコをひくおとなしい老馬。古麻袋と

かますが乗鞍がわり、鐙もないすがた。落ちたことは一度もなかった。

大人になってからは、戦争末期、宮城県の川渡温泉に近い農場（現在の東北大学農学部附属農場）における同県営の馬鈴薯採種栽培の状況を視察するため、当時軍の管理下にあった馬に乗った。スベスベしたほんとうの乗鞍に跨がったことはこれが初めて。なにか不安定なような感じ。厩舎から出て馬鈴薯畑に行く途中はノタノタとしてサッパリ進まない、いやいやながらの歩き方でやっと圃場を一巡し帰り途にかかった。トタンに馬は元気になり、うまやが見えかくれするようになる頃はかけ足、次第に速力を増し、そのまま厩舎に飛び込むかに見えた。あぶないと思う瞬間、自意識で馬から離れようとしたのか、馬が私を振りおとしたのか、とにかく私はみじめな姿で地べたにいた。おかげで数日間ではあるが、幸い近くにある温泉に打身をしたし、忙しい戦時下に閑を楽しんだことが思出される。その後今日まで機会がなかったわけではないが、気も進まないまま一度も馬に近づくこともなく過している。

私の馬に対する経験はこのように乏しいものではあるが、馬に跨がった時の視界の広さ、あたりを完全にへいげいしたような優越感。馬の背は五尺、跨がる人間も跨間から眼の位置までは僅々二三尺、したがって地上せいぜい七八尺、その高さは山との比でなく、望楼にも遠く及ばない。それなのに馬上からの眺望はまことに素晴らしい。高等ではあっても動物である馬、人これに跨がって渾然一体、人でもない、馬でもない、一つの神経系統をもつ複合生物のように、歩き、走り、かけまわるすがたは、はた目にも美しい。

高級な馬術を完全になしとげる瞬間は忘我一切是空の境地のうちに手綱がさばかれているものと、私、学生時代弓道部にあって稀ではあるが矢がはなたれる寸前、すなわち会の数刻に味わい得た無心の心境から推察される。

幸いに馬術部にある学生諸君、馬上にあって感覚する清純崇高な気持、人馬一体天空に遊ぶような妙技の瞬間に味わう清澄な心境を平生に生かし、一層精進されるよう。

馬術部発足当時の想い出

初代部長　永井一夫

筆者は年号が大正から昭和に改まる直前北大医学部に赴任した。当時東大では陸軍の馬を使わせて貰って馬術が盛んであって筆者も中々熱心な方であった。東大では陸軍大学校の夏休みに空いて居る馬を使わせて貰い秋には習志野の騎兵学校や騎兵連隊の馬を主に日曜日に使わせて貰い軍の方でも指導将校を出してよく世話をしてくれた。

所が北大に来て見ると文武会と云うものがあって色々の運動部門が活動して居るにかかわらず其中に馬術部と云うものが無い。然かも畜産学科の学生には正課として乗馬をやらせて居たので北大が数頭の馬を持って居たし、又月寒の歩兵連隊にも多少の馬が居て空いて居る時は貸してもくれたので、北大内に乗馬同好会的のものはあった様である。

筆者は馬を持って居る北大で文武会の一部として馬術部が無いのは不都合だと考えて、当時の文武会長であった半沢洵教授に文武会の一部として馬術部を設置して貰いたいとの要望書――請願書と書いたかナ――を提出した所が幸に認められる所となって馬術部が出来た次第である。

云い出しべえで筆者が初代の馬術部長たるの光栄を担ったが、東京で軍の馬に軍の指導者と共に乗ってばかり居たので、単独騎乗には甚だ臆病であったのと自ら小児科医者として万一町の子供に怪我でもさせては大変と云う斟酌も手伝って殆んど馬に乗らない馬術部長として終わって了った事は誠にお恥かしい次第であるが、筆者以後の歴代の馬術部長の御指導よろしきを得た事と、部員諸君

の錬磨の成果は目ざましく、既に早く北大馬術部の三十周年を迎える迄の間に於ける輝かしい成績は全国各大学の馬術部の間に燦然たるものがある。真に御同慶の至りで、更に今後の発展を祈り且つ期待するものであります。

発足当時乗馬と云う言葉がかなり行なわれ、兎もすると乗馬部と云う様なことを云う人もあったのであるが、乗馬では如何にもただ馬に跨って居る様な感を与えるので、馬術とか騎道とか云うべきだとやかましく唱え、幸いにして馬術部の名が固定された感があるのは初代の馬術部長として唯一つの誇りであり光栄でもあります。

重ねて北大馬術部の発展を祈るや切であります。

（昭和35年12月9日草）

過去十年

馬術部顧問　松本久喜

十年という年月が全く夢のように過ぎてしまった。この十年間は各人各様に色々な思い出があるに違いない。学生諸君には入学試験の苦しい、また楽しかった思い出が、社会で働いている人には卒業―就職さらにまた恋愛から結婚、そしてまた子供と一通り自然の法則に従った変化があったと推察される。ところで私の十年というのは馬を愛する人達に関係のある十年のことである。日高の農林省新冠種畜牧場（旧新冠御料牧場）から馬に関する業務を大学が引き受けてから昭和十五年が丁度十年に相当する。この間を顧みると町村との交渉、関税局との連絡と慣れない仕事に追い廻されたが、この間大学当局や同僚の理解ある援助でどうやら大学のものになったが、今考えると、役所の手続や交渉の方法は知らぬが仏とはいいながら、異例のものが多かったらしく、冷汗ものであ

る。十年間に牧場の内容も少しづつ変わって来たが、全く無から有を産みだしたようなものだった。馬術部に席をおいた近代の人達は一度はこの牧場で合宿した経験があるに違いない。実はこの牧場は私には全く思い出の地なのである。昭和三年、学部進入の年の夏の実習にこの牧場を選んだ。当時場長は増村さんで現在東京で老後を静かに過して居られる。その頃静内迄汽車で未だ日高線は全通しておらなかった。駅から牧場までは乗り物はなく徒歩だった。丁度東大の学生が三人農事の実習に来たのと一緒になり静内から歩き始めたが、途中誰れも休もうといわないし、当方も意地になった訳けでもあるまいが頑張ることに決めた。日高の初夏の太陽は相当なものだった。背には一カ月の予定の着更えやノートその他でふくれたリックサックがあり、肩はいたいし汗は出るし、喉は乾くしどうも意地というやつはつらいものだったと記憶している。遂にシベチセリ川が眼下に見えるヌッカの坂までやって来た。急にあの美しい広い河原が拡がりそのかなたに日高連峰が見えた。誰れいうともなく、道端に座りこんでしまった。通行人に聴くと市父（御園村の旧名）はすぐ其処だという。牧場を訪ねた人は知っているだろうが、御園の部落から牧場への坂に向って左側にある藤原さんのお宅がその頃宿屋をやって居り、われわれ学生は牧場には泊らず、この宿屋に泊って牧場に通ったものである。

兎に角藤原旅館に東大生と四人同室で泊ることにした。今は既に亡くなったが、宿のお婆さんの数々の親切は今日も思い出される。朝六時からの始業で、六時の牧場の鐘がなる迄に牝馬厩（今の古い牝牛舎）まで行かなければならなかった。あの二町位ある落葉松の並木を通り、竜雲閣から右折して、日高には珍らしい赤松の並木道を歩いて行く毎日は全く楽だった。厩舎長の高橋さんや他に働いていた人達は皆親切だった。その後も永い交際を続けている人も未だある。

その後実験材料を頂きに度々牧場を訪ねたが場長も増村さんから川村さんに代わり、終戦後は北大同期の間克市氏が場長となられた。彼は学生時代、旭川の騎兵聯隊で共に合宿して練習した仲間でもあり、またそれ以外に個人的な永い交際を続けて来た善友でもある。この牧場も戦後の色々な変革の対象となり、永い歴史を持った馬牧場も時代の趨勢によって乳牛に切り変えられた。場長も

この仕事に多忙を極め、来客の案内から場長業務と体力にものを云わせて働いていた。場長の逸話はまた別の機会に御披露したいと思うが、終戦時には汚れた将校マントにスキー帽、ゴム長靴の格恰では場長室以外では一寸場長と見られない。その一例に、こんなエピソードもある。農村から見学に来た農家の人達に彼自から牧場内を案内して廻り、帰る段になり彼等は曰く「場長さんに宜しくお伝え下さい」場長くさること著るしいものがあった。

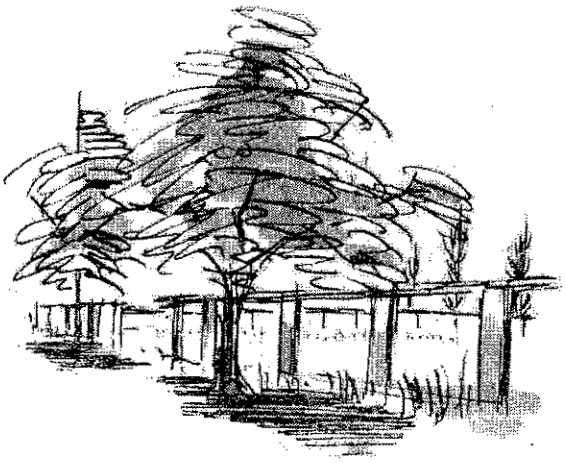
昭和二十五年二人の話しのついでにこの牧場の一部を大学でやらぬかとの全く思いがけない問題が飛び出したのが機会となり、決定する迄は色々なことがあったが、それから北大日高実験牧場が発足したのである。

そんなことで、私は別な意味から牧場の中を色々と見て廻ったが、藤原旅館で昔働いていた若い女中さんが、初老のお母さんとなっている人に逢ったり、あの頃の若者が立派に牧場の要職についているのを知った。北大の牧場の職員になった人達も若い人を除いては昔知った人達であったし、北方に見える笹山も、また厩舎も殆ど変わっていなかった。

牧場の内容も変わり、一部の馬は大学に移譲されたが、その他の馬はそれぞれ散っていった。この牧場の馬の系統は北海道、いや日本の馬産の歴史が刻まれているようなものである。幸いに僅か乍ら彼女等の生れた牧場にさらに命をながらえ、また子孫を残す運命を荷ったのが、今の牧場の雌馬群なのである。

現在の牧場の馬群は三つに分けられ、一部は昔からの林牧馬、二部軽種、三部は和種で、北海道で滅りつつある和種は大学のようなところでないと系統の維持ができないから、これからも是非続けてゆきたい。軽種は牧場の綜合経営の面からの役割を果たしている。三十五年度には兎に角日本ダービーにも顔を出した大学生産馬があることは心強いし、障碍馬として三十五年度のアラブ系の三羽烏の仲間入りをしている馬もやはり左臀部にNの烙印をもつ大学生産馬である。しかし、やはり馬術部に席をおき、またその馬を対象として研究を続けて来た身になると、理想的な乗馬を作り出したいと思っている。牧場の職員の乗馬だけは揃ったような気がする。次は……苦悩となるを恐

れて書かぬことにする。しかし何時かは名障碍馬を作ってみたい。遊佐将軍の言によると飛ぶ馬を作るより、飛ぶことの好きな馬を見出すことだそうである。幸いに林牧馬の中には牧柵を飛越脱柵する系統がある。それらの系統から、あるいは名馬が見出されるかも知れない。ゆっくり気永に待つことにしようか。



うら若き日の悦びを

大場善明（昭和三六年卒）

一きわすみわたる駒のいななきに、涼しき朝の熟睡を破られし若人が集いて、ここに三十年。此の間幾多のはかりしれぬ困難にもめげず、今日在る北海道大学馬術部の礎石を築き、不朽の伝統を残し往かれし先輩の皆様に現役の一部員として厚く御礼申し上げる次第でございます。今日ここに北海道大学馬術部三十年史を発刊するにあたり、貴重なる紙面をさいて、私のような者にも偉大なる先輩の方々と名を連ねさせていただけます事は此の上ない喜悦に存じております。また、黄金の年と云われますこの一九六〇年に、馬術部も三十年目を迎える事は非常に意義深いものがあると思います。

一口に三十年と申しましても、正直な所、三十年前には私など、まだ生命の発生すら約束されておらなかった訳です。はからずも、まさに偶然の悪戯にも、馬術部が創立されて三十年目に主将を務めさせていただいた私なのです。従いまして延々と続いた三十年間の北海道大学馬術部ではありますが、その末年の二～三年の事しか良くは存しておりません。たまに何かの機会に先輩の皆様と歓談し、昔日の憶い出を拝聴したり、色々の雑誌、記録等によって、昔日の面影をしのばせていただいておるのみであります。ですから創立当時の先輩の皆様が、一体、北海道大学馬術部の未来の青写真をどのように画いておられたのか、又、この三十年間に培われた伝統とはどんなものであるのか、正確には理解し得ない愚かな私です。これは私の不勉強の至す所で、広く皆様にお詫び申し上げなくてはなりますまい。しかし、過去の二十年前、三十年前にはどうであったか良くは分からないまでも、私が北海道大学に入学させていただいた年から昨春御卒業された先輩の方々とは、同じ屋根の下に泊り、同じかまの飯を食べて、共に苦楽を分ち与えていただけましたので、最近の極く若い先輩の方々のお考えになっておられました馬術部の構想に、いくらかでも協力したいと日夜考えて参りました私でもある訳です。しかし乍ら、三十年前の昔も、私達の時代である今日に於きましても、共に馬を愛し、此の世の最良の友として馬と共に明け暮れた青春の憶い出、〝うら若き日の悦び〟には少しも差違はないのではないかと思います。従いまして、此の四年間私が馬と共に味わった悦び、そして、はからずも、ゴールデン・エイジと云われます一九六〇年に、主将としての任務を終わらせていただくに当って、私の考えました馬術部の構想、並びにその結果につきまして、全く私

独自の反省でもありますが、此の紙面に述べさせて頂き、果して過去三十年間の北海道大学馬術部の歴史に照らし合わせ、進歩発展したか、停滞しているか、あるいは後退し弱体化してしまったかを、広く先輩の皆々様に御批判を仰ぎ、今後、私達の後輩に、私には指導してやれなかった点など、御教示賜わりますならば、此の紙面も決して無益にならなかったと思います。

私が此の一年主将としての在任期間に、いくつかの荒波はあったように思えます。しかし、過去三十年間に遭遇された先輩皆々様のそれに較べるならば、その何百分の一、否、何千分の一にも値しなかったかもしれません。私が考えました此の一年間の馬術部の構想は、すでに昨年末出しました「部報V号」に詳しく述べさせて頂きました。先ず第一に馬を愛する人、乗馬人口の増大を計り、広く馬術部を理解してもらえるように考え、一時は、六〇～七〇名にも及ぶ部員数を誇り、まさに伝統ある馬術部の名に恥じぬ大世帯となりました。この中には、馬術部を真の運動部としてではなく、単に自分の暇をつぶす為に馬にでも乗ってみようかという人が、かなりあったように思います。又、それとは別に、本当に馬術の技を磨き、日本一、否、世界一の馬術家になってやろうという、遠大な野望を持った人も勿論ある訳でして、私自身、此の二つのグループをいかにして調整し、先輩の皆様、並びに私の考えている〝馬術部作り〟をいかにして実行したら良いか、頭を悩めた問題です。馬術部を従来通りの運動部としての本質を変えては、対外試合等に於ける実績をあげる事は非常に困難に思いました。しかし、これ程多くの支持者、協力者を、果たして無に出来るものかどうか。私にはそれは出来ませんでした。折角、これ程多数の賛同者を得た若人の集いですから、皆が、部員二人一人が、楽しく活動出来る馬術部を夢見、出来るだけ多くの部員から馬術部の運営に関する活発な意見を聞き、多数意見による自主的運営を企画した訳です。ですから、今迄にない多勢の役員を構成し、毎月二回程度の役員会を開き、基本方針を確め、毎月、第一月曜日の定例部員総会で最終的に決定して参りました。これも私なりの考えではありますが、主将一人のワンマンチームの色を馬術部から脱したいが為でもあったからです。しかし、この事は正直に申しまして、私としては決して成功だったとは思えないのが、今になって残念に思えてなりません。と申しますのも、今迄にない多数の役員を構成し、多くの参考意見を聞く事は出来ましたが、各、仕事の分担を多岐に分散した為、仕事が煩雑となり、他の部員個人と役員との連絡がうまく行かなかったように思えます。ですから連絡の面から云えば、むしろ、主将の命令一下で動いた方が、より能率的であったのではないかと思います。しかし、現在の部員は少く共皆、成年に達した者の集りなのですから、何も主将の命令一下でばかり動くのが私達の馬術部ではなく、部員一人一人が、馬術部の益になる事は自発的に行い、害になる事は、各々の判断でたしなめるのが真の北海道大学馬術部の在り方ではないだろうか。少くとも最高学府に学ぶ我々が他人にいわれてからやるのでは、児童と何ら変わりがないのではないかと私は考えたからです。部員の活発な意見を求めると同時に、自発的な活動を容易ならしめるよう考慮したのですが、結局は失敗ではなかったかと私は今反省しております。むしろ、私の考え一本に部員全体がまとまってもらい、私の方も、もっとビシビシと私の意見を表面に出し、実行した方が、運動部としての実績も上がり、先輩の皆様にも理解いただけたのかもしれませ

ん。こんな事をいっては、何か弁解がましく聞こえますが、私の身勝手をお許し下さい。このように馬術部の雰囲気が変わって参りましたのも、時の流れでもあり、北海道大学馬術部三十年目に当り、一つの転換期でもあるのかもしれません。

一方、自馬繋養の問題にしましても、私にとりまして幾多の難関がありました。先輩の方々の中には、自馬を持ちたくとも持てず、はるばる月寒の二十五連隊に通い、あるいは旭川の騎兵隊に迄、馬を求めて練習に励まれた過去に較べ、これ又、先輩の御努力に依り我が北大の構内で自馬を繋養している私達は非常に倖せ者です。しかし、去る昭和二十九年国体の後で購入され、全国大会でも数々の好成績を収め、なお、将来も有望視されておりました北標号が昨年十一月、事故死と云う悲運に会い当時の主将として誠に申し訳なく、私の馬術部生活の中に一大汚点として残す事が、私の一生を通じて忘れ得ぬ事件であります。それでなくとも、現在の幾頭かの自馬が老齢に達し、早くも能力限界説を云々される折、まだ四～五年は全国大会で充分にその能力を発揮出来た北標号には実に申し訳なく思っております。此の事故に直面し、直ちに主将としての私の為さねばならぬ事は新馬購入の件でありました。しかし乍ら、此の北大に入学してから初めて「馬」に接した私の浅い経験から、次期北大馬術部を負って立つ名馬を探し出す事が、いかに困難であったか。目ぼしい先輩の方に御意見を伺いに上がったり、一人秘かに〝馬〟を求めて石狩当別、日高の静内、浦河、十勝へと、昨年の一月雪の北海道を歩き回った事も、今憶えば楽しい憶出の一つでもあります。そのようにして、私達の馬術部で繋養する種々の条件を満足してくれる馬と云うものを見つける事は、考えていた以上に容易でない事を悟りました。そんな或る日、偶然、元北大馬術部員であられた富山三良先輩にお会いし、何となくお話ししている内に、富山先輩の所有している乗馬を部合しても良いと云う事になり、「北海道大学に寄贈」と云う私達にとっては最高の条件で快諾を得る事が出来ました。此の馬は現在、「北涼号」と命名されております。父親は中半血ではありますが、トロッターの血を引き、母親はアングロ・ノルマン種でした。今の所、基礎調教の段階で、晴れて全国大会に出場出来るのは、もう二年位先の事になるかもしれません。その時には先輩の皆様にも機会があれば是非見て頂きたいものと思っております。私としましても、此の北涼号を未調教のような状態で後輩に残して行かなくてはならず、何かしら後髪を引かれる思いが致します。この北涼号について、私は一生忘れ得ぬ喜びを持っております。と申しますのは、実は昨年二月、此の北涼号がはるばる十勝の高島の牧場より馬術部厩舎に入厩した時には、すでに腹の中に仔が入っていたものでした。勿論、それは承知の上で寄贈していただいたもので、その仔は富山先輩にお返しする条件でした。私にとりましても、又、現部員にしましても、馬のお産に経験ある者が居らず、しばしば、獣医学部の先生方にお話を伺いに行き、又、特別講義(?)をしてもらったり私自身もいささか不安でもあったように思います。出産予定日の十日位前からは、毎日の当番が徹夜で北涼号の様子を見回り、部員の苦労も大変であったと思います。四月の初めとはいえ、北国の春は遅く、所々にどす黒い残雪の中から、やっと頭を持ち上げた新緑の若草が、身を刺すような北国の春風に、身を震わせている頃ですから、私達も、徹夜で部室のストーブを、真赤に燃して深夜に襲い来る睡魔に、コーヒーをガブガブ飲んで頑張った

ものです。ついに四月十八日にやっと丸々と太った〝駒〟を産み落しました。私自身もこの生命の神秘を眼前にして、しばし茫然としておりました。無事出産が終え、ふと我に帰った私は、まさに我が子の誕生を祝うが如く、幼児のように厩内をはしゃぎ回って喜んだあの時の感激が、しばしば私の脳裡をかすめます。あまりの嬉しさに、腹のを下にブラ下がっている〝もの〟を、てっきり、〝ヘソのヲ〟と見間違え、「牝馬が生まれました！」いきせききって電話で富山さんに連絡し、翌朝、馬房の中ですやすや休んでいる仔馬を見に来た所、どうも〝ヘソのヲ〟にしては、少々大き過ぎると思いまして立たせて見た所、何とそれが〝男性のシンボル〟であったのには、思わず苦笑せずにはおれませんでした。此のような悦びを馬術部生活で味合われた先輩も、そう多くはないのではないかと思います。このような馬術部の馬が北大でお産をした事のあるのは、北大馬術部三十年間に他にもそうなかったと思います。あるいは初めてかもしれません。産後の経過も良く、仔馬も昨年秋迄、暖い部員の心やりにすくすくと育ち、まさに、「呼べば、答えてメンコイぞ……」の歌の文句の如く実に良く私達になれてくれました。本当に馬術部のマスコットとして可愛がり、悦び合ったものです。此の仔馬も今では富山さんの牧場に、多勢の当才仔（トウサイ）と駈け回り、厳しい自然の生存競争に生きぬいている事と思います。

其の他、現在飼養している自馬については、出来るだけ沢山の自馬を中央の大会に連れて行き、その真価を発揮してもらいたかったのですが、昨年は、ただ熊本に於ける第十五回国体に北嶺号が中障碍に優勝。六段飛越に第三位に入賞したに過ぎませんでしたが、「北海道大学には、未だ北嶺号健在なり！。」と全国に認識していただけました。このような自馬をもって中央の大会に遠征出来るようになったのも昭和三十年からでもあり、私達も此の方面に全力をあげて精進してはおりますものの、何分多勢おります部員をさておいて、遠征選手ばかりで、この自馬を一人占めにする訳にも行かず、仲々難しい問題でもあります。其の他の対外試合にしても、昨年は余りパットした成績もあげられず、昨夏、帯広での東北、北海道学生馬術大会には、決勝にて地元、帯広畜産大学に、まさに紙一重の判定に涙を呑み、第二位となって、昨年の全日本学生馬術王座決定戦の出場権を譲った事が、主将として実に口惜しく、今年こそは、晴れの全日本学生馬術王座決定戦に出場し、且、優勝出来るようお願いしたいものです。又、東京に遠征しては、東日本学生馬術争覇戦でも、矢張り決勝で、東京農大に破れ第二位に甘んじる等、昨年は、いずれも〝後一押し〟と云う所で惜敗したのも、日頃の練習に、もう一息の精進が必要とされたのではないかと思います。兎に角、前述の如く多勢の部員が楽しかるべき練習を、少数の遠征選手により独占してしまう事が、私には非常に辛く感じたものでありました。

楽しかった数々の憶い出の中にも、ピョコピョコと、辛い苦しみの憶い出も顔を見せております。此のエルムの学園に学び、そして馬と共に若き日の情熱を紺碧の空に発散させた、あの日、あの時。それは今にして考えるならば実に春雪の如きはかないものでありますが、若き血潮の躍るを、誰ぞ咎めむ。朝に夕に、愛しき馬と語り合い、共に触れ合う心の糸を。私の悦びは馬の悦び、そして私の悲しみは馬の悲しみ。又会おう、明日の太陽と共に。他人には馬狂（ウマキチ）と云われ、両親に勘当寸前に迄、おどかされながらも、毎日通った

ポプラの並木路。この並木路を冷たい木枯しに、背を送られながら、さまよい行けば、今もなお、こんもりとした原始の森に包まれた恵廸寮が、昔のままに立ち並んでおります。二十年前、三十年前の先輩の方々も、もし今、ここにたたずまれたならば、古の数々の悦びが蘇って来ると思います。誰に何と云われようとも、ただひたすらに馬を愛すが故に歩まれた先輩諸兄の青春の姿を、この並木路にフト想い浮べたり致します。三十年前先輩の皆様が味わった悦びを、今私が味わえるという事は、此の上ない喜びです。原始の森にこだまして恵廸寮生の歌声が、響いて来ます。一緒に声を出して歌って下さい。昔日の想いも新たに……

うら若き日の悦びを
はかなきもとの誰かいう
理想の潮湧き出づる
生命の海の高鳴るを。

（昭和二年恵廸寮寮歌「蒼空高く翔らむと」）

つたない文章で誠に恐縮ですが、後輩の明日への羽ばたきを夢見つつペンを置きます。

うら若き日の悦びを永遠に断やす事勿れ！

新しき時代を迎えるに当って

千葉祐記

（昭和三十六年度主将）

北海道大学馬術部三十年、それはなんとすばらしいことではないか！　一くちに、三十年と云っても、この三十年の歴史の中には、連綿と綴りつけられてきた一日一日の馬と人間との愛情がしっかりと結合し、そして美しい花となっていた。それは、頑強に花茎に密着して、いつ落ちるとも知れず、その華麗さを満天下に咲き誇っている。我等が北大馬術部万歳と、全く、大音声あげたいところである。しかし、今、私がこの伝統ある馬術部三十年目と三十一年目の中間を取り持ついわゆる、現役主将として、数々の名声を残してゆかれた諸先輩の記録を辿りながら、馬術部三十年を顧りみるとき、我々現役部員たるものは、いかにあるべきや、と沸々として私の胸に

湧き出ずる何んとも形容しがたい自賞の念を押し返すことはできないのである。私は、この三十年間にしっかりと着実に積み重ねられてきた伝統と云う梁と末来に必ずやかけられるだろうところの、がっしりした屋根とを結着する立派な意匠の鐃たり得たいと思うものである。そして将来、いかなる強風、豪雨にも耐え得る頑丈なる建物に造り上げてもらいたいと思うのである。この小さいが、しかし重大なる使命をもつ一九六一年に、我背巻の全能力を傾注したい所存である。この一大決意のもとに、昭和三十六年度、三十一年目の主将としての抱負を立体性は欠くけれど、出来るだけ多角的に述べてみたい。

北海道大学馬術部の三十年を種々の記録をたよりに、ふりかえってみるとき、あらためて新しい感慨をもって考えさせられるのは、この三十年間の普遍性は年々才才熱情ほとばしる若き青年の心魂の蓄積であったと云うこと、そしてこれからも、うら若き青年男女の発溯たる精神のみがこの北海道大学馬術部の後継者となり得ると云うことである。私は、かねがね考えていた。この心魂傾けた若き熱情のほとばしりを部内に最良に反映したいと。そして、その反映が完全に行なわれてこそ、はじめて、我が北海道大学馬術部存在の大きな意義があるのだと確信している。こんなことは、大学の運動部に於いては、いまさらもち出すべきことではないかも知れない。しかしながら、最近の馬術部に於いては、現役部員は、近い遠いは問ず、先輩諸氏の残してゆかれた輝かしい伝統の影に隠れ、あるいは亦、その輝ける伝統の重みに耐えかねて意気消沈の輩もあまたおる訳である。こんなことからも、「若さの反映」を主張する私の主旨がご理解いただけると思う。更に私は強調したい。伝統ある北大馬術部を更に発展させるためには、団体生活に現われる「若さの回復」をおいて他にないと思うのである。この「若さの回復」を新年度、そして将来の馬術部のモットーとしたい。勿論、若さと云っても重要視するのは大学生の良識の下に表出される奔放さ、粗野さ、大胆さ、と団結心である。だが、いかにすれば、このモットーが部員全体に徹底出来るであろうかと考えめぐらすとき、少々、心もとない感じがしないでもない。現代に於いては、最早、主将に対しては、あらゆる責任は追求されるが、部員に対しては、主将の権限によって彼等の協調性を促すこと、かつ希望することは明示出来ても、それを独裁的に強制することは、許容され得ない時代になっているのである。

今は、北大馬術部の転換期にある重大なときなのである。それはいろいろな方向から云い得る事なので、具体例を挙げその原因と現状の問題に対する対処とに付いて述べたい。そして、この転期を、礎(いしづえ)に末来の馬術部発展を夢みたい。

今を去る三十年度及び三十三年度に於いて、我が北大馬術部は連戦連勝を続け、いわゆる、馬術部の黄金時代を築き上げた。しかし、その後の戦績はあまり芳ばしいものではなくなってきつつある。これには社会的影響が多大であると考えられる。即ち、黄金時代の先輩諸兄は、いわば強烈な軍事教育を受け、それに淡い郷愁をもち、そんなかで、全くの民主教育をうけた学生が入部しその軟弱さを、きたえ上げたがそれは短期年間に消えていった。そして当時の上級生は、猛烈な自己練磨に励み、黄金時代を築き上げて行ったが、そこで殆んど忘れていたことは、強力な後輩を育てておくことであったと思うのである。以来、数代に亘って主将の任についた者はこの馬術部の栄誉失墜を防ぐことに、彼等の精神をすり減らしてきたようである。このことは、現在の馬術部が滞停してる大きな原因とも思はれる。私はこの停滞から出来るだけ早く脱出するために、出来るだけ合理的な対処法をとることにした。現在部員は五十余名を数えるが、四年生が一年間だけ軍事教育をうけただけの、いわゆる気粋の〝戦後派〟ばかりである。五十余人の戦後派全員に満足のいく方法はないけれど、将来性のある合理的な方法を役員会議できめた。こ

れからは先輩皆様方のご協力を受けながら新しい馬術部になる。反俗的な馬術部から大衆的馬術部になる。さもなければ、馬術部は衰退の一途を辿ることになることは明日であるからだ。これから、この新しい馬術部の方針を被瀝しながら、私なりの抱負を述べてゆきたい。

(一) 五十余名にのぼる大世帯の部員をもつ馬術部内の円滑な統一

(二) 部外に対する部役員の活動の方針。特に、学生としての自責の下にどの程度の渉外性が望まれるか、等に関する問題。

(三) 馬匹の交換期に於ける適切な処置及びそれに伴う資金の流動性に関する諸問題。

(四) 飼料調達に関する問題。

以上の四つの大きな問題に付いて述べてゆきたい。先ず(一)の問題。部内の円滑な統一に関しては、いくつかの分野に分かれる小問題がある。先ず部員の練習方法、それに練習以外に於ける部内生活その他であるが、練習方法を適切に施行することによって、他の問題はかなり緩和されるのではないかと思う。この線に基づいてこの問題の解決を図ろうと思っている。その方法と云うのは、次のようなものである。即ち部員全体を三つの階級に分ける。それを、A級、B級、C級、とするならば、この各階級には主将、副将、及二名の企画委員があたる。A級というのは、五名か六名で編成して、各自決められた自馬をシーズン中専任調教する。この五名ないし六名は亦、対外試合のレギュラーとなる。更にA級部員はB級部員の訓練にあたる。この方法をとれば、馬の調教崩れも最小限に止めることが出来るのではないかと思っている。B級と云うのは、試合時には相当の力を出すとは思われるが、今少し、力不足、経験不足を感じさせ、自馬調教には無理と思われるクラスである。又、この級は将来A級となって対外試合に備える特別訓練生と云った意味も含む。したがって、主体は三年生・二年生であるし、練習も、A級と同程度のものを行なう。亦、B級部員は新入部員の面倒みる義務を与える。これによって自ら欠点を発見し、その整調行なわしめる。これがB級部員に対する最大の目的でもある訳である、三年生・二年生の時期は馬におもしろ味をおぼへて来た、一番のりたいと思う時でもあるのでこの方法によって、自己錬磨に努めるようしむけさせたい。この級は次代をになう最前線の要員であり、部を常に発展させるべき部員ともなるのである。C級と云うのはA・B級以外の部員で、これに属さしめる部員は新入生及び乗馬には興味を持っているが、単なるレクリエーションとして覚えておきたいと云うような部員である。この方法の施行にあたっては相当誤解を招くことも考えられるので、注釈をつけておくことにする。即ちこの方法をとるのは、あくまでも練習の方針のみに於いてであって、大世帯の部員をかかえ、全員が馬を楽しみ又、対外試合にも優秀なる成績を納めるためにも適切な方法と考えられるからである。従って、練習の機会は全部員に平等に与えられることを納得させることは勿論である。馬術部運営の役員はこれを慎重に行なう積りである。更に、練習の内容としては、全員に対し、常に基本馬術の訓練に精進するよう指導する。これは現在の馬術部は特定のコーチ、あるいは、監督をもっていないため四年生が主体となって下級生の指導にあたっており、それ故四年生こそ基礎訓練を充分に積んでおかねばならぬし、それに対する怠慢は絶対に許されないのである。これを上級生が怠ると、殆んど全部の国立大学の馬術部がそうであるように、大学入学後、馬になじんだ連中の多い現在の馬術部上級生は理論面でも実際面でも真実性を欠

き、下級生の攻撃の的となり、同時に下級生に練習に対する気魄を失わしめる原因ともなり、チームワークの乱れる原因にもなると思われる。今後の練習ではこれに沿った練習方針をとりたいと思っている。

次に、(ロ)の部外の渉外性の問題であるが、これは随分むづかしいことと思う。具体化して取組む問題にしては難しいテーマであるが、馬術部の発展には欠くべからざる重要な要因であることは云うまでもない。と云うのは、この常日頃の渉外性が直接に又間接に馬術部の運営に影響を及ぼすからである。しかもそれが、主に、部の運営資金の流動性に関係するため、部としても、明確な方針を発表することが出来ないのである。したがって、今年度も従来通りのことになると思う。精々、他の乗馬団体との交流・試合時等に後援をお願いする所の報道関係等であろう。ただ最近で大変うれしかったのは、東京に在京OB会の結成がなされたことであろう。このようなことは現在の馬術部に対して精神的に非常な安定基盤を作ったと思う。馬術同好の先輩方が一堂に会するたびに、昔の馬術部をなつかしみ、馬術観を一席ぶち、そして昔懐しい寮歌を唱って、話に花を咲かせ、感涙を流すのを我々現役が同席してながめるとき、馬術部発展のために確固たる基盤を築いてゆかれた諸先輩のためにも、亦将来のためにも、ほんとうに立派な馬術部に仕上げたいと心から思わずにはいられない。このような会の結成をここ数代に亘って時々の主将及び役員によって夢みられてきたことであるが、その夢が実現されたのである。これは北大馬術部が益々幅の広い運動部になったことを如実に示すことではなかろうかとも思う。

(ハ)の馬匹の交換期に於ける問題であるが、これはそもそも、昭和二十九年の国体が札幌で行なわれ、その時以来、近い将来自馬の交替に関することは考えられてもよかったのではなかろうかと愚痴にならぬ愚痴を部員と話し合っている。北大馬術部の自馬飼養管理は全国一を誇っても良い程の立派なものである。それは、北斗号(二十才)、北嶺号(十七才)、北穏号(十六才)等の老令馬が大きな試合で活躍している現状をみても充分理解いただけることと思う。しかし、その完璧さがかえって切破つまった大きな問題を現在に至って惹起せしめたのである。つまり、一度に殆んど全部の自馬(六頭)が老令となり、その取り換えに非常な苦心をしている訳である。勿論これらは現部員の役目であるので、その新馬入手にやっきになっている現状である。幸い馬は生き物である故、一度に全部が老令化する訳でもないので、極端に老衰した馬を農場で処理してもらい、三十五年二月に一頭、三十五年十一月二十三日に一頭を入れ、前者は北標号(ミス、トクシマ)、後者は北潭号(第三白河)の替りで名はそれぞれ、北涼号、北楊号と名付けた。北涼号の入籍には学校側より強力な反対が起ったらしいのだが、松本久喜先輩(北大農学部教授)及び教授半沢道郎先生(北大農学部教授)の御尽力で何んとかけりがついたような訳である。北楊号の方は日高の北大附属実験牧場より不妊馬であった馬を松本先生の御尽力で新しく入厩したものである。現在、北大馬術部で専用に練習に使っている馬匹頭数は八頭ある。しかし、そのうち三頭は老令又は発育不良馬で殆んど将来性がないと思う。ここで主将となって痛切に私が感じたことは、交代馬は現役活躍馬が健在なうちに仕上げを完了しておくべきだと云うことであった。これは、今後主将となる人の常に心に銘記してそれを後代の主将に引き継ぐことを怠りなく行なうべきである。しか

し、そう口で云うほど、手易く出来る問題ではないので、発言者として、私は後輩に対し僭越ながら、稍かながら突破口を残しておきたいと考えているのである。亦、現在の馬術部の馬に付いて心配なことは、馬格がだんだん小型化してゆく傾向にあることである。これは文句の云えた筋合のものではないのだが、現在のような乗用馬の供給の少い時代では、立派な将来性のある大型の若駒を入手することは容易なことではないようだ。しかし、もっと積極的に購入範囲を拡張して自馬の大型化を図るべきだと思っている。なお新馬購入に際して問題となる資金の調達は全く具体化出来ない。この問題が新馬購入の難点の一つにもなっている。しかし、何らかの方法をとって除々に解決の方向に導きたいと考えている。

最後に(四)の飼料の問題に対する今後の方針である。馬を飼う場合に最も事を慎重に且つ又、余裕を持って考えなければならないことは馬糧の問題である。だが、本年度の馬術部の現状では、どうみても余裕のある解決は出来得ていない。説明の前に、実質的には我々馬術部員が精魂込めて可愛いがっている自馬であるが、馬籍は農学部畜産部の所属になっていることを述べておく。本年度の年間の自馬八頭に給与する燕麦量は二百八十俵である。この内農学部畜産部より与えられる燕麦の量は百二十俵ほどである。これでは約半年分にしかあたらないのである。それではあとの約半年分の飼料はいかにして調達したらよいだろうか。この問題は毎年部役員が頭を悩ます問題であるけれど、今になっても良い永遠的解決法はみあたらない。今までのところは、農場で穫れた燕麦を二月乃至三月まで共同使用させてもらい、足りないところは春四月ころ、畜産部より都合してもらっていた。それが五十俵前後である。あとの足りない分は部主催の映画会、ダンスパーテー、その他の臨時のアルバイトをやって調達して来た。最も良い年で、これである。ましてこれからはこんなことすら希望できぬ状態である。現に昨年などは燕麦の作付面積が極端に減少し、農場では大動物、特に馬を減少させて、それに換わる機械類がどんどん入れられてきた。最早、農場に頼り切った馬術部では運営が不可能になりつつある。今や、機会を待って、はっきりと一人立ちした名実共に北海道大学体育会馬術部にしなければならない時期にきていると思うのである。しかし、この方針にも公表しがたい問題が多く含まれているので容易には解決出来ないかも知れぬ。「ままならぬは人の世の常」とか、全く然りと感銘せざるを得ない。

以上で現在の部が直面している問題点とそれに対する対処に付いて少しく述べた。しかし現在の馬術界を総合してみるならば、軍馬華やかなりし頃の馬政を参考にして、現代のように一種のペットと考えられがちな馬術馬を、昔と比較するとき、運動部としての馬術部をしっかりと盛り立てて他の運動部に互して将来を切り拓いて行くためには、並々ならぬ努力と忍耐と種々の危機をくぐり抜けるための冷静さを吾々は必要とする。しかもなお、その将来は必ずしも輝かしいものではない。これら種々と考えめぐらすとき、現在の馬術部ひいては、日本の馬術界がいかに重大な転換期に立っているかがはっきりと解るのではないだろうか？　こんな難事にあたり最後に力となるのは、我々「青年の若さ」であると思うのである。

私は本年度馬術部三十一年目の主将として「我々の若い力」を部内に強力に反映させると共に、部の組織化を図り、未来の馬術部を益々輝かしいものとしたい。

最後に馬術部三十年間に卒業された諸先輩の御健康を心から祈ります。

年報



解説

編集委員

この年報を作成するにあたり、その内容は各年度の代表の方に執筆していただいたが、乗馬会時代から昭和十四年迄は、昭和十五年発行の北大馬術部十年誌を中心に、編集者の方でまとめたものである。従って、各年毎の部記録については、十分理解していただけると思うが、三十年間の歴史としてみるとき、そこに欠けていると感じられる一貫性を補う為に、馬術部三十年の流れを簡単ながら追ってみた。

尚、創立以来、満三十年目に当る昭和三十五年度については、別項**うら若き日の悦びを**（大場尊明氏）を以て代行させていただいた。

北海道帝国大学文武会馬術部として発足したのは昭和五年三月であるが、その母体となった北大乗馬会については、更に遡ること数年、即ち、馬術を志す人々が集まり、乗馬団体を結成せんとしたのが大正十三年十月に発会した**北海道帝国大学乗馬会創立委員会**であった。同委員会は、軍事研究団体の一環として乗馬練習を行なうべく、野間口、平山、沢田氏を中心に軍部と交渉したのである。その結果、大正十三年十二月、第七師団長より正式の軍馬借用許可を受け、大正十四年一月、同委員会解散し、**北海道帝国大学乗馬会**の発会が実現し、会長中村大尉、幹事長野間口氏のもとに、三十名の会員が土、日曜に月寒の第二十五連隊にて練習することになった。

後年、松本、河崎氏等の入会と共に、文武会の一団体としての基礎を固め、馬産地北海道の大学馬術部としてその使命をになうべきであるとの声が盛り上がり更に周囲の援助のもとに、昭和五年三月、ここに**北海道帝国大学文武会馬術部**の創立をみるに至った。その間、東大馬術部出身の永井教授は、乗馬会の運動とは無関係に、北大馬術部創立の運動をされ、この実現を促進した。そして、永井教授を部長に、河崎主任以下四十数名、文武会馬術部としてスタートした。練習については、乗馬会の時と同じく、第二十五連隊にて行な

的訓練の必要に即してスポーツの勃興日に盛んなるものあり、吾が北大文武会亦所謂文武の両方面に諸種の部を設けて活躍して居りますことは真に慶賀に堪えざる所であります。

然るに五十年の光輝ある歴史を有する農学部を頂く我が北大としては将又良馬の産地として本邦に冠たる北海道に文化の源泉とも目月とも仰がるる我が北大としてその文武会に馬術部を欠くは画竜睛を点ぜざるの恨みがあります。全国無数の学校の事は暫らく之を問わずとするも、例を東西両京の帝大に見んか何れも偉大なる馬術部を擁し馬を有年々対抗競技を行なうの盛況で、京大の如きは十頭の外し年々三千六百円をこれが維持に支出していると聞いて居ります。単にスポーツの一としても馬術の有する独特の長所は敢えて小官の喙々を要しない次第でありますが、特に文教の傍常に尚武の美風を失わなかった本邦で、武技の一として馬術が如何に尊重され来たったかを見ましてもその身心の訓練に益する所の大なるは想像に難くありません。他方又実用的方面から之を見ましても、軍事教練と密接の関係あるべきは申す迄も無く、更に軍事以外の機会に於いても馬術を解すると否とによって受くる便不便又日本男児の体面の如何等敢えて多くを言うに及ばずと存じます。

文武会の他部に比しまして季節の制肘を受くることも比較的少ない馬術部の設立を承認して頂く可能性は十分あると信じて居りますが、設立後この部の活動に先立つものは馬と金であります。ところで馬は幸い農学部畜産科所属の数頭を同科学生の正課としての使用を妨げない範囲で利用させて貰うことができましょうし、又休日には月寒の軍馬を借して貰うことも当然できると思います。既に非公式に予科の生徒達が乗馬会を組織して月寒に於いて相当の便宜を計つて貰って居るとも耳にして居ります。東京その他に於いてもかかる機会に陸軍当局が他方面との理解を計る方便として好意を示してくれる傾向の有ることも明らかであります。若し夫れ北大文武会の名によって陸軍当局に交渉するところあらんか最善を尽くして便宜を与えられることは小官の断言して憚からぬところでありまして、行く行く旭川の騎兵隊に依嘱して乗馬演習を行なう位の機運にはすぐなると思われます。勿論設立の当初から多額の文武会費を頒けて貰い難いこともよく分って居りますが、さし当り小官の希望するところは馬術部が文武会の一部として承認せられ適当なる部長を得て該部の事業が実行の緒に就かんことであります。馬術部成立の上既成各部に譲らざる部員を得べき見込みは勿論あります。最初小官は学内職員、学生、生徒等に檄を飛ばして同志の連名状を作成した上馬術部の設立をお願いしようとも存じましたが、此挙に出でて幾分たりとも事を遷延せしめんよりは先ず意見を陳じて御願いすることの捷径なるべきを確信して御賢断を仰ぐこと件の如くであります。

昭和二年一月二十四日

馬術部設立熱望者・北海道帝国大学教授

永井一夫

北海道帝国大学文武会長・北海道帝国大学総長

佐藤昌介殿

（原文のまま）

いたが、昭和十九年、二十年には、実質的には当部の自然解消をみるのである。

そして終戦。ようやく世の中も落着きを取戻した昭和二十六年九月、古谷、下飯坂、後藤、渡植氏等が中心となって、完全なるスポーツ団体の一つとして馬術部を作ろうとの話から、ここに馬術の復活をみることとなり、その名も**北海道大学体育会馬術部**として発足したのである。しかしながら、乗馬らしき馬は北大には居らず、さりとて軍隊も存在せず結局、札幌競馬場、及び札幌乗馬クラブの好意のもとに、週三日の練習が可能となった。戦後第一年の試合は対帯広畜産大学戦のみであったが、これに勝ち、さい先のよいスタートを切ったのである。しかし、全くのフリーから出発した戦後の馬術部は、戦前のそれと比較して、適切な指導者に恵まれず、これは当時の部員の苦労したものの一つであった。昭和二十九年、札幌にて国体の開催に際し、島、杉野目両学長、及び太秦部長、松本教授等を始め、当局、諸先輩の好意によって、この時用意された貸与馬より六頭の購入が実現し、一躍、最も多くの自馬を有する馬術部の一つとなったのである。厩舎、部室も第一農場内の一偶を借り、部員がこれを飼育管理することとなった。翌三十年、自馬を持って始めての年、はやくもその成果を発揮し、国立七大学馬術定期戦、東北北海道地区学生馬術選手権大会、対帯広畜産大学馬術定期戦と、全ての試合に優勝し、更に第十回国体（於川崎）に、自馬大会として初参加し、宮沢氏がヨシタカ（現、北嶺）号にて六段三位、また第八回全日本馬術大会には、大久保氏が同じくヨシタカ号にて六段二位、鎌田（旧姓、榊原）氏が北斗号で中障四位となったのを始め多くの上位進出をみたのである。そして、女子の入部をみたりして、新しい姿の馬術部の礎石は着々と固められていった。だが、参加試合が多くなるにつれて、遠征資金集めにダンス・パーティー等をやむなく行なうようになったのもこの頃である。

年を追うにつれてその戦果も華々しく、既に全国に北大の名を強く印象づけるようになったが、昭和三十三年においては、前出の如き公式試合には殆んど優勝し、加えて第十三回国体（於、富山）では千葉（幹）氏が北嶺号にて総合馬術優勝、また、第十一回全日本馬術大会（於、名古屋）では鎌田氏が洋考号（札幌乗馬クラブ所属）にて総合馬術優勝と、確固たる成績を収め、戦後に於ける黄金時代ともいわれるようになったのである。一方、馬事思想の普及について努力された樋口、生田氏等は、北大主催にて招待全日本女子学生馬術選手権大会を計画し、この年、第一回を開催したが、女子部員の奮斗華々しく、全戦全勝にて優勝した。その他の活動として、前年より乗馬講習会を開催し、広く一般、学内にその機会を与え、馬事思想、スポーツとしての馬術のPRに努力している。尚、当時迄かってのインター・ハイの如き全国的大会のなかったことを憂慮し、この点について奔走された宮沢、樋口氏等の努力の結末、全日本学生馬術王座決定戦の実現にこぎつけ、東北北海道地区の代表校としてその第一回に出場したが、善戦四位に終わった。かくてますます好調を続ける当部は、昭和三十四年、第十四回国体（於、東京）に於いて、森本氏が北嶺号にて六段優勝、佐伯氏が北標号にて大障四位、更に三十五年には、第十五回国体（於、熊本）で大場氏が北嶺号で中障優勝、千葉（裕）氏が同じく北嶺号にて六段三位と、栄えある記録を残し、文武会馬術部発足から数えて三十一年目を迎え、現在に至っている。

昭和五年度

北大馬術部の誕生

大正十四年十一月十七日現在の馬術部の前身である北大乗馬会が呱々の声を挙げて以来四年、幹事松本久壽兄、河崎秋三兄等が中心となって各方面に運動を起こしその熱と努力が実を結んで昭和五年三月、北大文武会馬術部は堂々輝かしき第一歩を踏み出したのである。また先輩諸兄の努力の蔭に当時の文武会々長佐藤昌介総長並びに新島理事長以下理事多数の深い御理解と御支持を得たことも記憶に留める必要があろう。尚是れより先、東大馬術部出身の医学部永井一夫数授は北大馬術部の設立を強く望まれて、北大乗馬会内部の運動とは別個に同年一月別項の如き「馬術部設立希望趣意書」を文武会委員長半沢洵教授を通じ佐藤昌介会長へ提出された。このことは我が馬術部の設立を一層容易ならしめた大きな力であって、我々はここに乗馬会先輩諸氏に対すると共に永井教授に対して深く感謝の意を表する次第であります。

一歩、昭和五年三月、旧北大乗馬会を解散してその会員を直ちに馬術部部員に編入し、主任幹事河崎秋三兄の下に部員約四十名、先に馬術部の設立を熱望された永井教授を第一代部長として三十年の永い歴史に第一歩を印したのである。

馬術部々則（創立当時）

第一章　総　則

第一条　本部ハ北海道帝国大学文武会馬術部ト称シソノ事務所ヲ本学文武会事務所内ニ置ク。

第二条　本部ハ馬術ノ向上運動精神ノ涵養ニ努ムルト共ニ併セテ馬事ニ関スル研究ヲ行ナウヲ以ッテ目的トス。

第二章　部　員

第三条　本部ハ文武会通常会員ノ有志ヲ以ッテ組織ス。

第四条　本部々員ハ次ノ三種ニ区分ス。

一、選手　一、通常部員　一、臨時部員

但シ臨時部員トハ定期合宿時ノミ募集スル者ヲ云フ。

第五条　本部ハ毎学年ノ始メニ於テ部員ヲ募集シソノ他ノ時期ニ於テハ入退ヲ許サズ。

第六条　本部々員ハ部費トシテ毎月金五十銭ヲ納付スベシ。

第三章　練習機関並ニソノ方法

第七条　本部ハ歩兵第二十五聯隊乗馬ヲ以テソノ練習機関トシ毎週土曜日午後、日曜日午前、祝祭日其他適当ノ時ニ歩兵第二十五聯隊ニ於テ同聯隊ノ乗馬委員ノ指導ノ下ニ練習ヲ行フ。其ノ他休暇ヲ利用シ旭川騎兵第七聯隊ニ宿泊シ馬術練習並ニ軍事ノ研究ヲ行フ。

編集委員

第四章　顧　問

第八条　本部ハ顧問若干名ヲ推薦ス。

第五章　役　員

第九条　本部ニ左ノ役員ヲ置ク。

部長　一名　幹事　若干名

但シ幹事ハ主任、会計係、庶務係及ビ主将ヨリナル。

第六章　事　業

第十条　本部ハ第二条ノ目的ヲ達スル為左ノ事業ヲ行フ。

一、適当ト認メタル学内及ビ対外ノ競技会ヲ開キ又之ニ出場ス。

二、馬事ニ関スル研究並ニ馬事思想ノ普及宣伝。

三、馬術ノ向上、並ニ軍事ノ研究ノタメ軍隊宿泊。

四、春秋各一回遠乗ヲ行フ。

第七章　会　議

第十一条　会議ハ一、定時総会　二、臨時総会　三、幹事会　ノ三種トス。

第十二条　定時総会ハ通常毎年一月、臨時総会ハ必要ニ応ジ開催ス

第十三条　定時総会ニ於テ附議報告スベキ事項次ノ如シ。

一、予算及ビ決算報告　二、庶務報告　三、新年度ノ計画

四、其ノ他重要事項

第八章　経　費

第十四条　本部ノ経費ハ左ニ掲グルヲ以テ之ニ充ツ。

一、本学文武会ヨリノ補助金

二、部費

第九章　簿　冊

第十五条　本部ニ左ノ簿冊ヲ備ヘ主任幹事之ヲ保管ニ任ズ。

一、部員名簿　二、会計簿　三、部誌　四、備品簿　五、発受簿　六、領収書綴　七、馬事ニ関スル書籍雑誌　八、写真帳

第十章　附　則

第十六条　部員ニシテ本部ノ目的ニ反スル行為アリタル時ハ幹事会ノ議決ヲ経テ之ヲ除名ス。

第十七条　本部々則ノ改正変更ハ総会ノ議決ニヨルニ非ザレバ行フコトヲ得ズ。

第十八条　本部々則ハ昭和五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス。（原文のまま）

四月　新学期が始まって新入部員約二十五名を加え、高松正信教授以下乗馬会時代からお世話下さった六氏を顧問として、永井部長河崎主任の下に岩垣駿夫、松本久喜、永松四郎、九鬼誠之助等の諸兄が中心となって新らたな意気に燃えて活動を開始したのである。今ここに馬術部十年誌から半沢先輩のお言葉を借りれば「初年度に予科第一学年として新らたに入部したものの中に高杉直幹、脇田代子郎、滋賀秀明諸君の第五、第六、第七代の主任があることは当時の新入部員の意気が窺がわれると共に部内の融和が思われて痛快なことである。」とその昔のすばらしい気迫が偲のばれるのである。

練習　部則にある通り北大乗馬会当時と同様に歩兵第二十五聯隊乗馬を借用して毎週土曜日午後、日曜日午後に同隊の高江調教師以下の乗馬委員の指導で行ない、又三月には旭川騎兵第七聯隊に約二週間合宿してわざを練った。その他多くの部員が札幌愛馬会に入会

して乗馬に努めていた。

試合・戦績

○東北乗馬大会　五月二十三日東北帝大主催の東北乗馬大会が仙台に於いて開催され北大からは永松、九鬼、加藤、岩橋、本田の五兄が出場し良好の成績を収めた。

○第七回全国高等学校馬術競技大会（インターハイ）七月下旬、東京陸大馬場に於いて、東京帝大主催の第七回大会には予科から藤原、加藤、岩橋、本田、小笠原の諸兄が出場し善戦第二位を獲得した。馬術部誕生一年に充たずして初出場、他校からダークホースとして恐れられ、後々までの宿敵学習院に敗れはしたが堂々準優勝し、意気天をつくばかりの北大予科軍が偲ばれるのである。

○全日本学生馬術選手権大会　北海道地方予選が旭川の騎兵第七聯隊で行なわれ河崎兄が代表と決定、習志野の同大会に出場したが惜しくも予選に敗れた。

○北海道乗馬大会　八月十日第四回が旭川に開催され、河崎、永松、九鬼、武田、半沢、藤原の諸兄が出場善戦した。

○関東乗馬大会　十一月二、三日明治神宮外苑に於いて開催され永松兄が出場した。

○弘前乗馬大会　十一月九日弘前高等学校主催第八師団後援の馬術が弘前に行なわれ学部、予科より夫々選手を送り、大学高専対抗競技に於いて首位を争って弘校と同点、優勝を弘高に譲って善戦二位を獲得した。

○行事その他　五月二十三日の文武会デーに際し第一農場内の馬場に於いて現在の部内競技会、引いて札幌乗馬大会の前身とも云うべき小規模　於部内十余名行なった。

こうして一年、五月の新入部員歓迎会に始まり、文武会デーの部内競技、七月のインターハイ遠征、九月の遠乗会、一月の初乗り、役員の選任と無事昭和六年二月九日淋しくも輝かしい卒業生送別会を迎えることができたのである。馬術部創立に尽力された河崎、松本岩垣、愛甲の四兄が銀製バックルをその形身に別れを告げ、我が馬術部にはここに誕生二年目の門が開かれたのである。

会計収支概況

収入の部

総額　金参百九拾九円四拾八銭也

内訳

一、金七拾参円五拾銭也　部員納入部費

一、金参拾壱円四拾銭也　日本学生馬術協会より地方予選費

一、金四拾壱円参拾八銭也　北大乗馬会々計より編入金

一、その他

支出の部

総額　金参百九拾八円四拾八銭也

内訳

一、金百拾六円七拾八銭也　教官謝礼費

一、金参拾五円也　備品購入費

一、金参拾壱円四拾銭也　日本学生馬術地方予選開催費

一、金弐拾五円弐拾銭也　雑費

一、金四拾四円拾六銭也　明年度繰入

一、その他

馬術部設立希望趣意書

国民保健の問題は国家の消長を左右する重大問題たるは敢えて今更申す迄も有りません次第で我が教育界を通覧しても学事の傍身体

的訓練の必要に即してスポーツの勃興日に盛んなるものあり、吾が北大文武会亦所謂文武の両方面に諸種の部を設けて活躍して居りますことは真に慶賀に堪えざる所であります。

然るに五十年の光輝ある歴史を有する農学部を頂く我が北大としては将又良馬の産地として本邦に冠たる北海道に文化の源泉とも目月とも仰がるる我が北大としてその文武会に馬術部を欠くは画竜睛を点ぜざるの恨みがあります。全国無数の学校の事は暫らく之を問わずとするも、例を東西両京の帝大に見んか何れも偉大なる馬術部を擁し馬を有年々対抗競技を行なうの盛況で、京大の如きは十頭の外し年々三千六百円をこれが維持に支出していると聞いて居ります。単にスポーツの一としても馬術の有する独特の長所は敢えて小官の喙々を要しない次第でありますが、特に文教の傍常に尚武の美風を失わなかった本邦で、武技の一として馬術が如何に尊重され来たったかを見ましてもその身心の訓練に益する所の大なるは想像に難くありません。他方又実用的方面から之を見ましても、軍事教練と密接の関係あるべきは申す迄も無く、更に軍事以外の機会に於いても馬術を解すると否とによって受くる便不便又日本男児の体面の如何等敢えて多くを言うに及ばずと存じます。

文武会の他部に比しまして季節の制肘を受くることも比較的少ない馬術部の設立を承認して頂く可能性は十分あると信じて居りますが、設立後この部の活動に先立つものは馬と金であります。ところで馬は幸い農学部畜産科所属の数頭を同科学生の正課としての使用を妨げない範囲で利用させて貰うことができましょうし、又休日には月寒の軍馬を借して貰うことも当然できると思います。既に非公式に予科の生徒達が乗馬会を組織して月寒に於いて相当の便宜を計つて貰って居るとも耳にして居ります。東京その他に於いてもかかる機会に陸軍当局が他方面との理解を計る方便として好意を示してくれる傾向の有ることも明らかであります。若し夫れ北大文武会の名によって陸軍当局に交渉するところあらんか最善を尽くして便宜を与えられることは小官の断言して憚からぬところでありまして、行く行く旭川の騎兵隊に依嘱して乗馬演習を行なう位の機運にはすぐなると思われます。勿論設立の当初から多額の文武会費を頒けて貰い難いこともよく分って居りますが、さし当り小官の希望するところは馬術部が文武会の一部として承認せられ適当なる部長を得て該部の事業が実行の緒に就かんことであります。馬術部成立の上既成各部に譲らざる部員を得べき見込みは勿論あります。最初小官は学内職員、学生、生徒等に檄を飛ばして同志の連名状を作成した上馬術部の設立をお願いしようとも存じましたが、此挙に出でて幾分たりとも事を遷延せしめんよりは先ず意見を陳じて御願いすることの捷径なるべきを確信して御賢断を仰ぐこと件の如くであります。

昭和二年一月二十四日

馬術部設立熱望者・北海道帝国大学教授

永井一夫

北海道帝国大学文武会長・北海道帝国大学総長

佐藤昌介殿

（原文のまま）

昭和六年度

馬術部成って一年、河崎兄以下の四兄を送って新役員の張り切った指揮の下に昭和六年度の春を迎えた。新役員は左記の通りである。

主任幹事　九鬼誠之助
庶　務　武田　朝男
会　計　半沢　道郎

幸いな事には岩垣、松本両先輩が園芸学教室、馬学教室に夫々勤務されることとなり、事々に絶大なる助力を頂くことができたのである。なお三月に転任された中村素大尉の後任遠矢良仲大尉も快く顧問を引き受けられ、四月には学習院から北大農学部へ入学の東園（旧姓伊達）兄を迎えると共に新入部員十数名を加えることができた。此の年には満洲事変が勃発し軍部の事務も次第に多端となり、部の練習にも影響する所が多くなり、部員からも軍馬の人参代の一部にもと拾数円を贈った。一月には永井部長が辞任され、顧問の高松教授が代って部長となられた。

○馬事講演会　新入部員歓迎会を学生集会所に開いて間もなく五月二十四日の文武会デーに新らしい試みとして馬事講演会を学生集会所に開催し学内一般に公開した。高松正信顧問の「統計上より見たる世界産馬会の傾向及びその将来に就きて」と題する講演、引きつづいて映画会　と多数の参会を得た。

試合・戦績

○東北乗馬大会　五月三十一日に仙台に開催され東園兄が個人優勝の栄冠を獲得した。

○北海道騎乗大会　六月二十一日旭川に第五回大会が行なわれ大学高専対抗競技に我が部が優勝を遂げた。大会後七月四日より旭川騎兵第七聯隊に於いて夏季合宿練習を行い、その間に全日本学生選手権大会の北海道地方予選を行ない東園兄が北海道代表に決定した。

○第八回全国高等学校対抗馬術競技大会　七月二十六日前年と同じく東京陸軍大学馬場に開らかれ北大からは本田恒康、小笠原義顕、植村勘一の三兄が遠征し善戦第四位に入賞した。

○第三回全日本学生馬術選手権大会　八月一日習志野に挙行され本道代表として東園兄が栄ある優勝を成し遂げここに栄冠は初めて津軽の海を渡ったのである。十二月には旭川で一週間の合宿練習を行ない予科部員十二名が参加した。

第一回東北帝大対抗定期戦　伝統の対東北帝大戦は昭和六年十二月二十七日師走の木枯しの中にその第一回大会の幕が切って落されたのである。場所は仙台、本校からは永松、九鬼、武田、東園、藤原の五兄が遠征、悪天候下の馬場に悪戦苦闘するも下幸にして第一回大会は東北帝大に名を成さしめて終ったのである。

戦雲急を告げると共に軍馬を始め人見大佐、五十嵐聯隊長と次々と去られ、一月には前述の如く永井教授が部長を辞任され、二月十四日の総会に新役員も決定し、予算の編成も終って卒業生永松四郎兄を送ったのである。

昭和七年度

明けて昭和七年、新入部員三十六名を加えて部員総数七十六名の大世帯となり益々盛況を呈した。本年度の役員は左記の通りである。

主任幹事　東園基文（旧姓伊達宗文）

庶務
会計　半沢道郎　兼任

なおこの年四月にはロスアンゼルスオリンピック大会に、お世話になった城戸少佐を送り、又七月には海軍第二艦隊馬術練習士官十一名が本学を訪れた。満洲事変のため人馬の移動が多く軍部馬匹の都合で学内大会、遠乗会、の実行出来なかったことや練習の不充分は已むを得ないことであった。

試合・戦績

○習志野乗馬大会　四月九日習志野に挙行され学生乗馬団体回数競技に本田恒康、小笠原義顕の両兄が出場、本田兄（三帰号）は個人として五十六名中堂々第四位を獲得、又学生中障碍連続飛越競技に出場の東園兄（盛星号）は十七名中六位を獲得した。

○第九回全国高等学校馬術競技大会　七月三十一日東京陸軍士官学校河田町馬場に開催され北大予科から脇田、高杉、小笠原、滋賀の四兄遠征出場するも善戦むなしく第六位に甘んじた。

○第四回全日本学生馬術選手権大会　先の六月十九日旭川の北海道地方予選で代表と決定した本田恒康兄と前年度の選手権保持者である東園兄とが出場、八月三日夏の陸軍騎兵学校馬場に熱戦を繰りひろげた。本田兄は二十一位で惜しくも本競技に失格となり、東園兄は予選、本競技を通じて堂々二位に入賞、二年連続入賞という輝かしい記録を樹立した。当日入賞者の成績は左記の通りである。

順位	氏名	得点
1	藤野泰吉（東京商大）	三一五・〇
2	東園基文（北大）	三一四・七五
3	滝江義明（慶応）	三一四・二五

第六回北海道乗馬大会　八月十七日旭川に挙行され、穎村兄が学生一般障碍に優勝、東園兄が学生総合馬術に四位を獲得した。又団体の全国大学高専対抗障碍飛越競技には東園、本田、九鬼の三兄より成る本学チームが堂々優勝、北大総長カップ、朝日大毎優勝旗を獲得した。

第二回対東北帝大戦　八月十六日旭川に於いて挙行、四名戦を行なったが我に利あらず、二年連続して東北帝大の御食となった。十一月にはオリンピック馬術をはじめとした映画会を催し、輝かしい歩みを残して静かに冬を迎えたのである。

北大馬部モノグラムに就いて　馬術部モノグラムは北大乗馬会に於いて制定され、使用されていたものを受け継いだものであって乗馬会当時特に会に貢献せる者に対してその功績を讃える意味で授与する習慣であったもので、馬術部に変わってからも有功部員に与えられていたものである。昭和六年度まではモノグラムに関して何んら特別の記録が無く、制定の由来、意義、授与者氏名等が判明していなかった。昭和七年、東園主任がこの状態を憂いて主任日記に書き

残された一文を引用させていただけば左記の通りである。「従来モノグラムは他の賞品メダルの類とその性質を異にし、云はば馬術部の有功章とも称すべきものにして、これを授与せられたる者の光栄亦大なりと云ふべし。然してこれが受領者は其の栄誉と共に永くその馬術部に対する功績を称讃せられるべきものなり。ここに於いてこれが論功に当りては深甚の熟慮をなし、モノグラムをしてその精神的価値を低減せしめざるよう努むべきなりと信ず。」（原文のまま）

尚モノグラム授与者氏名とその番号とは巻末の表を参照されたい。

○馬術部ペナントに就いて（東園基文記）馬術部ペナントは昭和七年一月二十九日開催の幹事会以後二回にわたり幹事会に於て協議せる結果、馬術部卒業生に贈る記念品として在部当時を偲ぶによき思い出のメモリアルとしてこれが作成を決議せるものにして、その考案初回制作に当りては筆者に一任せられたるものなり。故に我が馬術部の意義あるペナントとして将来非難の恐れあるやを憂ふる処あるも幸にして今日迄大なる非難の声を聞かざるを喜びとす。然して当時の幹事及先輩はかく年々の記念品を統一して馬術部ペナントなる記念品をしてこれに次第に歴史的価値を有さしめ以て一層意義深き贈物とせんことを計りたるものなり。但し馬術部卒業生全般に之を贈るべく部の財政上許さざる為、このペナントをして馬術モノグラム授与者に対する卒業記念品と限定せり。然してその卒業生とは本科卒業まで部員としてその終りを完したる者を意味するものなり。但しこれを原則とするものにして卒業生の待遇をなすものをも含ましめ得、例えば大いに部の為に尽しモノグラムを授与せられた部員にして真に同情すべき理由の為に退学する場合（又は単に退部するにても可）又は不幸にして在学中に友に先立ちし者等その事情を斟酌して定むべきなり。又部長、顧問等の役員の退転にあたり贈呈するも可ならん。然してペナントにはその卒業年度を皇紀年代を以て所定の数字を以て入れるものなり。尚馬術部にはその原品ともなすべく文武会創立の年をトし、皇紀二五九〇年の年号を入れたるペナントを保存しこれと共に年号用数字原形（半紙に描きたるもの）はこれを代々の主任保管するを例とす。然して今後そのペナントは硝子入りの額縁に入れ保存に便ならしむるを可とせん。尚爾来これが製作は三越運動部（札幌支店運動部扱ひ）に命ぜり。（原文のまま）

尚ペナント贈呈者は巻末の表を参照されたい。

昭和八年度

主任幹事のバトンが東園兄から植村兄に引き継がれ、一月二十六日学生ホールにての卒業生送別会に九鬼誠之助、武田朝男、半沢道郎の三先輩を送り巻闌わの四月習志野乗馬大会をして昭和八年度の戦いの火ぶたを切ったのである。

試合・戦績

○習志野乗馬大会　学生中障碍に東園兄出場して六位となる。

四月二十五日には新入部員の歓迎会を学生ホールに行ない、翌五月には旭川騎兵第七聯隊で営内合宿練習を行ない植村主任以下十名が参加して練習に励んだ。

○第九回東北乗馬大会　北大本科からは東園、大迫、植村の三兄が出場し十八校中五位を獲得した。（六月三、四日）

○第五回全日本学生馬術選手権大会　五月二十一日道予選に代表として選出された植村勘一兄が出場し、七月十六日習志野に於ける本大会に七位を獲得した。

○第十回全国高等学校馬術競技大会　七月二十二日東京陸大に開催され、北大から池内、渋谷、佐藤の三選手が遠征、出場するも惜敗した。

北海道乗馬大会　八月十三日、本年は〝第七師団乗馬大会〟として開催され、障碍には吉見兄が一位、綜合馬術では一位に植村兄、二位に高杉兄という結果であった。

○第七回明治神宮体育大会馬術競技大会　植村兄出場して堂々第二位に入賞（十一月三日）

○第一回北大馬術部々内競技会　十一月十九日現在の部内競技会の第一歩として第一回馬術部競技会が月寒第二十五聯隊練兵場にて挙行された。

○対東北帝大戦　十二月二十五日本年最後の試合として北大二年連続敗退の後第三回大会が宮城野仙台に於いて挙行された。札幌からは東園基文、滋賀秀明、森山武雄、大迫明徳、本田恒康の五兄が遠征して二連敗の汚名を返上、念願の雪辱を遂げた。

こうした対外試合の間に九月の文武会デーには馬術部映画会を催し、十月には学生ホールに於いて諸試合の報告会を兼ねて藤田少佐、阿部大尉両顧問の歓迎会を開くなど多彩な事業も無事終わって昭和九年二月一日の総会に北大馬術部にその人ありと恐れられた東園基文兄を卒業生として送ったのである。

昭和九年度

昭和九年二月一日前年度主任の植村兄からバトンは高杉兄に引き継がれ、昭和八年度の卒業生送別会が終わると共に昭和九年度への一歩を踏みだしたのである。新年度の役員は左記の通りに決定。

主任幹事　高杉直幹

庶　務　吉見一郎・渋谷周平・滋賀秀明

会　計　脇田代子郎・池内武夫

予科幹事　前川静弥・小村達夫・山下正宛

春季合宿練習　春三月　全国高等学校馬術競技大会の優勝をめざしての春季合宿を例年の通り旭川騎兵第七聯隊に催し予科生を中心として一週間の猛練習をつんだ。

新入部員歓迎会並びに新旧部長歓送迎会　先きに四月二十八日新入部員を対称とした初練習を行ない多数の新部員を迎え、百花咲き薫る五月五日部長交替の歓送迎会とあわせて新入部員歓迎会を開いた。これら新入部員の中には昭和十四年度主任の西村兄や我が馬術部二度目の全日本学生馬術選手権保持者となられた菅間兄などの名があったのである。この日初代部長永井教授の後を受け二代部長として設立後日の浅い馬術部を育て導いていただいた高松教授が止むを得ぬ事情から部長を辞されたのでその後任には獣医学界の権威である黒沢教授をお迎えして、旧部長高松教授の送別会、新部長黒沢教授の歓迎会をも兼ね行なったのである。又部に功績の多かった大迫、森山、渋谷の三兄にはその功を讃えてモノグラムの贈呈がなされ盛会のうちに新学期のスタートともいうべき会を終わった。

試合・戦績

○第十一回全国高等学校馬術競技大会　七月二十二日東京青山の陸大に開催され、北大予科からは小林、前川、石井の三選手が上京し、奮戦するも武運拙く第八位に甘んじた。この大会に先立って三選手は月寒の二十五聯隊、又上京後陸大校庭などで猛練習をつんだのであった。当大会の優勝は第一高校、二位は成城高校であった。

○第六回全日本学生馬術選手権大会　七月二十八、九日習志野騎兵学校馬場に於いて挙行され六月の道予選に代表と決定した大迫明徳兄が出場、奮闘するも残念ながら入賞を逸した。

○北海道乗馬大会・対東北帝大戦　九月二十四日旭川騎兵隊に於いて北海道乗馬大会と対東北帝大戦とを行なった。北海道大会の方では綜合馬術、選手障碍とも高杉兄が一位を占領、対東北大戦は雨中接戦を演じ、点差四十二をもって北大に凱歌が上がり二連勝、二勝二敗五分の星とこぎつけた。

第二回部内競技大会　十一月十一日月寒第二十五聯隊営庭に開催され、寒空にも拘らず多数の人々の来場を得て盛会のうちに幕となった。

事業・その他

映画会　第一回馬事思想宣伝講演映画会と銘打って我が部としては最初の公開映画会を今井記念館に開催し非常な盛会を得た。北海タイムス社に後援をお願いし、十二月八日の当日まで部員が街頭に出て徹底的宣伝を行なった。当日のプログラムは黒沢部長の挨拶、鯵江中佐の満洲に於ける軍馬の講演、引き続いてイタリー騎兵学校、オリンピック、ダービー等純粋に馬ばかりを扱った映画会と題目通り馬事思想宣伝のみの会ではあったが熱心な宣伝が功を奏したか会場は開会前にもう超満員、「招待者以外の方は入場御遠慮下さい」という張紙を出したとか先輩部員の会心の微笑が目に見えるようである。冬の札幌に昭和九年度放つクリーンヒットと讃えられるべきであろう。

冬期合宿練習　昭和九年の年の瀬から十年の新年へかけて正月を返上しての参加者十七名という規模の大きい合宿が旭川の第七騎兵聯隊に実施された。なお一年を通じての月寒二十五聯隊での通常練習は二十一回、幹事会は九回と記録されている。又前述の試合の外に四月十四、五両日に全日本馬術大会があり植村、大迫、渋谷の三兄が出場し、渋谷兄が第七位に入賞した。六月二十日には東北乗馬大会が開かれ植村、脇田、久葉の三兄が出場した。立派な戦績と多彩な行事の中に大過なく終わった昭和九年度の最後に悲しい事実を記録するのは忍びないことではありますが敢えてペンを取る次第であ

る。不幸、昭和九年六月十六日、昭和六年度の我が馬術部第二代目の主任九鬼誠之助兄が札幌で亡くなられた。其の夜は部員一同通夜を営み故人の思い出話に一夜を明かした。九鬼兄は御卒業後は台湾のある会社に勤務されたが、又札幌に帰られその地で亡くなられたのである。

昭和十年度

昭和十年一月二十四日学生ホールに於いて改正された新制度が発表され、前年度高杉主任の後を受けて新主任脇田代子郎兄以下次の様に新役員が決定された。

主　任　脇田代子郎
主　将　吉見一郎
選手監督　大追明徳
会計主任　森山武雄

その他予科幹事を二名置いた。右の総会終了後卒業生送別会を同所にて開催。

植村勘一、岩橋帰一、久葉昇の三兄を送った。又五月四日新入部員歓迎会に新進気鋭の士十八名を加え、なおその席にて多年部に貢献され、大いなる功績を残された左記の五兄に対して昭和十年度のモノグラムを贈呈した。

小村達夫・石井昌長・山下正亮・前川静弥・福光幸彦

○練習の頓挫　本年は部員の練習には実に恵まれず例年の旭川春季合宿すらも満洲事変に出動していた部隊帰還のため多忙という理由で騎兵第七聯隊から許可がでず中止せざるを得なかった。又一方我が部唯一の練習機関であった月寒歩兵第二十五連隊の乗馬も同様の理由で練習不能となり、なお悪いことには五月四日に病馬を出して二十五頭全部薬殺され練習は完全に頓挫してしまった。そこで札幌愛馬会及び畜産学教室馬を借用して六月中頃まで不便な練習を続け練習再開の日を待ちわびたのである。夏の香り深まった六月十六日初めて歩兵第二十五連隊の練習を許され、六月二十二日新入部員は降雨の中を初めての練習に参加したのである。

試合・戦績

○東北乗馬大会　六月一日東北帝大が主催して仙台に挙行されたが我が軍に利なく惜敗した。

○日本学生馬術協会東北支部大会　七月七日盛岡市に大追、高杉の二兄出場するも入賞を逸した。

○第十二回全国高等学校馬術競技会　七月二十一日前年通り東京陸大馬場に開催され、六月下旬より選手候補の四兄が猛練習をつみ高江荒野両顧問の絶大なる指導を受けて炎熱下の東京へ遠征石川、西村小池の三兄が出場したが奮戦むなしく一位を成城高校に譲って十三位に敗れ無念の涙を呑んだのである。

○第七回全日本学生馬術選手権大会　六月九日に旭川で北海道予選が行なわれ前川静弥兄が代表に決定　七月二十八日の習志野の本大会に出場したがこれまた北大に利なく入賞を逸した。

○北海道乗馬大会　八月二十八日旭川に開催され北大は大会に先立って二十四日から騎兵第七連隊に営内合宿し練習を行なった。結果障碍に北大の小村兄、大学高校対抗個人に石川兄が見事優勝を遂げた。一方、団体戦の大学高校対抗試合は敗れ総長カップ・大毎優勝旗を盛岡高農に奪われ、遠く岩手へ持ち去られた。

○第五回対東北帝大戦　九月四日旭川に開催され障碍飛越・野外騎乗とも東北大を破り、昭和八年以来三連覇を遂げた。我が部からの出場選手は吉見、前川、石井、大迫、小村の五兄、戦えば負け、出場すれば必ず敗れた本年の不運な戦績の中に最後にして勝利の花が咲き薫ったことで漸く愁眉を開いたのである。その他十一月には第三回部内競技会を持ち、話は戻るが六月には馬魂碑除幕式が月寒の陸軍墓地に行なわれ部員一同が参列した。又前年の後を受けて北海タイムス社後援の下に映画会を二日間三越に開催し好評を博した。こうして冬、一月二十三日の卒業生送別会に高杉、脇田、吉見、大迫の四先輩を送り出し勝運我になく悲運の戦績を綴った昭和十年度も暮れるのである。

昭和十一年度

昭和五年丁度北大馬術部創立の年に予科に入学された高杉、脇田、吉見等の先輩が卒業され、滋賀新主任の下に学部二年生の意気と若さとを中心として昭和十一年度の馬術部の生活が始まったのである。

役員交替　一月二十三日の総会に幹事のバトンが前年度から引き継がれた。

主任兼主将　滋賀秀明
選手監督　前川静弥
会計主任　小村達夫
予科幹事　西村、菅間、小池
実科幹事　小間

此の年学部三年目に部員が居なかったので自ずから馬術部の主流が若返り新進気鋭、一騎当千の若武者ばかりまさに金城鉄壁の布陣と評されるべきであろう。

練習　例年通り春三月の春季旭川合宿をその第一歩として五月、七月、十二月の四回にわたって騎兵第七聯隊に営内合宿し技を錬り、つつ部内の融和、団結力を培った。

○部内競技大会　四回目を迎えた部内競技会も本年度は春四月二十六日、月寒で催され部員一同楽しい早春の一日を送ったのである。当日の主任日記の一節には「夜来の雨上がり天気頗る晴朗、馬高く天

に嘶き我等が大会を祝うが如し、時の立つにつれ人馬一致、人馬不一致の妙技続出し観衆の声援を浴ぶ。パン喰競技、騎馬戦は本日の白眉なり。」（原文のまま）と明るいその日を思わせる一文が残されている。

諸行事　馬事普及の意味で公開し、市民にも馴染の深くなった馬術部主催公開馬事映画界を十月北大中央講堂に於い行なった。フィルム未着のため今井記念館を使う予定が流れ、又当日が素晴らしい荒天ときたので観衆は比較的少なかったけれど映画、説明、場内の整頓と共に優れたものであった。

○遠乗会　秋も深い十月二十五日、総勢三十四騎、燃える紅葉を求めて定山渓往復、山野に馬を走らせた。この年を最初として春は若葉に憧れ、秋は紅葉を素っての遠乗会が定期的に催されることになったのである。

試合・戦績

「遠乗よりも、合宿よりも華やかで平素の練習に錦上花を時に雨を添えるのが遠征である。」という遠征の名定義に始まる昭和十一年度の遠征諸試合の成果は善戦虚しく幾つかの涙の戦績を並べながらも左記の如く堂々たる名誉の記録を残している。

○東北乗馬大会　六月十三、十四日仙台宮城原練兵場に開催され全国四十の強豪と相戦って予科軍が堂々第六位を獲得した。札幌からは石川、小池、永田、菅間の四兄が遠征し出場した。

○全国高等学校馬術競技会　七日十九日東京陸大馬場に伝統の第十三回インターハイが挙行され、北大予科奮戦して堂々三位に入賞、未だ北大老いずの感を全国に与えたのである。予軍選手は石川、小池永田、補欠菅間の四兄であった。

○第八回全日本学生馬術選手権大会　七月二十六日階暑の習志野に前川静弥兄出場し惜しくも十二位となる。

北海道乗馬大会　同じく七月二十五、六日旭川に開催され北大からは二十数名の多数が参加し、大学高専対抗綜合馬術に北大予科（西村・石川・小池）が優勝、前年度涙を呑んで盛岡高農に渡した北大総長杯及び大毎優勝旗を奪還した。その他個人賞にも多数の入賞者がでた。

○第六回対東北帝大戦　九月六日仙台宮城野に遠征、滋賀、山下、松平、高井、桶木、石川の新鋭で東北大に対戦五十三対八十と之を破り四年連続優勝を成し、此の年初めて購入された第一回の優勝盃を獲得した。なおこの日は東に嘯を唱えていた強豪日本大学とも対戦し一蹴のもとに下している。

○第一回対弘前高校馬術定期戦　楡も落葉し銀杏並木の白い道にも黄色い葉が散り始めた冬の訪れ近い十一月八日、永年の念願かなって第一回の北大予科対弘前高校の馬術定期戦が弘前に於いて開催された。この弘高戦に関しては前述の通り数年前より交渉のあったものの種々の事情に依って本年までのびのびになっていたものが急に話が進展して開催の運びとなったものである。北大からは石川、児玉、下条、中館の四選手が出場し大いに奮闘するも健闘虚しく第一戦の優勝盃は海を越えた弘前に留まる結果となったのである。なお十一月から十二月にかけて行なわれた仙台、東京間長途騎乗に北大の荒野顧問出場し群雄を退け堂々第二位に入賞された。

○自馬購入の計画　本年度の画期的な試みとして陸軍特別大演習が北海道で行なわれるに当りその記念事業として自馬購入の計画をたてた。結局は種々の障害に阻まれて実行できなかったのだけれども

ここに当時の先輩諸兄の意気と情熱とを偲んで文武会理事長への請書願を記載して十一年度を幕としたい。

○自馬所有ニ関スル理由書

当馬術部ハ日本唯一ノ馬産地北海道ノ帝大馬術部ナリ、故ニ其ノ練習機関亦多カルベキ事ニ当然ナルベシ、然ルニ事実之ニ反シ僅ニ歩兵第二十五聯隊用ノミ、然モ土曜、日曜札幌鉄道乗馬部トノ混合練習ニシテ其ノ絶好ノ練習季節春季、秋季ハ同隊ノ島松野外演野習及機動演習ニテ殆ンド練習日ヲ有セズト云フモ過言ニアラズ、又旭川騎兵隊ハ我ニ多大ナル援助ヲ与フルモ何分遠距離ニシテ其ノ旅費、宿舎料及ビ其ノ交渉等ノ関係ニテ之ヲ充分利用シ得ズ、又札幌愛馬会ニ之ヲ求ムルニ其ノ頭数三―四頭ニシテ市民ノ需要ヲ満ス事スラ得ズ、マシテ我々部員ノ之ヲ充分利用シ得ザルハ勿論ナリ。

斯クノ如ク練習機関不足ノ為、各人ノ技術ノ錬磨ハ勿論、重要ナル試合ニ臨ム前一ケ月以上練習ヲ行ハズシテ試合ニ出場スルガ如キ実ニ馬術部及ビ本学ノ名誉ヲカケテ出場スル我々ノ慚愧ニ堪ヘザル所ナリ。願ヘッテ当大学文武会各部ノ状態ヲ観ルニ各部共堂々タル練習機関ヲ有スルハ勿論、其ノ設備亦完全ナリト云フベク独リ我部ノミ取残サレタル感アルハ遺憾トスル所ナリ。然リトハ云ヘ部員ヨク一致団結練習ニ励ミ、ヨク活躍シ本年度ニ於テモインターハイ第三位、対東北帝大戦四ケ年連勝、北海道乗馬大会優勝等実ニ本州各地ノ諸校ノ心魂寒カランメタルモノナリ。

我々ハ今後尚先輩ノ残セン歴史ヲ奉ジ身心ヲ鍛錬シ技術ヲ錬磨シ充分ナル活躍ヲナシ全国ニ覇ヲ唱ヘル為ニハ之等貧弱ナル練習機関ニテ満足スベキニアラズ。

此所ニ我々ハ新天地ヲ開発シ部ノ発展ヲ期スル為今秋ノ陸軍特別大演習行幸並ニ馬政第二次計画実施記念事業トシテ部長始メ諸先輩各部員一致団結我ガ馬術部自ラ乗馬ヲ所有セン事ヲ決議セルモノナリ。其レニ要スル馬場、厩舎ノ敷地ノ下附ヲ仰ギ厩舎ヲ建築シ自馬ヲ繋養シ部員ノ向上心ノ要求ヲ満タシ其ノ愛馬心ヲ涵養シ身心ヲ鍛錬シ一致団結親睦ノ実ヲ挙ゲ学生馬術学生スポーツノ本領ヲ発揮セントスル也。故ニ敷地其他乗馬所有全般ニ関シ絶大ナル御援助、御斡旋ヲ御願ヒ致度御願ニ及ビタル所以ナリ。

主任幹事　山下正亮
主　将　桶本勝彦
庶　務　高井
会　計　石井

昭和十二年度

昭和十二年一月二十二日卒業生送別会に滋賀秀明、森山武雄、小間良彦の三兄を送り、滋賀、森山の両兄には「ペナント」、小間兄には記念品が贈呈された。又昭和十二年度幹事として左記の諸兄がその任に当ることになった。

選手監督　松平　悌

試合・戦績

○北大・札幌OB、札鉄合同乗馬大会　役員も決定し、全員が夫々の配置について厳しい練習に、楽しい部生活に油がのり始める頃、春今やたけなわの北国の五月二日、在札馬術関係者の親睦と技術の向上とを目的として本大会が開催され各種の対抗戦が行なわれた。

○全日本馬術競技大会　五月二十二、三日習志野に挙行され、北大は団体戦に於いて優勝、又個人戦では石川兄が学生乗馬団体代表選手障碍飛越競技に大いに力闘常々栄ある優勝を成し遂げ一層北に北大有りの感を深めたのである。

○東北乗馬大会　五月二十九、三十日、札幌からは桶本、石川、松平の三兄が全国学生団体競技に出場し第六位となる。なお北大予科は都合で出場を中止した。

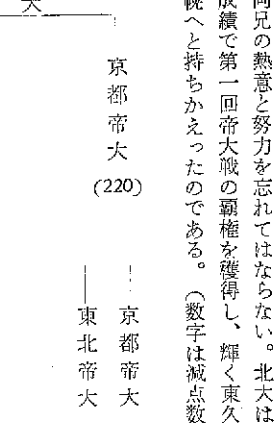
○第十四回全国高等学校馬術競技大会　七月十七、八日、伝統のインターハイには荒野教官の指導の下に連日斉藤用馬を用いて猛練習をつみ山本、石井、児玉、永倉の四兄が出場、第一回戦不戦勝、第二戦は山形高校を下すも武運拙く第三戦に第六高校に敗れ去った。

○第七回対東北帝大戦　七月二十三日旭川に開催、好天にも恵まれ人馬とも闘志を燃やして両軍善戦したが終に東北勢の前に敗れ五年連続優勝の偉業ならず、夢は惜しくも消え去ったのであった。

○北海道乗馬大会　東北大、弘高、盛岡高農、麻布獣医等の本大会に於ける宿敵ばかりとの対戦もあったが大学高専対抗綜合馬術に北大本科優勝、北大総長カップ、大毎優勝旗と死守することができた。又個人としても山下兄が優勝、北大としても会心の微笑を洩らしたいところであったろう。

○第九回全日本学生馬術選手権大会　八月一日習志野まで遠征、高井兄出場するも予選に敗れ去った。

○帝国大学馬術聯盟第一回馬術競技大会　昭和十二年八月四日現在の国立七大学馬術定期戦である第一回帝大戦が学習院馬場に開催された。この大会の開催までには北大主任山下、松平両兄、東大主将水野、工藤両兄の熱意と努力を忘れてはならない。北大は左記の如く堂々たる成績で第一回帝大戦の覇権を獲得し、輝く東久邇盃を海を越えて札幌へと持ちかえったのである。（数字は減点数）



○全日本学生軍対北海道軍対抗馬術競技大会　学生馬術協会から全日本学生軍遠征の準備を依頼され、諸先輩及び在札部員、札鉄の力を借りて大会の準備を終った。八月二十四日午後一時より北大斉藤馬場に試合開始、全日本学生軍の勝利をもって終った。尚当日は多数の観覧者を得て国旗掲揚、北海道長官、北大総長祝辞、選手宣誓に始まり懇親会にすべてが終るまで非常な盛会であった。

○対弘前高校戦　九月十二日、豪雨

両軍泥まみれの大奮闘を展開し、一八〇対一二五で北大予科初の勝利を飾って第一回戦の雪辱を遂げた。その他九月には「軍旗祭歩兵

第二五聯隊馬術大会」に札鉄と対戦、問題なく大勝した。

諸行事　秋空の澄み切った九月二十四、五日の両日歩兵第二十五聯隊の多大の援助を受けて初めての一泊遠乗会を豊平峡、定山渓を訪ねて実施した。又秋も深い十月には札幌時計台に馬事思想宣伝の映画を催し、十一月六日には卒業生送別試合を行ない石井、桶本、山下、前川、松平五兄を送って実り多き昭和十二年度も終るのである。最後に対札鉄練習問題が年度明けに起こり練習に支障を来たしたこともあったが協定、妥協して無事丸くおさまったことをつけ加えておく。

昭和十三年度

主任幹事のバトンが山下兄から池内兄に引き渡され、第一回帝大戦優勝をはじめとした華々しい業績を残された歴戦の勇士が卒業され、旭川騎兵第七聯隊に於ける合宿によって昭和十三年度の馬術部が回転し始めるのである。最初は銓衡制度の欠陥に起因して幹事会組織の問題が円滑を欠いた感もあったが、十二月の合宿、三月の合宿と二度の合宿も部員相互の気もよく揃った愉快な合宿として無事終り池内主任としての一年の方針も決った。方針―それは此の昭和十三年度を捨石とする―とこれであった。明日の飛躍のために今日を犠牲とする方針、その考えの是非はともかくとして昭和十三年度の北大馬術部は池内主任の下に歩みを印して行ったのである。

○札幌乗馬大会　四月に入って新入部員を迎えた諸行事の中に、部は第四回札幌乗馬大会の準備をすすめた。予算の申請、会場の選択などと東奔西走し、とにかくも会場を月寒練兵場から学内の畜産馬場へと移し得て、永年の希望の実現を見た。市内への宣伝騎乗、新案の余興競技等々、人馬共に無事大会を終了することができた。

○第二回帝大連盟戦　七月六日、東北帝大を当番校として第二回の帝大連盟戦は仙台で挙行された。馬学教室の好意に依って畜産馬場で猛練習を重ね、病後を押しての石川兄の出場などと諸選手兄にも無理を願い仙台の苦しい戦いへと出発した。札幌からは池内主任の外八名の大世帯、優勝は東大か北大との声を尻目に当番校東北帝大が三戦全勝で初優勝を飾り、大銀盃は仙台に留まり、北大は無念に第二位で涙を呑んだのである。

○第十五回全国高校馬術選手権大会　恒例のインターハイは七月三十三十一日の両日開催され、北大からは永倉、福本、小林、岡田の四兄が上京、出場した。今は亡き石川先輩が得意のヘルメットを被り元気一杯若い選手を監督されたという話が語られている。我が北大予科軍大いに奮戦しベスト8にまで残ったのだが惜しくも入賞を逸した。

○全日本学生馬術選手権大会　八月十四日東京後楽園スタージアム

で行なわれ池内兄が北海道代表で出場、試合当日抽籤馬が落鉄という不運にもみまわれて春以来の練習もかいなく予選に敗れた。

対東北帝大戦　夏の盛り八月旭川に合宿、引き続いて同月十九日遠征して来た東北帝大を旭川に迎えうった。北大は小田、菅間、西村山本、池内の五兄が出場、大差をもって楽勝した。しかしながら続く八月二十一日の「北海道騎乗大会」では大学高専対抗障碍で自他共に認めた優勝候補北大が団体、個人戦共に東北帝大に覇を制せられてしまった。

〃弱敵と見て侮らず!!〃しかし試合には「運」がある。「敗者の弁」ばかりではない「運」があるのではあるまいか？　と当時の池内主任が回顧されている。

○対弘前高校戦　月が変って九月二十四日、青森県弘前で第三回の対弘高戦が行なわれた。北大からの出場選手は永倉、関、岡田、福本小林、山根の六兄、大差をもって堂々弘高を下した。ここにも昭和十四年度インターハイ優勝という偉業を成し遂げた北大予科軍の実力が偲ばれるのである。

諸行事

十月、秋晴れの好天に恵まれて江別への一泊遠乗会が催され、翌十一月には映画会を今井記念館で開き一般に公開した。又十二月冬期の合宿は旭川の聯隊の都合上取止めとなり、斎産乗馬と歩兵二十五聯隊馬を借用して冬季休暇中特別練習了行なって之の代りとした。そして一月新幹事会の決定を待ってバトンは西村新主任へと受けつがれ昭和十三年度は終るのである。

昭和十四年度

昭和九年以来五年間我が馬術部のために種々御尽力下さった黒沢教授が公務多忙のため部員一同のその御留任懇望も退けられて部長を辞された。止むを得ずこの御申出を承認、後任は同教授の御推薦により理学部太秦教授と決定、四月二十四日新入部員歓迎会の席上新旧部長の歓送迎会を行なった。又多年部の顧問としても色々御骨折下さった荒野顧問、田代顧問も夫々御転勤なされので後任として岡田騎兵大佐、太田砲兵大佐に早速顧問をお願いした。なお本年はこの歓迎会の席に六名の蒙古自治政府留学生を含めた二十五名の新入部員を迎えた。

練習　幸いにも我が部は月寒聯隊当局の御理解に依り、事変下に於ける練習用馬匹不足の状態にもかかわらず殆んど平常と変りなく練習を続けることができた。又旭川騎兵第七聯隊に於ける合宿練習は三月、七月に二回、十二月と計四回厳しい猛訓練を行なった。

試合・戦績

○第五回札幌乗馬大会　五月二十一日、月寒三浦部隊、北海タイムス社、札幌OBライディングクラブ後援の下に部外からの参加者五十

名他中学生十四名を加えて北大畜産馬場に華々しく開催された。障碍飛越、巻乗競走、パン喰、琴平、借物競走、馬装競走などの他にも対抗競技として予科対実科、畜産対馬術部札幌OB対馬術部等の試合が行なわれ、珍技、妙技続出の中に楽しい一日を終ることができた。

○第三回帝大聯盟戦　本年は我が校が当番校に当り、七月九日旭川に於いて開催の運びとなった。京大が不参加であったのは遺憾ながら新進名古屋帝大の加入を得て、当日九日午前八時三十分より一校六名リーグ戦の形式で競技が行なわれた。名古屋からは七名、仙台からは六名、東京からは実に十五名の選手が派遣され覇を争うことなったのである。我が校からは西村、菅間、下条、石井、山本、福光永倉の六選手が参加出場し泥濘をついて奮戦力闘したが結局二位に甘んじて東大に名を成さしめ東久邇宮盃は東京へ持ち去られた。

1東大　三戦全勝
2北大　二勝一敗
3名大　一勝二敗
4東北大　零勝三敗

○第九回対東北帝大戦　七月十三日旭川に挙行され昨年に続いて我が部が優勝の栄冠を獲得した。出場した選手は山本、石井、下条、菅間、西村、福光の六兄。引き続いて七月十六日北海道騎乗大会が同じ旭川騎兵第七聯隊に開催され、多数の選手が参加して大学高専対抗障碍では北大本科（菅間、下条、西村）が優勝して昨年東北大に奪われた東日優勝旗並に北大総長杯を獲得した。なお成績は二位に盛岡高農、三位に北大予科の順であった。

○第十六回全国高等学校馬術競大会　八月五、六両日東京陸大馬場で行なわれ札幌からは福本、山根、岡田、小林の四兄。第一日は暴風雨の悪コンディションの中で各校とも善戦、出場校二十六校の中左記の八校が予選を通過した。

1、学習院　2、成城　3、北大予科　4、三高　5、姫路
6、五高　7、山形　8、一高

第二日目は好天に恵まれ絶好の乗馬日和、第一戦に宿敵学習院を屠り次いで三高、決勝戦に姫路を倒してついに待望のインターハイ制覇は成ったのである。雌伏十年、輝く文部大臣杯と優勝楯とを懐いて青山原頭選手一同感激に立ち尽くしたのである。第二日の戦績は左の通りである。（障碍十五個、二分三十秒）

準々決勝　北大予科九二・〇―学習院一二九・〇
準決勝　北大予科九〇・五―三高四四八・〇
決勝　北大予科三五・〇―姫路八五・〇

○第十一回全日本学生馬術選手権大会　八月十三日東京代々木練兵場に挙行され北海道代表として北大の菅間選手が出場第一次予選を堂々第六位をもって通過して決勝進出資格を得て二十名の中に残った。続く第二次競技では予選通過第一位明大の石崎、第二位慶応の平沢等第一位から第七位までが大接戦を演じた末覇権は見事北大の菅間選手の上に輝いたのである。昭和六年第三回に於ける北大伊達選手の優勝以来実に九年振りで選手権は再び津軽の海を越えて札幌へと我が部の歴史を輝かすことになったのである。参考までに第十一回大会の成績を記せば左記の通りである。

競技成績

一　菅間（北大）　三八八・〇〇
二　石崎（明大）　三八五・二五

三　機田（慶大）　三八三・〇〇
四　栗田（大高医）三八二・二五
五　岩本（早大）　三八一・〇〇

インターハイ優勝、全日本学生選手権獲得と相次ぐ勝利に九月二十一日職員集会所に盛大な祝勝会を催した。昭和十五年発行の北大馬術部十年誌の写真にある通りズラリッと並んだ優勝杯は記念誌中の圧巻である。十年の望み漸やくここにかなって当時の部員、先輩方の歓び、偲ぶに余りあるものがある。

さてこの栄ある昭和十四年も総勢三十有余騎が轡を並べて遠乗会を挙行した。時は十二月二十八、九両日、好天に恵れて定山渓までの遠路、心ゆくばかりに北海道の秋色を賞した。

又映画会は農学部大講堂で学内にのみ公開した。

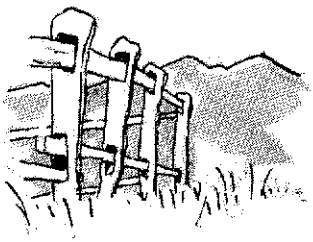
第四回弘高戦は九月に札幌で行なう予定であったが弘高の都合により止むを得ず本年は中止となった。

尚十一月三日の明治神宮国民大会には選手権二十位まで出場資格のある学生馬術中障碍に管間兄出場し八位となる、

これで昭和五年馬術部創立から馬術部史上輝かしい足跡を残した昭和十四年度までの記録を終わるわけであるが、最後に昭和十五年二月予科桜星会馬術部誕生の朗報を記して筆を置きます。

（尚この記録を書くにあたっては「北大馬術部十年誌」からかなり抜粋、引用し又半沢、岡田両先輩から多大の御指導、御意見をいただいたことをつけ加えておきます。）

（文責　三浦清一郎）



昭和十五年度

石井和彦（昭一六年卒）

このたび三十年史を編さんするに当って、その原稿を提出せよとのことに、平素は全く無音に過ぎた上、何等御後援もし得なかったことなどを思い合わせて、まことに心中じくじたるものがあり、伸々筆をとる気持が進みませんでした。然しそれはそれとして、昭和十五年度部員としてその責を果さねば、と敢えて駄筆を弄する次第です。

年史という以上、その型式に適合した書き方があるとは思いますが、当時の資料も何一つ持ち合わせず、単に貧困な記憶に頼るのみでありますので、行事、戦績等については触れることが出来ません。わずかに当時の一部員としての感想を簡単に述べさせて頂き、責をふせぎたいと存じます。

まずここ数年来の部の目覚しい活躍ぶりが、極めて鮮明に印象ずけられます。げだし部長先生始め先輩各位の御指導のもとに、現部員諸兄が自から精鋭を以て任じ、熾烈なファイトで敢闘しておられる成果であると思います。十五年度の部員も、意気においては現部員諸兄と同様に、ファイトを燃やして頑張ったことには間違いありません。第二次大戦で戦死したといわれる熱血漢、故山本義則君始め、温厚な人柄のうちに烈々たる闘魂をひめた児玉堅造君などと一諸に、チームワークの合言葉のもと、技術と精神の錬磨にいそしんだことは、全く貴重な経験であったことを、今更乍ら有難くさとる次第です。いつの時代も同様でありましょうが、当時もこわい先輩が沢山いて存分に鍛えられました。「前へ進め！」の号令から始まった練習は、一際大きな号令「鍛を外せェー」でその最高潮に達したものでした。私共は馬のたてがみ、或いは見えないように鞍の前端にしがみついて、ひたすらに温情溢れる「常アーシ」の号令を待ったという次第。この伝統？は連綿として現在まで継承されているのではないのでしょうか！　然し反面私共は、真の意味では先輩が恐くありませんでした。それは練習はたしかに厳格でありましたが、いかなるスポーツも同様に馳緩した心身をもってしては非常な危険を伴うのですから、練習をきびしくすることはむしろ当然すぎる位です。問題は私共の先輩が、練習が終ればさっぱりとして後がなく、みなリーダーシップを身につけた学生紳士であったということです。その意味で、私共はよい先輩に恵まれたと思って居ります。

始めに申し上げましたように記憶すら確かでありませんが、元の旭川騎兵連隊における合宿、日曜日ごとの月寒二十五連隊での練習等、身心の鍛練に、進んで立ち向かったという実感が先に立ち、実の所私個人としては、あまりのんびりとたのしむ余裕を持ち得なかっ

たような気が致します。然しその間、僚友の巧まざるユーモアに哄笑し、野外騎乗にはいわゆる浩然の気を養い、又技術と精神両面での自信喪失と獲得をくり返し乍ら、喜びと哀しみのうちに青春を明け暮れしたことなど、すべてが懐かしく想起されます。

以上とりとめもなく当時の回想をまとめようと試みましたが、筆が遅々として捗らず、斯の如き稚拙な文となりましたことを深く謝する次第です。

最後に此の度の三十年史刊行の壮挙に当り、部長先生始め部員諸兄に深甚の敬意を表し、併せて前部長黒沢亮助先生、部長太秦康光先生、先輩各位並びに部員諸兄の御発展を御祈りして筆を擱きます。

昭和十六年度

岡田光夫（昭和一七年卒）

此の度馬術部三十年史を刊行するに当り、歴代主任の記録を求めて来られましたが何分既に二十年近く経って居り記録も散逸してしまって某してどんなものが出来るか危惧しながら、ともかく輝かしい馬術部の歴史に途中で缺ける事があってはならないとの一念で筆を採った次第であります。

さて一月に石井、山本両先輩と農学実科の熊沢、山田、佐藤(誠)の三君の送別会を開き、私が主任を仰せつかり、選手監督小林五郎君、庶務幹事福本途夫君、会計幹事小林誠平君と云うメンバーでこの一年、部の仕事を担当することになりました。温厚で統率力に富んだ石井主任、ファイトのかたまりの様な山本先輩を送り出した心細さと自分の自信のなさからか、今手元のアルバムの送別会の写真の下に「この日主任に就任。前任者より一歩進んだ仕事をすると誓うされど前途の多難を思う時人和によるより外なし!!」と馬鹿に気負った文章が記されてあります。とにかく一年と云わず一月毎に非常時態勢が強化され、土曜日曜の月寒歩兵第二十五聯隊(北部第六十三部隊と通称号で呼ばれる様になった)の練習も不自由勝ちとなり、一方馬事思想普及と云う大号令の下に、年々数を増す新入部員をかかへて、私なりにこの一年をどうやって行こうかと思い悩んだに相違ありません。二月になりまして、高度国防国家の建設に即応する為に今までの文武会の名を廃し、これを報国会と改め、各班の活動はすべて国家目的にを沿うことを前提とすべきであるとの趣旨から、名も北大報国会国防訓練部騎道班と改められました。この様に学生

馬術の成果を直ちに戦場で役立たせるばかりでなく、馬に関する知識を持った学生の応召後の活動が大いに期待される時代となったわけで、班の活動も選手の養成より錬成と云う事に重点が向けられると云う一大転換期に遭遇致しました。かと云って、その様な方針に忠実に従ったかと云うと、やはり試合には勝つべきものと夢中になり、優秀な選手を作るために特定の人をしぼる（大変失礼な言い方ですが）と云うことには変わりありませんでした。今の学生諸君の中には、その様な雰囲気の中でよく学生が窒息もせず、又、反感も持たなかったものだと反問される人があるかも知れませんが、当時の挙国一致と云う時代の波の中で、学生だけが例外であってよい理由はなかったわけで、若干の抵抗は感じつゝも勝ち戦さと云うこともあって、大方無関心であったと申すより外ないと思います。しかしこの年の後半には遂に学生生活に重大な影響を与える事が起りました。それは、所謂繰上げ卒業がはじめて実施された事であります。この目的は、明年三月卒業予定の学生を十二月に繰上げて卒業させ、一日も早く国防の第一線に立たせようと云う事でありました。このように激変する世相の中で、私達部員はむしろ少しでも多く馬を楽しんで置こうと云うような気持で過したものでした。この紙面を借りまして皆さんに御知らせしたい事は、私の最も敬愛する左記の方々が戦場に散った事で、これらの優秀な先輩同僚ありせばと、誠に痛惜に耐えない次第であります。

記

下条　親氏（昭和十四年農学部卒）……卒業後蒙疆政府に就職、終戦を知りつつ奥地に出張のまゝ生死不明

富樫　稔氏（昭和十四年農実卒）……卒業後満洲の騎兵隊に入営、沖縄で戦死

山本義則氏（昭和十五年理学部卒）……ジャワバンドン大学に赴任の途中比島で戦死

佐藤誠亀氏（昭和十五年農実卒）……北支で戦死

佐藤　誠氏（昭和十五年農実卒）……中支で戦死

永倉　寛氏（昭和十六年工学部卒）……工兵隊に入営、北千島で戦死

福本途夫（昭和十七年理学部卒）……山本氏と同様ジャワバンドン大学に赴任の途中比島で戦死。

小林誠平氏（昭和十七年農学部卒）……沖縄で戦死

いささか冗長になりましたが一年の概要はこれ位にしてこの一年に起った事を順を追って記したいと思います。

三月三十一日―四月六日……北部第五部隊で春季合宿が許され岡田、平井、大手、稲葉、酒井、前田の七名が参加、騎兵隊から捜索隊へ編成変え直後の為、優秀馬ばかり配当され久し振りに愉快な合宿であった。

四月八日……興亜馬事大会第二日目学生中障碍にも小林五郎出場し入賞す。

五月　……幾多先輩の活躍した宮城の原で開催された第十七回東北学生馬術競技大会に岡田、福本、小林（誠）小林（五）と駒を進め岡田、小林（誠）二騎併列、野外騎乗に三位入賞。

五月十八日…全国学生選手権北海道予選が旭川で開催され、岡田、福本、小林（五）大戸、大淵、大手、福岡、稲葉、前田出場し小林（五）優勝。

六月　……部内親睦のため先輩、本科、予科対抗障碍競技大会を畜産馬場で開催、予科優勝、本科二位

メンバー

先輩　太秦・半沢・山本・小村の諸氏

本科　岡田・平井・小林(五)・大淵・大戸・福本・小林(誠)

予科　大手・福岡・酒井・小林(正)・羽島・稲葉

八月四日　……昨年常間先輩の出場した全日本学生馬術選手権大会に小林(五)出場、二三〇・六二五点で三位、二位の島(明大)との差僅かに〇・一二五、惜しかった。

十一月三日…第十二回明治神宮国民体育大会に岡田出場中障碍八位

十一月九日…北大予科対弘前高校定期戦が弘前で開催。八〇対一二〇の大差で昨年の雪辱を遂ぐ。

予科用メンバー

大手・福岡・稲葉・羽島・小林(正)・山村・安達・宇都見

十二月　……部隊の都合で夏季合宿は出来なかったが冬季合宿は隊の特別の計いで実施。

参加者

大根予科教官・岡田・羽島・安達・山村・大手・山崎

宇都見・木栓・平沢

後記

この年八月に後に大東亜戦争の序幕と云われた関東軍特別大演習の為全国的に何かと物さわがしく伝統の対東北帝大定期戦、帝大戦インターハイがいずれも中止となった事を附記します。



昭和十七、十八年度

編集委員

当時活躍され、部を指導してくれた先輩に大戸進氏・平井宏和氏（共に十八年卒）などが居られたが、都合により私達で代筆する事になり、詳細に当時の状況をお知らせ出来ないことをお詫び申し上げます。前年には世界の近代資本主義発展史上にも特筆される第二次世界大戦に日本も参加することになり、国内の情勢を一変してしまったのである。この激変期に於て、我が北大馬術部も、極めて運営困難とならしめる諸圧迫も甘んじて受けなくてはならなかった。即ち、御承知の通り前年より北大の文武会は、報国会に改められ、馬術部も騎道班となっては今迄のように技を競い、試合を行う事より、すべて部活動は国防国家建設へのレールを歩まねばならなかった。従って部員の練習も、即実戦的軍人を鍛え上げるものと変らざるを得なかったのである。国家の命令一下、我々学生も、続々、繰上げ卒業の措置により、戦地に送り込まれたのである。このような国家情勢下にあり乍らも、当時の先輩はしっかりと北大馬術部の名を両手で抱き乍ら守り続けたのである。

昭和十七年度の対東北大学馬術定期戦、及び帝大戦は中止され、炎暑八月に恒例のインターハイと全日本馬術選手権大会が行われた。インターハイに於ては北大予科第二位。本大会をもって最後となったこの年の大会は青山の陸大馬場で開催され、安達、羽鳥、小林、山崎、宮崎、本庄の各氏が出場。先輩諸兄の絶大なる応援と選手の奮闘も空しく、第二位に甘んじなければならなかった。〃北大強し〃の前評判から、あらゆるチームにマークされながらも、真向から受けて立って堂々と戦い抜けたことは、我が部伝統と誇らしく思われる。

又全日本に於ては北大から岡田氏が出場し堂々五位の成績を収めた。このころから馬術試合の中に馬術に関する「学科」が取り入れられた。

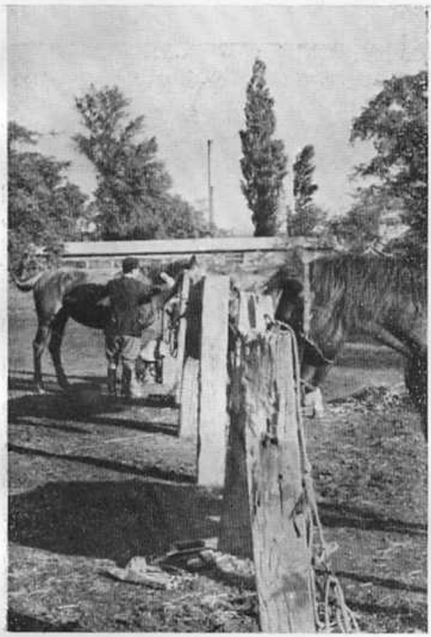
九月には旭川騎兵隊で合宿が行われた。何月に行われたのか不明ではあるが本年は北海道騎乗大会に優勝し、十月の対弘前高校定期戦も二〇〇点の大差をもって大勝した。弘高戦に関しては、本年は札幌で行われる運びとなっていたが、何分当時の情勢下にあっては練習用馬にも事欠く事少なからず、ましてや馬術の試合等、当時の北大の中にあっては時勢にそぐわぬものとして統制されるようにもなり、定期戦開催をも公表を避けて部内の上級生を中心に内密に計画しなければならない程、困難となって来た。しかし前記したように、逆境を克服して定期戦を行い、二年連続して弘前高校を下し、再度その覇権を握ったのである。以上でおよその十七年度の部の活動が終る。

昭和十八年度に関しては皆無といってよい程資料が無く、不本意ながら省略に近い形をとらなくてはならぬことは残念に思われます。特筆すべきことは、報国会、騎道班としての北大馬術部が、北大騎乗会誌創刊号を発刊し得たことである。この頃になると戦火は益々激しくなり、練習の機会もなく、「第一農場の松本先輩が実験用に飼っておられた蒙古馬を乗りまわしたりして、わずかにうさをはらしていた」と小林正英氏の便りにも書かれています。こうしてやがて敗戦、記録は散逸し、馬活動は停止の状態に陥って誕生以来北大馬術部は最も重大な危機に立ったのであった。

（文責　三浦清一郎）



＜ポプラ並木・奥へ続くアカシヤ並木・のどかな北国の抒情詩＞



練習後の手入れ



日だまり

昭和十九年度

小林正英（昭和二〇年卒）

昭和十九年の部の活動状況をということですが、あの終戦末期のこと。十九年の春、札幌にもようやく春らしい気配のおとずれる頃、各学部とも学徒動員の勤労作業に各地に散っていて、一年先輩の諸兄は、そのまま九月には入隊、我々は引き続き敗戦間近まで動員を受けて、やっと懐しい学園へ帰って来ると間もなく敗戦、そしてあわただしく卒業。その時は、既に完全武装した米軍が、続々大学にも繰り込んで、接収を開始し、我々は国の運命どころか、自分自身の身の振り方さえ、見当もつかぬままあわただしく故郷へ散って行ってしまって、今思い返しても何一つ記憶に留めているものがない始末です。また記憶の糸をたぐる資料も、敗戦とその後、転々としている間にどこかに紛失してしまって、部史編纂の諸君に申訳ない次第です。あの前後の状況は、かえって、当時大学に残っていた私達より後の学年の方々が御存知のことと思います。しかし、馬術部にお世話になった五年半、暗い時代であったにもかかわらず、全く楽しい学生生活を送らせてもらったのは、部における先輩諸兄との交際だったと思います。

昭和十五年入部当時は月寒の連隊の馬場で、それは熱心にシボッテくれたものでした。それに旭川の騎兵連隊での春、夏、冬の合宿訓練も忘れ難い思い出です。月寒の連隊の馬が樺太方面に出て、その後出来た北部軍司令部の馬に乗せてもらったのはいつからだったでしょうか。優秀な馬が襲撃されたまま、乗り手がなく、週一度の騎乗も馬をとりかえて乗る程で、それでも調教師の方に喜ばれたものでした。もうその頃は、将校乗馬を繋養はしていても、殆ど乗られなかったようです。そう云えば旭川の騎兵部隊すら、いつの合宿だったか、今迄の厩舎がすっかり模様換えになっていて、馬房変じて、偵察用軽戦車がずらっと並び、肝心の馬の方は、縮小して一棟に、どれも埃をかむっていたのには驚かされました。ここでも張り切った馬を、午前と午後と、とりかえて乗りこなすにも、準備運動位で終わってしまうような嬉しい悲鳴をあげた程でした。この旭川の合宿が出来たのも、昭和十八年の正月の休みが最後だったでしょうか（多分、小生の学部一年の頃と思いますが）。そうする間にも卒業された先輩の諸兄は、続々と部隊に入り、最も熱心に指導して下さった岡田先輩も卒業して、ついに大学から離れ、理学部に居られた山本、福本先輩が、軍要員で南方へ行かれる途中、乗船が潜水艦にやられて亡くなられたとの悲報を聞いたのも、月寒の練習の時だったと思います。又、戦争と共に、それまであった定期戦も時局に沿わ

ないという名目で次々と中止されたのもその頃です。当時の定期戦は、学部で帝大戦、東北大戦。予科ではインターハイと、弘前高戦だったと思います。インターハイの最後（これが旧高校制の最後のインターハイになりました）は、昭和十七年八月、青山の陸大馬場で同期の安達君、羽島君と二年の山崎君、一年の宮崎、本庄両君だったと思います。南方で接収したという豪洲産のサラブレットなど、名馬ぞろいでしたが善戦及ばず、最後を飾れなかったのは、前評判が高かっただけに先輩の期待に応え得なかったのが残念でした。

弘高戦も十六年は弘前であって、大歓待を受けましたが、十七年には札幌で行なうことにし、我々だけで、コッソリ、退学覚悟で計画したりしたのも、懐しい思い出です。

十八年になると、もう余り練習の機会もなくなって、第一農場の松本先輩が実験用に飼っておられた蒙古馬を乗りまわしたりなどして、わずかにウサをはらすようになったりしたものです。

かくして敗戦。混乱の中に部の整理も、後輩諸兄とも交歓もなく去ってしまったのは、当時の事情が事情だったとは云え、悔まれます。入部以来ともに練習にいそしんだ仲間は、初め馬場に一杯になる程だったのに、卒業までには、病気されたり、自然に脱落したりなどして、工学部土木の羽島君と、医学部の安達君だけでした。その安達君も胸を病まれて、当時は病症からやっと脱して、小康を得たところでしたが、その後の闘病の甲斐なく、亡くなられたのは残念なことでした。

以上取急ぎ思い出みたいなものを書きました。十九年には札幌におりませんでしたし、部としても、何一つ活動がなかったと思いますので、悪しからず。



昭和二十年、二十一年度

編集委員

日本近代史の中でも重要なエポックとなったこの年代。昭和十七年のミッドウェイ海戦の敗北以来、サイパン失陥、日本本土の空襲も激しく、以後戦況は極めて不利となり、この年、昭和二十年にはもはや敗色歴然たるものとなった。しかもなお我々学生は学徒動員でかり出され、殆んど学校に居らなかった有様でした。その為、我が北大馬術部も殆んど部活動停止の状態でした。そして敗戦と云う日本国民が今迄に味合った事のない悲嘆のどん底に投げ込まれたのでした。やっと学徒動員も解け、懐しの研究室に、学舎に戻って来られた当時の方達はしばしの解放感と、連合軍の占領、駐留による一抹の不安が交錯した毎日を送くられた事でしょう。エルムの緑に、あかねさすポプラの並木に甘い感傷に触れる暇もなくあわただしく卒業。そして故郷へ散って行かれた同僚。この暗い時代だったにもかかわらず、そこに淡い燈をともしてくれたのが、部における先輩、後輩との交歓でした。当時の時世の激変に、はっきりした記録もないながら、おぼろな記憶を辿って部活動の一端を記してみると、当時、予科では何んとか乗馬を細々と畜産部でやっていた様です。この頃学部の方からは山崎治夫（工学部）、和田晴（畜産科）の両君が馬場に良く出られて指導されていた様です。松本久喜先生、岡田元八大佐の御好意で、予科生は和田君か、鎌田（旧姓榊原）君がリーダーとなって居られた様です。当時の馬は、北威、金駿、永龍、宮武、冠風、蘭高、其の他実験牝馬で岡田光夫さんから羽島君が引きついで時たま乗った北影、牡馬のソハイル等が居った模様です。表だった当時の部活動の詳細は不明ながら、昭和二十年四月十五日畜産馬場で予科新入生のために、予科部員の伍班練習を披露。五月二日、市内東郷会館で騎道班総会を開き、太秦先生、西村先生が御出席下されたとある。以下不明ですが、翌二十一年には増々、部活動も収縮してしまい、予科生の愛好者のみが細々と練習をやっていたに過ぎず、部も自然、有名無実化してしまい、しばし眠りにおちいり、来るべき時機に備えて、その活動力を貯えるべく、伝統ある北大馬術部に一休止符がうたれる事となったのである。かくして、昭和二十二年より二十五年の四年の間、新しき時代にふさわしい、新しき姿をもって日本の馬術界に君臨する北大馬術部のおごそかな眠りが続いたのである。

（資料提供　羽島栄治氏）

昭和二十六、二十七年度（復活時の回想記）

古谷昌司

復興は新設よりむづかしく倍の時間を要するものである。

今から約十年昔、北海道大学の一隅に馬術部という集りが再度のうぶ声を上げ、その後数々の戦績をかかげ、今では学生馬術界の有力なメンバーの一員となった。

この輝かしい光の裏に基礎工事から配線までのかくれた原動力があった事を私は敢えて復活の回想として述べさせて戴く。

且つこれから申し上げる事は当時のありのままの実状を述べているに過ぎないのである。

それは昭和二十六年九月始めの或る日の朝から始まる。まだ夏休み気分の学生の特権でのんびり寝ていた私は聞いた事のない、いささか日本名では読みづらい名の来客の報せでしぶしぶ応接間に出て行った。

今まで会った事もない大きいの、小さいの、そして中位のが坐っている。先方は私を知っているらしい。ところが自己紹介の挨拶が終わるや否や「我々は北大に馬術部を作ろうと思ってやって来ました。古谷さん、是非協力して欲しい。」と始め今日までの北大馬術部のあらまし、私の現状（よくまあ！調べたものだ）と続き、最後にもし協力してくれなくとも、我々だけでも復活させようと思っていると結んで終わった。

当時、私は知人を通し、札幌競馬場や札幌乗馬クラブで個人的に乗っていて、大学で部を作ろうとか、北大に馬術部があった等とは全然考えていなかったので余り気乗りもせず、大いに賛成するから君等やってくれ給え位で返事していたが、そのうちに彼等の話につれ込まれ、やってみようではないかという事になってしまった。

これが生れの第一日である。

この見知らぬ訪問客であり、現馬術部の生みの親とは、北大助手（日高農場）下飯坂隆君、秋田市役所永井重翁君、北大助手渡植貞一郎君であった。

翌日登校して有力メンバーとしての後藤義英君（円山動物園）と初顔合せ、同僚の斎藤君（畜産助手）を引き入れ、一応の態勢を整え、躍動し始め、練習馬、練習場の獲得と新部員募集へと歩み出したのであった。

先ず部運営の分担を決めるべく、打合わせを行ない、とりあえず主将をやれとの事で私が受持ち、マネジャー兼技術指導に後藤君、庶務運営に下飯坂君、永井君、会計に斎藤君、渡植君を決め、部長太秦教授に挨拶し、受持ち分担を決定した。

練習馬は札幌乗馬クラブの馬を借用、月二千円、週三日、一日二時間であった。練習場は競馬場の何処か（我々学生のための馬場など

というものはない。）一応乗れるものは後藤君、下飯坂君、永井君、小生位のもので、さてさて復活はしたものの如何にすべきかで迷ったが、復活はした以上永久に存続せしめ、永遠に育てるべきという観点から新部員を募集、又は無理に引き入れ、二十名にも達した。しかし前途の如く乗れるものは四名位で後は殆どずぶの素人というのが発足当時の実状であった。

又戦前同好会とか、鍛錬会とかで馬術部があったようであるが、この記録とて全然見当らず、又部品も憲迪寮に乗鞍があるとかで行ってみたが、二、三あるのみでそれもぼろぼろに放り投げの状況であった。

（先輩諸兄に大変失礼であるが、これも終戦という特殊環境のたせるわざと思われる。）従って復活とはいうものの名前のみで部復活とはかえって責任が附加され、手付けた以上は何んとしてもやらねばならぬ厄介な事になった。

さて以上で部らしき型はなったが、次に今後の方針という事になる。しかもここ一、二年の運営方針で永続可能性と消滅危険性が決められると考えられる為、我々幹部としては大いに迷った次第である。

今ここに述べる事は手前味噌的になるかも知れぬが……。今日部報も第六号と発展され、内容も豊富且つ立派なものであるのに敬意を表する。しかし復活当時の記述の中に次の如く感じたので、卒直に申し上げるが、理想と現実の違いを、表面的なものと内部のものとの違いを、ただ現実の欠陥と誤想されている向きがあるように考えられる。もっと現実の姿を事実に基づいて分析考慮して戴く必要があるのではなかろうかと思う。

さて主題にもどり、今後の方針をいろいろと検討した結果、次の如き方針を立てた。

㈠ 現在騎乗出来る者は四名程で、他は全然未経験の為、これらにとにかく騎乗出来るように訓練し、経験者の卒業後の部運営可能状況とする事を第一義と考える事。

㈡ 従って二十八年、二十九年在学者の徹底的養成をする事。

㈢ 北大運動部に於いて全くなかったと同様の部である為、最悪の場合でも、形態のみでも存続せしめる部とする事。

㈣ 北海道では牧畜は盛んであるが、馬術というものはあまり知られていない。一般人の馬術に対する認識が高まれば、当部の存在についても大いに有利、有意義となる事から特に札幌に於ける馬術のPRを盛んに行なうように努める事。

以上の基本的方針の樹立を太秦教授の決定と松本教授の御指導、札幌競馬場姉崎氏の実地指導に従って進める事にした。

先ず前途の如く練習馬は札幌乗馬クラブ（及び時により競馬場の）数頭で、馬場は競馬場の下見場、又は門前広場、厩舎空地等不定個所で未経験の出来得る限り騎数を増す練習を主体に始めた。

馬場内でも蹄跡を歩かせる事は初心者にとって大変であるのに、馬場でない広場で蹄跡を作る事は並大抵ではなかった。

経験者の一人が騎乗先導をつけ、他は初心者が馬を歩かせる事のみの補導に大童であった。

さて初心者の訓練養成は養成とし、とにかく部という型に嵌ぎつけたので基本方針のPRに入った。（短期間に一応の部活動をするには全く忙しい事忙しい事）

即ち勝敗は第二とし、先づPRとして、又復活記念行事として帯

広帯大との定期戦を本年中にこれ又復活させようという事になり、発足一カ月半足らずで行なう事にした。この為出場者は約一週間前頃から練習（障碍飛越）を開始したのみであった。

この会場設置も大変で障碍物とて満足なものなく、後藤君が種々奔走し、知人の大工さんに全く実費で応急処置をして貰った状態であった。

試合場は北大第一農場馬場。その日はみぞれが降るかの如き寒い日であったが。幸いわずかな差であるが、宮脇盃の奪還所有（今日まで帯大所有）する事が出来た。

試合が終わり落着く間もなく、又初心者の訓練に入ったのであるが北海道に於ける馬術部存続の難点がここに一つ介在する。それは冬季間の練習であった。

積雪の為に馬場運動は満足に出来なかったが、それでも雪の中を蹄跡をつけ、なんとか出来る限りやったものの、結局不充分の間に越冬する事となった。

さて明けて昭和二十七年、先きの二十名もなんとか馬の背に乗る事が出来るようになった。この頃新入者で特に落着いていたのが榊原君であった。彼は全くの未経験であったが、大変失礼ながら少々鈍重に見える程落着いており、又ねばり強さがあって続いて練習して行けば必ず物にし、我々の後を継いでくれる者と確信していた。私の確信の如く彼は二十八年、二十九年と主将の位置にあり、馬術部をなお磐石としてくれた事を改めて御礼申上げる次第であります。

三月、大分最初の新入も滅じ、又又新部員の募集と訓練に入らねばならなくなった。

四月、二十七年度役員はこのままで基礎固めをする事となり、方針も前年通りで進み、先ず新入者の募集という事になり、下飯坂君永井君のポスター作成、勧誘と並々ならぬ努力の結果六十名という新入があった。

ここで一つ打ち開けをするが（当時新入の諸君許されい。これは悪意ではなく、部の継続の為の幹部の一心からである。）部の予算は実績もないので全く微々たるもので、その上馬術は他より経費のかかるスポーツであり、貯蓄とてなく、部品を買うなどとは全く縁遠く乗る事自体財政的に困難を期した。そこで一般より徴収する策として制限なく募集し、出来るだけ多いメンバーとする。しかし最後まで残るものは何分の一かであり、多くは二～三カ月のうちに訓練の苦しさの為に脱落して行くであろう事は経験者のよく察知出来る所である。従って入部金及び二～三カ月部費で或る程度の息はつけると言う算段を立てざるを得なかったのである。

予測通り六十名は七月頃には少数を残すのみで多くがやめて行った。この後に残った後継者が大久保君、正富君、岡本君、千田君、加藤(昌)君であった。

さて我々復活者の目的方針は前述の如くでこの具体策としては年次の後継者を見出し、養成する事と馬術のPRであった。四月からの運営もこれに沿って進めた。従って二十六年入部者の残った者は新入者の訓練の補助で練習も騎坐固めを主とした。

ここで一言申し上げたいが、復活当時の練習について色々異論があり、当然ある事は我々もうなづけるが、我々としては方針の完成の為にとったいささか無理な策でもあった事は敢えて否定はしない。ただこの現実をもう少し考慮していただきたかったと思っている。批判された方がもし我々の立場であったなら、同様の目的から

同様の方策をとらざるを得なかったに違いないと考える。

さて短期間に騎乗出来る方法として第一に考えられる事は騎坐固めであり、騎坐固めの為の鐙上げ騎乗は新部員にとって相当に苦しいものであったと思う。且つこれを指導する先輩諸君も全く並々ならぬものがあったと思う。しかしこの方法によって夏頃には約半数となり、このうち実質熱のある者は先の五名程度となった。これで財政的、質的目標のいくらかは効があったと思う。

しかし二十六年入部者とて半年も経ない現状では鐙上げ駈足手前変換ですら落馬する者続出で狭い馬場、或いは馬場でない馬場では危険きわまりないものであり、脳震蕩を起す者も出た状況であった。

又その間PRの大々的なものとして馬術大会即ち催しもの的に観覧客の多い時期を選んで六月、東北北海道馬術大会を当校Dグランドで開催した。この時は札幌に於けるPR、即ち馬術の認識を持って貰う為、市内各所にポスターを貼り、大衆に披露したわけである。

札幌に於いて馬術大会をこのように公開した事は十月に大通りで行なった鉄道八十周年記念馬術大会と共に始めてと言ってよい程である。私は中学時代、昔の札幌愛馬クラブで乗っていたが、子供の頃から今日まで札幌では一度も見た事はなかった。さてこの時も札幌競馬場の絶大な援助を得て行なう事が出来たが、障碍物の作成、設置、会場の設置、新聞社との接渉、出場選手宿所の世話、知事盃、学長盃の交渉等の庶務的な事に後藤君、下飯坂君、永井君の並々ならぬ努力があって盛大裡に始まり、おさめる事が出来た。

ただ試合の前日会場設置とタイム測定の時、後藤君が標準タイム測定の試乗していた時である。最後の三段障害でブラッキー号という我々として最も重宝にしていた最年長のアングロアラブが地面が固い為か、なにかにつまづいた為か、後藤君の腰の力が強過ぎた為か(後藤氏許されよ)飛越し、地面に前脚をつけた途端に前のめりになり、膝制動で坐ってしまった。立ち上がったブラッキの前脚は両方共膝を中心に上下に大きく皮をすりむき、見るも無残な姿になった。

ただでさえ馬の少ない時、且つ催しとして最も質のよい馬を出場不能とした事は全く眼前が真暗になるような思いとブラッキーに対するすまなさでいっぱいだった。ブラッキーはすぐ獣医学部病院で手当てしたが、やはり出場不能、他で代行させねばならなかった。

戦績は残念ながら第二位となり、同郷の帯広著大に優勝盃を持ち去られたが、馬術部の存在について学内学外共認識を新たにして貰えたと確信している。

しかし大会終了と共に再び基礎練習にもどり、二十七年前半は殆ど全く基礎練習のみで終った。

さて夏休み期間の練習について又頭を悩ましていた頃、幸いにも競馬場から札幌競馬開催の為、乗馬クラブの馬を北大で預って欲しいという事があり、松本教授の御努力と御好意によって始めて自馬のような感じを持つ事が出来た。即ち現在の農場の部屋を部室として貰い、現在の自馬厩舎を借りて馬を収容し、交代で馬当番をし、世話をした。この時によく率先して帰郷もとり止め、世話をしてくれたのが大久保君であった。

六月大会の際に出た話しから七月十二日一年足らずのうち初の遠征を試みる事とした。東北大学との定期戦復活である。勇躍第二軍も加え、仙台に遠征したが、試乗はあまり出来ず、且つ驚いた事には出場馬が道産子の如く非常に小さく、障碍等はとても危なっかしい

様なので閉口した。案の定、翌日の試合には熊よく負け、いさぎよく引き上げ、同時に行なわれた全東北学生軍には馴れもあってか、勝つ事が出来た。

しかし非常に不愉快だった事は定期戦の時、東北大側は馬術界では厳禁とされている標準以上の大型拍車を使用し、これの連日練習の為か、出場馬の脇腹に傷があり、血が滴っているのにそれに猶拍車をぶち込んでいる様、又逆鞭使用（これも厳禁されている）を行なっている様は見るに堪えず全く不愉快であった。このような彼等に負けても苦にはならなかったが、ここで我々として大いに考えねばならぬ事は我々の方針から我々は部の基礎固めをする事が第一であって勝つ為の充分な練習もなく、一、二の戦績で気をよくして出掛けて行った事が間違いであり、本来の姿にかえるべきであった。

しかし後継者の先鞭をつける為に又北大に馬術部のある事のPRの為に勝負は第二とし、出来得る限り各所に顔出しをする事であった。八月三十一日、国体予選（福島）に出場したが、又残念ながらパス出来なかった。

以上我々が出掛けている間、札幌の留守は本年新入者の者で、なんの事故もなく、守って居てくれた事は全く感謝にたえなかった。

この頃の我々幹部クラスの者は学生最後の年でもあり、来年の卒業の就職の事もあって色々と多面にわたって忙しくなって来たのであるが、哀心の我々に元気を付けてくれたのは二十八年度、二十九年度、三十年度の幹部諸君であった。特にこれは個人的な事になるが、三十年キャンプテンの大久保君は入部二ヵ月位から常に私を励ましてくれた。彼は北大に入る前に早大でラクビーで鍛えていたとかで私の訓練法は生ぬるい、優し過ぎると常々叱られて居た状態であった。その生ぬるい訓練でも堪えられず、ややもすると怠慢になり易い同僚をはげまし、率先して苦しみを受けもち、私の訓練をより易く援助してくれた事に今もって感謝する次第である。

次にこの頃、部の前途について私はやっと安心する事が出来た。というのは二十八年、二十九年、三十年と我々の後をついでくれる者をはっきりと摑む事が出来た事である。即ち落着きとねばり強さで部をより堅固なものと基礎固めを完成してくれた榊原君（現鎌田君）と彼についでのその確固たる部を日本学生馬術界に有ならしめる為、ファイトをもって前進せしめてくれた大久保君の両君をもつ事が出来た事である。

又彼等を中心に部の幹部として又正選手として充分はたしてくれるだろう方々に正富君、岡本君、千田君、加藤（昌）君等であった。

私は復活キャプテンとして彼等を持つ事が出来た事は私の役目も終わったも同然であり、今退部しても充分な位であった。私が彼等を後継者として確信した事（結果論的にはなるが）をマネジャー後藤君に相談した所、彼の推測も同様であり、今後の計画として彼等を（特に榊原、大久保両君）幹部養成する事としたのである。

さて自馬らしき型を持てた為か、今夏の練習は割に味入りが出来この時に力をつける事が出来たものと考えられる。

夏休みも終わり、正規練習を始めた頃、我々の部復活に刺激されてか、競馬場内でも障碍飛越等を始める者が増えて来たので練習試合をしょうというので九月、第二軍を主に対競馬場戦を行なった。

次に第二回帯広定期戦をやろうという事で帯広へ遠征、且つ第二軍も参加して行なった。幸い本年も宮脇盃は我が方に所有する事となった。

この頃であったと思うが、部もやっと落着いて部員も揃い、練習も出来るようになったが、反面乗馬クラブの年老いた馬では若い者の練習にはもの足りなくなり、必然的に無理をする事となって練習馬に事故を起す事が度々起り、乗馬クラブ会長菊池氏（北海タイムス社長）がもう学生に馬を貸さんと、又貸し料を倍額とすると言い出したのには驚いた。早速掛合ったが、てんで鼻先きにもひっかけない。全く困りはて、松本教授に相談した所、「よし私が話してやろう。」と早速出掛て下さる事になった。この時は全く嬉しかった。

北海タイムスに行ってみると、菊地社長は長椅子に横になったままで鼻で返事する様には教授の横にいた私は我慢出来ず、どなり出そうとした。教授が気配を察してか、私を制止されたので仕方なく黙り込んだ次第であった。この社長の態度にかまわず、じゃんじゃんと学生馬術を説かれる教授に動かされてか、遂に再度使用する事を許され、貸料も従来通りという事になった。

我々にとってクラブの馬は物足りないものであっても唯一のものであり、又現在以上の借用料は部活動をストップせざるを得ない状態であり、今日部が存続出来たのもこの時の教授の御助力がなかったならば危ないものであったと思う。我々として深く教授に感謝の意を表するべきである。

さて夏の暑さも過ぎ、秋日和の頃我々の大きな役目も殆ど終わり短い間であったが、我々と共に未だ馴れぬ部の作り上げに努力してくれた新部員の者等と一日楽しく過し度いという事になり、又乗馬の爽快味をもって部に猶尽して貰いたい念願と札幌ＰＲの一端を考え、全員外乗をする事にした。

しかし馬数からみて四～五回に分け、旧部員は幹事役、世話役にまわり、円山―山鼻―中島―競馬場のコースをとった。世話役は事故を起さないようにする事、楽しくする事の気苦労のみで全く疲れるのみであったが、部員の一人前の馬術家になった得意顔や外乗の爽快顔をみるとそれだけで楽しくなったものである。お陰で外乗行事も一人の事故者もなく、楽しいうちに終わった。

さて馬術大会の最後のものとして鉄道八十周年記念大会であるがこれは大きく札幌市内のど真中でやろうという事になり、大通り西八丁目の広場で行なう事になった。この日は幸い秋日和で観覧客も相当多数を得る事が出来、競馬場の全く肝入りで応援して下さる事になった。

札幌市民に障碍飛越馬術を公開し、眼の前に見て貰ったのは大きいものではこれが始めてであろうと思われる。

この行事も成功裡に収め、引き続き旧帝大戦復活という事になる。この頃練習も満足にしていない我々は各個に出来るだけ行ないこれを最後のものとして頑張ったのであるが、出発の前日不幸にも私は人馬転倒鎖骨々折で出場不能となってしまった。丁度寒さが少しづつ増して来た頃、帝大戦出場の練習で一人づつ三段飛越をしていた時であった。（馬はプリンセス号で前脚が弱く飛越中に前がきをする馬であった。）大分馬も人間も疲れていたが、これで終わりと飛越した時である。飛越中の前かきが横木の間にひっかかり、障碍もろ共、とんぼ返り顛倒、私は地面にたたかれ、動けなくなってしまった。プリンセス号は異状なき様、私の横に立っている馬に事故がないので先ず安心したが、私は立ち上がれないので〃しまった〃と思ったが、もう終わりであった。

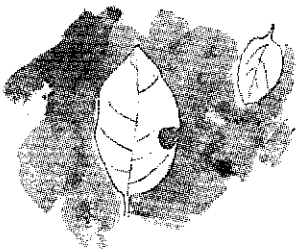
その晩早速後藤君、下飯坂君、永井君、斎藤君の正選手と補欠の

榊原君、及び大久保君が訪ねてくれ、榊原君に正選手として勇躍出発して貰う事となった。私の代りに長い間使用して来た鞭を持参して貰ったが、惜しくも第二位となり、且つ榊原君は顛倒、鞭は四つに折れて返って来た。何にか合通ずるものがある様に今も感じている。

帝大戦終了によって完全に我々の時代は終わった。後は次代に引き継ぎをするのみである。復活より今日までキャプテンを受持った私にとって方針は充分と行かなくともなんとか尽す事が出来たように思っているが、これは全て先輩諸兄の御指導、御助力と札幌競馬場の御援助、特に姉崎氏、芝坂氏、高橋氏の並々ならぬ御援助があったからであり、深く御礼申上げる次第であります。又私はキャプテンという座にすわっていたのみで、私の代りに実際に指導、且つ世話をされたのは後藤君であり、始めより終りまで陰の原動力として力強く部を支え、推進されたのは下飯坂君、永井君で彼等の御力が今日の北大馬術部をあらしめたものと敢えてここに述べさせて戴き、改めて御礼申上げる次第であります。又二十八年卒業後、北海道に於ける国体開催を機に一早く、実質の自馬をもち、次いで学生馬術界に坐をしめるべく努力された部員一同の方々に深く敬意を表する次第であります。

最後に部室の皆さんに是非御願いしたい事は学生スポーツの有り方、特に馬術家としてナイト（騎士）の精神を忘れず、ただ勝たんが為に馬に乗り、勝たんが事を第一義と考える事なく、常にフェアーな気持で人馬一体である事、且つ最後まで鞍数を多く常に練習する事である。二十八年～三十年のキャプテン榊原君、大久保君は入部時は全く素人であったが、常に休みなく練習し、今日を成した事を（例として引き合いにして大変失礼であるが）忘れなく、馬術の上達は人馬一体の精神と常に真剣な鞍数である事である。

大変長々と述べさせて戴いたが、復活当時の実状をただ有りのまま述べさせて戴いた次第であります。



昭和二十八、二十九年度

鎌田正人
（旧姓榊原　昭三〇年卒）

約十年近い年月が過つと私のような健忘症の者には何か記録をたどらぬと仲々正確な記憶がないため不確かな事があるかも知れずその点、御容赦をお願いして居ります。

前主将の古谷さんからバトンを引き継いだのは二十八年一月（雪の降って居った記憶だけしかないため、二十七年十二月であったかも知れません）、部が復活して以来まだ一年少々しか過って居ないのですから、二年目の私がキャップになっても何をやって良いやら全く途方に暮れたといったのが本音でした。当時三年目の中松さんが居られたのですが病気のため退部されたため此方へお鉢が廻って来たという訳です。部組織も現在のような部室がある訳でもなく、連絡も思うにまかせず、何か連絡事があると学内掲示板にいちいちポスターを張るというややこしさでした。そのためばかりでもありませんが、当時の関係者O・B、の方々にも御迷惑をおかけしたり失礼のしっぱなしであったり、ここに深くおわび申し上げます。私の青二才で方々御迷惑をかけたのに対し、マネージャーの大久保君に一流の社交的才能で私の至らぬ点をカバーしていただき、又非常に困難な経済事情を見事乗越えていただいた事は私にとって全く幸いな事でした。さて第一の仕事は古谷前主将始め部復活のため努力して下さった方々を戦後初の卒業者として目出度く送り出すのが任務でしたが、グランドホテルでダンスパーテイをやった他は追コンも極く粗末なものでモノグラム贈呈もなく淋しい限りで申訳ないと思って居ります。

当時の練習は競馬場内の札幌乗馬クラブで週三日を基準にやったのは前と変わりありませんが、二十六・七年より頭数も減り、リガレット、プリンセス、アート、リミッテッド、ブラッキー、チャンプ（後のアート）の六頭と、時折り借りることが出来た、競馬場岩文位のものでした。月水金以外にもマニヤは暇のある限りクラブに出入して居って空いた馬に乗せていただいて居りました。先輩が居らなくなって一番困った事は今迄は古谷、後藤、永井、下飯坂、斎藤、等の諸氏が練習時の教官役をやって居られたのが、一度に一人も居なくなって終ったのですから、馬場内の事は大体馬術教範を中心としてやるということになっては居っても、その馬術教範すら手に入らず、号令さえも次第におかしなものになる始末で、駈歩発進の扶助にしても右駈歩は右拍車を使うの、左拍車を使うのと仲々統一が

取れずに弱って居りコーチャーを是非とも見付けねばならぬと言うのが部員の声でした。当時時折道庁に居られる和田先輩が競馬場に来られて練習を見て下さる事もあったのですが練習の度には不可能だとのこと、仕方なく松本先生に御相談致しましたら「先輩で市役所に居られる岡田君なら、熱血漢だからきっとやってくれるだろう」とのお話、早速お伺いしてお願い致した所快諾を得ました。当時の私達にとっては何にも増して心強い事でした。春に入って六月末行なわれる旧帝大戦に備えて強化練習のため競馬場にお願いして今迄の午后のみの練習を、選手だけを対象としてウィクデーの毎朝六時から一時間半行なう許可を得ましたので岡田さんにはこの時にお願いする事と致しました。岡田さんは毎朝既に朝食を採られ、弁当を持って練習が終れば直ちに役所へというお忙しさで、次の年に体を悪くして一年休まれましたがきっとこの頃の御無理が災いしたのではないかと恐縮して居る次第です。毎朝集合時間は五時半ですから選手の方も大変で私と阿部、田中（以上三年目）、大久保、加藤（斉）、斎、岡本の六名でしたが、一カ月もたつと二、三人も来れば良い方、小雨の朝等今日は岡田さんも来られないだろうと朝ねをきめこんで終った所、後で聞いたら岡田さん一人で雨の中で乗って居られた由、穴があったら入り度いとはこの事でした。理論的にも経験談を色々話して下さったり、推進力が后駆から衡に至る即ち〃Druch com men〃等と恐れ入りながら興味深く聞いたものです。当時の馬は岩文を除いて全部水勒で乗って居りましたが旧帝戦は大勒でやる事になって居りましたので全馬大勒で練習をやって居りこれは当時としては画期的な事でした。勿論午后の練習もあった訳でこの方は選手をも含めた責任者二名が決められて居てその者の指導の下に一般部員の訓練が行われました。朝の練習が終って講義に出て三時頃三十分もトボトボ歩いて又競場迄というのは余程の馬狂でなければつとまらぬ無理な事でしたでしょう。部室がないため部員相互の親睦と言えば秋に行う遠乗と、夏、競馬場で行う合宿位のもので、加えて全員殆んど試合経験がなかったため選手重点に力を入れた、私の方針が間違っていたため秋になると部員数が減少して終ったのは残念な事でした。このように活動の中心が競馬場にあったため、全ての活動は競馬場と相談の上、競技をやるにしても、馬の借用願い、合宿願い等と対外交渉の大部分はこの方に向けられましたし、練習が終ったら、無事終了した旨報告するのが責任者の仕事でした。又経済的にも月三千円のクラブ費が部経常費の大部分であった訳です。

さて二十八年最大の課題は旧帝大戦を北大主催で行う事でしたが、何せ復活以来今迄の競技経験と言えば二十六、七年度の帯広商大定期戦二回の他、二十七年北大が主催して創設した東北北海道学生馬術大会と、東北大当番校でやった宮城県湯谷町の旧帝大戦、それに市内の札鉄、競馬場のオープン戦位のもの、その殆んどが私達のスタッフは知らないという有様で競技準備も仲々の大仕事でした。場所も大通りが市より不許可で結局は前年東北北海道戦の時と同様北大Dグランド（本部横）と決めました。その頃障碍と言えばチャチなもの二、三しかなく、四、五ケを新造した訳ですが、これ又岡田先輩にお願いして市役所の山から白樺を少々無償でいただき、ペンキもぬっていない障碍の中で唯一つ北大主催らしい物が出来て競技当日各チームの写真のバックとしても好評でした。これ等の諸経費は頭痛の種で、何も知らぬ私は新聞社の後援とはこんな経費の少しでも持っていただけるものと思い違いして居ったため、新聞社

に日参して、私の無知を知らされてスゴスゴと帰る始末。しかしこれも斎藤善一さんの力添えで障碍製作費の一部を大学より出していただく事になり、又数万の寄附も足を棒にして歩き廻った結果集り馬術部得意のダンスパーティの収益も少々あり、なんとか競技開催となりましたが競技当日我々は疲労困憊、大久保君と二人でタメ息をついた事でした。審判には武田忠幸、姉崎保両氏をお願いし、特に姉崎さんには競技程度その他細い点でも種々御指示を受けた訳です。参加校は東大、名大、東北大、北大の四校でリーグを行いましたが、秘かにねらっていた東久邇宮杯も、東大川崎のアート号好騎乗により敗れ二勝一敗で二位、春以来の猛練習も水泡に帰した訳ですが、選手全部が、対帝大新人戦を入れて二度目というのですから無理のない事かもしれません。歓迎レセプションも産業会館でダンスパーテーと同時に盛大に開き、遠征選手にも大変好評で、大久保君の辣腕でレセプション代金が全部収益となる一石二鳥でほっとした事でした。姉崎さんを送って競馬場への帰途、安心感と疲労から路上に昏々とねて終い、後で大笑いとなったのも今では懐しい想い出という訳です。

第二回東北北海道学生馬術大会は岩手大学馬場で行われ、田中大戦と同じく、私と大久保、阿部、田中、加藤斎、の五名が出場致しましたが、これは私が大失敗の二拒止矢権を喰って三位となり、古谷主将が第一回を創って道知事杯をチャレンジとしながら、又々これを獲得出来ず全く残念この上もありませんでした。秋の帯広畜大定期戦は雨の中、Dグランドで行いましたが、これ又私が競馬場農耕馬の成忽を乗り切れずに惜敗、結局二十八年度の競技はいずれも惨敗で終ってしまった訳です。これではまずいと、姉崎さんにお願いして、私一人だけですが十一月中旬より十二月末の学生選手権に出場する迄約一カ月余、馬事公苑に留学させていただく事になりました。向うでは毎日二頭づつの馬に乗せられ、姿勢がなってないとこっぴどくやられました。兎に角障碍馬はどうやら動いたとしても、馬場馬はからっきし駄目という訳で全く泣き度い程でした。学生選手権の方も二十二、三名中の十四位であったと思います。兎に角、東京の選手は馬場馬術は上手なのですから、どうし様もありませんでした。しかしこの留学は大変勉強になり、次年度からの練習に非常に役立ったと思って居ります。しかしこの年の暮から阿部、田中の両君が工学部のため練習を続けられないとの理由で退部されたのはようやく強化し始めた時だけに非常に残念でした。

二十八年末からは第九回国体貸与馬競技用馬が二十頭競馬場に入厩し、今迄乗って居ったクラブの馬もこの中に含まれて終い、同時に元橋調教師がお出になり、コーチャー難もこれで解決した訳ですが、同時に全てが調教中であると理由で、新入生、鞍数の少いものの騎乗は或る程度制限されたと言う事になりました。従って二十九年度は練習は全て国体貸与馬の馬の借り、全体の調教というわくの中で行われた訳で、相当の技術あるものは特に国体事務局より名を指定され、元橋、荒川(二十九年六月着任)両先生の指導の下に行い、又一般部員の練習は馬を選定し、相当調教の進んだ馬のみを用いて障碍飛越等は特にお願いしてやったと記憶して居ります。これとても北大だけ単独でやるという事は不可能で若しも他の一般の人が来て居ればそれ等の人と一諸にやる訳で、チームワークを作るのに非常に困難があった訳です。

五月には戦後第一回の北海道大会が盛大に行われ、自馬中障碍に

は、岡本（朝清）、大久保（進山）私が（岩文）OB渡植さんが（幸運）、それに競馬場高橋さんがアート（チャンプ）で出場高橋さんが優勝され、貸与馬中障碍は四十数名の出場者中岡本君が見事優勝され北大勢大いに意気が上がった事でした。

この年の旧帝大戦は名大主催で岡崎市競馬場で行われましたが、こんな遠方への遠征は今迄やって居りませんでしたし、又旅費を作るのに一苦労私は練習中の人馬転倒で足首捻坐でビッコ引き引きの大遠征でしたが秘かに優勝をねらって居りましたし、又その実力も充分あると思って居りました。しかし結果は私の人馬転倒、その他の失敗があって東大と二点差位の本当の惜敗で又も東大の軍門に降り、七月の猛暑の中、大久保、岡本、正富、加藤斎、加藤昌太郎各選手とも流汗淋漓の大奮斗でしたが野望又も空しかった訳です。〝キャアモ〟〝ナモ〟の名古屋弁に壁易致しましたが、名高い岡崎城天守閣でのレセプションは家康の古事を想いながら、各校互に交歓し、旧帝大戦ならではの楽しさでした。帰る段となって加藤斎君失踪して見当らず、まあ後で分るだろうで帰ったのですが、後で聞いたら城下のクチナシの花の下で札幌のリーベを思い出して居ったら、そこにねて終ったらしく一同大いに話しの種にして帰途についた訳です。

第九回国体馬術競技は札幌競馬場で北海道馬術史上最大の競技として選手人馬、約百頭の多数で賑いましたが、部員の殆んどが箱番とか競技係、宿舎係という名で狩り出され、総力を上げてこれに協力した訳です。出場者はO・B岡田氏が北斗で中障四位、前野先生が幸運で六段、私が北斗で綜合六位、朝清で中障その他O・B後藤、（岩文）斎藤（幸運）両氏も中障に出場したと記憶して居ります。

国体が終ってからは、しばらく荒川調教師が残って居られましたのでその間特にお願いして直接部員の指導をしていただき合宿もやったり、乗馬は二十頭そのまま居りふんだんの練習が出来成果も上がったと思います。結局国体開催迄は思うようにならなかった事は生れ出る悩みで、その後、時の学長島先生の大英断と太秦、松本両先生の御努力で夢に迄見て居った自馬六頭が第一農場で繋養され、それに加えて朝清、幸運を加えると八頭で数の上でも日本一馬持の馬術部となり、次年度からの飛躍的発展の礎石となった訳です。九月に入って間もなく大久保君に主将のバトンを渡した訳ですが二年近く盲蛇におじずのたとえ通り全く何も分からずに部のために何もする事が出来ず申訳なく思って居る次第です。責任が軽くなったら急に四年目の九月であることに気がつき慚愧した次第です。

大久保君にバトンを渡して臨む第三回の東北北海道戦が福島大主催で福島競馬場で行われましたが、メンバーは旧帝大戦と同じ、完全に勝ったと思い、やれやれやっとの事で道知事杯がもらえると思った矢先、審判のおかしな判定から福大の二位にさせられたのは全く残念な事でした。（これ等は大久保君も書くでしょうから簡単にします）十月十勝種畜牧場で行われた帯広帝大定期戦は見事昨年の雪辱を遂げやっと最後の試合だけは勝った訳で、久しぶりにハゲ天の天ぷらをつつきながら乾杯した次第です。尚十二月の学生選手権には又出場させていただきましたが又々十一位で決勝に残れず、御期待に添えず心苦しいばかりでした。

総じて復活以来技術的には全く低いレベルであったのが国体を境として飛躍的に進歩し、又練習の形態も次第に正統なものとなりましたが、部活動としては未だ統一が欠け特に部員相互の親睦という点が充分でなく、内部の組織機構の整備を疎にして居って後輩の方々に大変御迷惑をおかけした事を深くお詫び申し上げると共に当時お世話になった競馬場関係者O・Bの方々に厚く御礼とお詫び申し上げ回顧の筆を置きます。

昭和三十年度

大久保　利彦
（昭三一年卒）

昭和三十五年度も終りに近づきつつ有り、もう五年も六年も前の事は、私の頭の中に余り残ってないように思いますが、おぼろげながらの記憶をたどりつつ思いのままに筆を走らせてみましょう。

私が北大馬術部に入部しましたのは、昭和二十七年四月十六日加藤斎君に勧められ二人で下宿や寮の事を後廻しにして先ず入部手続きを致しました。それから馬術の方の上達は毎年落馬数においてトップを行って居りましたからお解りの事と思います。

さて、自馬購入のきざしは、何と云っても昭和二十九年度に国体が北海道で行なわれ、馬術は札幌競馬場と決まり一応国体中障害貸与馬として二十数頭が購入されました。しかしこれはいづれも調教中との事で部員全員乗る事が出来ず数人の者に決められ、もっぱら調教師のテコと云った具合でした。が何とかお願いをし春、夏(二回)秋、冬の五回も合宿練習が出来ました。特に此の時は、今迄得られなかった教官を元橋忠作氏、荒川米吉氏の両調教師にお願いをし、初めて馬術とはこう云う物だと云う事を教えられました。「君等のは馬術でなくて乗馬だな。」と云った調子で　。

又此の年、吾々だけで札幌競馬場の官舎一戸をお借りして合宿した時の事です。何しろ冬でも有り寒さには、どうしても石炭とマキが必要で有りますが部に金も無く考えに考えた末最後の手段をとりました。即ち、部員に夜間外出を認めるかわりに必ずマキと云うおみやげを要求しました所、唯一回の夜間外出のみで映画の看板をはじめ非常にたくさん集まり、部員のファイトを変な所でみせられ、ホットしました。又石炭は思うように行かず、手取り早い所で競馬場のをと云う事になり、宿直員が寝てからごそごそやり、取って来ましたが、入れる所が無く、押入れを開け一生懸命かくして居りました所、競馬場の姉崎技官が突然に来られ、部員一同びっくりして石炭を後にして一列に並び「いらっしゃいませ。」とやった所、にこにこしておみやげを置いて帰られました。所が其の翌日姉崎技官にお会いしました所、「部員は全く行儀が良いね。現代の学生にはめずらしいよ。」とほめられ此の時ばかりは赤面致し、苦笑した次第です。それ以後部員一同非常に競馬場の方々からかわいがられました。これ則ち「ようりょう」ですな。

さていよいよ国体も終り、国体使用馬の処分が大きくクローズアップされ、私も其の役員の一人として種々の会議に出席致しました。(もちろん学校はさぼって)又松本教授も会議に必ず御出席下され、非常に自馬の購入に力をお入れ下さいました。又大学当局

にも再三再四お話しをされ三拾数万円の予算をいただいて来られ、これで夢で有った自馬購入資金が入手出来たわけです。此の頃ちょうど、学長の選挙が有り、杉野目教授が学長になられましたので早速学長を北大馬術同好会に御入会をいただきました。此の点多少の政治臭が有ったかと思われますが、いずれにしても資金が得られた事でO・B現役共々歓喜した事は事実でした。所が自馬六頭を無事購入致しましたが自馬を入れる厩舎も飼料も無く、又々松本教授にお願い致し、御理解有るお考えをいただき農場の一部の厩舎を無料借用した次第です。又飼料も当分農場のを使え、と云われホットしました。「但し一切の自馬の世話は現役部員で行なう。」と云う約束でしたので、今度は部室の事で壁にぶつかってしまいましたが、これ又松本教授及び農場の方々にお願いをし、農場の一部を無料借用とあいなったわけです。しかし部屋には、古ぼけた高さ六尺、巾三尺、長さ六尺の二段式戸棚と蜘蛛の巣だけでしたが、部員と良く相談し宿直は二人必要となり、高学年一名、低学年一名と組合せを決めましたが、ベッドが無いため前記戸棚を一人分とし、今一人の分は、米軍の払い下げベッドを一つ見つけ、フトンは、私が体育会の役員をして居りましたので支笏湖の寮より無理矢理取り寄せ、取り敢えず上下各二枚、毛布二枚を借りうけどうやら部員の寝る所は出来たような次第です。しかし馬具は皆土間に置いたまま。馬具はたしか私の知る範囲では、うやむやの内に道庁よりもらい受けたような形になってしまったようです。(私の卒業後支払ったのかも知れませぬが……)

ざっと此のやうな状態で部室が出来上ったわけです。ちょっと皆様想像してみて下さい。壁は全て石、天井は三間もの高さ、夜ともなれば同一棟には、緬羊三、ロバ三、仔牛一及びネズミ拾数匹。全く静かなものでした。しかし部員の中では私の知ってる限りにおいては、静かなる部室でノートを見ていたのは私一人のようでした。(本当ですぞ!!) 勿論私は講義に出なくても必ず部室には顔を出して居りましたから 。此のようにして皆様方の御協力と部員の一致団結をもって北大に自馬六頭有りと全国に誇ったわけです。

ここで部員の一致団結の表われを少しくひろってみましょう。飼料は全部農場のを食べさせて居るのですから、所謂居候自馬六頭と云うわけです。部員は何の命令も無いのに日曜、祭日はもちろん、休講の時間でさえ農場の仕事のお手伝いを致しました。即ち牧草刈り積み上げ、燕麦刈りより落し迄、と云う事を。又農場の馬の馬糞出し等又冬ともなれば寝わらを選ぶのが大へんでした。雪路をかため、余り使った事の無い馬ソリを引き出し今考えてみると皆実によく馬を愛する心が強かったものと感復の至りです。又冬の作業時にこんな事が有りました。日曜日の朝九時に集合時間を決め、良かろうと云って別れた所、翌日私が寝坊をして十時に部室に行きました所、屋根の上の雪落しの真最中でした。私はすまんすまんと云いながら共に作業をして居りましたら、一部がきちんと残っているでは有りませぬか「これはどうするのか?」と問いました所、「遅刻して来た者のために大切に残しておくのだ。」との事、私もなるほどなるほどと云いながら雪落しをやった事をおぼえて居りますが、それが終らない内は、作業の終った部員は一人も帰らず待っててくれました。これなどは、所謂体刑と云う所でしょうか、部員全員の一致を崩してはならないと云う皆の心と思いました。

次に一番頭を悩ました事は金銭問題だと思います。念のために入

部金及び部費を記してみますと、昭和二十八年度二百円、百五拾円昭和二十九年度三百円、百五拾円、昭和三十年度三百円、二百円。で運動部中最高額でした。これでも一つも部室は変わらず、遠征資金、大会の経費はつねに不足して居りました。ここに至ってついに金もうけを考えたわけです。其の一つは、部主催のダンスパーティーです。パーテーイの歴史(?)は昭和二十七年に北大の雨天体操場で二日間(土、日)続けて開催したのが初まりかと思います。其の時は入場料五拾円でしたが二日間で一万四千円ほど利益が有ったと思います。これを機に各運動部も繁しくパーテイを初めましたがどうやら馬術部ほど人気は無かったようでした。これを昭和二十八年より馬術部は産業会館とわたりをつけ、そこを借用致しました。入場料百円で。又入場税の方も大分やかましく税務署より柳原氏(現鎌田氏)と共に数回呼び出しも来ましたが、学生と云う地位を大いに利用し、私の知る範囲ではうやむやにし、後は例によって上手に済ませて居りましたから、一夜にして二万四・五千は利益が有りました。其のパーテイ券も部員全員で各地に売り込み、前売券だけで二百枚は下らなかったと思います。又一種のパーテイ族を作り上げ御希望に答えるべく部員のダンスのレッスンも所かまわず良く調教したものです。お陰で馬術部のパーテイは女性が非常に多かった事も他の部にねたまれた理由の一つでした。又二、三のショーも時折入れた事も有りましたが、陰で「おどる馬術部だ。」など酷評を受けた事も有りましたがとにかく収入源の大きなウェイトをしめてた事はたしかでした。其の二は、自馬を所有して居る事から、時折り映画の宣伝にアルバイトとして人馬一体で出た事も有りました。大体二~三時間でラッシュを中心に馬一頭が八百円~千円、人間が三百円前後と此の時は、人間の方が遙かに安い賃金でしたが皆部員個人の収入にし、馬の分のみのを部に入れる事にして居りました。或る時はジョッキー服のはでなのを着て市中パレードをして居た事も有りました。其の三は、学校当局にはお叱りを受ける事は十分承知で道営札幌競馬に自馬を出した事が有ります。ミストクシマ号(昨年死亡)とヨシタカ号の二頭を、部員は馬券の下見場引出しが一回二百円、賞金を得た時は其の一割配当との約束で、小生などは獣医学部に所属して居りましたので若し馬に事故が起きたら責任を持つと云う事で(但し馬の治療は学部の教授にお願いする事にして居りました。)一度ミストクシマ号がエビハラになり約一カ月騎乗出来なかった事が有りました。勿論私など我が子が走る運動会のような気持で競馬場に行き良く馬券を買いましたが先づ結果は記さない方が良いでしょう。特に思い出に残る事は此の競馬の賞金で旧七帝大戦のため京都に遠征し、どうしても優勝しないと働いてくれた馬に申しわけないとの全員のファイトで見事優勝したあの感激は終生忘れる事が出来ないでしょう。其の四は、運動部の中で部費が最高額でしたので各人の懐も大へんな事と思いました。部の役員は時折厚生係のような役目もして居りました。先づ一般団体の依頼でパーテイの荷物の出し入れ、但し荷物が無くなったら一切部で責任を持つ事にして。又選挙を初め各新聞社のポスータ貼り、これも云われた所にきちんと貼り非常に良く貼ってある所から感謝された事がたびたびでした。これは特に夜の仕事でも有り、札幌の夜景を満喫しながらアルバイトが出来、しかも短時間でと云う事で……。

此のようにして公私共に資金も段々出来上り部の備品もスムースに購入出来、二段式ベッドを新調し、馬具もきちんと揃える様にな

り各人の長皮靴も整理出来る様になり華やかなカーテン等も窓にかかるようになりました。但女子部員の更衣室迄には至らず終りました。其の折は全員室外出るとの約束でスムースに行って居りました。女子部員のお世話は特に岡本洗君にお願い致し実にうまく全て行ってました。これ即ち男女共学の良い所ですな……。

以後私もどうやら無事に学校も押し出され札幌に近い所に居りますが、やはりサラリーマンになればそう自由もきかず部員及び部室の方には御無沙汰している次第です。

えらく長々と駄文を記しましたが此の辺で筆も終点にきましたのでストップ致します。

昭和三十一年度

荒川　清（昭三二年卒）

我々昭和三十二年の卒業生は、戦績の上では先輩諸兄の獲得されたカップを守るのが精一杯であり、特に述べることもないし、また当時の資料も持合せないので、それら詳細については当時の部報を見て頂くことにして、ここでは、アルバイトのこと、その他について述べてみたい。

まず思い出されるのは、農工大で開催された東日本戦で成蹊大と顔を合わせ、当時既に有名であり後にローマ・オリンピックの代表となった影山裕三選手を相当の差で破ったことであろう。この結果貸与馬での障碍飛越であれば、北大の力で相当のところ迄やれるという自信を持つとが出来て、その後の国立七大戦の優勝にも影響したと思われる。

この国立七大学戦は戦後第二回で、丁度、札幌で開催することになり、当時の宮沢主将を始め全員がその資金集めに協力し、先輩諸兄や後援者の方々にも相当御迷惑をおかけしたが、我々は何の因果か入学時から資金集めに縁があったようだ。つまり、クラーク先生像前での入部受付と同時に、大久保先輩からダンス・パーティーのチケットを渡され、手伝いを命じられたのである。

馬術部に入部し、馬の顔を見るより先に、資金集めの手伝いをさせられたのは我々位のものであろう。入学した二十八年は、丁度、国立七大学戦が、北大主催のもとで開催されることになり、種々の準備や寄附集めで、馬に乗ることより奉加帳を持って歩く方が多かったようだ。当時は、馬は馬術部が復活し興隆期にあった頃で、試合の遠征費、競馬場への支払い（当時、自馬はまだいなかった）或いは試合を主催する場合の開催費や合宿その為の費用として必要

に迫まられていた為か、とにかく資金集めのダンス・パーティーは非常に多かった。他の部でもパーティーを開催していたが、馬術部主催のパーティーは当時定評があり、女性の固定客も多かったようで、どんな猛吹雪の日でも赤字を出さないことでも有名であった。実際四年間で二十回程開いたと思うが、一度も赤字はなかったと記憶している。これも部員諸君の団結の賜で厳寒の夜半、糊のバケツを下げて四丁目から薄野にかけてビラ貼りをした思い出はなかなか忘れられないものである。小生も一年の時からこれらバイトの見習いをさせられたおかげで方々に顔なじみが出来てしまい、石狩支庁の税務課では「まだ卒業しないのですか」といわれる始末で、まるでパーティー屋であった。

馬術とダンスとは関係がないようであるが、しかし練習の後、特に鐙上げの後はタンゴをやり内股に歩いたおかげでガニ股にならずに済んだと思っている。もっと馬術部らしいアルバイトでは、大映映画「幻の馬」の宣伝に出かけたり、狸小路商店街の大売出しのパレードに馬共ども参加したりした。

ここ数年はパーティーの開催も毎年に少なくなるように見受られるが、パーティー屋としては一抹の寂しさを感じないでもないが、余りアルバイトに精を出さずとも良くなったのであろうか。本業の勉学と練習に励んでおられるようで非常に結構なことだと思います。

昭和三十二年度

樋口正明（昭三四年卒）

卒業以来馬に乗る機会は殆んどない。だが今でもたまに蹄の音を聞いたりすると瞬間ハット全身に緊張感を覚える。このことは馬というものがいかに私の生活に大きなウエイトを占めていたかを示すものといえよう。実際に自分の北大生活を顧みると、全てが馬との関連に於て成り立っていたともいえる。しかし私は北大入学と同時に馬術部に入ったのではなく、また入部後に於ても、当初はある程度乗れるようになる迄の一時的なつもりであった。このような私が馬術部の生活に情熱を感じて来るようになったのは、第一に馬そのものの持ついろいろな意味での魅力であり、第二に良き先輩が多く居られたという事実であり、第三に他の運動部にみられない一種独特

の雰囲気に引かれるものがあったからである。現在、馬術部の生活を振返ってみて感じることは、自分が恵まれた立場で部員生活を送ることが出来たということである。即ち、二十九年の入部当時は、戦後の中絶より部が復活して以来数年を経過した時期にあたり、念願の自馬六頭を得て部内に活気が漲ぎる興隆期であった。次で翌年、公式戦全勝という戦後の全盛期を経て、部報の発行その他、部の活動が先輩の努力によって軌道に乗った後の三十二年度の主将の任にあたり、良き同僚の協力を得て対外試合に好成績をあげることが出来たのである。

三十二年に於て特筆すべきことは、当時北海道馬術界の第一人者であった鎌田先輩が学士入学をして再び部の活動に参加されたことである。技術的指導者の獲得という願ってもない機会を得て、自馬の調教及び部員に対する指導面に於ける理論的技術指導の不足という欠陥が是正されて各自の研究は盛んとなった。このことはその後の自馬競技に於ける好成績の最大の原因となっていると思う。同先輩は日本馬術界に於ける北大の地位を向上させる点に大きな足跡を残されたといえよう。対外試合に於て最も印象強く残っているのは、シーズン早々の六月東京農工大学で催された東日本大学馬術争覇戦で初優勝した時のことである。前年初参加し一回戦で苦杯を嘗めさせられていたので喜びも大きかった。これには後日談があり、自分では八十%の可能性で優勝と日記に書いて自信満々札幌を出発したのであるが、留守部隊では予想外の勝利の知らせに全く驚いたということであった。このシーズン当初の優勝は全員に自信を与える結果となり、帝大戦をはじめ試合に於ても勝利を得ることが出来た。好成績を記録し得た理由としては、部員全体の結束によりチームワークよく各試合に参加することが出来たこと、及び鎌田、生田、千葉という強力なトリオをはじめとして、個性のある優秀な選手が多かったということがあげられよう。実際に試合に臨んで馬割りに悩むことは殆んどなく、試乗の馬をみてこれは誰あれは誰ということがすらすらと頭に浮んだものである。そして、キャップである私が満点馬に乗せてもらうことがしばしばであった。考えてみると、キャップが満点馬に乗るチームは非常に強いかまた非常に弱いチームかの両極端になるのではないだろうか。

この年画期的な出来事として女子部員の対外試合初参加があげられる。当時三年生の中村美幸さんが七月に仙台で行われた東北・北海道地区の県対抗戦に北海道チーム代表の一員として参加し、北海道に優勝をもたらしたことは北大の女子馬術の前途を明るいものとした。その後、福島大学主催の関東東北女子馬術大会にも参加することになり、更に翌年、招待全日本女子学生馬術大会の北大主催にまで発展して行ったのである。

一方、試合を離れて部生活をみると、不文律の形で守られて来た馬術部員たるものの種々の義務その他について明文化すべく、北大馬術部規約を設けた。即ち、自馬製養以来、それに附随する飼育当番、作業その他の面について、年々馬術部の発展と共に部員数の増加に伴い、新たに確認するという意味で制定をみたのである。従って、練習、合宿等については従来通り強制するものではなかったが、部員の最低の義務ということに対し強く警告する性質も加味したものである。次に示すものはその全文である。

北大馬術部規約

第一章　総　則

第一条　本部は北海道大学体育会馬術部と称す。

第二条　本部はその事務所を本学第一農場内馬術部々室に置き自馬の飼育管理をなし練習場として馬場を管理する。

第三条　本部は馬術の向上、運動精神の涵養に努めると共に、併せて馬事に関する研究を行い広く馬事思想の普及に努むるを以て目的とす。

第二章　部　員

第四条　本部は体育会通常会員中の有志を以て組織す。

第五条　部員は本部則並びにその他の諸規定を守らなければならない。

第六条　部員は入部時に部員名簿に所定事項を記入し入部費を納入し、また毎月部費として所定の額を納めねばならない。

第七条　凡て部員たる者正当な理由なくして退部することは許されない。退部の承認は主将がこれを行う。

第八条　1　部員にして健康上の理由その他止むを得ない事情により六ケ月以上部員としての活動不能となりし者はこれを休部としその間部費は所定の額の半額とする。

2　前項の休部者が六ケ月を経ずとも復部することは出来る。但しこの間休部とはみなさない。

第九条　如何なる場合に於ても部員にその義務の遂行能わざる事由の生ぜし場合はその旨を書面にて主将に報告し、その承認を得ねばならない。

第十条　男子部員は既舎当番の任につく義務を負う。

第十一条　部員は部室及び既舎内外に於てよく火の用心、清潔整頓に留意し各自その義務を全うせねばならない。

第十二条　部室に於ける飲酒、勝負事はこれを禁止する。

第三章　既舎当番

第十三条　自馬及び諸設備の日常の管理の為当番をおく。
第十四条　当番は馬の健康、部室厩舎内外の整理に絶えず留意し、飼付、日誌の記入その他定められた任務の遂行に万全を期さなければならない。
第十五条　当番は引継ぎなくして帰ることは出来ない。

第四章　練習及競技会

第十六条　練習方法、時間、場所は主将が決定指示する。
第十七条　練習に際しては主将の定めたところのトレーナー並びに上級生の指示に従って行動し勝手な行動は許されない。
第十八条　競技会出場の選手は主将がこれを決定する。

第五章　顧問及役員

第十九条　本部は学内教官及びOBより部長一名顧問若干名を推薦する。
第二十条　左の役員を置く。
1 主将、副将、マネージャー、会計、飼育、庶務。
2 主将は部員総会に於て選出される。
3 役員の任免は主将が決定する。
第二十一条　1 役員員会は本部運営の為の執行機関である。
2 役員会は一致して部運営の指針をたて正常なる部の運営、部内秩序の維持、馬匹の健康増進に努力しなければならない。

第六章　経費

第二十二条　本部の経費は左に掲げるを以てす。
1 入部費及び部費
2 体育会よりの補助金
3 その他不定時収入

第七章　諸則

第二十三条　部員総会及び役員会は主将が必要に応じて召集する。

第二十四条　部員として義務を怠たり部内の秩序、運営に重大な影響を及ぼす行為のあったとき、役員会で会議し主将裁決により除名処分をも行う。

第二十五条　本部に二年以上在部し卒業時に部員としての義務を全うせし者には卒業記念品としてメダルを送り、裏面に番号を彫りそのリストを部が保管する。

第八章　附　則

第二十六条　本部々則の改正変更は総会の議決によるにあらざれば行うことを得ず。

第二十七条　本部々則は昭和三十二年四月一日より之を施行する。

以　上

しかし省りみると、多くの問題があった年でもあった。対外試合の日程に追われて馬術の普及ということが計画倒れになってしまい、学内に於ても春の乗馬講習会の外はみるべき成果をあげることが出来なかったことは大いに反省している。ただ、対外試合に好成績をあげることはP・Rに役立つのみでなく、学内に於ける馬術部の地位を向上させ、また予算獲得の面に於て実績を示すこととして当時としてはどうしても必要であったのである。この点最も効果のあることは全国優勝することであったが当時は目標とすべき全国大会がそもそも存在せず、大会実現の為の努力が先ず必要であったのである。

現在全国的規模で行われている全日本学生馬術王座決定戦が実現する迄の経緯について知る人も最近は少いと思うのでこの機会に書いてみたい。三十年度は公式戦全勝という戦後の全盛期を迎えながら全国的大会がない為に日本一を争う機会がなかった。このことは当時二年生の私にとっても全国大会の必要性を痛切に感じさせられた。当時の学生馬術界は各地域毎には組織化されていても全国的に未組織であり、関東地区と関西地区の間で全日本学生馬術王座決定戦の名称を使用して日本一を決めていた状況にあった。この大会を真の全国大会にすべきことを主張されたのは、三十年春馬術連盟主催の第一回学生馬術講習会の席上に於て当時三年生の宮沢前主将であった。我々の考えでは全日本学生馬術連盟等の組織化には尚相当の月日を要すると思われるので、とりあえず日本馬術連盟主催にて全国的規模の王座決定戦の実現を希望し、連盟に対してその後も働きかけを続けたのである。だがそこには難しい問題があり早急には具体化しなかった。即ち従来の王座決定戦の主催団体が関東と関西の学生団体であり、馬術連盟は後援団体にすぎず、これを連盟主催の大会にするには抵抗する努力が必要であったのである。しかし我々の主張に大義名分があったこと、及び馬術連盟の青山氏の尽力によって三十一年度にはほぼ全国的規模の大会が開催される見通しがついた。ところが残念なことに王座決定戦の予戦となった三十一年六月の東北北海道地区大学馬術選手権大会に於て、北大は帯広畜産大学は敗れて、それ迄努力して来た王座決定戦についての交渉を畜大に申し送り事項として引継ぎ、その後一年間北大としては手をひいた期間となってしまった。結局この間に情勢は後退して三十

一年度の大会は実現せず、翌年再び北大が東北北海道大会に優勝した時には三十二年度についても既に手後れとなり、その翌年全日本学生馬術連盟の正式の発足を待ち、これの主催として三十三年度より全日本学生馬術王座決定戦が行われたのである。

思うに北大と王座決定戦との間には因縁浅からぬものがあり、努力の不足（特に東北・北海道地区の組織化に欠けたこと、及び全国的にみて横の連絡に欠たこと）にもよるが大会実現迄四年の年月を必要としたのである。今後部員諸君によって、我々の果し得なかった全国優勝の夢が実現される日の来るのを一日千秋の思いで待っているのは私のみではなかろうと思う。

昭和三十三年度

生田勝一

復活七年目の課題

昭和三十二年七月五日、従来の九月役員交替期を二ヶ月繰り上げ樋口前主将からバトンを受けつぐ。

新役員氏名

主将	生田勝一
副将	千葉幹夫
マネジャー	田中紀介
渉外	門奈駿
飼育	村山哲
会計	森本悌次
備品	長谷川邦夫
記録	原邦男
女子部長	片山静子
技術顧問	鎌田正人

ここに我が馬術部も復活七年、様々な問題が前途に現れ始めました。というのは周囲の情勢が次第に現状の維持を困難にして行きつつあったからです。すなわち第一に老令愛馬の老衰によるよろめき、次に厩舎、馬場、部室等諸施設の老朽化——といってもこれらは当初から相当いたんでいたものと思われますが——又用具、備品等の消耗破損、そして更に大学会計課の冷遇化、もっとも損害を直接受けるのは第一農場畜産関係でしょうが、これに所属している我が愛馬の栄養状態に大いに影響を及ぼすのは当然であります。七年目の課題はまさに山と積まれ、前途洋々として多難であります。

対外的には復活以来の赫々たる戦果により。我が部の地位を確固

不動のものたらしめ。又樋口前主将の抱負であった道内馬術思想の普及も、次第にその目標に近ずき、困難な局面を打開し、なお一層の発展を見せるには今一度我が部の基礎を充実させるよう努力する必要があると思われました。そこで部の運営の在り方に再検討を加え、新しい方向に導いて行かない限り部の存続は難しいと判断し、前記の如く新役員を決定したのであります。

戦績

六月　第十回対帯広畜大学春期定期戦　於　北大

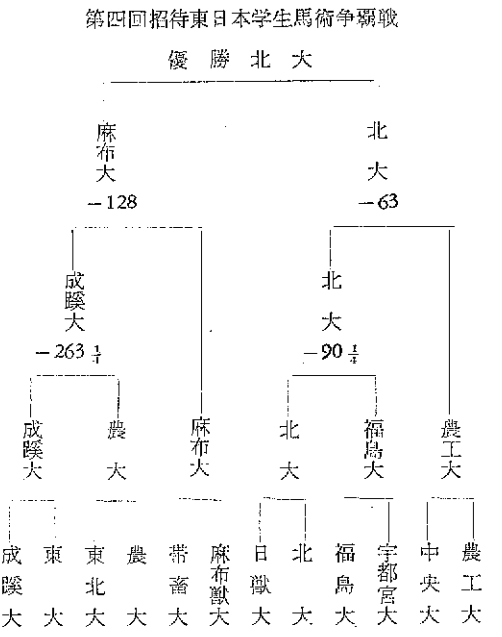
シニア戦、ジュニア戦共に北大が優勝して、まずは好調のすべりだしを見せ、例年の如く対外試合の幕はその対帯広畜大戦に切って落された。

同六月

第四回招待東日本学生馬術争覇戦　於　農工大

毎年行われる農工大学祭の一行事としての本大会には我部は三度目の参加。出場選手は生田主将以下七名、〝北大強し〟の声に乗って緑の部旗を翻めかして乗込んだ。

参加チームは十二校、第一戦の日獣大を最少減点レコードで踏破、勢に乗って第二戦福島大、三戦農工大を下して、いよいよ決勝戦は昨年度優勝の麻布獣医大とぶつかった。それも減点−63対−128で楽勝し、農工大学長杯、府中市長杯、朝日杯を獲得して東京勢に後塵を浴びせることができた。



同じく六月、東日本遠征の折名古屋まで足をのばして名古屋市大・名古屋大・北大の三校で親善試合を行ったが、三者とも一勝一敗で引き分けとなり、決勝戦は行わず後日を期して別れた。

又同じく六月、名古屋からの帰途、東大との親善オープン戦を行った。雨天の為、程度を下げて強行したが減点七点の差で残念ながら東大に勝をゆずった。

東北・北海道地区大学馬術大会　於北大

参加校五校　リーグ戦

極めてスムーズに試合を運び、予定通り優勝と決定した。

4勝零敗		
3勝1敗		
2勝2敗		
優勝	北大	
2位	畜大	
3位	岩手大	

校名	畜大	東北大	福島大	岩手大	北大	勝点
畜大		○	○	○	×	3
東北大	×		×	×	×	0
福島大	×	○		×	×	1
岩手大	×	○	○		×	2
北大	○	○	○	○		4
負点	1	4	3	2	0	

対東北大定期戦（六月三十日）

東北大 —268 3/4

V差 114 1/2

北大 —153 3/4

北大優勝

第二回にして二年連続優勝、対東北戦にかけては無敗を誇ることができた。

七月に入って、北大で札幌地区の親善試合を行ったが、鬼門の同好会に破れ、札幌乗馬クラブに次いで三位、自衛隊乗馬部を辛うじて下し、最下位を免れた。

どういう理由なのか我が部は親善試合に弱い。特に同好会は鬼門である。本当に強いのならどんな試合にも勝つ筈なのだけれども。

同じく七月、釧路へ合宿途中の青山学院大学馬術部と親善試合を行い、シニア、ジュニア戦とも楽勝した。

第十五回立七大学馬術定期戦　於東北大

待望の旧七帝大戦は東久弥宮賜杯三連覇を目指して雨の仙台で開幕された。自他共に優勝候補を許し、その意気正に天をつくばかり四戦全勝と一気呵成に輝く三連覇を成し遂げた。出場選手は生田、樋口、鎌田、千葉、村山、今田の六選手。

校名	北大	東大	名大	京大	東北大	勝点
北大		○	○	○	○	4
東大	×		×	○	×	1
名大	×	○		○	○	3
京大	×	×	×		×	0
東北大	×	○	×	○		2
負点	0	3	1	4	2	

四勝零敗		
三勝一敗		
二勝二敗		
一勝三敗		
零勝四敗		
優勝	北大	
二位	名大	
三位	東北大	
四位	東大	
五位	京大	

九月二十二日

第二回北海道団体選手権大会　於北大

大学・同好会・OB・札鉄・自衛隊・競馬場と参加七チームのトーナメント、北大は第一回戦にして、鬼門同好会と対戦、軽く一蹴されるという憂き目にあった。決勝戦は同好会と帯畜大で行われ、僅差ながら同好会が優勝を勝ち取った。

十月十九、廿日

東京馬術大会　於　パレス

（北海道関係分のみ抜すい）

中障碍飛越競技

予選失格　北標号　生田勝一

特殊障碍飛越競技

六位　北嶺号　鎌田正人

六段障害飛越競技

三位　北嶺号　樋口正明

十月廿六、七日

第十回全日本馬術大会　於　馬事公苑

（北海道関係分のみ抜すい）

乙種馬場術競技

三位　洋孝号　鎌田正人

中障碍飛越競技（B）

八位　北嶺号　千葉幹夫

六段障害飛越競技

二位　北嶺号　樋口正明

不詳　北標号　生田勝一

中障碍飛越競技（A）

五位　北標号　生田勝一

八位　北斗号　岡本　洸

不詳　北嶺号　高橋留次郎

（札幌競馬場）

総合馬術競技

五位　洋孝号　鎌田正人

八位　北斗号　岡本　洸

九位　北楡号　千葉幹夫

十一月二、三日

第八回関東学自馬競技大会　於馬事公苑

種目　総合馬術競技のみ

個人

六位　北楡号　千葉幹夫

七位　北斗号　鎌田正人

団体

二位　北斗号　鎌田正人

北嶺号　樋口正明

北楡号　千葉幹夫

自馬競技は正に馬術本来の目的にかなったものであると思われるのでこの種の大会には機会あるごとに参加することが必要な事と痛感される。本年は全日本馬術大会、関東学生自馬大会共に自馬で参加し、前記の通りの成績を上げたのである。関東大会の団体戦では

無念ながら慶応に名を成さしめたが、我が部繋養の馬に於ても決して他にひけはとっていなかたと思うので、あと一歩の前進で栄冠を獲得することができたであろうと思われた。

十一月十日

第三回関東北女子学生馬術大会

参加選手　中村・片山

我が部では対外試合に女子の出場は本年が始めてであったので、今後の進出を考慮して女子選手二名の遠征を試みた。結果は決して満足すべきものであっとは思われないが、我が女子部の奮起を促し得たことと、これを基礎として来年度の計画の中に全日本女子学生招待馬術大会を加える事ができたことは大いに意義のあることであり、成長途上の我が女子部の発展の為に貢献するころ大であったと確信するものである。

十一月十日

対帯畜大秋期定期戦

シーズン最後の試合は例によって対畜大戦であった。最後の試合、ジュニア戦に北大の経路違反があり、畜大にシーズン最後の勝をゆずったは残念なことであった。

シニア戦

北大　V北大優勝

帯大

ジュニア戦

北大　V畜大優勝

畜大

これで本年度の行事の大略を書きしるしてきしたが、大きな試合は緊張するせいか実力相応の戦振りを見せたのに意外な伏兵にしてやられることが多かったのは大いに反省しなければならぬことであろう。又本年は残念ながら全日本王座決定戦が行われなかった。様々な条件、環境に於て他校より一段と恵まれている我々は絶対的強さを誇り得る地位に立つことが比較的容易にできるのではないだろうか。北大馬術部の奮起と一層の発展を願って終ります。

（部報より転載　三浦清一郎責）



昭和三十四年度

森本悌次（昭三五年卒）

戦績の詳しいことについては既に部報に報告されているのでここでは書かないが、私が一年間部の運営をまかされて、感じたりしたことについて二、三書いてみたい。

戦後の所謂黄金時代の後を受けただけにはっきりいえばやりにくかった。とにかく前の年の通りに成績を上げれば当り前で、落ちれば今年はどうしたのだといわれることは必定である。その結果はご承知の通りであるけれども、帝大戦に五連覇をなし得なかったのが最も口惜しかったが、これも全くわずかの差、それも審判から成績が発表されるまで優勝をしたと思っていただけに何とも残念であった。特に、なれぬ暑さにもかかわらずよく健闘して審判の方からもその騎乗振りをほめられた選手諸君に対しては全く残念という一語に尽きる。

その他のビッグゲームとしては東北北海道学生大会に優勝出来た。この大会は本来ならば福島大がその当番校であったのが、馬の都合で北大にてやってくれるよう依頼して来たので、主催校の優勝は困難というジンクスを自馬の強みと実力(?)でこれに打ち勝つことが出来た。それで十二月には全日本学生馬術王座決定戦にのぞんだがこれも惜しい所で二回連続出場のかいなく、優勝を逸したが、ともあれ、実力的にはずば抜けたうまいものはいなかったけれども、小ツブながら平均した力を皆が持っていて、結局プロ野球の大洋とは対称的に、リーダーである小生のリードのまずさで試合を失ったようなので、その点に関しては十分遺憾の意を表したい。団体では幸いにも前年度に続いて優勝、入賞者を出すことが出来たのはうれしいことであった。今年も熊本の国体で、大場君が優勝されたが、全くうれしいことである。

他面相変わらず我々の頭を悩したのは、財政的なピンチと飼育管理の問題であった。ある遠征で誰れかがこんなことを云った。「一度でよいから女中さんが御膳を運んで来てくれる旅館に泊って、十分な休養をとって試合にのぞみたいものだ。」と。我々の遠征はほとんど夜行で行って着いた朝試合、そしてその夜の汽車で帰って来るか、又は主催地の学校の寮に泊められて、外で一ぜん飯を食うのが関の山である。「オレ達だってそうして優勝したんだ。」と先輩にいわれれば何とも申し上げる次第もないが、決して今のような状態ではよいはずがない。それでも私達のときになって東京に東園先

輩を始め若い先輩の方々のご努力によって、在京OB会が結成されて、我々に援助を下さったのは誠に感謝にたえないことであった。そのお蔭で前年までは何とか雑収入の道があってどうにかやっていたのが、それも底をついて全くのピンチに陥った我々も一息つくことが出来た。欲をいうならば、これが全国の全部の先輩の組織となって欲しいものである。聞くところによると、今年はかなり全国の先輩より援助が来ているとかこれが更に大きくなるよう望みたい。

ゲルのことが続いて恐縮だが、飼育管理の問題も我々を圧迫した。畜産学科の厄介者的な存在の馬術部の馬に対する圧力は大きく、結局松本先生のご努力でかろうじてその糧を得ていたのが、先生の渡米によって全くどうにもならない事態になった。例年春先になると燕麦が欠乏して、いつも先生におこられながらも教室に通って、何とかしていただいたり、部のとぼしい財布から幾分ずつ出してその場をしのいでいたが、とうとう前記の通り先生の留守と財政のピンチでどうにも明日から馬に食わす燕麦がなくなったことがあった。そのとき最後の手段として大学本部の会計課に泣きついてどうやらもたすことが出来たが、後で考えるとぞっとするほどである。とに角、自馬があっての馬術部で、馬がいなくなった馬術部は丘に上ったカッパに等しいのであるから、馬術部の馬を心配なく飼育できるような永久的な体制の確立が必要であると考えられる。

またこのようなことが影響して新らしい馬を入れることも出来ない。馬は年々才をとっていくし、各競技大会の水準は向上しているのに、毎年同じ馬で出場して「老馬に乗ってよく健闘した」なんていわれるのは余り感心しないし、このままでいるといつか断層が生ずることは明らかである。

最後に部内の人間関係について云えば、永年の念願であった自馬の所有がかなえられて、今まで馬キチのみの馬術部が広い層の学生に解放されて、部員の数が増加した。これに伴って、所謂サラリーマン的な部員の存在が目につくようになった。勿論これは、部を統率する指導者の指導力の欠陥に由来することは明らかであるが、しかし何事に於いてもむずかしいのはヒューマンリレーションである。競技会等に出場する際のチームワークには影響しないけれども、他の部と異なり、馬を自分達の手で飼育管理する立て前からは、いわゆる半幽霊的な部員が困った原因となる。特に冬のシーズンオフになるとこの問題はいつも頭を出して来るようだ。そんな奴等はやめさせてしまえといわれたらそれまでだが、現在に於いてはこれらの部員がある面に於いて部を運営していくには必要であることも又、事を簡単に考えられない原因である。特に馬術のように特殊のスポーツでは多くの人に馬術というものを理解してもらうためにはまあ必要悪的なもので、今後のこれらの解決も残されている。

以上取り止めもないことを書いたけれども、今年は創立三十周年を迎えた馬術部が更に大きく発展するために今後解決しなければならない問題は多くあると思う。勿論これは現役のみで出来るものでなく、先輩を始め一般の馬術関係者の援助なくしては出来うるものではない。北大馬術部が益々その成果を上げられんことを祈ってやまない。



櫻星会馬術部設立のこと

小林誠平（昭一七卒）

「桜星会馬術部設立」此の言葉が先輩によって具体的に唱へ初められてから、数え見れば早や四カ年の月日は過ぎ去ってしまっている。四年間〃唯単に四年間と云っても非常に短いと感ずることもあるけれども我々桜星会馬術部設立を希望していた者にとってはそれは長い長い月日であった。顧みれば昭和十二年西村氏達によって最初に役員会に提出されてから、昭和十三年石井、山本、児玉の諸氏により、昭和十四年、永倉、半沢、服部、関の諸氏によって毎年々々提出されながら出席役員の三分の二の賛成を得ず遂に否決の憂目を見なければならなかったとは。趣意はほとんど全役員に徹底しそれには賛成されていながらも実際の投票に於いて否決されようとは。その原因を思えば、経費の問題に於いて否決されるとは我々にとってあまりと云えばあまりにも残念であった。昭和十四年度福本、岡田、山根、小林予科幹事となってからは常に思い出され互に語り合うことにはインターハイ優勝と桜星会馬術部設立のことであった。十四年の暮から越えて昭和十五年、我々も役員会に「桜星会馬術部設立の件」を提出すべく適当なる方法による運動を開始した。併しそれは例年の方法以上には何等変ったこともなかった。二月八日役員会には出席者六十二名によって、午後四時十五分開会せられ、先ず総務より彼等の立場を説明、新部設立の件について積極的に賛成の意を表明した。併し予算の件については、当分の間予算は請求しないし又請求する場合は役員会に附することを附加し、我々としてもそれは現在の桜星会としては止むを得ないこととして認めた。趣意書朗読、福本の種々の説明の後、高岡教授、東教授ら経済問題其の他について二、三の質問あり投票が行なわれる。同時に提出された射撃部・音楽部の説明、投票の後開票さる。我々の胸に唯賛成の三分の二を越えていることを願うのみ。結果は賛成五十票、不賛成十票、無効一票で桜星会馬術部は設立された。時に七時三十八分。

先輩達による努力は時来たり、文武会馬術部成って十年目、二千六百年の光輝ある年に美しくも華やかに実を結んだ。桜星会の一部員として或はインターハイに、或は其の他に全桜星会員の後援の下に戦える日は遂に来た。我々の頭上には桜と星の旗がある。我々の喜びは桜星会員の喜びである。併し我々は今日のあることは先輩諸氏の苦心と指導の結果であることを決して忘れない。

（北大馬術部十年誌より転載）

在京O・B会結成について

在京O・B会幹事　樋口正明

現役時代より、OB会の組織化については、大いにその必要性を感じていたが、いざ自分が学生生活に別れを告げ、実社会の一員となり毎日の忙しい仕事を持ってみると、気になりながらもOBとして何も出来ずに卒業後半年を過していた。

たまたま昭和三十四年一月、戦前の大先輩有志の間で在京OB会を結成してはとの機運が起り、初の会合が計画されているとの知らせがあった。そしてこれに出席したところ、十名のOBが集り、準備会としていろいろ懇談をした。席上、今後在京OB相互間の親睦を図るとともに、馬術部に対しても出来るだけの援助をしたいとの意見が出され、翌十一月東京で開催される国民体育大会、全日本馬術大会を機会に在京OBの組織化を進めることになった。十月二十八日、遠征選手歓迎会を兼ねて在京OB会第一回総会がOB十八名出席の下に催され、東園氏を会長に選出し、私が当分の間連絡係となることに決まった。

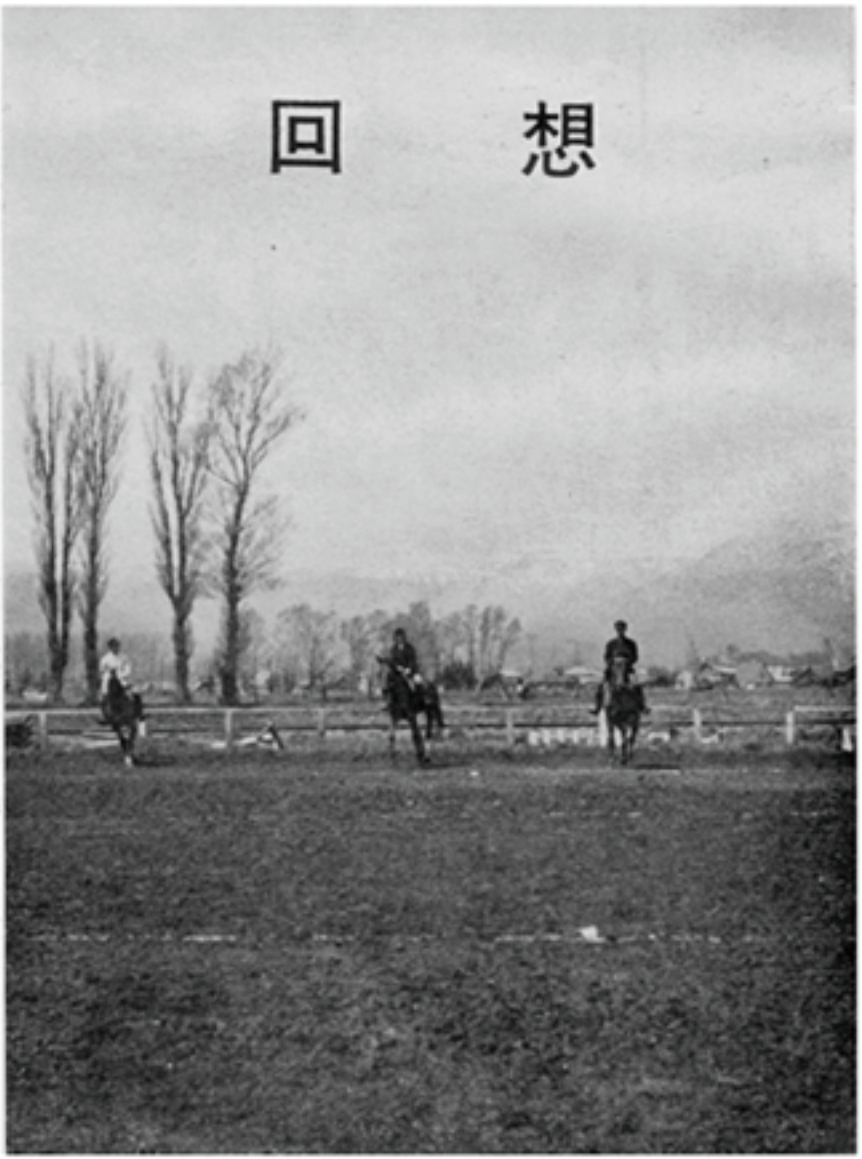
現在会員は三十名を数え、忘年会、新年乗馬会等、時々集っては馬談義に話を咲かせている。本年一月の初乗会は、中央競馬会の御好意により馬事公苑にて行ない、会員十三名の参加があった。約半数が馬に接するのは戦後はじめてという状態であったが、流石に往年の名選手連(?)は、三時間余りの障害飛越や道路騎乗においても見事な手綱さばきをみせ、それぞれ一日を楽しむことが出来た。但し、その後しばらく腰が痛くて困られた方が多くあったであろうことは想像に難くない。

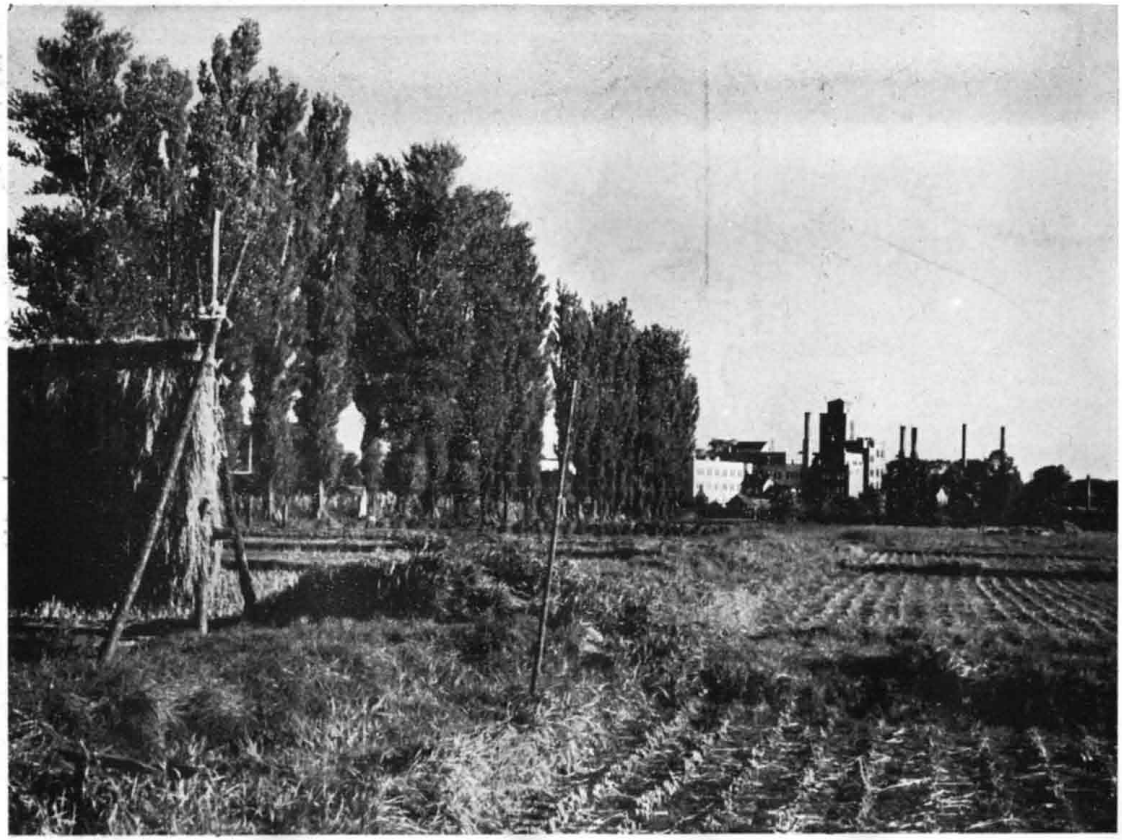
馬という共通のものを通じ、北大生活に思い出を持っている者の集りとして相互の親睦を深めつつ、馬術部に対して物心両面について多少なりとも後援をなし得るようなOB会として今後も進んで行きたいと思っている。



（東京OB会・第一回総会・国体・全日本出場選手を迎えて）

回　想





<初秋の農学部遠望>



理学部横
馬術部部室へ至るポプラ並木。



北大構内クラーク像附近

乗馬会の思い

平山常介（昭四年卒）

大正十三年の秋頃だったと思う。当時は予科二年生だった私が同じクラスの沢田君、野間口君から乗馬の相談を受けた。といっても沢田君は朝鮮の中学から、又、野間口君は九州の中学から、そして私は京都から来ていたので、北海道に来たのだから馬に乗ってみたいというのが話の起りだった。そこで体操の先生だった中村先生（陸軍大尉）と大塚先生（陸軍中尉）に相談して、当時月寒にあった第二十五連隊から退役間もなく北大予科に来られた大塚先生のお世話で、月寒連隊の将校馬と機関銃隊馬を日曜日だけ借りることを連隊長にお願いすることにした。こんな手続世話は野間口、沢田両君が特によくやったので、私はただついて歩いた程度でした。その頃は丁度軍縮のやかましい時代で、軍隊は今日の自衛隊のほどではないまでも、世間から余り歓迎されてはいなかったし、又一方で、近く学校に於ける軍事教練が正課として採用される話が出ていた時で（大正十四年には正課となった）、連隊では心よく私達の願いを受け入れてくれた。勿論乗馬だけお願いしたのではなく、軍事研究の題目も加え書いた結果もあったのでしょう。

扨、乗に馬るといっても、三人共馬に対する知識は何も持っていなかった。願書を出してから許可される間も、何とか早く馬に乗りたいというので、やはり退役将校で馬を持っていると聞いた三瓶さんを中島公園の近くだったかお宅に訪ねて私達の希望を述べ、又、札幌に乗馬会をつくる話などして他に二、三の馬持ちというより馬好きの方々（残念乍らお名前を忘れた）を集め持馬の借出しに成功した。円山公園の近くの馬場らしい広場で、最初は二、三頭の馬だったが初めて馬乗りを教わった。私達の方は会員を手近から集めて七、八名だったと思うが、日曜だけでなく、放課後もよく練習に出かけたものだった。交代でしか乗れなかったし、お互いによく落馬もここで経験した。特に私など多い方だった。そこで北大乗馬会を組織したのでありますが、勿論これは文武会に入ったのではなく、同志の集りのものでした。会長を中村先生、副会長大塚先生、委員長野間口君というのがはじめだった。私はそれからずっと常任幹事のようなことをしていたと思う。これは発起人の一人として、たえず相談役的な役割をしたという程度のものであります。会費は月二円だった。これは当時としては学生には大金で、この会費が運営上（謝礼金が主体）必要で、文武会に入れなかった主因で、私が昭和四年卒業する迄、在校中はその姿のままであった。

私達素人連中が三瓶さんの組織前の乗馬会を中心に札幌の街を乗り廻るようになり、街の乗馬熱が昂まり、十三年の暮だった愈々正式に札幌乗馬倶楽部を結成することになり私達にも入会を勧めて来た。その頃は可成の実質会員が集っていて、女子会員（芸者さんだったとか）もいたので仲々賑やかであった。当然発起の口火を切った私達は入会すべきだったが入会金を十円とか二十円とかいうので一同閉口、協議して私達の会員は全部辞退することにした。丁度その頃は毎日曜午前中は月寒に練習に行くようになっていて、午後迄

乗馬というのは可成過剰でもあった。第二十五連隊では丸さんという調教師が指導してくれ、時々将校の方（少佐以上でないと馬に乗れなかった）がわざわざ日曜に出て来て教えて下さった。

大正十四年三月の春休みに、初めて旭川の第七師団の騎兵第七連隊に二週間位だったか軍事研究を兼ね、今日でいえば二週間入隊をした。ここでは午前、午後馬に乗って楽しんだ。丁度前述の通り、軍縮時代で兵舎は空いていたので、都合よく隊内では下士官待遇ということ（即ち兵隊さんには敬礼しなくてよいということ）だった。これ以後夏の休みや春にもこの騎兵隊入隊は毎年企画された。昭和になってからその機会中に連隊で馬術大会があり、中野君が二位に入賞した。その時の一位は旭川師範の学生だった。次の年は同じ時期にやはり大会があって、その時は中野君が一位だった。所謂馬術に熱が入って来た頃だった。私は乗馬を楽しむ方で、当時から七十五キロ（二十貫）もあり、よく馬が可愛想など冷やかされていた関係で、又乗馬姿も優美でないことを自覚もしていたので競技には出場しなかった。これは下手ということではないのです。

思い出はつきませんが馬術部創設の頃の話をお伝え致します。

北大乗馬会時代を省て

中野友二郎（昭四年卒）

馬術部創設三十年を心からお喜び申上げます。私は昭和四年の三月卒業したので輝かしい馬術部の発足には語る資格はないが、何より好きな馬の事であり、馬術部の前身である北大乗馬会の最後の責任者であったので、当時の状態や馬術部が生れる迄の事を述べてみたいと考へた。昭和十二年北大予科工類に野間口氏が入学した当時、軍事教練教師歩兵中尉の大塚さんに依頼されて、月寒の歩兵連隊機関銃の駄馬に乗せてもらうように話を進められた。此の発足当時参与された諸公は、予科工類の沢田、平山、中谷、三氏に農類の間鍋氏で皆予科一年の元気な積極性あり組織力のある人達ばかりであった。一団体が生れ出る時、而も当時の軍隊は民間人の介入は非常な困難があった。其困難は前にあげた野間口氏を中心とした五氏の熱意に動かされ、大塚中尉の度々の請願により週二日、即ち土曜の午後と日曜の午前とに乗馬練習を許可されることになった。同氏等は早速会の組織に全力をあげ、会長には予科主事藤原先生をお願いし、幹事長野間口氏、庶務沢田氏、会計平山氏の下に会員が募集された。最初は十五名位だったと思う。記憶がうすれているが、発足は昭和十三年の春かと思う。同年夏頃、若い私の目に予科の生徒が長靴をはいてピカピカする迫車をつけて歩いているのが目についた。当時畜産学科に乗馬が七頭位あって同学科の学生は乗馬演習があり、農学科は三年目学生のみ、週一回、あこがれの乗馬演習があった。馬に乗る事、動物を御す事は誰でも好きであろう。何処の子供も犬が好きだ。現畜産学科松本教授、後に述べる川崎氏等も予科時代犬にこっておられたようで、私も松本氏から猛犬の子を一頭戴いて愛育しておった。

さて乗馬姿の予科生を見ては私の心は矢もたてもいられず、同学年の而も科も同じ間鍋氏に何とか入会させて貰い度いと懇願した。

間鍋氏も度重なる懇願なので、之を平山氏に紹介して二氏の紹介で、漸く入会させてもらったのが、其の年の秋で、予科二年の時であった。最初は私設的な傾向が強く、相当有力な紹介者がないとなかなか入会は困難であったように思う。さていよいよ最初の練習である。旧会員は将校乗馬に颯爽と乗っているが、新入会員は私とも十五六名は、駄馬に軍鞍と称する高い鞍で乗せられた。興味をつける為に少し乗せて速歩、常歩で初歩を教わった。而も軍馬は大切な兵器である。当時は兵よりも大切な存在と考へられた時代である。而も、馬になれ、馬の癖を知り、馬と親しくなることが、一番大切な事である。最初は乗るのではなくて、乗せてもらうのである。指導教官は軍の調教師であった丸さんである。端正な姿勢で、私共のあこがれの的であった。さていよいよ乗せてもらうと、常歩の時は先頭の馬に（旧会員）ついて行くので、云われた通りの姿勢が保てるが、事速歩になると姿勢は保てぬわ、尻は浮くわ、仕方なく前橋につかまった。何回やっても駄目だ。他の人達は二回目位から手を離しているのに、私だけはいつ迄たっても手が離せない。私に馬乗りは駄目なのかと何度思ったか。何度断念しようかと思ったかわからぬ。然し平山、間鍋両氏に、一生懸命やるからと約束した事であり、旧会員が立派に乗っているのを見ては、永年あこがれていた馬乗りをどうしてもあきらめ切れない。漸く速歩中に手が離されるようになったのが、一ヵ月近く後の事であったであろう。さあ嬉しくてならぬ。此のおくれを取りもどす為に、私設の札幌愛馬会にも入会して練習に励んだ。どうやら人並みに乗れるようになって来た。翌年調教師が交代になり、安部さんが吾々の指導をされた。安部さんは少し前かがみで、馬の前進力に主体を置かれたようで、馬の運動が生き生きとしているように感じた。私も将校乗馬に乗せてもらう様になった。

北大乗馬会の基礎も漸く固り、練習にも実が入って来た。そして後年、馬術部の産みの親である河崎、松本、岩垣三氏の入会を見たのである。幹事長の野間口氏が、後進に路を開いて、役員を引退されたので、幹事長平山氏、会計間鍋氏、庶務中野と交代して会の運営に当る事になった。此の頃から、旭川の騎兵第七連隊に、三月の休暇に合宿する事になった。新入会員も、出来る丈公示して、広く希望者をつのる事にしたので、会員の入退が相当多くなり、残る会員は熱心な人達ばかりとなって、技術も一段と躍進した。歩兵隊の将校馬で、馬場馬術、障碍迄やって而も、今迄集団行動になれなかった将校馬を、此処迄持って来た事について、軍当局は喜んでおられた。然し吾々の技術には、未だしの感が深かった。騎兵連隊の合宿では、さすが本職だけに、乗り振りが全然ちがうのに驚いた。指導教官は、根岸中尉殿、滝曹長殿、古城軍曹殿、それに本部附須田曹長殿であった。特に須田曹長殿は騎兵学校出身者であり、馬術については連隊中第一人者であった。私が本科一年の時、平山氏は私に幹事長の重職を与へられて、役員を退かれた。前役員は名誉会員として会に止まってもらう事になり、会の発展上指導助言を頂くようになった事は、喜ばしい。庶務川崎、松本の両氏、会計に、岩垣氏とスタッフがそろって、基礎は固くなり馬術部への進展の道が開かれたと云っても過言ではない。川崎、松本、岩垣の名トリオで、最早事実上の部であり、基礎に於いても、組織に於いても、確固不動のものとなって来た事は争われぬ。私は時々三氏に、部への移行の問題を説かれた。然し技術の面では未だしの感があり、腰をあげる気になれなかった。此の引込思案の態度で、部への移行がおくれた事をおわびしたい。特に以上の三氏の熱意に応じられなかった

事をおわびしたい。然し、何とかして会員の技術向上をと念願し、少なくとも七、八名の会員が以上三氏の技量に迄達するようにと、念願して練習を重ねた。会員の新陳代謝は他の運動に比べて激しいが、淘汰されて優秀な者が残って行く事に、変わりはない。練習は激しい。心を鬼にして激励しなければ、反って危険が倍加される。互いに弱気を励まし合い、稍もすれば粗雑になり勝な運動神経を引きしめてゆかねばならぬ。

学部の二年の夏だったと思うが、他の大学の技術を見せてもらう為、仙台の馬術競技大会に、個人で出席して見た。十幾つかの障碍を無事飛んだ。成績については兎角は述べたくないが、之を我が北大乗馬会のそれに比較すれば、「北海のはて中央を知らず」等と、引込んでばかりいる必要もない事を知った。川崎、松本、岩垣、酒井、半沢武田、等のメンバーを擁すれば、決して他に劣らぬ成績をあげ得る確信を得た。否、私の念願していた技術向上が、馬術部への発展段階として充分なものになって来た。こんな思い出がある。酒井寛一氏の乗馬、宮は私などなかなか乗りこなせない。首で逃げる腰で逃げられる。寛一氏が乗ると見事に纏す。「矢張り寛一さんとお宮か」と、感心したが、問題は乗手の脚力であり推進力である。充分な推進力には、馬は腰を振ったり首で逃げたり出来ぬ。馬に乗るには、一に推進、二に推進であり、之と平行した愛情を持たなければならぬ。馬になめられてはならぬが、馬を恐れたり、恐れさせたり、神経質にさせてはならぬ。入会させてもらった当時は、或いは江別に、或いは定山渓へと、遠乗りがあったが、後になって馬場の練習、特に騎兵隊での合宿に重点を置かれた事務当局の三氏に、特に敬意を表したい。娯楽の域から脱して、会員が皆技術の修得に努力を積む心になった事が何より喜ばしい。

二年前、卒業以来始めて北大を訪れて、松本教授、半沢教授にお会い出来て往年の思い出にふけった事は忘れられぬ。半沢教授の御案内で色々馬術部の実態にふれさせて頂き、三十年前との差がつくづく感じさせられ、私が去った後の乗馬会が馬術部に発展し、而も此処迄長足の進歩をした事に驚いた。役員の交代毎に、何等の実績もなかった私にまで挨拶状を戴き、而も、学習院時代のベテランであった伊達氏の入部以来全国的に優秀な成績をあげ、学生馬術界に北大馬術部の名を高からしめた事は、其前身である北大乗馬会員の末席をけがした私の喜びでもあり誇りでもあります。三十年を経て、時々昔のモノグラムを胸につけて当時をしのんでおります。

毎年春、上京致しますが何をおいても学習院馬場に参りまして、若い学生の馬術に精根を打ち込んでおられるを見学して、老の血を若がえらせて、もらっております。私の仕事は高校の生徒を立派に育て上げてゆく事です。馬に乗っていた頃、身にしみた責任と愛情で若い生徒を育てる事に、努力しております。

部員諸子の御健斗をお願いします。





在部当時を顧みて

――学生選手権のことなど――

東園基文（昭九年卒）

何も書かないうちに、北大馬術部創立三十年記念号の原稿の〆切日であった九月三十日が過ぎてしまいました。なんとも申訳ないような、それでいて内心ほっとしたような気持になっているところへ、十一月中頃まで待つから選手権のときの様子や、当時の練習のことなどについて何か書けとの御命令、なんだか税金の督促を受けたような気がして、所詮はのがれられない義務でもあろうかと、原稿用紙に向っては見たものの、さて何から書いたらよいものやら、何分にも三十年近くにもなろうという昔話、現役の方々からすればまだ生まれぬ前の物語、正確なことは何一つ記憶していませんし、調べる時間もありませんので、ただ思いだすままに漫然とおしゃべりさせていただくことにして、誤りがあったら何卒お許し願います

私が馬術部に入れていただいたのは昭和六年の春で、文武会の馬術部になった翌年だったかと思います。当時は部に馬がいる訳でもないので、土曜日ごとに月寒の歩兵第二十五連隊に行って、銃砲隊の馬、つまり機関銃を積んだり、歩兵砲という小さな大砲を曳いたりする馬や、その連隊の連隊長とか大隊長とかいう人たちの乗る所謂将校馬に乗せていただくのでした。十頭ぐらいの馬で、調教師の方が簡単な部班馬術の号令をとって下さり、その後で低い障碍を飛ばしてもらって、週に一度の貴重な練習は終るのです。日曜日に乗ることもありましたし、たまには遠乗をすることもありましたが、道路騎乗でも、できるだけ片手手綱などしないで、これも練習の内だと気を入れて乗ったものでしたし、また部員にもそうした心掛けで乗るようにいいもしました。

しかし東京で、校馬二十頭の外に主馬寮、砲工学校、士官学校と馬場馬術に障碍飛越に恵まれた練習をしてきた私にとっては、なんともものたりないというより、部のためにそのあまりに恵まれない練習条件を歎かずにはおられませんでした。それで選手級の部員は努めて山鼻の方にあった貸馬屋にも足を運びました。そんな訳ですから何か大きな競技会へ出場の前とか、冬休みには事情が許す限り旭川の騎兵第七連隊に合宿練習に行ったものです。

この騎七での練習はこれはまた全国でも習志野の騎兵学校を除いてはその右に出るものがないと思われる程のものでした。下士官の

馬でも他の騎兵連隊の将校馬に劣らぬ良馬、両中隊にそれぞれ赤煉瓦の大きな覆馬場があり、兵営の前には騎兵学校の裏馬場そのままの障碍馬場があるし、また近くには野外騎乗にもってこいの近文台の広大なすすきの原が拡がり、その台地への登り下りには、気おくれする新入部員をはげますのにもってこいの急斜坂もできていました。

冬の合宿は私の在部中毎年かかさず行なわれました。年末年始には軍隊でも年に一度の休暇が出て、兵隊さんの手が足りず馬運動にも困るくらいですから、我々は喜んで迎えられました。その代り内務班つまり一般の兵室でまったく兵隊さんと同様の日課を送るのです。朝起きるのもラッパです。起きるとすぐ厩に行き朝の点呼、週番士官に対し当番が「北大生何名異状ありません」といって挙手の礼をします。馬は一人二頭ずつ貰っているので、その馬手入れ、朝飼をつけ終って洗面朝食、三度の食事をするにも食事当番をきめて賄所に貰いに行くのです。「北大生食事を戴きに参りました。」といってここでも挙手の礼、バケツに入った麦飯とおかずを貰っても、だまって帰ったりしては大変、「食事を戴いて帰ります。」といって礼をするといった具合。午前、午後二回の練習が終って、馬手入れをすませ、やれやれといった気持ちで入浴にいって、浴槽の中で鼻歌を歌って注意された人もいました。しかし当時は北海道広しといえども馬術部と名のついたものは北大一校にしかありませんでしたから、まるで一人っ子のように可愛いがられて、北海道でだけもてて、結構気をよくしていた憾きもないではありませんでした。

昭和六年は全日本学生選手権大会が始まって三年目でした。その頃は北海道からは一人しか出られませんでしたが、北大以外に選手を出す学校もなかったのですから、部内競技会でも出場選手を決めてもよいようなものですが、その年は、丁度夏前に旭川で北海道乗馬大会というのがあったので、その序に騎兵第七連隊で予選を行ないました。当時の選手権大会は夏休み中に騎兵学校で行なわれました。やはり馬場と障碍の綜合得点できめられたのですが、先ず騎兵学校で馬の抽選があり、その馬で二日にわたって練習が許されました。それですから、その間に、充分馬を手に入れることができた訳です。競技当日は馬場に続いて障碍飛越があり、その綜合得点によって午前の順位が発表されます。

第三回のときは、馬術課長の山本寛少佐が選手の控室に来られて、その順位を読み上げられました。ところが全く意外にも最初に呼ばれたのが、「北大の伊達君」(―在学中はダー坊即ち伊達といいました―)、慶応の笹江君、日大の佐藤君などの名が続いて読みあげられたと思います。なにしても大変なことになりました。私はなんだか身のひきしまる思いがして、そっとその控室を抜け出し、誰にも気づかれないようにして、姿勢を正し上京の途中お参りして来た郷里の神社に対し、心の中でその加護を感謝すると共に、午後の善戦を念じました。流石に全日本学生選手権ともなれば関東関西の精鋭に互しての戦い、とても優勝をと念じる自信もありませんでした。しかし結果は午後また別の馬での障碍飛越―二米の水濠やバンケットもある―も無過失で飛び、優勝ということになりました。正直にいって夢のようとは正にこのことでしょう。第一回第二回と関西に持ってゆかれた関東選手の面々は、今年こそはと心に誓っていただけに、今度は思いもかけず津軽の海を越えて持ってゆかれることを本気にくやしがりました。私自身は有頂天になるどころか、いささかてれ

くさいくらいのものでした。

しかし時が立つにつれて選手権をとったという意識がはっきりして来ました。その年の秋の明治神宮競技、今でいえば国体に当りましょう、その頃神宮競技といえば年に一度の最高のスポーツの祭典、各競技の優勝者の名は銅板に刻んで永く保存される、と聞いていただけにすっかり気負いこんでしまいました。学校を一週間も休んで、たった一人旭川の騎兵連隊に行きました。丁度連隊の事務が大変忙しいときだったので準士官、下士官が我も我もと自分の馬に乗ってくれというのです。私は翌日から毎日五頭ずつ乗りました。そして乗り終った馬は一本の肢を五十回ずつこすりましたから、毎日千回ずつ馬の肢をこすった訳です。馬に乗るのもたった一人。一個中隊が馬運動できる程の大きな覆馬場の中に入って扉を閉め、障碍を並べて一人で飛ぶのです。須田曹長(当時)の峨梅号では一米八〇まで飛びました。蹄跡に横木を六本かけた単一高度のときの障碍を置いて、障碍の線に入ったらどんどん歩度を伸ばして最大の速度で飛ぶのですから、踏切りが悪ければ横木は三、四本瀬の前を飛び散ります。それをまた掛け直しては飛ぶのです。事故をしたって助けてくれる人はいつ来るのか、今考えればそら恐ろしくもなります。そして夜は将校集会所の畳をすきすきに並べた広い部屋にたった一人で寝るのです。集会所の当番兵が食事を持って来てくれる以外には口をきく相手もいません。全く練習というよりは修行といった日課でした。

そんな猛練習をして勇躍上京。神宮大会は市ケ谷の士官学校で行なわれたので、母親や姉弟までが見に来る騒ぎ。私はそのときほど優勝せずになるものかと、優勝を目当てにしたことはありませんでした。恥ずかしい話ですが優勝したら北大馬術部にいくら、その年の春までお世話になった学習院の馬術部にもなにがしかをと捕らぬ狸の皮算用もついつい心に浮ぶ思いあがり振り。そして当日抽選で当った馬が第三障碍を飛んで左へ曲る所で膠着。したけど、蹴れど後へさがるばかり、「今年度のチャンピオン、北大の伊達君今日はどうしたことか苦戦の模様であります。」と放送されじりじりする程結果は悪く、とうとう初めて見に来てくれた母親の前で失権のうき目。それからは決してそのような身勝手な願いはせぬことにし、ただベストを尽し得て、恥ずかしからぬ成績を納めることを念願することにしました。

翌昭和七年の第四回選手権大会には後進に道を譲ろうとも考えましたが、逃げたように思われたくもなし、それにまだ二年だったので、どうせカップを返しに行かなければならないのだからと思い予選を受けてまた出場しました。そのときは商大予科の藤野君(今の相川君)が優勝、私は二位になりました。そのとき私より馬の上手な高校時代の最も親しい同級生の一人が、「二位でよかった。」といって心から喜んでくれました。私には彼の気持がよく解るように思われました。私は彼の言葉を幾度も心にかみしめて、その祝意を心から感謝したのでした。

その頃我々に貸し与えられる競技用の馬というのは騎兵学校の学生、つまり全国の騎兵連隊から選抜されて入校する騎兵の少尉中尉の教育用のもので、当時は濠サラもかなりいたほどでしたから、今の選手権から見れば随分恵まれたものでした。しかしその反面今の部員諸兄のように、自分達で部の馬を飼育し調教し輸送して遠征するといういわば、馬と共に生活する苦しみと楽しみを味わう機会には恵まれませんでした。その苦労を乗り越えて今日に至る輝かしい成績を納められた、戦後の部員諸兄に心から敬意を表すると共に今後のたゆみなき発展を衷心お祈りして、このつまらぬおしゃべりを終ることにします。

第十一回
全日本学生馬術選手権大会の想出

菅間威（昭一五年卒）

昭和十四年八月十三日は私にとって一生涯忘れられない日です。と言うのは此の日、東京代々木練兵場に於いて挙行された、第十一回の学生馬術選手権大会で、各位の御鞭撻、御激励に依り幸いに選手権を獲得致し、東久邇宮賜盃を津軽の海を越えて持帰る事が出来た日だからです。顧みると初めて馬に跨ったのが予科入学の嬉しい頃で以来足掛け六年間馬に親しみつつ楽しい学生々活を送り得ましたのも、皆様の御厚情の賜と深く感謝する次第です。尚祝辞を下さいました方々に厚く御礼申上げます。

報告を書けと幹事に言われどうも自慢話をするようで嫌だと断ったのですが聴いてくれず仕方なく拙い文を綴らねばならぬ事になりました。

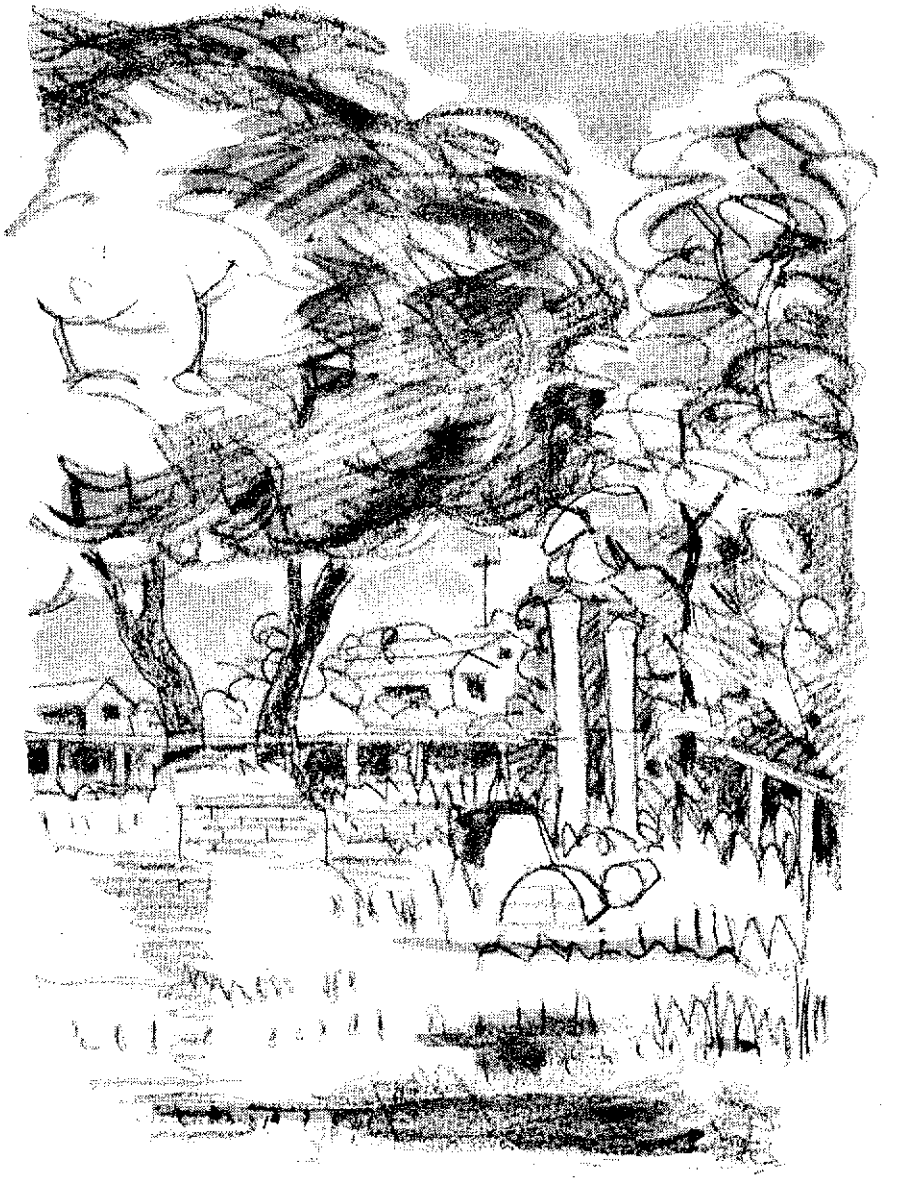
五月十二日に騎兵第七連隊営前馬場で降雪後の悪コンディションに悩みつつ、又時々降って来る雨に脅やかされながら予選を行ないました。伸長速歩の歩度が伸びず、又隅角で転倒しそうになった事を憶えています。障碍飛越にも馬にもってゆかれて大分苦心をしました。幸いに代表に選ばれたのを知った時、北大の名誉のために頑張ろうと固く心に誓いました。東京の気候に体を馴らしておこうと思って早目に上京して、大会を待ちました。

大会は八月十三日午前八時より代々木練兵場久米邸跡に於いて行なわれました。天候は晴朗、微風がありましたが朝から実に暑い日でした。その前々日の八月十一日に予科士官学校で出場順のみの抽籤が行なわれました。今年は大会当日まで出場馬を発表せず且予科士官学校での練習は一回も出来ませんでした。抽籤の結果出場順は四十五番で第一次競技後段出場となりました。第一次競技は馬場馬術及び障碍飛越競技が行なわれました。五十名の選手に対し馬は二五頭で二六番以後の選手は有利でした。馬の抽籤を終わり二五番迄の選手が準備運動をやるのを見ている中に、気も大分落着き此の分ならばゆっくりした気持でやれると言う自信を得ました。最初は初めての大会でどちらを向いても知らぬ顔ばかりで些か興奮していました。馬場馬術は速歩及び駈歩運動でした。馬場内は草の茂った儘で、大分やりにくく、準備する方で少し考えてくれたらよいと思いました。僕の乗った馬は、前に日本医大の選手が乗り、停止を正し

くやらず、又駈歩運動の歩度が伸びるので、それに気をつけていたのですが矢張りうまくゆかず、二四点減点されました。障碍飛越競技は十個、最高一米で同馬で行ないましたが前の騎乗者の時に、第二障碍を左に逃否しているので、それを警戒して無減点で通過し、結局二〇〇点満点の所を一七六点で、第一次競技通過者二〇名中第六位で第二次競技出場資格を得ました。第二次競技は野外騎乗及び障碍飛越で、十三時半から新たに抽籤せる出場順及び馬を以て行なわれました。私は八番、馬は宮友号でした。直ちに準備運動に移り野外騎乗のコースを一廻りしましたが、非常に口が固く準備運動中に指をすりむいてしまいました。尚障碍コースを廻っている時、先輩の山下さんに呼びかけられ非常に嬉しく思いました。野外騎乗は距離千四百米。六個の固定及び置き障碍があり、それを四分以内に通過するので、出発より斜面を斜めに下り、下馬して十米程の木橋を渡り直ちに扳になり、林、隘路、平地、次いで坂を下り再び登って決勝線でした。宮友号は先にも書いた様に口が堅く、ぐんぐんもってゆくので野外騎乗であまり追うと、障碍飛越の時にいりこんでしまう恐れが多分にあると思いましたから野外騎乗に於いては出来るだけおさへ、扶助も軽く使いました。野外騎乗中第一障碍を拒否しかけましたので、脚及び腰で追込んで飛越せしめそれから後は歩度を考えながら割合楽に通過しました。第五障碍で馬が後肢を横木にぶつけ、大分揺れたようでしたが意下しませんでした。何しろ暑い事とて、汗が上着まで滲み出し、野外騎乗を終えてからの十分間の斃馬のときは、自分の体か他人の体か判らぬ位にへばってしまいました。何よりも先ず体力を練ることが第一と強く感じました。十分間の斃馬の後障碍飛越競技に移りましたが今度は経路も複雑であり十五個、距離は五百五十米、最高一米二〇、障碍も大分趣を異にしたものを置き、設備者の苦心の跡がうかがわれました。形の変った障碍は馬が恐れる関係から乗御者の苦心、努力を要します。あらゆる扶助即ち精神、拳、脚、騎坐、腰とその総てを綜合し又独立に使う事は馬術に於いて絶対に忘れてはならぬ事と思います。第二次の障碍飛越は最初から調子良く飛越し、第十障碍を越えて稍々馬にもってゆかれましたがどうやらおさえることができ、最後の障碍を無事に飛越し得て決勝線に到達した時は思わず長い安心の吐息をつきました。かくして第二次競技では満点を得て、第一次の二分の一と合計し三八八点で二位との差は二点七分五厘で優勝することが出来、畏くも東久邇宮賜盃、又文相盃、陸相牌を会長三好閣下より授与され、最後に自分の手で碧空に高く飜っていた国旗を国歌吹奏裡に降下した時の感激は終生忘れられません。以上で私の拙ない想い出を止めようと思います。今後も益々体力を練り気魄を養成し技を磨いて皆様と共に斯道振興の為につくしたいと思います。

（北大馬術部十年誌より転載）





部員時代の思い出

滋賀秀明（昭一二年卒）

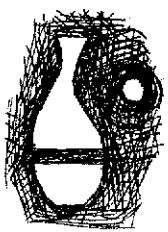
私が予科に入学したのは昭和五年だった。丁度その年に北大馬術部が創立したのだから我々同期生が馬術部の最初の新入部員というわけだ。従って馬術部創設の苦労は知らないのだが諸先輩の努力と長い乗馬会時代もあって創立当時既に中々充実した部であったと思う。我々が予科の入学式を終えて始めて教室に入った時予科二、三年の藤原さん、本田さん等四、五人の人が馬術部入部の勧誘にこられた。藤原さんが頭を突き出して得意の一席を弁じてから夫々手分けして机の間を、どうだ入らんかというようなことを云って歩かれた。他の運動部も二、三勧誘に来たが馬術部が一番張り切った感じだった。矢張り新設というわけで新興の意気にもえていたのであろう。尤もその年には馬術のインターハイで初参加にも拘わらず二位をとったのだから立派なものだ。皆張り切っていたのも当然かも知れない。プレス工業の重役さんで今はすっかり落ちついてしまった本田さんがその時カラーの高い洋服を着て腰で調子をとりながら歩いていた姿も眼にうつるようだ。それから数えて今年は三十年とは驚ろいた。私は未だ気分は至って若いし、馬でも手近かにあればいつでも乗ってみたいと思う程でとてもそんなにたったとは思われない。最初に月寒に練習に行った時には岩山といったろうか、たしか連隊長の乗馬だったが中々馬品のよい馬で加藤英夫さんが細い体でいとも易々と乗っていたので借りて乗ったのだが敵は生憎私の技の未熟を承知で乗ったとたんから尻を左右にくりくり動かすので私も可成り頑張った積りだが鐙を挙げ速歩をさせられたら一周目位で馬からすべり落ちてしまった。その時あの馬であの位乗れれば結構だと慰めてくれたのは小笠原さんだったに違いない。お蔭様で乗馬をあきらめず楽しい部員生活を送ることが出来ました。これが私の馬術部員生活の第一歩だった。最初は新入部員も多く賑やかだったが練習の回を重ねるに従って少なくなっていったのは淋しかった。結局我々同期で終りを全うしたのは高杉、脇田、吉見、森山の諸君と私だけになったが併し当時としては同期生の数は断然多い方で、その後大迫君が加わったし流石馬術部最初の新入部員だけのことはあったわけだ。併もとれも当時から一騎当千のさむらいばかりで現在は皆夫々大学教授や大会社の重役と偉くなり森山君も国立の療養所長として活躍されているのは御同慶にたえない。

これ等のよき同期生と優れた先輩、後輩に恵まれ、時代はよし、札幌も今と違ってのんびりと静かで詩情にあふれていたし、私の七年間の部員生活とその後七年間のOB時代を振りかえると全く楽しい思い出に充ち充ちている。老来昔のことを懐かしむことが多くなったがとりわけ乗馬の思い出と先輩からいろいろな方面の御指導を受けた思い出は忘れられない。仙台や旭川で行なわれた競技会や札幌郊外への遠乗会の思い出がなつかしいのは勿論であるが、始めて旭川の冬季合宿に参加して一日四頭もの馬を割り当てられ兵隊の除隊後で運動不足の馬が物凄く張り切っておる上に、中には噛む蹴るはおろか跳り、はね、横飛びする癖馬がおり馬に乗っては一瞬の油断

が出来ないのみならず零下二十七度にも達したことのある寒さと軍隊の内務班の生活に不馴れなも手伝ってえらく苦労したり、森山君と一緒だったろうか軍馬止めの杭が立っているのは承知だったのだが人のいないのをよいことに豊平川の堤防の上に愛馬会の馬を乗り出し、あまつさえ駈足をしたものだから番人に見付かっていたくしぼられたりしたのも今は全くなつかしい思い出だ。又私は今では植村さんともどうやらこうやらではあるが酒のお相手が出来る程、酒は飲めない方ではないのだが酒を教えてくれたのも馬術部だ。昭和八年の対東北大学戦は仙台で行なわれて私も大学一年でそれに加わった。試合は十二月二十五日に行なわれ我が方の勝利に帰した。そして試合が終って、伊達主任に連れられて夜の東一番丁に繰り出しブラザー軒、仙台会館等を飲み歩いて祝杯を挙げたのだがこれが私がキャバレー(当時はカフェーといったが大体同じものだと思う)に入った最初である。その日は丁度クリスマスの当日ではあったし、二日前には今の皇太子誕生のサイレンが高々と鳴ったばかりで世の中は兎角浮き浮きしていた時なのでその夜のキャバレーはそれはそれは華やかで勝利の美酒のうまかったことはたとえようもなかった。大体戦前も昭和八年頃は昭和文化の最盛期、甚だロマンチックな時代で、巷には「東京音頭」や「酒は涙か」等の流行歌があふれており、又宝塚歌劇の全盛期で「タンゴローザ」とか花詩集の歌が若い人の心を魅了していた。その夜も伊達さんは「タンゴローザ」を歌ったり、楽しそうにステップを踏んだりしておられたようであった。飲む方の話ばかりで申し訳けないが、キャバレーの思い出話をしたついでにもう一つ忘れられないのは旭川のモンパリだ。旭川には似つかわしくない程あか抜けしていて落着いた併も楽しい雰囲気の店で当時札幌にもこんな感じのよいキャバレーはなかった。諸先輩は皆さん中々ごひいきにしていて誰か知らないがウェイトレスにこの店をそっくり札幌へ持っていきたいと云ったら先方にそれより大学を旭川へ持って来なさいと云われたという伝説がある。恐らく先輩は皆、そんな気持をもっていたのではなかろうか。私はモンパリーを思い出すといつも半沢さんを連想する。きっと半沢さんのお伴で行ったために違いない。赤い洋服を着て肩から籠を下げたタバコ売りの少女の可憐な姿がなつかしい。どうも神聖な記念史につまらない酒場の話など夜の部の思い出を長々と書いて申し訳けないが遊佐幸平大御所以来馬術家と酒は付きものみたいに云われてきたのだから許していただきましょう。又練習風景や試合など昼の部の大事な記事は他の方が書いて下さるに違いない。

何しろ私には楽しい部員生活だったのでまだまだ書きたい思い出は山程あるのだが何せ文章が下手でいたずらに紙面をよごすばかりだからこれでやめます。

終りに私の部員時代いろいろお世話になった部長先生、先輩、私の主任時代仕事を助けて下さった後輩の方々に改めてお礼を申し上げると共に馬術部の今後益々発展することを祈って筆をおく。



昭和十二年の思い出

――帝大戦のことなど――

山下正亮（昭一三年卒）

馬術部の三十年史を編纂されるとのこと、誠に有意義のことと存じます。

実は部より原稿を依頼されましたが、卒業後二十二年を経過し、記憶も不十分、加えるに筆不精で困ったことになったと思い、古い写真や本をあちこち探しておりましたところ、当時の新聞の切抜きを発見致しましたのでそれを転載させて頂き、責を逃れたいと考えます。

昭和十一年の主任滋賀秀明氏より、バトンを渡された昭和十二年組は、予科一年入学より、春、冬に行なわれた旭川騎兵連隊での合宿を始め、土曜日曜の月寒歩兵第二十五連隊の練習、それに愛馬会の合宿も、本当に真面目にやった前川静弥、石井昌長、小村達夫、桶本勝登、高井久芳、小生、それに学習院馬術部で鳴らした松平悌の面々で、本年度は大いに活躍しょうと春早くより練習を始めました。

当時学校の馬は畜産学科の学生以外は乗せない規則でしたが、部長さんは畜産二部の黒沢先生であり、また畜産科の馬の総取締りが松本久喜先生であることから、何とかかんとかお願いし、朝六時半頃から学校の馬を貸りて練習に励みました。

六月初旬の全日本学生馬術選手権の予選は旭川騎兵連隊で行なわれ、前川静弥君が優勝し、七月、習志野騎兵学校で行なわれた選手権大会に出場したが残念ながら優勝を逸しました。

七月の北海道騎乗大会には、松本、半沢、高杉先輩を始め総数二十名、旭川に乗込み大いに活躍しました。尚、当日行なわれた対東北戦には破れ、全学生対抗（北大、東北大、盛岡高農）には優勝し優勝旗を獲得しました。

次いで春以来主として松平悌君が、東京帝大、東北帝大、京都帝大と連絡され、第一回全国帝大馬術対抗戦を八月四日、学習院馬場で開催することになり、松平、桶本、高井、石井、山下、それに一年目の石井君が参加致しました。当時の状況は東京の新聞に次のように記載してありました。

「三段横木を鮮やかに跳ぶ北大の松平君」と三段抜きの写真の下に、

北大優勝す

第一回全国帝大馬術

第一回全国帝大馬術対抗戦は四日午前八時より学習院馬場に於いて北海道、東北、東京、京都の四校参加で挙行、予科時代インターハイ大会に活躍した松平、石井を擁する北大は劈頭優勝候補の東京と対戦したが全員むらのない活躍でこれを破り、決勝戦に京都を三十二点の差で破り、栄ある東久邇宮賜盃を獲得した。

競技は各チーム五選手出場交互に五頭の馬に乗り馬場馬術と横木、レンガ、門扉等十一を配置した障碍飛越で行なわれ、決勝戦

では北大の松平が雲霧を駆って馬場障碍共にこの日の最優秀の無減点で好スタートしたに反し、京大の二番選手常保は難馬朝雪を御し切れず拒止、逃避、硬直を連続に見舞われ遂に失格となり、百五十五減点を課せられ前途を暗くした。

北大は桶本、主将山下また清竹号を巧みに乗りこなし最後の石川を余して四選手の受けた減点は三十七点で、これに対し京大は二百十点であった。かくて北大の大勝を思わせたが、ラストの石川は朝雪号が当り馬場馬術は大過なかったが、障碍にかかって距止、逃避で苦しめられタイム・アップで失格、計は百八十八点となったが、他選手の好成績が物をいって北大が優勝した。

一回戦（減点法）

京　大　二一三―二四二　東北大

北　大　四一一　六〇　東　大

決勝戦

北　大　一八八―二一〇　京　大

		馬場	障碍	計
北大	松平（雲霧）	0	0	0
	桶本（三鉾）	6	3	9
	高井（宮梅）	3	18	21
	山下（清竹）	4	3	7
	石川（朝雪）	1	150	151
京大	森岡（宮梅）	0	27	27
	常保（朝雪）	5	150	155
	広瀬（清竹）	5	17	22
	西部（雲霧）	0	6	6
	津田（三鉾）	1	9	10

かくして一同整列し、東久邇宮賜盃を授与されたことは一生忘れ得ぬことであります。翌日松平、山下が宮家に御礼言上にあがり、意気揚々と帰道致しました。黒沢部長を中心として写した優勝記念写真が獣医学部の先生のお部屋に掲げられてあり、見る度になつかしく当時が思出されます。

全日本学生馬術選手権の二十位迄の者は毎年、朝鮮、満洲に遠征試合に行くことになっていたところ、七月七日の北京郊外蘆溝橋の一発より支那事変勃発し、朝鮮遠征中止となり、学生馬術連盟より北海道遠征に行きたいからとの電報で、夏休みを返上して準備をしました。当日の様子は北大新聞に次のように書かれてありました。

本学馬場に開く馬術の豪華版

圧到的妙技を振い

松平個人に優勝

全日本学生軍に凱歌

全日本学生軍対全北海道馬術競技大会は、北海道庁、本学文武会馬術部共催、北海タイムス社後援の下に去る八月二十四日午後一時より本学畜産馬場に於いて開催された。

先ず定刻半沢氏の開会挨拶に次いで国歌斉唱裡に全学生軍三浦、全北海道藤本の両軍主将に依る国旗掲揚、本学総長高岡会長代理塚本工学部長の挨拶、及び名誉会長佐藤男爵代理太秦理学部教授の祝辞の後、選手代表三浦全学生軍主将の宣誓があって、いよいよ晴天に好調子の馬場を舞台とし、全国より選ばれた「馬術日本」の精鋭の鉄蹄砂を捲く熱戦と妙技が展開された。

学生軍は今夏習志野に行なわれた全日本学生馬術選手権大会の優勝者武田君（千葉医大）をはじめとし、オリンピック馬術大会

予選に於ける学生代表に選出された全日本学生馬術選手を選じて北海道軍を襲えば、これを撃退せんとする北海道軍も、その技術を全国的にかわれる藤本主将（札鉄）、松平（北大）等を第一線に第一級の道産選手を以て固めて「馬術日本」の最前線を望んだこの日の戦いこそ、時局そのままを反映せしめた熱戦であったが、各戦績は次の如く、結局二六三・七五の減点を以て学生軍が優勝するところとなり、北海道軍は、三二一点の減点を受け惜しくも敗退したが個人競技では北海道軍のホープ本学松平君は僅か九点の減点で期待にたがわず優勝して万丈の気を吐き、かくて競技終了と共に北海道庁長官杯、本学総長楯は全日本学生軍に、北海タイムス社杯は個人優勝の松平君に夫々授与された。尚、戦績は次の如し（数字は減点表）（関係分のみ記載）

全北海道軍

松平（北大）　九
山下（北大）　二四・五
高杉（北大O・B）　二五

個人競技

1 松平　悌（北大）　九
2 西野勝美（札鉄）　一五・五
3 三浦哲太郎（中大）　一七

また、秋には対札鉄戦を歩兵第二十五連隊練習場で開催、北大が優勝しました。戦績は次の通りです。

北　大　　札　鉄
石井　一九四―一九七　細岡
西村　一九四―一四〇　佐藤
高井　一九二―一八〇　門脇
松平　一九四―一七二　佐々木
池内　一九七―一九一　都丸
永田　一九七―一九五　関口
小田　一九二―一四五　会田
栃本　一八六―一八二　高本
山下　一八六―一八二　高木
前川　一九一―一七〇　島田
計　一九三一―一五七四

（但し二百点満点の計算）

その他、部内の馬術大会を九月十八日歩兵第二十五連隊機関銃隊前広場で開催しました。また九月二十五日には、待望の豊平峡迄の一泊行軍を歩兵第二十五連隊の御援助により実施致しました。

かくして翌昭和十三年二月、東久邇宮盃、北海道大会の優勝旗、対全日本学生の個人優勝の松平君の北海タイムス社杯を始め、数々のカップを飾った中で送別会をして貰ったのは忘れ得ぬことであります。

最後に、学生時代またその後も御指導頂いている歴代の部長先生諸先輩、旧騎兵第七連隊、高江さん始め旧歩兵第二十五連隊の方々農場の荒野さん等に厚く御礼を申上げ、併せて今後の部の発展をお祈り申上げます。

思い出すまゝに

桶本勝登（昭和一三年卒）

「都ぞ弥生」の牧歌的魅力にひかれて、はるばる南の広島から、生れて初めて北海道の土を踏んでから既に三十年近くの歳月が流れてしまった。東京のど真中で、その日その日の仕事に追われながら我が生涯における最も楽しかった北大馬術部時代の記憶の糸を次々とたどって思いつくままに記したい。

広島高師附中時代に、サッカーや、柔道に熱心だった関係で、北大へ来て初めて面喰った事は、蹴球部と柔道部からの激しい勧誘争いであったが、皮肉な運命で馬に対する愛着から己のスポーツ生活を一変してしまった。東京生活の騒音と自然に反した日々のくりかえしの中で、せめて夜のテレビを子供と西部劇に見入りながら馬への愛着の鬱憤を辛うじて晴している現状である。

○月寒の初騎乗と練習

月寒と云えば、羊群と共に私には初めて馬らしい馬に乗った懐かしい思い出の土地である。あの殺風景な歩兵二十五連隊の黒ずんだ建物を背景に、少年時代から夢に見ていた事が、陽春のある日、月寒の馬場で初めて乗馬を許された時に、事実となって現われたあの喜び！。三十年たった今日、ありありとテレビの映像のように思い出されるが、あの馬場も今は如何なっているだろうか。いつかの月寒における部内大会で、余程馬運が良かったと見えて技術の未熟にも拘わらず、予想外に障害が良く飛べて立派な鞭を賞品として与えられた事が、其後、乗馬に対して自信と熱意を益々高める一因となったと思う。

○札幌愛馬会

札幌の良さは民間における乗馬クラブの発達であろう。しかも乗馬そのものが気楽に自由に、当時は出来た事である。会員であれば皆が一様にそうはできなかったかもしれないが、近くに住み、学生であり、人に親しみ易かったという利点があったかもしれないが、朝夕気楽に思いつくままに馬を利用する事が出来た。特に素晴らしい思い出として、未だに心に残っている事は、夏の早朝、未だ涼気の感じられる頃に、ちょっと一汗、とばかりに郊外や円山公園の中腹などへ、たった一人で乗り廻した後に、ゆっくり朝食する快感である。

ある日曜日など、西部劇の主人公気取りで馬を乗り廻し、汗だくの後に郊外の風呂屋の前で馬を繋ぎ、悠々と一風呂浴びて出て来て後から散々友人から冷かされた、のんびりした時代であった。この愛馬会のお蔭で多年、馬そのものに馴れ親しむ事ができ、乗馬を気安く味合い親しむ事が出来たのは幸運だった。入会後、最初の騎行で中島公園にて数人と共に写した騎乗記念写真が妙に心に残る。それは新米で下手なくせに仲々熟練した騎手のように颯爽たる姿に写っているためでもあろうか。

○北大畜産部所有馬

今でも度々、広告に出て来る北大構内のポプラ並木。この素晴しい並木通を畜産の馬を借りてはよく走ったものだ。当時の畜産馬場

附近には、身体は小さいくせに妙な声を出したり、いばったりしていたロバや、ガチョウなどいる牧歌的な風景が印象的であった。「宮武」という真黒い精悍な馬がいたが、乗る時は少々癖があってうるさくとも、一度またがった時の能力の素晴しさと、これを乗り廻すという自信。当時は若い元気さに溢れていたように思う。癖馬程能力がある事を実感として味合い、今日人を管理する事を本職とするに至っているが、ジャジャ馬馴らしコツがそのまま職務上の参考となっている事も因縁である。

○定山渓への遠乗

秋の快晴下に豊平川に沿って、馬糧を積み野営の支度をして定山渓温泉へ向った時の楽しさ。真駒内辺りの日本ばなれした素晴しい広々とした緑の風景。騎行にふさわしい自然の美しさを満喫しながら、夜は白樺に馬を繋いで夜営した時の感激。馬を手入れし、馬に糧食を与える時の人馬一如の愛情の交錯。走馬燈のように次々と郊外騎乗の人生の喜びが浮び続ける。

○日高国騎行

新冠御料牧場に於いて、馬友、高井久芳君と共にアラブ系の駿馬に跨りアメリカ映画そのままの広大な山林原野を長時間、思う存分に乗廻した時は、まるで己が西部劇の主人公となりきった気持で夢中になって乗り廻ったものだ。これこそ広島から北海道まで憧れて来た甲斐があったと感激した。翌日は更に浦河まで行き、農林省の種畜牧場を廻ったが、学生時代に思切って馬にちなんだ旅行をした事が、こんなにも長い間人生の最良の思い出となるものかと今更の如く感ぜられ、若い現役の部員の方々にも出来る時に積極的に、OB になってからの美しい思い出となるように、大いに旅行をおすすめしたい。

○樺太騎行

学部に入って二年目の冬休みと思うが馬友の高井君と共に馬とスキーでもって樺太騎行を雪中に決行した事は痛快であった。樺太庁から種馬を借り交互に乗馬し、ロープによって馬スキーをしながら長い日数をかけて北上し、クリスマスも正月も馬と共に雪中に迎えた事は北大馬術部員らしい計画だったと思う。樺太の一本道を偉大な精力をもった種馬で走り続け、休めば馬の汗がポロポロと凍るような冷たさも、寒さすら眼中におかず、唯々、馬と共にある事の嬉しかった無邪気な時代であった。人生は短く、やれる時に何でもやりたいと思うスポーツも、冒険も、旅行もすべきと思う。それだけ人生の深みが増し、人生の意義があると思う。

○旭川の合宿

諸大会に具へて夏も、冬も旭川の騎兵旅団に合宿して昼夜しぼられ続けた事は、己の技術の向上に最も役立った方法と思う。随分高い障害でも騎兵将校と一緒になって身体の続く限り訓練されたものだ。下士官の人達も随分と可愛がってくれ、実に愉快な○○話をよくやって喜ばせてくれた。冬休みも広島へは帰らず、好んで厳寒の旭川で雪上や屋内馬場に於いて、一日三回、朝、午前、午後とその都度馬を替えて選手としての大会準備をしたものである。当時大会は全道でたった一つという稀少価値があるにせよ、軍の将校、下士官、兵共に随分と好意を示してくれた。夜毎に○○話をして、疲れた体をなぐさめてくれた愉快な連隊は今はどうしているだろうか。

○仙台……東北魂、東北大会等

毎年行なわれる東北帝大との対抗戦は両大学の懇親会を兼ねた愉

快な旅行であり試合であった。北大と東北大とはかっては同一大学の各学部であった歴史上の近親感も加わって、他の試合には見られないくつろいだ親しみがあった。試合も愉快であったが試合終了後の懇親会は学生としては随分派手な場所で、派手に楽しんだように思う。

東北乗馬大会も毎年初夏の候に仙台で行なわれたように思うが、青葉香る初夏の青葉城下に馬を連ねて町を、城を騎行する時の青春の喜びよ、思いも新。学部一年の時と思うが、〃新角〃の嬉しい頃でもあったために一層感激が深いものがある。それは仙台駅前に泊った宿の娘〃ミス・カナダ〃（カナダ生れの二世で仲々顔形も宜しいために）が仲々、我々北大軍を応援してくれ、当日は試合場で声援までしてくれた事である。そのためかどうか、〃新角〃になって最初の試合らしい試合に大いに実力以上（?）を発揮して、小生も得意（?下手な横好きかもしれないが）の野外騎乗に英雄気取りで、奮戦した甘い楽しい思い出や、女学校のある方向へ馬がなびくと云っては愉快に散歩出来た宮城原や八木山などの思い出の騎乗等々。仙台と云えばその後、同行した滋賀秀明、松平愉の諸兄との限りない愉快な思出は今だに、とかく社会へ出てせちがらい生活裏にあって砂漠の中の清い泉のようなすがすがしい心境に滲らしてくれる。仙台からの帰路、連絡船上で選手一同の写した写真が未だに頭を離れない。あの朗らかそのもののような顔、顔、顔……。その中で好漢石川通吉君がその後突然死亡した事など、昨日のように思われる。

○盛岡の馬市

遠征の間の思出……滋賀さん等と早朝思い立って盛岡の馬市見物に下車した。馬好きもここまで来ると人生も益々愉快である。但し初めての土地に早朝降りたため、適当な食にもありつけず、空腹をトマトを買ってしのぎ、またこのトマトの美味しかったこと！。馬好きのとりもつ思出はつきぬ。

○武勇伝（?）

馬術部のためにと、心ならずもビヤホールのビールの力も手伝って狸小路の盛り場でラグビー部の勇ましい連中と○○した勇ましい（?）思い出。当時は体力もあったし。もて余すような若さがあって、一生のうち、時にはあのような西部劇まがいの熱演も又人生の一つの味とも思われる。但しこの事件は知る人ぞ知る。

○帝大リーグ戦の創設

部の役員として果した一つに、東大其の他の帝大馬術部と話合って、第一回帝大リーグ戦を創設した事である。熱心に交渉もしたが随分学生としては派手に交際もしたように思う。確か、学習院の馬場でやったと思うが北大の外に東大、東北大、京大等であったろう。小生も試合に出場したが、あの時の花形松平愉君の勇ましい障害飛越の大きな引伸写真が朝日新聞に掲載され、全国の乗馬ファンに「北大初優勝」の大きな活字と共に、P・Rした事は痛快であった。北大馬術部員の熱心さと、部員の団結力が実を結んだものと思う。

○モノグラム、ペナント

この二つは当時部員として最上の誇であり、名誉であった。部屋にペナントを飾って馬友と快談し、モノグラムに誇りを感じて、益々、技を磨き、体を正すという効はあったと思う。三十年の伝統ある部のためにも、この種の心の糧となる制度は必要と思う。

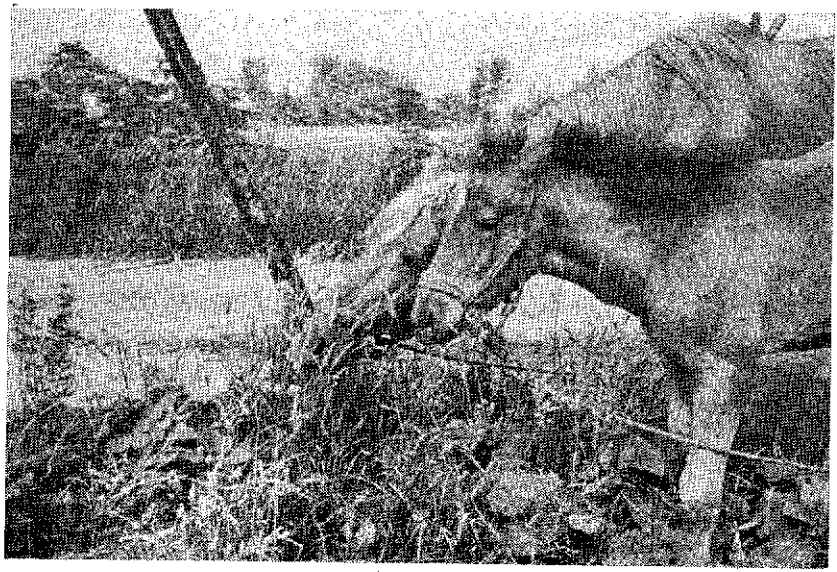
○札幌の思出 ……余滴

馬の練習後よく行なった陸橋側の「オリオン」というタマツキ屋は馬の部員には特に親切だった。狸小路のビヤホールの雰囲気。疲れた時の駅前の西村のロシヤチョコとマダムの親切さ。エルム、千秋庵、明菊等々。札幌は我が心の故郷であり、否それ以上のものがある。「アルト・ハイデルベルヒ」という物語にも似た札幌への憧れ。長い歳月世の波に流され、もまれている間にも常に心の奥深く秘められた甘美にして尊いもの。それは札幌であり、北大であり馬術部である。

○現部員に

社会に出て特に感ずる事は学生時代に素晴しい楽しい思出を持っているという事は人生の様々の荒波に直面して、これを乗切る大きな推進力となるという事である。稀少価値のある学生馬術を思いきってやれる間に独自の活躍をされ、見聞を広めておく事は良い思出即ち最大の心の休息となり、社会活動の原動力となり、長寿の秘訣でもあり、又豊富な話題は有力な社交の武器でもあろう。数多い先輩諸兄から有益な御意見が提出されていると思われるから、私としてはこのような見方から思いつくままに、堅い意見など遠慮して、思出のみを書いた次第です。心から一九六一年が更に北大馬術部の輝く光栄の年であるように部員、O・Bの皆様の健康と共に心から祈ります。

★ ★ ★ ★



昭和26・27年の頃

――試合のことなど――

斎藤善一（昭二八年卒）

小生本科二年の秋（昭和二十六年）に下飯坂、渡植、永井君等の努力に依り北大馬術部が復活し直ちに入部したが一年半後に卒業しているので、馬術部員としての生活は非常に短い。その間は古谷氏が主将、後藤氏がマネジャーをしておられたので、この頃の事情に就いては両氏が一筆ものされるのが適当であり又当時馬術部の再建に努力し、更に庶務、記録係を担当されていた下飯坂氏が詳しい資料を持っておられると思うので小生などは出る幕ではないのですがお求めに応じ学生時代の試合の模様を書いてみることにしました。

当時は馬術部の形態を整えるに忙しかったとも云えます。札幌乗馬倶楽部、札幌競馬場の御好意に依り馬を貸して載いて交替で肩身の狭い思いをしながら練習していた状態であり、馬術部が自馬を持って思う存分練習する事は実現しそうにない夢でありました。一方馬術競技そのもののレベルも低く、試合の数も少なく、馬も悪い。審判規定に対する研究も不充分、今考えると明らかな誤審、見当外れの抗議などいろいろと憶い出されます。又馬場馬術などとてもやれそうになかった。実際にやってみたら丙馬場なら充分恰好がついたと思うのです。二〇米×六〇米の馬場を作って乗ったことは一度もありませんでした。もっとも全体のレベルが低かったことに依って小生などは大いに得をしたとも云えるのですが、そんな話は別の機会にして先ず当時の試合の要点を述べてみますと以下の通りです。

対帯大復活第一回定期戦：昭和二十六年十月二十七日於北大第一農場馬場。審査委員長姉崎技官。馬術部復活第一回の試合であった。馬の割当ては抽せんにより決定した。選手は古谷、後藤、下飯坂、永井、渡植、補欠高野。審判基準に狂奔（審判長の判断による）次後失格とあり落下は前後肢区別なくと但し書きがついていた。リンゴ箱を積み重ねて障碍にしたりしたが、経路図に依れば最終（第9）障碍は高さ一米三〇、巾一米四〇（三段横木）となっている。初雪が降った寒い日で炭を一俵燃やして暖をとったりした。北大優勝、個人戦（団体戦の結果より決定）は一位高木（畜大）、二位古谷、三位後藤。

第一回東北北海道学生馬術大会：昭和二十七年六月七日於Dグランド（現教養第三講堂の東側）。馬割りは矢張抽せんで決定。参加校は北大（古谷、後藤、永井、下飯坂、斎藤、）畜大、岩手医大、岩手大。審査規準第五項、審判長の指示により減点を加減出来る（これは個人戦成績も同時に出すので馬に依る差を少なくする為にとられた措置）。落馬減点三〇点。障碍の数は十四ヶ、最後の三段は高さ一米三〇、巾一米四〇となっているが実際には一米二〇に下げた。又乾壕を堀り横木をかけ高さ六〇、巾一米とした、その外陸上競技用のハードルを障碍に利用したりした。本大会に出された記念章は金三〇〇円の豪華版でエビ茶ラシャ地に金モールで文字を入れた、但し参加各選手から記念品代として三〇〇円を集めた。畜

大優勝、北大二位。

対東北大学定期戦：七月十二日、於東北大学農学部グランド。古谷、後藤、下飯坂、永井、斎藤が出場。写真係一名随行。初めての遠征で大いに張切ったが惜敗し情なかった。馬が障碍の近くに行かない事が多く口をとったり追ったりひどい試合だった。後に全日本国体で活躍したトップホマレ号が初出場、この馬だけはよく飛び満点だった。

対全東北戦：上と同じ七月十二日に東北地方大学馬術大会が行なわれていたので各大学の主将を集め全東北軍を作って貰いこれと一戦をまじえた。幸い勝ったが賞状をくれなかったので後藤氏が強硬に催促し後程送ってくれることとなった。此の日の試合では北大勢は揃いの純白のユニフォーム（実は練習服）を着用して出場、緑の服章が映えて東北勢を大いにうらやましがらせた。

第七回国体地域予選（古谷、後藤）及び東北北海道大学対抗（下飯坂、永井）：八月三十一日於福島競馬場。全回の遠征で振るわなかったのは旅の疲れであろうと云うので往路は船は二等とするなどコンデションの調整を計ったが惜敗。両試合とも東北大学が優勝した。

対競馬場戦：九月十七日、於札幌競馬場。辛勝したが賞状には八〇〇米大障碍レースなどと大層な文句が書いてあった。

対帯広畜大第二回定期戦：九月二十一日於駒場十勝種馬場。北大連勝。草ぼうぼうの馬場であった。審判長が適当に障碍を直してもよいと云われるので飛び易い様にいろいろと障碍の角度を直してしまった。シニヤ：古谷、後藤、永井、下飯坂、斎藤。ジュニヤ：鳶野、鎌田、後藤、宮地、阿部。障碍は高さ六〇糎以上一米以下、三拒止で次の障碍に向った。一回目二回目拒止三点、三回目四点減。馬の反抗に当り馬頭を強打する等必要以上の暴挙にありたる時はその個人の総減点を二倍とする。タイム減点は一秒一点。経路違反（場外逸走を含む）二〇点減、経路違反三度に及びたる時は失権とする。同点の場合は代表二名により指示された障碍を飛越して決定する。障碍物が原状に復せざる間に飛越せる場合は二〇点を減ずる。以上の如く失権を少なくする為変則な規定が適用された。

鉄道八十周年記念馬術大会：十月十四日、於大通り公園。内容は北大対札鉄の対抗試合。北大優勝し金一封（千円也）を貰った。馬場馬術と障碍飛越を行なった。馬場の課目は左前肢施回、速歩右巻乗、半巻、馳足左巻乗。障碍では経路違反、場外疾走共に一三十点減同一障碍で二拒否の場合次に向うが二拒否三障碍の場合失権と云う項目を削ったので十コの障害をひとつも飛ばずにゴールインした選手もいた。北大：古谷、後藤、下飯坂、鎌田、斎藤。札鉄：細岡、高砂、布浦、進藤、門脇。

第十回七帝戦：十月二十六日、於宮城県涌谷町第一小学校校庭。鎌田新主将外後藤、下飯坂、永井、斎藤が出場。本大会で旧帝大戦の名称が討議されたがプログラムには第十回全国綜合大学対抗馬術大会とあった。附近の農家から借りた馬を使用した為、賞品は山の如くあったが（小生が出席した大会でこの時程賞品が沢山あったことはなかった）殆んど馬に対する賞品であった。従って馬に対する応援がすさまじく下手なことをすると校庭にムシロを敷き一升瓶をかかえたオッサンがバカヤローなどと騎乗者をどなりつけるなどの光景もみられた。小生も被害者の一人で今でも耳の底にその罵声が残っている。後藤氏は人馬転をしたが馬が起き上る時すでに鞍にま

たがっていたので西部劇の如しと大いにカッサイをはくした。旧主将の古谷氏は出発直前の練習で鎖骨骨折をして不参加。愛用の鞭を参加させたがそれも幾片にも折れてしまい気の毒だった。東北大学初優勝。北大は二位にとどまった。三位東大、四位名大。日本馬術連盟規定によって行ったが二拒止三障害失権の項を二拒止が連続三障碍に及んだ時と解釈して行なわれたので拒止失権は少なかった。

以上の如くせいぜい東北・北海道の間で転戦していた訳ですが日本馬術界も北大馬術部も戦後再出発し、いわば揺籃時代と云えましょう。其の後昭和二十九年本道で第九回国民体育大会が開催され在札の乗馬家が総出で国体使用馬調教の手伝いをした為本道馬術界も俄然活気を呈し、国体終了後馬が払い下げられ北大も自馬を持つに至り北大馬術部の黄金時代が到来する訳です。黄金時代の輝かしい実績を記録に留める為にも本冊年史の刊行は大切だと思います。編集子の御苦労を察します。

馬達のことなど

下飯坂　隆
（昭和二八年卒）

馬術部三十年史の原稿をと再三催促されたが、吾々の時代の仲間も多士済々、各々書かれると思うし、手許に正確な記録でも有れば未だしも、早くもあれから十年経った現在、あの試合とこの試合はどっちが先だったか？　と考え込んで了う様なお粗末な記憶の為、筆をとり兼ねていたが、いよいよ切羽詰ってこのままずらかるのも申訳ないので、当時の馬の思い出などを中心に頭に浮ぶことをボツボツ書き綴ってみようと思う。

いつから馬が好きになったのだ？と聞かれるが、はっきりした覚えはなく、もの心が付いた頃にはもう馬の魅力にとりつかれていた様で、朝鮮で役人をしていた親父がよく乗馬をし、幼い私を鞍の上に乗せてくれたのが直接の原因だろうと思われる。それ以来、中学三年の冬、内地へ引揚げるまで休日と云えば親父にくっ付いて乗馬クラブへ乗りに行ったものだった。終戦の為引揚げた水沢は馬産地とは聞いていたが、さっぱり乗せてもらえるような馬がなく大いにくさっていた。それが北海道へ行けば馬に乗れるだろうとつまらぬ野望を抱かせて予科を受験し幸いパスした時には何よりもまず今度こそは乗馬が出来るだろうと嬉しかったものだ。ところがここでもチャンスに恵まれぬまま、時おり窯の友達と食糧不足を補う為田舎へアルバイトに行きイモやカボチャをもらって来るついでに開拓部落の農耕馬に乗せてもらったり、ポプラ並木の辺に放牧してある農場の馬をながめに行く程度で三年は過ぎ、三年目の夏に、現在住み付いているこの牧場へ畜産の学生実習で来て、実に六年ぶりで乗馬らしい乗馬に鞍を置いて乗せてもらった時にはやっと本望を達した嬉しさで一杯だった。楽しかったこの牧場実習も二週間で終って了い札幌へ帰ると又馬がない。

そこで何とかして馬に乗りたい一心で、同じ気持を持っていたと思われる渡植君、高野君と話し合い、頬は頬を呼ぶもので、獣医科の永井君、一級上の古谷さん後藤さんと仲間も次第にふえたところ

で、丁度当時、真駒内の米軍キャンプが払下げたと云う乗馬が札幌競馬場に来たと云うのを聞きつけて捨ててはおけず、松本教授や当時の小関札幌競馬場長のところへ六人が代る代るお願いに行って、どうにか馬術部としてこれ等の馬を貸して頂けるところまでこぎ付けた。馬が確保出来たので華々しく部員を募集し、二十六年秋、戦後しばらくなくなっていた馬術部が復活した訳である。

前置きが長くなったが、以上の様な次第で、当時は伝統有る馬術部を再建したいと云う様な大それた気持はなく、何とかして馬に乗りたい一心が部を復活させた様なものである。初めて競馬場へ行った頃は、事務所裏の装蹄所の厩舎一杯にタテガミを進駐軍好みに短かく刈上げた乗馬がズラッと並んでをり、名前も、「ブランデー」、「メジャー」、「ブラッキー」、「アート」、「チャンプ」等々、洋酒棚にでもありそうなのが揃っていた。それ等の馬達も次第にへって吾々が練習を始めた頃には、大体八頭ばかりが残り、競馬場の誘導馬「昇興」、「岩文」等が時々練習に加わった。

主将の古谷さんを始め吾々六人はいづれも以前乗馬の経験が有ったが、乗馬歴が皆まちまちである為、最初は挟助に対する記憶などがたまに喰い違い、それについて議論した事も有った。しかし各人各様、それぞれ得意が有って馬の気性やクセをうまく利用して試合ともなれば却ってまとまった様に思う。

練習日には競馬場へ歩いて通い、たまにはそこから乗馬を連ねて第一農場の馬場まで来て練習をした事もあったが、大体は決った馬場もないまま競馬場前の広場を使ったり、競走コースの一部に障碍を並べて練習をしたものだったが、乗馬達は真駒内にいた頃西部劇に出て来る様に乗られればいきなりキャンターをやらせられるクセが付いていたらしく、トラックに出ると、やたらに突走りたがってよく引掛けられた。

馬のタテガミも次第に伸びて吾々の乗馬らしくなった頃には、こちらも各馬の気質がわかって来た。そこで、従来、予科対帯広高獣戦として行なわれて来た試合を北大対帯広畜大戦として復活させることになり、部をまとめて間もない廿六年十月二十七日、第一農場馬場で行なうことにした。これ等試合については、外にも詳しく書かれると思うので、記録的な事は省くが、相方選手五名、従って馬も五頭出場した。この時の人馬の組合せを見ると、大体選手の特徴もわかると思う。

古谷・「ブランデー」(この馬はひどいロウソク飛びで、少し大きな障碍になると余程騎座がしっかりしていないと落されたものだ)

後藤・「プリンセス」(悍の強い牝馬で、引掛けられているような勢でフッ飛ばし、うまく誘導すれば満点馬に近かったが、おそるおそる行ったりすると逃げられた。)

渡植・「ブラッキー」(名の通り青毛の小柄な馬で、うまく推進して素直に行けば満点馬となり、一寸こじれると少々口が堅い為右へ左へと振り廻されたものだ。)

永井・「チャンプ」(これも小柄で他の馬よりやや太目だったが見た目より可成りの跳躍力があり、力で飛ばせれば飛ぶと云う様なタイプで、気に喰わぬと農場の馬場の柵を平気で飛越した。)

下飯坂・「リガレット」(これも体に似ずスピードが有り、誘導でへまをしなければ満点馬。)

以上の様な組合せで、緒戦を飾ることが出来、大変気を良くしたのだが、今考えると、短期間のうちに人も馬もよくこれまでになっ

たものだと思う。

明けて二十七年の五月に、古谷さんが道庁へ交渉に行ってカップを出してもらい、帯広畜大の外に、岩手大、岩手医大を招いて、東北・北海道学生馬術大会を行なった。この時は試合数も多い為、前記の馬の外に「岩文」、「リミテッド」、「アート」等を加えたがいづれもなかなかの難馬で「リミッテッド」は全く障碍を飛ぶ気がなく、止められたり逃げられたり膠着されたりしながらも、第三障碍位まで行けば良い方で、必ず三拒止かタイムオーバーで失権になる事はわかり切ってをり、この馬に当れば恥をかくのを覚悟でスタートに着いたものだ。「アート」も膠着の常習犯で、やっと動き出したと思うと引掛ける、いやな馬だった。確かこの試合中、この馬で落馬が有り放馬した為、悠々と競馬場まで帰られて了い、一と騒動した。競馬開催中は、おとなしく誘導馬を務める芦毛の「岩文」は障碍に向けると所謂チャカチャカした馬になり、引掛けそうになるので、一寸押えると障碍前で止って了い、皆にきらわれていたが、私とはウマ?が合い、この試合の外、大通りでの札鉄との試合等、志願して乗せてもらった程だった。後肢のバネが素晴しく障碍の手前で一度押えてから適当なところでブッ放してやると、そのバネを利かせてモリモリと突進し気持良く飛越してくれた味は今でも忘れられない。

吾々の現役時代はわづか一年半に足らず、遠征の機会も誠に少なかったが、この数少ない遠征の度に変った馬に接し、所が変れば馬も様々なものだとその都度感心したものだ。

最初の遠出は、仙台の東北大馬場で行なわれた対東北大戦で、この時は「明善A」、「明善B」と称する東北大の自馬が出されたがいづれもうちで小さいと思っていた「ブラッキーよ」り更に一層小柄で巾ときたら少々大げさに云うと半分位しかない様に思われた。私は「明善B」なる芦毛馬に乗ることになり、相手方の試乗を見ていると、鞭を逆手に持って馬の頭をさかんにポコポコたたいている。何の真似だか知らないがおかしなことをするものだナと思っていたが、いざ乗ってみると、頼りない体には似ず良く飛んでくれるが、少しでも拳が揚ると頭を揚げて了いハミをはずして逃げ様とする。成る程これをきらってさっきはまじないをしていたのだナとはじめて納得出来た。

これ等の馬と対照的だったのは、同じ年の初秋、帯広に近い駒場の十勝種畜牧場でやった第二回目の対抗大戦の出場馬で、中間種とは云え重半か何からしく実に太い、こんなのが障碍を飛ぶのかと心配したが、良く調教されてをり案外巧く飛ぶ、しかしこれ等の抱きの太さには全く面喰った。確かこの時には障碍の高さの最高を八〇糎位に下げた様に記憶している。

これより約一カ月早い八月末、福島競馬場で国体の東北・北海道地区予選と同地区学生対抗戦が有り福島へ行った。これに使われた馬は、国体貸与馬競技用として京都の今村さんが調教されたと聞いたが、この試合前、吾々の宿舎に地元の福島の人がこっそり訪ねて来て「北大さんには以前お世話になったから(何の時にどこでお世話をしたのかこちらが失念したが)内緒でお教えするが、ここの馬は引掛けたと思ったら手綱をいくら引いても止りません。口笛を吹けば止る様に調教されていますから、これは呉々も内緒に」と云って帰って行った。しばらくすると又別の人が来て同じ事を云って行く。更にもう一人も同様な事を教えてくれた。御親切は大変有難か

ったが、随分おかしな内緒も有るものだと思った。幸い吾々は誰も引掛けられず口笛を吹かずに了ったが。

復活後初の対帯広畜大戦を行なった日から丁度一年目に当る廿七年十月廿六日、宮城県涌谷町の小学校々庭で第十回全国綜合大学馬術大会（所謂帝大戦）が行なわれ、吾々の外に地元東北大、東大、名大が出場した。この試合の直前、古谷さんが練習中に鎖骨を折って出場の望みを絶たれ、代って鎌田君が初めて吾々と共に遠征することになり、古谷さんの身代りにと愛用の鯨髭の鞭を持参して試合に望んだ。試合前の打合せに、ここの馬は全然拍車を使っていないから、はづして乗る様に、若しどうしても付けたい時は布でよくくるんで馬に痛感を与えない様にして欲しいと申し渡され、それではと云うので専ら鞭を使用することにして、二試合合計九回代る代るこの鞭を使った為、流石の鯨髭も折れて次第に短くなり試合が終った時には、手許から四分の一位を残るのみとなっていた。この試合に、後にオリンピック候補選手用練習馬となった「トップホマレ」が使われたが全く障碍をきらう事を知らない様な馬で、良く調教されているのに感心した。又私が乗せてもらった「谷風」は前年の国体六段で優勝か入賞かをした馬と云うことだったが、踏切りも飛越も実に上手で、馬格も大柄で整ってをり、印象に残る一頭だった。

この涌谷の試合が、吾々現役時代の最後の試合となり、次の鎌田君達の時代へ移って行った訳で、全く短期間ではあったが、この他にも練習中のこと、競馬開催中乗馬の管理をたのまれて競馬場の厩舎に泊り込んで、夜の明け切らぬうちにやる競馬馬のスタート練習を手伝いながら、形ばかりの合宿をした時の事等、書き出せば切りがないので、甚だとりとめのない文章になったがこの辺で筆をおきたいと思う。

随想

鎌田正人（昭和三〇年卒）

◇国体、全日本の想出

札幌の第九回国体以来北海道からも毎年自馬を持って遠征する様になったが、戦前は全く貸与馬競技が主であった様で一部のプロ乗馬家又は軍人でもなければ自馬を持っての遠征という事はなかった様である。戦後の国体には、ずっと早くは金沢大会に和田先輩や後藤先輩（帯広高獣より）が出たらしいがその後しばらく中断しており、第八回松山大会に斎藤善一先輩が単身出場されて北海道にも馬術家ありという事を示していただいたが、以上二つはいづれも貸与馬競技であった。第十回の川崎以来はづっと選手が各々貨車に付添って、津軽の海を渡り、良いにつけ悪いにつけ「人馬が或る程度

固定化した」という悪口を言われながらも、北海道馬術の水準というものを公の舞台で評価してもらっている訳である。そしてこの遠征は全道馬術大会と共に北海道馬術界最大の年中行事となって終った。これを行うのは北大を含めて四つか五つの参加団体がある北海道乗馬連盟が行なうのだが、元々お金のない団体の寄り集りの事とて、馬の輸送費、選手の旅費等は出る訳がない。結局性懲りもなく、先輩、後援者の方々に無理を言っては御寄附を願って既に六年を繰返しているから道内の関係者、後援者には一種の税金となって終った。全くよく怒りもせずに御協力いただいているものだと、心から感謝の念で一杯である。

さてその結果という事になると記憶に残っているのは自分の事が多いので私の失敗談、自慢話を中心として一つ一つの遠征をふり返って見たいと思う。

川崎大会(昭和三〇年)へは我々として初の遠征であったため、どうも要領が悪い。貨車には私と加藤斉君、競馬場高橋氏が乗って六日目に到着したが、風邪を引いた馬が出るやら、あまり経費を切り詰めたため競技開始迄に馬の休養の時間がなく、全体としてはあまり芳しい成績ではなかったが、北嶺の大障碍五位、六段四位という成績は、この馬のその後の花々しい成績の足ならしという所で、この時乗った大久保君のファイトと、調教に対する努力に敬服した次第である。この時の全日本大会の中障碍に私は、北斗をお貸りして出場したが、この時は予選通過者十六名に対して一名対抗のトーナメント型式で決勝を行なったのであるが、北斗号快調そのもので無欠点で準決勝も飛越したのだが〇・一秒の差で東京浜野氏のウベル号に敗れ、決勝進出ならず三四位決定戦では一落下四位になった。この時の北斗が彼一生の飛越中の最高の出来であった様に思い、その後次第に年を追って能力が低下して行く様に思われたが、或る馬の一生一代最高の出来に乗っていった者は幸せであると私は常に思っているから、これも一つの幸せであったと思い、今村先生に賞められたのと、ともに忘れられない記憶である。

第十一回宝塚大会(昭和三十一年)は先年の経験を生かして少し早めにと思って全馬六頭ワムに積込み、又高橋氏と小生二人で上乗りになって出掛けたが途中青函のシケに会って三日間ストップ。これで競技の時のコンデションは全く日茶苦茶。それでも新任獣医の千田君に助けられてどうやら競技に間に合う様になった。この時私は綜合馬術に洋孝号で出たのであるが、既にこの馬も六才、落着きも出て来たので少しは自信をもって或いはと思っておったのだが、この阪神競馬場馬場で一生一代忘れ様にも忘れられぬトリプルファウルというやつをやって終った。第一に馬場馬術で経路違反をやって終ったが、これは頓馬な者なら誰でもやると自分で慰めて、まあ大好きなスチープルチエースで少しでもせり上ろうと思ってあまり苦にもせずにおった。そのスチープル、私の出番が十一番。十番には既に水沢で終った全日本大会大障碍で優勝した人馬、東京アバロンの難波君にピクシー号。スタート直前、彼は私に「スチープルは始めてだがどの位で走れば良いでしょうね」と尋ねて来たので「まあその馬格なら一杯に追って丁度良いでしょう」と答えておいたら、彼又真正直にスゴイスピードで飛び出し第一オークサー通過、第二の乾濠で人転、あたら名馬も骨折薬殺されて終った。少なからず後味の悪い思いをして、間もなく私もスタートしたのだが、始めて走る、夢にまで見ていた公認競馬場の芝馬場障碍コース二千米に向った

ら、それも忘れ、十月末の心地良い日差しに、久々とばかりコンスタントに十八――十八位で快走する馬の上でしばし恍惚の境であった。轡を終ってバックストレッチ、オクサーを次々と越えてやがてホームストレッチにかかる障碍に向った時経路図がチラッと脳裏に浮んでこれは飛ぶ障碍ではなかったと思って故意にさけたら、一つ早やすぎて経路違反。箱番氏に〝再行〟と大声で言われてハッと気が付いた時は、夢の国から、地獄に落された様な気分、後の祭である。結局図面だけを頭に入れても広い競馬場の事であるから実際に徒歩で歩いて見ないからこの様な事が起るのであって、どんなに名人でもやはり競技前出来る事ならコースを徒歩で歩くという事は常識として心得ていかねばならない事の一つである。それにしても私の今迄の経験内ではこのスチープル程気持良く走った事は又とない。何時又この様なチャンスに恵まれるであろうか？　さて綜合馬術最後の障碍飛越になるとすっかりファイトをなくして全然〝ナッチョラン〟。第五障碍の着地の際に馬がノメッつたら騎座変して私は手でタテガミの中程よりやや前の所に手を附いて体を支えたら、馬君仲々頭を上げない。観衆の大勢いる競馬場自慢の大スタンドの前とて重力は働くから、そのままズルズルと直下降、手は土を摑み、馬の頭は私の股間をぬけて見事に落馬、そこが穴であったら入ってしまい度いと思っても仕様がない。再騎乗して入線したが穴があったら入り度いとはこの事である。そしてこの事は時の馬術情報にも「スチープルで騎座がガタガタになって障碍飛越になると落馬したり騎座変する様な者があるが云々」と書かれて赤面のいたり後々迄たたった次第である。

しかし同じ場所で国体直後に行なわれた関西大会では北嶺が六段飛越に於いて山本智君を乗せて一米六〇完飛で優勝、その素晴しいバネを全国の人に初めて御披露してアッと言わせた訳である。この時は私もこの馬で大障碍に出て失格はしたがその素晴らしい後躯の弾発は、忘れ難い味である。又札鉄の門脇氏も回数飛越にヨシタカ号を駆って優勝、私も又複合馬術で荒木雄豪氏のネプチューン、井上勉氏のイチゲツを破って勝ったのは競技歴最初の優勝として私自身非常に嬉しい想出である。この三つの優勝によって北海道の馬術界がその後全国的にも非常に大きな地位を占める様になったのは遠征二年目としては実に大きな成果と言えますし、後援者の方々にやっと顔向けが出来ると選手一同意気揚々として帰途に着いたのは申すまでもありません。そしてこの年迄指導していただいた競馬場の姉崎氏にも恩返しが出来たと思って少なからず肩の荷が軽くなった気になったのです。

次の年第十二回静岡大会（昭和三十二年）では馬術は行なわれず全日本大会だけを東京で開催したため、遠征は国体という名分がないため大変困難なものでしたが主に学生が主体となり、馬事公苑の整った競技場で力一杯競技をやり、又非常にチームワークも良く地味でしたがまとまった和気合々の遠征でした。ここでも北嶺は宮城県の足柄に次いで六段で二位となり、そのコンスタントの六段飛越力は高く評価され始めその後、年々優勝候補にランクされる様になったのである。又北徹の綜合の馬場馬術に於ける落着いた動きは新しい型の綜合馬の出現を想わせた。私も洋孝で乙種純馬術に初めて出場して二位になったが先生のおらぬ所で馬場馬術をやっても無駄だと言われておった手前、一頭の馬に性こりもなく乗った甲斐があったと一人秘かに少しばかりの満足を味わった次第である。

十三回富山大会（昭和三十三年）は久々の裏日本での開催で越前の方々の人情と堅実な運営の方法に目を見張ったのであるが、綜合馬術では千葉幹夫君が見事優勝、秘に優勝をねらっておった私も泥濘に足をさらわれてどうにもならぬ時に、その落着いた柔かな騎乗に完全に〝シャッポを脱いだ〟のであるが、共に励まし共に学んだ者が優勝した喜びは又格別で手を取り合って祝福したものである。この時の野外騎乗は競技場の大山公園周囲の山を利用して行なわれたが、丁度私の出場順頃に天皇陛下が御臨席になられ、京都の荒木雄豪氏と京大生、及び神奈川の松居巌と私が天覧の栄に浴した。陛下の目の前をスタートして山にかけ上り、駈け下り、更に競技場を眼下に見渡す事の出来る最後のコースの山頂に登り、ゴールに向って急斜面を降る直前、斜面の状態を見極めるべく三十秒程立止っておったが、陛下のお立台と更に大観衆、更に小雨にけむる富山の沃野を見下した気分はこれ又終生の想い出として私の目に焼付いている。私は又国体馬場馬術にも昨年の「乙純」に味を占めて出場したが得意の経路違反で三位に落ちたのは競技に対する準備の不足、真剣さの不足、更に精神力の足りなさを幾度も反省させられたのである。北嶺には生田君が乗って出場したが運悪く踏切時に足がすべって四位、又北標で「大障」に出場し驚異的飛越を見せながらも惜しくも四位だったのは大変残念であったが当時の人馬一組の練習法の成果として非常に画期的なものであった。更にこの年の全日本は飛弾の山脈を越えて名古屋に転戦したが中京競馬場のサンドコースは安定した騎乗が出来、練習の制限も殆んどなく非常に乗り易い馬場であった。馬も非常に落着きを見せて来たため競技は非常に楽な気持で出来た事は幸いであった。当日の朝、会場に鶏の数羽入ったカゴが運搬されたのを許らずも見て、「さすがは薬鶏の本場だけの事はあるものだ。きっとどこかで展覧会でもやるのだろうと思っておったが、スチープルチェースの向う正面にある障碍に向った所、急にバタバタという羽音とともに鶏が騒いでいるではないか、さてはこれに使う為であったかと、一瞬気合を入れて難なく通過する事が出来たが、これに物を見た馬が約半数あったから、競技者たるもの諸事注意を怠ってはならぬとつくづく思った訳である。その結果始めて全日本馬術大会の綜合馬術に優勝出来たのであるが、その原因は馬場馬術の得点が非常に良かった事、そしてその原因は、これは良い成績を上げた時は皆一応共通している状態であるが、人が勝とうという意識が過剰でなく、むきになっておらず、心が平静であった事、馬も又非常に落着いている事、結局は勝敗にこだわらずに伸々とプレイが出来た事だと思われる。運動も型にはまったものにするよりは、上位十名位の力量の差等は殆んどないのであるから、その人、その馬の持味特性を良く把握して生かした乗り方が返って審査官の目に良く見えるし、そこに自然さがあると思われる。更に高級になれば芸術にも達するものと思います。それと同時に審査官の理想とする型もその年その年で次第に変化する事も重要な事で、それは世界の馬術論の変化、日本の馬術界の論議の変化となって現われますからそう言う事も常に敏感に感じ取る基礎知識と、変化にも合せ得る度量が必要とされるのでしょう。当時綜合馬術に於ける馬場運動は用役姿勢でなければならぬ様な論調が非常に一部の人から言われておりました。そう言う点で洋孝の態勢というのは非常に有利なものであった訳です。現在ではあの当時と同じ運動をしても五位に入るのも無理でしょう。何故ならばもっともっと、完全な収縮（高等

馬術的でない）でない収縮を要求しているからです。勿論調教審査の対象ばかりでなく、スピードとか障碍飛越の能力も必要としますが、この方は何時も変りなく、柔順と前進気勢だけが問題になるものと思います。

それにしても昭和二十六年入部以来十年余、やっと二千五百か三千鞍が、今村安先生の二、三年で一万鞍乗るというのに較べてなんとその努力の少ないことかと今更ながら恥ずかしい気が致します。しかし昨年（昭和三十五年）全日本大会で朝岡唯夫氏が六十才にならんとして六段飛越に入賞した如く、何時もたゆまず乗馬し続け度いものである。

東京国体、熊本国体等除かれて申訳ありませんが、毎度毎度お世話になった方々にこの紙上から御礼の一言を書いて終りと致します。本当に有難う御座居ました。

◇ 先輩N氏の事

秋田出身の彼氏は良く学び、よく飲み、豪胆磊落、色々話題の多い人であった。二七年頃にはS先輩等と一緒に庶務をやっておったため度々各々の寮に集って部員連絡用のポスター書きをやったりしたものである。

練習場にも膝のない乗馬ズボンに、底のない長靴、それに家畜病院から失敬して来たのか繃帯で拍車を止め悠々と馬場に現われて体の如く大きな声で吾々に気合を入れ、号令を怒鳴っておった。新兵は声だけ聞いて恐れをなしたものだが酒豪をもって鳴る彼氏、或時吾々もお供をして鮨屋で一杯やった後、その高いのに憤慨して帰り際にそこのノレンを持って来て終った。二、三丁行った頃息せき切って追いかけて来た鮨やの親父、彼氏の声を聞いて物を見て終い、ノレンだけは返してもらって彷々の態で帰るという程勇ましかった。又その有名な長靴は開部の頃より少々穴があったらしいが、それは次第に大きくなって、卒業近い頃には既に裸足同然となっていたが。これ又平然として時には仙台、常広へ迄も遠征し、当時未だナイロン靴下等のあまり出廻っておらなかった頃の貴重な天然靴底と靴下とをいじめつけておったが、この靴を履くと鐙の感覚が良くて一寸止められないそうである。

当時の冬期間の練習は雪が多いため組織立った部班運動は殆んど行なわず道路上騎乗が主であった。又当然練習に参加する者も少なく一人か二人という事もままあったが反面マニヤには又とない良いチャンスで一日二、三頭乗ってくれと言われる事もあった。それで吾々気の合った者共、三人で時には早朝にもしばしば遠乗りをしたものである。コースは往復二時間位の南は円山公園、西は琴似の酒造会社。三時間で円山から琴似へ廻る順路というのが多かったが、或時はギヤロップで前駒の跳ね上げる雪玉に目を廻しながら、又伸長速歩で凱旋将軍の様な気分になって、正規の練習の堅苦しさとは別の開放された楽しさを味わったものである。そんな事をした或る朝、氷点下十数度もあったであろうか、可成りの寒さであったが、例によりN氏を先頭に人通りのない雪の街路を一つ走りして、馬も人も息で眉毛や顔口の周囲を霜で真白にしながら、札幌ならではの乗馬の味を楽しんだのであるが、終って帰途につく頃、彼氏の大事の一物が痛いとの事。さては良からぬ事でもしたのかと思ったら、どうやら乗馬の時は寒中でもズボン一枚でいる彼も、一寸ボタンが開

いておったために頑傷にかかったらしい事が分った。後で分った事だが、この急所には生理学で言う弱点というのがないらしいから、札幌の乗馬家夢々油断すべからずと言う訳である。

◇癖馬列伝

馬の癖も百馬百様で多くの中には人様同様に色々変った馬がいるのは当然で既癖の良い馬悪い馬、乗ったら又一癖のある馬と、なくて七癖で詳しく言ったら際限のない話である。戦前は軍隊に多数の馬が集っておったため色々見本になる様な強者もおったらしく今もって語り草となって、先輩老人から聞かされる事がある。一般に癖馬は既癖なら愛情のない飼養、乗っての癖なら調教の過誤に原因することが多く、極く自然な状態で放牧が主ならば悪癖等はたいして起るものではない。元来広い原野を疾駆して進化した動物のことであるから、高々二坪や三坪の馬房に押し込められて、たとえ充分な飼料が与えられたとしても、禄な運動もさせられないのでは「幾ら原子の時代というても馬が瓦版読むものか」という訳で食って走ってねるしか能のない彼等の事、小人閑居してなんとやら、色々退屈まぎれにやる事が習い性となって更には病的にさえなる。自分の後軀だとかに噛りつく〝身喰い〟。馬房を蹴る、疝癖（グリッポ又はガック）熊癖、馬房とおしくらまんじゅうをする馬等色々あるが、特に疝癖は疝痛の原因ともなり矯正法もなく全く困ったものであるが、それを防止するため金網で四方を囲い、全く歯に支点を取らせる所のない馬房に入れたら、ねころんで自分の蹄に歯をかけて〝グイ〟とやる強者も出る始末で一度覚えたが最後人間の麻薬にも比すべき悪癖である。

私の関係した乗馬にはあまり大いした数でもないのでこれと言うのもないが、想い出すまま書いて見る。

リガレット号――札幌乗馬クラブ、国体貸与馬、帯広畜大と移って行った馬であるが、時折他馬を蹴る事以外は特別悪癖とてもなく、実に上手に障碍も飛び、心臓も丈夫であったためか二三時間乗られても汗もかかぬという程で、乗り易く且、骨のしっかりした頑丈な馬であったため、乗馬クラブ一番の働らき手で、蹄鉄が他の馬の半分しかもたぬという位、良く乗られていた。特にG・Iにはその丈夫さを買われてか引張り厩であった。そのためか皆と同じ盛切りのめしに不満だったのか夜な夜な馬房を出て燕麦の半俵位ペロリと平げて、澄まして自分の馬房にもどって何食わぬ顔をしているのだが、幾ら利口と言っても自分がはずした馬栓棒をかけておく程ではないから、朝に見付けられて、馬丁さんから馬栓棒で焼を入れられておった。さてこの防止策として夜は馬栓棒をロープで結えて置くのだが、これ又上手にはどいてしまう。遂に競馬場高橋氏考案の特殊な累線状環と鎖でようやくその難から逃れられたのだが、国体に遠征する様になって畜大の白馬として一緒に行き、遠征途中の乏しい馬糧を失敬されたこと再三であった。どうもこう言う馬は囚人が自由にあこがれる様に馬房から出る事しか頭にないらしい。

岩文号――競馬場の誘導馬であったこの馬は芦毛の美しい馬であったが、リガレット同様放馬の名人であり、馬房を出る事もさる事ながら、外に繋ぐ時には張手綱で余程しっかりしていかぬと大抵の結び目は上手に口ではどいて、意気揚々と頭を高く上げ、尾とタテガミをなびかせてその辺を走り廻ったものである。この馬は

又大勒の銜枝を噛むのが全く上手で走行中、さっと銜枝を銜えたが早いか、後軀の独特の弾発とともに見事にひっかけられる。相当の名手もこうなると仲々おさえる事が出来ない。しかし〝癖馬名馬〟か、私が道内で乗った障碍馬の中では一番怪るやかに見事な弾道を描いて気持よく飛越する馬であった。第一回道大会の自馬中障碍にはこの馬で出場したのだが最終障碍前の人馬転倒で長蛇を逸したのは今だに忘れられない。

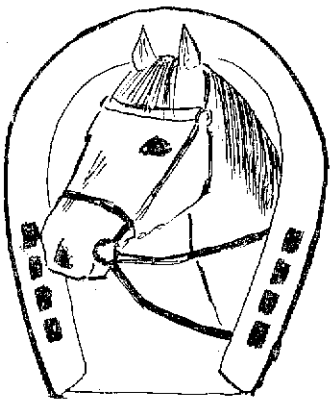
チャンプ号――（後にアートと改名）競馬場高橋氏が度々国体にも出た名馬で障碍飛越の非常に上手な馬であったが、気に入らぬ事があると立上って困ったものである。調教師をもって任ずる後藤先輩は立上ると同時に手綱を引いて騎手は飛び下り、ひっくり返して懲戒したりして後年は幾分良くなった様であった。しかしこの馬は米軍時代にクールペットを教えられておったらしく両拍車を入れて手綱を控えると確実に立上ったから、調教によって覚えたのか、自分に過度の要求をさせられたり、厩舎に帰り度くなった時に立上ると騎手が思う様に動かせなくなる事から悪癖となったと思われる。現在でも活躍している横浜乗馬クラブの藤花号も競技場に入る前に屢々立上って失格しているが、馬は走行中に立上るという事はめったに少ないから、普通の立上る癖は推進不足と手綱操作の不良から来る事が多い。強引に推進すれば敵わずに前進する事が多い。これは膠着癖についても同様である。昨年あたりは競技会でも次第にその数は少なくなっているがスタートをしない馬、スタート後膠着する馬が相当数見られるが、これ等は結局調教中の推進脚力の不徹底が原因で〝脚の強力な推進に合えば百%膠着等は起るものではない。競技中思わずもっとケトバセと声が出るものである。現在の北檜は膠着癖と口の固いのが一緒になって入場後ラチ外に飛び出るという癖を覚えたが、これも徹底した扶助を使えば能力のある馬の事、癖を出さずに済むものと思われる。一度競技場でこう言う癖を覚えると調教中はおとなしくとも競技場に入ると俄然その癖を現わすから、その様な馬で競技に出る人は余程の決意をもって如何なる抵抗でもこれをくじく自信がなければ競技には出ない方が良いという事になる。自信があっても実力が全部出し切れぬのが競技場であるから尚更である。

その他膠着する馬としてはアート（後のチャンプ）リミッテッド等があったが後者は唯拍車を入れた位では悠然として小便をたれ、少しも動かぬという型。前者は全身水から上った様に汗をかきながらも、幾ら拍車を入れようが鞭で打たれ様が前進は少しもせずに横に行ったり後退したりするだけで、私が今迄見た膠着癖の中では一番悪質のものであったと考えられますが、これ等も乗馬する人の技術が上昇するに従って又馬の調教が進み落着きを見せるに従って殆んど後年にはその癖を見せなくなったのを考えると、最初の頃に悩まされたのは技術が悪かったと言う結論が出そうである。怪談めいた話であるが、朝清は三才の時、日高の山野から第一農場に来て間もなく私も乗り始め、渡辺さんと二人で馳られてノックアウトされたり、落馬したり、引きずられたり、全く想い出の多い、その反面非常に勉強をさせてくれた馬であったが、札幌国体の前、競技に出すべくその一カ月前より競馬場の厩舎に入れて調教しておった頃の事、朝になって厩舎に行って見たら馬栓棒は全部かかっているのに馬房の中に馬がいない。驚いて競馬場内を走り廻って探してみたら、彼何食わぬ顔で走路の傍で草を食べている。そこで例え馬房か

らは出ても、大きな厩舎に出入りする扉を閉めておけば大丈夫だろうと思って次の朝見たら扉は閉っているのに馬房の中、又厩舎の中にそれらしい物は一つもなく、彼氏は又悠々として戸外で草を食べている。全く恐れ入った強者である。（どうして出たかを知りたい人はお出下さい）

その他厩癖の悪い馬としてはデパートの様に色々な癖をもっているのが、現在もクラブにいる雅竹で、瘤癖、熊癖、身喰い、馬房を蹴る等全くにぎやかである。

然し癖馬名馬の諺もあり一癖ある位の馬が能力がある事が多いのは人も同様であるが、癖ばかりで正常に働かぬのは人では松沢病院行き又は鑑別所行きという所であろうか？



雑感

乾　直道
（昭和三十三年卒）

十月も末になり、いかに南国阿波の国とは云え、過ぎ去る風にそろそろ肌寒さを感じるようになったこの頃、部から馬術部三十年史の原稿依頼を受けた。考えて見るに小生、在籍時代それ程有能な部員でもなく、部を去って後も、私の他に多くの優秀な方々が各界にわたって大活躍をされているものと常々拝察しているので、何で又私などに？気のきかない連中と怒っては見たものの、卒業後の二年間を札幌で過し、その後も何やかやと、えらそうな事を書き送った覚えがなくはないので、あえて雑文の筆をとる事に決心した。

想い起して見れば年月のたつのは早いもので、私が北大に入学してまだ肌寒い四月に「馬術部」と書いた扉を恐るおそる叩いてから早くも八年の月日も過ぎ去った。何から書きだし、何を書くべきかを、筆をとった今でさえ迷っている仕末なので、まず新入生時代の回想からとりとめのない筆を進めて行くことにする。

当時の部は今日の如くめぐまれた状態ではなかった。入部当日、見るからにこわそうな先輩から「練習は明日から競馬場で、」と云われ、当時札幌の東の端、豊平川の近くに下宿していた私は、毎朝五時におき、苗穂から一番の上り列車で桑園迄行き、わずかな遅刻でしかられるのがこわさに、駅から競馬場迄の道をゴム長を片手によく走ったものだった。現在の上級生諸氏は皆立派な紳士ばかりと思っているが、当時の連中ときたら皆鬼か？蛇か？（その時はそう思ったので、今は皆立派な第一級の紳士であることを附言しておく）練習を始めて一週間もたったかたないうちに、アブミ上げで泣きたい位しぼられ、しばらくしてあこがれの障害練習をやらせてくれるようになったら、「手をはなせ。」「アブミを上げろ。」それに加えて私は生来背がまるくそれを直して下さろうと云う親切心でよく背中に棒をつけられうらめしい想いで馬に乗った。

このような練習が続く間に、幾人かの同窓が歯のこぼれる様に去っていった。その中で、「落馬の名人」と云うありがたくない称号をたまわりながら細々と生きのびて行った自分が不思議な気がした。こうしているうちに、馬上にいる方が地上に落されている時間より少し長くなった頃、夏の合宿がやって来た。夏の合宿は、全ての人達が経験するものでそれ程目新しいものもないので、その中で珍談を一つ二つ御披露しておく。今考えて見ると、当時は現在に比べて食料事情にめぐまれていなかったのかも知れないが、よく悪い事をしたものだ。ある晩、合宿所の近所の畠から、みそ汁用に野菜を無断借用致して来て、朝それをきざんでいたら、なんと、そこへ昨夜の畠の持主がカゴ一杯の野菜を持って来てくれて曰く、「学生さん毎日大変ですね、少しだけど食べて下さい。」と置いて行かれたのには一同恐縮どころでなく大恐縮。又は石狩街道迄乗馬で無料のトウキビ仕入れに行き、お百姓さんにつかまり馬に逃げられ、しかもお説教された後、リュックサック一杯のトウキビをもらったと、はるか篠路から背に荷をかつぎ、長靴でビッコを引きながら帰って来た豪傑等。又、風呂屋に行った帰りに、桑園駅の貯炭所から洗面器一杯の石炭を持

って帰るのがノルマだった戦後初の冬の合宿、その他もろもろの新入生時代の想い出はつきないが、どうも泥棒談議になってしまったので、この辺で一まず筆先を変え、部からの希望もあるので、三十一年夏の旧帝戦を、お台所の前からのぞき二、三書き綴りたいと思う。

忘れもしない三十一年夏、前年由あって一年間休学した私は、新入部員になり変ったつもりで喜々として合宿に入った。時の四年生は、入部の時の同僚共、揃いもそろってガメツイ奴ばかり。その連中から早速帝大戦の特別会計をおおせつかり、合宿につきものの作業免除の特典に喜んだのもつかの間、帝大戦の計費の他に五、六万の金を浮かせる位に金を集めてほしいと云われた時は、暑い夏にもかかわらず冷汗をかいた。それからは、毎晩色々の角度から札幌の財閥を検討、メモし、朝の練習が終るとスグ街にとび出すのが日課となった。始めの二、三日こそ、むくつけき男共のみの世界から小生だけ美しい女性の多い街に出られるのをひそかに喜んだものだが、電車にのると馬の臭いが体にしみ込んでいるのか、皆遠く離れて行くし、いよいよ本番になって寄附をもらいに運動員屋へ行けば、「スポーツの全国大会ならたいていはお手伝いたしておりますが馬術大会ではねえ。」と云われるし、道庁で賛助費として寄附してくれると云うので勇躍のり込めば、あっちの窓口で判、こっちで印と、半日近く庁内を歩き回され、出た金額が二千円。ギャフンと来たが、まあ無いよりましと、重い足取りで庁門を出たこともあった。又ある会社では、押しの一手で社長に直接面会した迄は上出来だったが、それからがいけません。「近頃の学生はことある毎に寄附を当てにして、自分達の労力を惜しんで他人の金ばかりを当てにしている。」と云うような意味のありがたい？社会訓を三十分以上にわたって聞かされあげくの果てに「考えておくから明日出直して来るように。」との事、翌日、勇躍かけつけて見ると、受付で女の子に「御趣旨に賛成出来ないから御寄附出来ないとの社長さんのおおせです。」と門前払いをくわされ、大いにむくれては見たものの、考えて見れば乞食同様に他人様のお金をいただきに行くのだから、くれないと云われて見ればそれ迄とあきらめた。そのような有様で日時は迫り、金は目標の十分の一も集まらず、泣きたい日が続いたが、荒川君の応援をうけ、諸先生の紹介状を利用し最後の努力をはらい、試合の数日前迄に予定を軽くオーバーし、十万円以上の金が無事に手元に入った。如くして募金も目標に達し、無事に帝大戦も終ったわけであるが、試合も全て完了し、はるか西方に手稲の山が紫色に煙る夏の夕暮に、野天でジンギス汗鍋をかこみながらの懇親会で、各大学の人達から、すばらしい大会で楽しい数日を送ったといわれた時は、何か胸にこみ上げてくるものを押えることが出来なかった。

その後、残した金を如何に有効に使うかと云う事が論議され、結局、戦前の諸先輩に与えられた如く、部の卒業生に対して記念メダルを贈呈する事に意見が一致した。そしてこれも特別会計のくされ縁で、小生が完成に努力することになった。これも又、慣れない東京の冬の下町を何回となくほっつき回り、色々語るべき事もあるような気もするが、あまりにも手前味噌になるので書く事を遠慮する。しかし四年間の苦しくも楽しい馬術生活を途中でいろいろの障害を乗りこえて卒業する優秀な後輩達に、果てしなく大きな未来と、過去の楽しい一頁を結ぶキズナとして与えられるメダルが我々の手によって復活された事を想う時、大きな満足と同時にいい知れない誇りを感じる。

とりとめなく文字を綴って来たが最後に、私が未だに馬への愛着を捨て切れず、当地に乗馬クラブを設立しょうと多方面に働きかけ、もし設立のあかつきには、短期間でも、北海道の優性な人々を鳴門の渦潮を越えて招ける日を楽しみにしている事をお知らせして雑文の筆を置くことにする。

一米七〇糎の壁

――― 第14回国体自馬六段飛越優勝 ―――

森本悌次
（昭35年卒）

今更こんな原稿を書くことはどうかと思われるし、又こう云うものはえてして自慢話めいて、読む人（もっとも誰れが好んで読むものでもないが）にとっても余り愉快なことではない。しかし、この「年史」の編集の仕事を押し付けて、卒業間際まで忙しい思いをさせているのも私に責任が一部あるので、その義理を果たす意味もあり、編集上の空いたページを埋めるのに使って頂く積りで、感想如きものを書かせて頂くこととする。

私が三年目のときの国体は富山で、全日本及び全日本学生自馬は、名古屋の中京競馬場で行われた。その時、我々三年目は田中、佐伯と私が馬丁兼任の様な格好で、始めての自馬大会に連れて行ってもらった。前にも書いた様に、我々がほとんど貨車乗りの馬丁さんの様に、はるばる馬を開催地まで送って行った。国体は、規程により人数の制限があるので我々は出場せず、名古屋に於ける全日本大会に出場した。その時の笑話にこんなことがあった。我々のある誰か（特に名を秘す）がある恐い先輩に、「何んでい！　はるばる名古屋まで来て障害一ケしか飛ばねいのかよう！」といわれてがっくりしたことがあった。全く長い長い馬との道中の末、障害一ケで失格とは全くご苦労な話であった。

このときの全日本馬術大会は、前にも書いた様に競馬場で行われ、私の知る限りでは観衆も多く、又優勝者の表彰式には吹奏楽の演奏があって、仲々華やかなものであった。この時優勝された我々の先輩が表彰されるとき、例の如く吹奏楽によりその栄誉がたたえられた。この光景を田中と二人でしばし感激しながら、来年は「オレ達もあの音楽を鳴らしてみてぇものよ。」と話し合ったのを覚えている。

翌年私達が四年目になってみると、諸々の悪条件が我々の前にあった。このことは別に書いたので省略するとして、この年の国体及び全日本大会の予選が七月の初旬だったと思うが大通り公園の広場で行われた。例年この予選会は秋の国体の直前に行われていたが、馬のスケジュールや、早く予選を終って調教期間を永くしたいという考えもあり、更に馬事思想の普及とか云う大義名分を立て、会場を大通り公園にして行われた。しかしジンクスにもある通り、主催者の立場にあるものは仲々大会準備の忙しさもあって、よい成績を上げるのは困難であり、このときもジンクスの通りになった。勿論この予選が行われる一週間前に、東北北海道学生大会

（これは〝王決〟につながる）が北大馬場で行われ、我々もその方にも精力をそそがねばならなかったことも原因しているが、とに角自分の出場するときに馬の背に乗って「やれやれ腰を掛けられたわい。」という様な状態であった。しかしこれも北海道馬術界のため（？）とは思ってみたものの、来年は又北大馬場でやった方が楽だとつくづく感じた。まぁそんな訳で余りよい成績が上げられなかったが、それでも前年度鎌田、千葉両先輩の活躍と、此度の開催地が東京であるという好条件が幸いして、前例にない九頭という馬の割当てが北海道地区にあったので、北大より四頭の出場が許された。この馬配が決定されるまでには幾度かの理事会が開かれ、かなりの論議が重ねられた。

とも角自馬四頭の出場が決り、乗り手の方も部報等によりご存知の通り四年目より佐伯、田中、本橋、私、三年目より大場、原、二年目より千葉というメンバーが決まった。丁度この頃は役員の交代期にあり、我々四年目は一応形の上では引退ということになっていたけれども、新旧の役員の話し合いで円満に決められたと思っている。とに角自馬大会に出場することが馬術をするものの念願であり、最大の目的は優勝することではあるけれども、参加して学生時代のよき思い出とするのも又、大学馬術部の部員の喜びであると考え、本来の考え方からすれば幾分邪道かも知れないが、多くの部員に出場の機会が与えられた。

以上の様な経過を経て国体には佐伯、田中、大場、及び私が〝自馬〟で〝貸与馬競技〟に千葉ということになった。二、三年前より北大でもある程度、責任馬制をとって居り、それに準じて各自の馬配及び出場種目を決めた、即ち佐伯―北標（前年度国体大障害にて四位入賞）、田中―北檜（前年度国体総合馬術にて優勝）、大場―北嶺、北檜（中障害）、森本―北斗（総合及び北嶺の六段）であった。まぁこの中で佐伯の大障害、田中の総合は入賞が堅いと云われていた。私が騎乗する北斗号は、かつては名馬と称されたけれども、やはり一九才ともなり、余り期待はかけられなかった。その他大場の北檜号の中障害は、とに角うまくゆけば満点で帰って来る可能性はあった。私の北嶺号はかつては〝六段〟に毎年入賞しているが、この頃一寸調教がくずれているのでもしやというのが大体の下馬評であった。

大会は十月二十六日の国体が皮切りで、後、続いて全日本、学生自馬という順序で行われた。

他の部員の練習もあるので出場人馬の特別練習は出発の大体一ケ月前より、本格的に始められた、本来ならこの大会を目指して一年をかけるところではあるが、何分にも大学馬術部の馬という弱点があり、結局正味一ケ月もない練習量で本大会にのぞまねばならなかった。九月末の札幌は陽射しもかなり弱くなり、雨が降った後の馬場は仲々回復せず又、悪いことでも有名なので、思う様に練習出来ないのが毎年、国体前の悩みでもあった。この年の練習も例にもれず時折激しく降るしゅう雨の中で行われた。結局東京に於ける大会前の調整が鍵となった。

更にこの時期は例年四年目就職試験があり、コンデションとしては良好ではなかった思う。我々の遠征馬達は毎年のことで慣れていることもあろうけれども、途中大した事もなく大会地、東京世田谷の馬事公苑の厩舎に落着いた。只、北嶺号が一寸立ち張れをやっていた位だと思う。何分にも寒い北海道から、暖い東京に来たので

馬も驚いたろうけれども、人間の方も全国から百頭以上の乗馬が集り、全国に名を轟かせた名馬や名人に会い、あるいは自信を多くしたり、心細くなったりしたものだ。大会前の練習は別段これといって特筆すべきこともなかったが、どこまで来ても資金と競争する様で東京都内の先輩めぐりもかなりやらざるを得ない状態であった。

大会の第一日であったと思う。NHKの札幌放送局から団体の北海道選手団のインタービュ！を取りにやって来て、盛んに鎌田先輩や有望な前記田中君等を探していた。こちらは全然期待されていないらしく相手にされなかった。これも私にとっては、楽に試合に出られた原因かも知れない。

私としてはかつての名馬北斗号もこの年が最後の出場になるかも知れないので最後の花を咲かせてやりたいという気持と、北嶺号がもしかすると、よいところまで行くのではないかという期待がほのかにあった。大会の二、三日前に在京OBの樋口さんが我々の宿舎に来られたときに樋口兄が前々年、やはり同じ馬事公苑で行われた全日本大会の六段飛越にこの北嶺号で二位に入賞しているので、そのときの様子を聞いてみた。六段というのは普通の障害競技と違って一見簡単な様でもあるので最初のバーの飛越状況が影響し、一つでも落せば失格になるものだし、又この練習は馬場が狭い関係もあって十分に出来ず、云わばぶっつけ本番でぶつからねばならなかったので、少しでもこの競技に関する知識をえたかったからである。

彼の話によれば、かつては〝六段馬〟と云われた様に、馬場に入って六つのバー障害を見ると馬自身がうまく間歩を合わせて飛ぶから乗り手は前へ進む力をつける様に追い込むだけで良い。ということであった。結局、馬が飛び易い様に持っていってやることが第一で、無用な細工は余計な過失を招くと考えた。しかしこの馬の飛越振りは垂直方向に高く上り、水平方向に流れる様に飛ぶことはないので、前進する力が障害毎に落ちるのは練習でも判って居り、更に背が低いので前駆を起す様に幾分吊り手綱気味にやることがよい。又この馬の性質は〝物を見る〟ので落ち付けて入り込ませない事。しかしある程度入り込んでハミにかかった方が六段の競技にはよい。しかし入り込むと首をふって水勒ハミで押え切れないので大勒をつけた方がよい。（これは昨年名古屋で成功している）大勒ハミ又は棒ハミをつけると不思議に落着き、これを付けると垂直方向に飛ぶが、前にも書いた様に六段では、これはかえって望ましい。又馬群から離れて一頭だけスタートに向うとき、一寸いやがるがその時だけ鞭をきかすと従順になる。まあこんなことを頭に入れて置いた。又広い馬場はこの馬にはよい影響を及すであろう。

さて第一日に総合では札幌乗馬クラブの洋幸号が五位に入っただけで、北大勢は全滅。又次の中障害にも帯広斎次の馬が三位に入っただけでよい成績が上げられなかった。結局残るのは第二日、午后の六段と最終日の大障害とになった。丁度この頃東京は天候に恵まれず、団体競技三日間を通じて日が射したのは第二日の午後だけであとはくもったり雨だったりしてかなり寒い日であった。最終日の大障害で佐伯君が見事な飛越振りを示していくうち、第何障害であったか、馬が足を引っかけて人馬転倒して顔半分に砂をかぶり真黒な顔をして見ていたお母さんをはらはらさせたが、それにも拘らず四位に入賞したのは見事であった。さてこの国体競技中では比較的馬場状況に恵まれて六段が行われた。この競技が始まる前に走路で置き障害を何回か飛んでみたが、時々障害前で拒止され、さては一

度も完飛しないで失格かなと思ったがとに角、二完飛最終障害高さ一米四〇を目標にして、これが出来ればまぁまぁとしようと考えた。しかも二完飛して三回に進めばかなりのところに行くのではないかと思った。前年の富山の国体では四完飛（このときの最終障害の高さ一米五〇）で優勝が決っているのを見たので他の馬と競争するというより、むしろこの目標に到達すれば結果として成績を上げることになると考えた。三十数頭の馬が場内に集って出場番号順に次々に飛んで、失格した馬は外に出ていく。北嶺号に幸したことは丁度二番前に同僚の北標号がいたことである。何分にも人見知りする（或は馬見知りする）馬なのですぐそばに仲間が居るのは馬ながら心強いのであろう。いつもならこう云う大きな大会の雰囲気をすぐ察知して入り込むのに、幾分入り込み気味ではあるけれども落着いていた。第一回はよく飛んでくれたが、見ていた人の話では全部のバーに北嶺号の足が触れていたそうである。乗り手も夢中ではあったけれども、それに気付いていたが、飛び出したら小細工するとかえって悪い結果となるので、馬のままにしておいた。第一回を完飛したのは二十頭近く居たと思う。第二回目は幾分調子を出してうまく飛んだ。馬場が広いということは人馬共に障害が低く見えるものと思う。北大馬場で最終障害一米四〇にして六段をやったら五個目の障害で必ず止ってしまう練習状況であった。或は云わせて頂ければ、調子がよく障害が低く見たのかも知れない。とに角二完飛して最初の目標にはなんとか達した。しかし残った馬が驚くべき十五、六頭も居ったのである。これでは入賞どころか十位以内もむづかしい。しかし目標とするところまで来たのだから、後はやれるところまでやれ、と思って入賞は頭にはなかった。北標号も二完飛してすぐ前に居た。さて第三回目である。こうなると障害の高さもかなり高く感じられる様になったが、それでも一米五〇という実感はなかった。これも無過失で飛んでしまった。ここで北標号失格して、残った馬が九頭。今までこんなことはなかった。少くなくともここで二頭かあるいは三頭になるのが普通である。この中には帯広畜産大学の馬がいたし、北嶺号のかつてのライバル慶応の慶隆号も居た。このへんから慶隆には負けたくないという気持が起って来た。第四回目、私の前には二頭位残っていた。この頃から馬も幾分入り込んで来て、馬群を離れてスタートに向おうとして、審判席の前を通りかけたときには、一寸反抗をしたがかえって障害が高くなったので入り込んだ方がよかったと思う。見ていた人の話では最終障害を飛ぶときにはすごい飛び方をしたそうではあるが、勿論乗り手には判らない。とに角四回目も無事に飛んだ。全く奇蹟の様なものだった。ここで残ったのは二頭だけとなり、もう一頭は麻布獣医大の麻緑号で第五回目の飛越に移った。負けても二位に入賞は確実なので気分的にはずっと楽で、馬の方でもこれが最後の決戦になる位感知したのだろう。断然落着いてハミ受けも良好でスタートに向った。五回目は第一障害は一米二〇で第六障害が一米七〇。普段大学では一米二〇でも余り素直に飛んで居ないので、この時は流石に障害が高く、目前に追って来る感じで一つ飛ぶと更に又高いのが追って来るという調子で、ちょうど機関車が坂道をあえぎあえぎ登る様にして飛んでゆく感じだった。第五障害（一米六〇）を飛んで着地しようとしたときもう駄目だという考えが頭に浮んだ。しかし着地して第一歩を踏み出そうとしたとき、競馬場の高橋さんが馬場の外から気合を入れてくれたので、もう一つだと拍車を入れ、踏切

りのときに乗り手だけでも飛んでやれという積りで人間の方が先にバーを越えるようにしたら、馬の方が後からついて来たというふうにして、とも角一瞬バーの上にある自分を意識したのを覚えている。しかし、やっと飛んで着地して二、三歩行ってハットしたら落馬していたのには自分ながら不手際だと思ったが。まぁあれだけ飛んだのであるからかんべんしてもらってもよいものと思う。やはり審判員も同情してくれたのか、これを落馬と見なさないでくれたのでどうやら優勝することが出来た。終って馬場の外に出たときに応援してくれた皆さんが寄って来て、握手をしてくれたことは今でも覚えている。

初めに書いた様な表彰を受けるときの吹奏楽はなかったけれども、この感激を味わったことだけでも十分であり、そんな不平を云うとバチが当りそうだ。

とに角馬が飛んでくれたのである。又ついていたのかも知れない。しかしこれも常によき指導を与えてくれ、又助言を頂いた先輩をはじめ支援してくれた部員諸兄の力がなくしてはありえないことだと思っている。ここに改めて感謝の意を表すると共に今後も多くの人がこの感激を味わえる様にこの私も微力ながら尽したいと思っている。

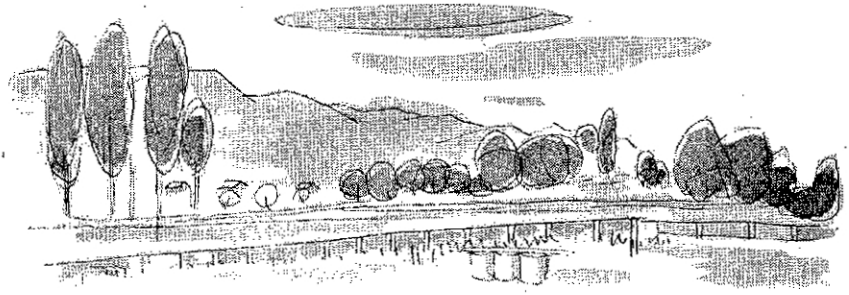
◆

◆

◆

◆

◆



国体自馬中障に優勝するまで

――北嶺号と共に――

大場善明
（昭36年卒）

半年振りの土の香を漂わせ、ほほを撫でゆく春風に身も心も、まさに真綿雲の如く浮き浮きとして入学した昭和三十二年の春、私の馬と共に歩んだ学生生活が始まった。生まれて初めて馬の肌に触れたあの感触。生暖い、艶のある彼等の肌から感じとった感触は、今もなお、私の指先に蘇って来る。当時の想い出の糸をたぐってみると、多分講習会第一日目、生田先輩であったと思うが、私等、よれよれの学生服に、白のトレパン。ダブダブの軍手にゴム長というような今の一年生の諸君と同じ恰好で、ビクビクしながら馬の側に立っていると、馬の尻にゴシゴシブラシをかけ乍ら、「こんな馬糞なんか手についても、チットモ汚いなんて思わなくなって来るヨ。」とあの印象的な瞳をギョロリとさせ、歯をむき出して笑われたのが想い出されるが、その時の馬が北嶺号であり、これが私と北嶺号の初対面でした。又、馬場に於いては、長谷川先輩に北嶺号の歩き方を称して、「モンロウ・ウォーク」という事も聞かされ、鞍上では随分ショウモウさせられたように思います。当時は全国に名だたる名馬〃北嶺号〃とも知らず、ただ手入れ等の時、非常に大人しいので、他の馬よりも恐しくなく、念入りに手入れしてやる事が何よりも楽しく思えました。

この年の秋、東京で開かれました全日本馬術大会に当時の主将であられた樋口先輩が六段飛越で堂々二位を占められたと聞かされ、何も知らなかった私は、改めて北嶺号を見直したものです。しかし、それ以来私は北嶺号に対して一つの疑問を持つようになりました。「六段飛越では一米六〇を完飛出来る能力を持ち乍ら、何故中障碍にもその能力を発揮出来ないのか？」他の人達からすれば、まさに愚問に過ぎなかったのでしょうが、この事が後になって、北嶺号に良く乗る私の契機となった訳です。それから翌年にかけて私は努めて北嶺号に乗る事を心がけ、他人の話を聞くよりも実際に自分で乗ってみた方がその疑問も早く解けるだろうと思ったからです。たまたま私が二年生の秋、全日本、国体北海道予選大会で、自馬中障碍飛越に北嶺号で出場を認められ、先輩に何度も何度も怒られながら練習はしたものの、競技では最終障碍を残して三拒止失権の憂目を見たのが、私の自馬による北嶺号との最初の競技でありました。此の大会等は私にとりましても最初の自馬競技大会でもあり、本当にアガッてもいたと思いますが、技術的に見ても（現在の私にしても自覚している事ですが）まさに〃馬乗り以前〃の乗り

方でありましたので、この成績にも甘んじなくてはならないと思いました。翌年、馬と接するようになってから三年目を迎えて、どうやら何んとか〳〵馬〳〵と云うものも理解出来るようになり、増ます面白味が湧いて来た頃、前主将の森本先輩より主将の大任を受け継ぎ、以前にも増して諸々の雑務に追われるようになり、北嶺号と接する機会も少なくなってしまいましたが、しかし、私が一年生の時に抱いた野望「少なくとも北嶺号に中障碍で花を咲かせてやりたい。」と心秘かに思ってはおりました。私自身の性格からしまして、他人と同じ事をして同じ結果に終ると云う事が嫌いでして、他人にはやれなかった事をやってやろうと柄にもない、遠大な野望の持主でもありました。ですから北嶺号の六段飛越に於けるズバ抜けた能力には敬意を表しましたが、もし私に機会を与えてくれるならば、是非共、中障碍で北嶺号を勝たせてやりたかった訳です。この年の秋、(昭和三十四年)東京で開かれました全日本馬術大会、国体馬術競技の北海道代表、並びに全日本学生自馬大会には、北海道大学を代表して出場させて頂きましたが、当時、私が主将をやっておりました関係上、選手団のマネージャ的仕事を受け持たされ、自馬九頭の遠征飼料、輸送費、寄附金集め、大会地に於ける総勢二十名にも及ぶ大選手団の三度の食費から、寝具代に至る迄、すべての経費を一任されていた為、何かと忙しく、待望の北嶺号と共に初めて出場する中央での大会でしたが、私の技術にいまだしの感が強く、国体では二拒止失権。全日本では一拒止二落下で何んとかゴール出来たものの第十二位に終り、全日本学生自馬大会では一拒止にてゴールする事が出来ました。この時の大会の成績を見てもお分りのように、後の大会になればなる程、私自身、競技場の雰囲気にも慣れ、尻上りに成績が良くなったものです。この時の遠征を通じ、私は来年に期するものが少くなかったのであります。「もしも来年、もう一度君に乗れる機会が私に与えられるなら、吃度、今度こそ勝たせてあげるヨ。」と競技を終えた後馬房で北嶺号に人参をやり乍ら誓ったものです。

札幌に帰ってから間もなく、北標号の事故により、早急に新馬購入の処置を余儀なくされ、本年昭和三十五年は、新たに入った北涼号の調教、それに私が二年生の時に入った北春号(旧名林城号)の調教も急がれ、主将として、又最上級生としてのその責任を痛く感じ、私の浅い経験で分らない点は先輩の鎌田さんに色々とお伺いし、北春号に何んとか障碍飛越を由りなりにも教え込んだりしておりましたので、殆んど北嶺号に乗る機会もない有様でした。七月末に例年の北大主催、全日本女子学生馬術大会に於ける北嶺号を見た時は、残念乍ら一時は今秋の国体、全日本を断念せずには居れませんでした。と申しますのも、あの北嶺号が、第一障碍すら飛べずに二拒止失権してしまったのですから。久しく新馬の方に気をとられていた間に、北嶺号は目茶目茶になっていたのです。こんな点、主将としての私に重大な責任があった訳です。自馬の管理と云うものが、この時程、難しいと思った事がありませんでした。一方が良くなって来たと思うと、片方が駄目。矢張り問題はあっても、責任自馬制の必要を痛切に感じました。そして夏季休暇となって、合宿も終え、夫々、部員が帰省している間に久し振りに北嶺号に乗ってみたのですが、思った程悪くなっているようでもなく、何んとか上手くやれば、モノに出来るのではないかと考えました。以下、本年特に北嶺号につきまして考えたり、注意した点等につきまして述べさせて頂きます。これはあくまで経験の浅い素人の私が考え、やった

事でもありますので、調教目的、過程に誤りがあるかもしれません。そんな点皆様に御指摘頂けますならば幸甚に存じます。

北嶺号は垂直高度障碍に於いては現在もなお、一米七〇の飛越能力はあります。もし、乗手が私等より技術的に秀れた方がお乗りになれば一米八〇だって飛べるような気が致します。私自身は、今秋の国体遠征前の練習中に記録しました一米七〇が最高の記録でした。このように北嶺号の飛越能力は、垂直高度障碍には卓越した能力を現在も持ってはおります。しかし乍ら、彼女の欠点は幅のある障碍は苦手のようです。幅が一米程度迄は大丈夫ですが、幅が一米二〇あるいは三〇位になりますと障碍の直前で前進起勢が鈍って、拒避の様子を示して来ます。これが一米五〇位になりますと、余程乗手の方で推進をかけてやらなくては、自分から頭を上げて銜を外し、拒避の様子を示します。又、どんな馬でもそうでしょうが幅が一米以上の障碍では、思う存分馬体を伸長させなくては完全飛越をさせる事が出来ないので、障碍の真上で馬の口を邪魔する様な銜受けは絶対禁物です。そして、北嶺号が中障碍飛越向きでない最大の欠点は、口が堅い事です。特に右の銜にガッチリかかった時の右回転は、殆どの場合、私は失敗しました。彼女がガッチリ銜を咬んでヒッカカッタ時は、いくら回転させ様として、轡を引いた所で彼女の首の力には、私達の人間の力では、先ず勝てません。ですから、ヒッカカル前に彼女を騎座、座骨で押え込み、一早く自分の手の内に入れてしまうより外に私には方法がありませんでした。右が堅いと云う事は、右内側姿勢が下手であると云う事でもありました。又駈歩は、どうも左手前の方が、お得意である点から見ても右回転が苦手であった事もうなづけます。そして北嶺号が障碍を逃避

するのは必ずと云って良い位左であり、右に逃避するのは余程乗手に欠点がある時でした。さて、このような北嶺号をいかにして、中障碍向きに仕上げたら良いのか。先ず最大の難関は口が堅いと云う事でした。私が二年生の時は、先輩に云われるまゝ水勒のDバミにマルタン・ガールをつけて乗りましたが、このDバミでは、彼女の首を振ってヒッカケル事を防止する事は出来ませんでした。勿論、この銜でも上手く、柔く持って行けば成功する場合もありましたが、大会の本番になって乗手が緊張してしまうと、殆んどの場合失敗でした。それで翌年、私の三年生の時の競技には、棒バミのDバミを使用してみました。これは昨年の東京国体の時です。棒バミを咬ませてみると、確かにヒッカケラレルような事はなくなりましたが、この為に身体が収縮してしまい、まるで馬場馬術の時のような短縮駈歩になってしまいました。障碍飛越に際しても、例のモノスゴイ反動で、ポッコポッコ、ボィーンと飛ぶ有様で彼女について行く私の方が非常に苦労しました。そして、馬の身体が収縮してしまう為に以前よりも、幅のある障碍が飛越出来なくなってしまいました。彼女にヒッカケラレル事は予防出来、回転が可能になっても、これでは障碍馬として失格でした。これらの苦い経験より、私は今年、北嶺号に大勒をかけてみました。勿論、障碍飛越に本来から云えば、水勒の方が理想的であるのを承知の上で。国体、全日本の北海道予選大会を控え、東北大との定期戦、東日本戦に遠征して、札幌に帰ったのは、道大会を五日後に迫った日でした。それから大会当日迄、何んとかして大勒に慣れさせようと練習に励んだ積りですが、いかにせん、複合で四位。中障碍では最終障碍を一つ残してタのイム失権には、「もうアカン」とまさに青菜に塩のしおれよう。とうとう今年は両

体も行けぬか。まあ、これから少しは学校の勉強も落ち着いて、出来るなア、と思っていた所、競技終予後の選手選考委員会で私もその代表の一員に、まさに、つけ加えられた模様。当時の状況から察して、当然、鎌田先輩とセント・ベル号が候補に上げられるだろうと、誰しも考えておられたでしょうし、北海道で最強のチームを編成するにはその方が妥当と考えて居りましたので、私自身、嬉しいような、半面、鎌田先輩には申し訳ないように思っておりました。

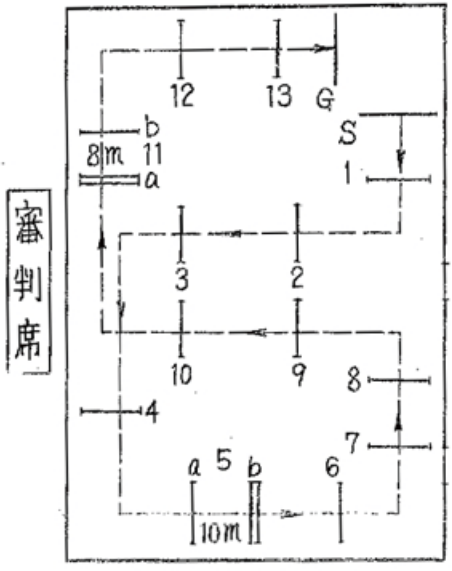
このようにして、北嶺号は、現主将の千葉君が六段で優勝したので、選ばれてはおりましたが、私と北嶺号は今秋の北海道チームには、まさしく、附録的存在でありました。その結果、国体では矢張り日頃、乗り慣れている方が良いだろうし、北海道大会の時の人馬で、出場した方が良いだろうという事になり、北嶺号の綜合馬術と中障碍には私。六段飛越には千葉君の騎乗となり、遠征出発迄の三週間、愈々、本腰を入れて私は北嶺号に向かいました。馬場をやる時には。鎖のグルメット。障碍の時には、革製のグルメットを、指が三本位入る様にゆるく締めました。そして先ず、徹底的に右内側姿勢をとらせる為に巻乗りに続く巻乗、何度も何度も、三種の歩様で巻乗りを連続し、忘れた頃に八字乗りによる左巻乗りをして、左右の柔軟性を高める事に意を注ぎました。そして、座骨の転位による姿勢の変換の感覚を人馬共に養うよう努めました。又、蹄跡行進中に、〃肩を内へ〃、〃腰を内へ〃の運動を織り混ぜ、右内側姿勢の訓練をし、時には二蹄跡運動を試みたりしました。それから次には、駈歩の手前の問題でした。前述した通り、北嶺号の駈歩は左手前がお得意で以前では直線上で右手前に発進するのが困難な場合がありました。しかし、完全に右内側姿勢を直ぐとれると容易でした。又、障碍の直前で左に逃避されるのにも、左手前の駈歩がある程度影響しているのではないかとも考えた訳です。次に試みた事は駈歩の踏歩変換でした。北嶺号は拍車に極めて過敏な方でして、荒い拍車の使用には反抗するので、拍車の使用にも随分気を使いながら、駈歩の発進をしたよう憶えております。踏歩変換も、最初は八字乗りをしていて、その切点で変える事を練習し、次には蹄跡上の変換を行ない、五歩目毎の踏歩変換位は出来る様になりましたが、この期間に私はこれ以上は出来ませんでした。勿論、この間、この様な馬体を収縮させるような窮屈な姿勢をとらせてばかり居たのでは、肝腎の障碍飛越で失敗する公算が強いので、その日の練習の終り頃には普通の鐙の長さより、五～六穴つめて、所謂、モンキー乗りで馬場を四回程、北嶺の思うがままに走らせ、馬体を充分伸長させる事も忘れませんでした。この様にして最初の二週間は、殆んど障碍らしき障碍の飛越も止めて、もっぱら基礎馬術の感覚を修得する為に、人馬共に励んだのでした。道大会後十五日目位に、どうやら、私自身にも、ほぼ満足の行くような状態になって来たので、障碍飛越を始めました。障碍も出来るだけ、北嶺号の苦手とする幅のある障碍を選び、高さは精々一米一〇位にしました。そして、私達のいつも使用する〃箱障碍（レンガ、石垣等）〃を二つ並べて、いつもの二倍の幅の障碍を飛越させるようにしました。この箱障碍を二つ並べると一米六〇位の幅が作れました。そして出来るだけ障碍に向う時は、右手前の駈歩とし、左の拳を馬の背峯にピッタリつけ、拳で馬の首をグイグイ右の方に押しつけるようにして、左に逃避されぬよう気を配りました。又、左へ逃げられるというのは乗手が推進をかける場合、どうしても、利き足の方が力が強く加わり、左右均等

の力で拍車を使用出来ない為もあるのではないかと考えまして、推進をかける時には、努めて左の拍車の使用に意を注ぎました。鞭の使用も出来るだけ控え、許す限り持たない事にし、楽な気持で飛越させるようにも心懸けました。それから肝腎の衝受けの問題です。障碍の真上で出来るだけ馬体を伸張させ、全身のバネを充分に利かせ、飛越にのみ全エネルギーを発揮させる為にも馬の口を邪魔する事のないよう、韁をやや長目に保持しましたが、余りゆるく持ち過ぎる事も禁物でした。北嶺号ばかりでなく、いかなる馬に於いても同様でしょうが、後駆より推進力を受ける支点が重要です。障碍の直前で衝が外れてしまっては、馬には飛越の気勢がそがれてしまいます。かと云って大勒をガッチリ咬ませると北嶺号は、身体が伸張してくれません。そこで私は、北嶺号が障碍の前で踏み切り、前駆が地上を離れる迄は小勒衝にて受け止め、前駆が着地すると同時に、今度は大勒衝で受け止め、ある程度馬体を収縮させ次の障碍の目標を速やかに決定し、馬を混乱させるような事の起らない内に、再び馬体を伸張させてやる。といった具合に、拳の柔軟性を特に練習した積りです。しかし私の拳は定評ある(?)堅さですから、仲々自分の頭の中で考える程簡単には参りませんでした。又、誘導中、いつ、いかなる時でも、駈歩の手前を変え得るよう練習し、どんな場合でも、着地と同時に、左右いづれにも回転出来るよう努めました。このようにして先ず以前のようにヒッカケられたり、馬に持って行かれる事もなく、何んとか素直に障碍に向けるよう努力した積りです。勿論、この間の練習中には、北嶺号の十八番、六段飛越も三度程、試みてこの時に初めて私は一米七〇の飛越感を味合わせてもらいました。

以上のような練習を貨車積みの前々日迄続け、熊本に向って出発したのです。私は途中、福島での関東北女子学生馬術大会を観戦し熊本に着いたのが、十月十九日でした。貨車の方も予定よりは随分早く、十六日に無事ついて、私の到着した頃には、一週間近くの旅疲れも大分愈えて居たと見え全馬極めて元気なのには安心しました。ただ当の北嶺号が車中、隣に積み合せた北櫛号に右後肢を蹴られたとかで十センチ程の裂傷を見た時は、いささかあわてましたが傷は浅く、殆んど治りかけておりましたので、先ずは一安心でした。しかし、いつもの事ですが立ちばれがひどく、四肢共、丸太棒のような足を見て、果たしてこれで障碍が飛べるのか心配でしたので毎日朝、昼、晩の飼付時間に、片足百回づつ擦でマッサージする事を丹念に繰り返しました。其の他については元気もあり、食慾旺盛にして、一日六升の燕麦に三升の麩、人参十本、札幌から持って行った北大の乾草をドッサリもらって、札幌に居た頃の飼料に較べるとまさに、グランドホテルの洋食と、どこかの学校の寮の飯位の差があり、札幌では今頃、ほんのお印し程度の燕麦とデントコーンに、ガツガツしている北春、朝清号に、この半分でも食わせてやれたらなあと思っておりました。お蔭で北嶺号も丸々と太り、毛の艶も一段と光沢を増し、まさに北海道大学の誇る名馬にふさわしい風貌を備えて来ました。私が熊本に到着した十九日から直ちに練習に入りました。いかに十月の中ばを過ぎたとは云え、昼間は札幌の真夏の暑さ。日中の練習は人馬共にショウモウでしたので翌日からは毎朝一時間、他府県の選手達が未だ寝ている間にゴソゴソ起きて、コンディションの調整に励みました。早朝と云っても、札幌等に較べ夜明けが遅く、六時頃でもまだ薄暗かったように思います。熊本



（北横弓と大場君）



（熊本国体中障害経路図）

1	竹柵横木	H0.9	W0.9
2	自然横木	H1.0	W1.0
3	門扉横木	H1.0	
4	石垣横木	H1.0	
5a	横木	H0.9	
5b	踏切横木	H1.0	W1.1
6	土堀	H1.2	W1.0
7	レンガ梯子	H1.1	W0.9
8	オリンピア	H1.1	
9	カマボコ横木	H1.2	W1.3
10	レンガ門扉	H1.1	
11a	横木	H1.0	W1.2
11b	横木	H1.1	
12	レンガ	H1.2	
13	三段横木	H1.2	W1.2

（バラージュは4～10にて各0.1mプラス）

での練習も別にあせる必要もなく、じっくり構えて、初めの二日間程は余り障碍飛越もやらず、出発前に覚えたあの札幌での〝感〟を呼び戻す事に重点をおいておりました。練習を続けている内に、足のはれも殆んどひき、どうやら身体の方も本調子になって来たので三日目頃から少し障碍飛越をやらせてみた所、思いの外調子が良く、これは今年も〝六段〟はイタダケそうだ。と思っても、決して〝中障〟には自信は持てませんでした。兎に角、北嶺号のコンディションの調整には細心の注意を払っておりましたが、障碍飛越を本格的に始めた翌日には、すっかり出来上ってしまい、良く北嶺号の大会前日あたりに見せる微候ですが、飼が上ってしまい少し調子をあげるのが早過ぎたのではないかとさえ思われ、少なからず不安にも思いました。それでも毎日の練習時間は長過ぎないよう、一時間以内に止め、スタミナを消耗させぬよう出来るだけ一日の涼しい時間を見計って競技当日を待ちました。又、練習後と朝夕に足のマッサージを忘れずに、一日出来るだけ多くの時間馬の側に居て、馬の様子を観察しました。

快晴の十月二十四日、地元菊池中学の吹奏楽団の奏でるファンファレに依って国体馬術競技の幕が開かれたのです。人馬共に待ちに待ったその日、私は北嶺号と共に綜合馬術に出場したのです。午前中の調教審査を何んとか終了し午后の広地騎乗に臨んだ訳です。

「さあ、イッチョウ、ヤッタロカ！」と北嶺号の首を軽く叩いて会場の声援、歓声に送くられてスタートした迄は良かったが、急な山を登りつめ、第四障碍の一米五〇センチ程のバンケット飛び降りに失敗。もろくも人馬転倒の憂き目を見、折角札幌競馬場の高橋さんにお借りした猟騎帽もそのはずみで脱げて、十米位先にコロコロ。帽子を拾っている暇もなく、すぐ様飛び乗って次の障碍へ。以後難なく全経路を走破して来たものの、急斜面の下降よりの第九障碍の排水溝の飛越で、着地の際、コンクリート道路の上に敷いてあった莚に北嶺号の前肢がからまって再び転倒。排水溝の幅は精々一米位だったと思いますが、急斜面下降中の飛越で案外スピードがあり、北嶺号は、したたか口を打ちつけて上唇に裂傷、左半身に転々と数ケ所の擦過傷。それでも北嶺号は運良く莚の上に倒れたのでそれ程大きな怪我でもありませんでしたが、私の方は、選りも選って、その莚より外れたコンクリート道路の真上にたたきつけられ、今思えば帽子もかぶらず良くコンクリートに頭を打たなかったものと不思議な位。いくら私の頭が〝石頭〟であってもコンクリート道路にはかないません。これも日頃の落馬の経験がモノを云って(?)無事だったのではないかと思います。今後後輩の諸君も、落馬する時はいかにして落ちたら良いのか、日頃の練習にも気をつけられた方が良いと思います。老婆心ながら——。突差の事でその時はそんな事も考えている暇もなく飛び乗り何んとか辛うじてゴールした訳です。

ゴールすると北海道選手の方がジュース等を持って、待ち構えて居てくれましたが「それよりも、早く北嶺の傷を見てくれ！」と叫んだ積りですが、喉がカラカラに乾いて言葉にならず、口から血を吹き出している北嶺号より降りて調べてみると、裂傷だけであったので大丈夫だろうと思って、直ぐに余力審査の競技場に入った訳です。

もう、ここまで来てしまっては、成績順位はどうであれ、ただもうこれ以上怪我をせずゴールする事のみ考え、北嶺号の口からほとばしり出る血しぶきに、手袋を染め乍ら頑張った甲斐あって二落下のみにてゴールし、万来の拍手も耳に入らず、そそくさと厩舎に引き

上げたものです。直ぐに北嶺号の傷の手当を獣医にしてもらって、私も宿舎に引上げたのですが、馬から降りてみると私の身体も、あちこち痛み出し、風呂から上って星空を仰ぎ乍ら、「こんな身体じゃ、明日の競技は無理だナ。北嶺だってあんなに怪我しちゃったんだから……四年間の野望も結局駄目か。」と痛む左足を引きづり乍ら、しんみり宿舎に帰り、食堂で監督の山本さんにも、「北嶺は是非共、六段に勝ってもらいたいから、大事をとって明日の私の〝中障〟は棄権したい。」と告げその夜は皆より早く寝床につきました。その夜は何もかも忘れてぐっすり寝みましたが、時折、痛む身体に歯をくいしばって寝返りしたのを憶えています。翌朝、競技第二日目を迎え昨日以上の快晴に恵まれ、大会の雰囲気も最高潮に達し、この日行なわれる予定の中障碍、六段飛越に出場の選手は早朝から練習に余念がなく、私を除いた北海道の選手も、朝食もそそくさに朝の軽い準備に出かけましたが、私と北嶺号は皆と離れて、引き馬で昨日走り回った広地騎乗の山へ、北嶺号に青草でも食べさせてやろうと思って朝の散歩に出かけました。この朝、私の身体の痛みもそれ程でもなく、北嶺号も極めて元気な様子で、昨日あれ程の怪我をした馬に見えない位で一時間半程青草を食べさせてからの帰途、軽く速歩をやってみると別に跛行の様子もなく、これならイッチョウやれるかな?とも思い、監督の山本さんにも、棄権するか、出場するかはもう少し様子を見てから決めたい旨伝えておきました。そして中障碍飛越競技の第一番目の人が競技を終えてくる頃、やっと決心して北嶺号に鞍を置き軽い速歩運動を二十分位して、私の出場順番を待った訳です。競技場からやや離れた待期所で「三十九番」の腕章を受け取り、会場より流れて来るスピーカーの声と、上手く障碍を飛び越えた時に起る観衆の拍手。失敗した時の「ワァー」と云う歓声。そんなものを耳にし乍ら日影で北嶺号を休め、私も馬から降りて地べたにあぐらをかき、タバコをプカプカ。本当に今思っても不思議な位、競技を目前にして、ゆうゆうたるものでした。係員に呼び出しを受け、「それじゃ、行って来ようや。」と北嶺に話しかけ乍ら鞍にまたがった私でした。競技場の入口附近で山本さんに「大場君、大丈夫か?」と聞かれ、「ウン」と一言笑って首を振った。私の内心では「今日は昨日みたいに、あわてて怪我をしても何もならないから、一つ一つあわてずに飛んで行こうや。」と北嶺号に話しかけておりました。愈々、私の名前と北嶺号の名が場内のスピーカーに呼び出され、入口のかんぬきが外されて、あの広い競技場の中に私と北嶺号が押し込まれ、数万にも及ぶ観衆を眼前にしては、まさに〝マナ板上の鯉〟同様。「エエイ、どうせ料理されるんなら、見苦しくなく行こう。」とばかりいさぎ良くスタートを切った。

第一障碍、第二障碍……と続く観衆の拍手、「フーン、無過失で来てるんだナ。」と思い乍らも飛んでいるうちに早くも第九障碍。そこで湧き起る拍手に「これはイカス!」と思った。最後の第十三障碍を飛越して一段と湧き上る万来の拍手に「ヘエー、俺は満点でゴールしちゃったのかナ。こんな筈じゃなかったんだが…。」本当に狐につままれた如く、既舎に北嶺号を休め、すぐ競技場に戻って、応援してくれた北海道選手団の方々に聞いてみると矢張り私は満点でゴールしたらしい。満点は私で五人目。私の後から更に二人出て、結局八十名中七名の満点者の中の一名に私が入っちまった。「満点者七名に依るバラージュを行ないます。」との場内放送に、

思わず「カイチョウ！」と叫んで厩舎の北嶺に飛んで帰った私でした。決勝に残った馬の中には京都大学のサターン号。学習院大学の藤桜号等が先ず私の最大の敵だった。京大のサターン号は今夏、酷暑の八月、帝大戦で京都に遠征した折にも見てその能力は知っている。又学習院の藤桜号は、東京大会等で不敗を誇る東京の代表馬。共に関西、関東の雄ではあるが、相手にとって不足なし、私は此の二頭にだけは負けたくなかった。先程迄の「出るだけ出てみようか……」と云った甘い考えから、今度は「一発、大物を狙ってやるぞ！」とファイト満々。障碍個数は全部で八個。先程よりも程度が全部十センチづつ上げられた。出場順は先程と同じで私は五番目。私の前には私の敵意を燃やすサターン号、藤桜号が出る。彼等の飛越はいずれも第二障碍の〝兎飛び障碍〟と第七障碍の〝カマボコ横木〟を落下して二落下。「ヨーシ、これは何んとかなるぞ。」と日頃余り用いない鞭を逆手に「止ったらショウチシネエゾ！」と北嶺号にいい聞かせ乍ら、個々の障碍の分析を始めた。難関と思われるのは、第七障碍のカマボコ横木。高さ、幅共に一米三〇センチと云うから北嶺号にも苦手の障碍。スタートOKのベルの音に、一瞬場内は静まり返る。まるで恐しい位の静寂さだ。第一障碍を飛ぶ。せきを切っておるような拍手。再び静けさが舞い戻る。北嶺号のひづめの音のみが、競技場内にこだまする。第二障碍の兎飛びにも再び起る拍手。観衆の拍手と歓声のみが、完飛したのか、否かを私に知らせてくれる。第三、第四障碍近くで観戦してくれている北海道選手団から声援が飛ぶ「ガンバレ!!」この時は不思議と周囲の物音が耳に入って来る。さあ、愈々最大の難関第七障碍。これさえ飛べれば後残るは一つだ。そんな事を考え乍ら障碍に向うと、心持ち北嶺号の歩度が落ちる。「ナニクソ、こんな所で止ってたまるか！」とばかり、無意識の内に右手の逆鞭が北嶺の後駆に食い込む。一度、北嶺が止まりそうな恰好をしたので一瞬観衆に「ウーッ」と云う異様な呻き声。続いて北嶺号お得意の「三段モーション」から来る飛越。危く私は鞍から投げ出される所だった。そして、鳴り止まぬ拍手の嵐。その後の最終障碍は自分でどうやって飛んだのかは分らない。自分自身、今、此の地上にある事すらも疑いたくなるような気持。私が乗っている北嶺号が天馬（ペガサス）と変り、果てしない大空の雲間を縫って宙に飛び立つような想いでした。大勢の方から祝福されたその夜の私ですが、「まさか北嶺号が優勝……。」とは予想も出来なかったのですから、先輩、現部員等の方達が、このニュースを聞かれても信用されなかったのではないでしょうか。この夜、私はまるで地球より遠く離れた世界に連れて来られたような想いに「夢ではないのか？」と星空を見上げ、北嶺号の厩舎に人参を抱いて向い乍ら何度も、何度も自分に問いかけてみました。すでにふっくらとした寝床の中で北嶺号は休んでおりましたが、私の足音に、鼻を鳴らすいじらしさに思わず両の手で、あの大きな首を抱きすくめ、頬ずりしたものです。人参も食べ終えてからは、私の膝に首を長く伸ばし、まるで愛し児の如くすり寄せ、スヤスヤ休む北嶺号が、〝馬〟であると私に感らせるのにかなりの時間を要したように思います。私にのみ、この感激を味合せてくれた神に心から感謝の祈りを捧げました。

最後に私なりの結論を申し上げましょう。何故私は熊本で優勝出来たのか？この四年間、断ゆまず燃やし続けた執念にも等しい情熱（ファイト）。それもあるだろう。しかし、も ともっと、究極をさぐれば

「運が良かった」と云う事。その〝運〟を完全に自分のものとする事が出来たからです。北嶺号の能力は優秀です。だがしかし、私の技術、経験を彼女のそれに較ぶれば、月とスッポン位の違いです。「機会（チャンス）をつかめ！」これが私の馬術部戦歴の中で得た最大の警策です。後輩諸君よ、私が君達にいいたい事は、「機会（チャンス）を逸せず、機会に生きよ！」である。剛健にして不屈なる開拓精神をもって飛躍せよ。勝利は諸君の掌中にあるのだ。やって出来ない事はない。しかしその準備が大変である。緻密なる計画のもとに、思った事はどんどんやってごらんなさい。

北嶺号ともこれでお別れです。達者でネ。

お嬢さん奮闘記

――女子部員、その後――

佐藤典子（医3）

馬術部に女子部員が入ったのは、昭和二十九年、札幌で国体が開かれたとき、その選手養成のため女子部員を募集したのが始めだと聞いた記憶があります。そのとき何人かの方が入られて練習に励まれたそうですが、卒業まで在部し女子部員として初の卒業メタルを手にされた方は松田瓔さんお一人でした。その後も毎年何人かの方が入部しましたが。都合で退部する方が多く、中村美幸さん（33年度卒）片山静子さん（34年度卒）と云った具合に一学年一名の状態が続き、その後に高階嬉子、佐藤典子の二名が入部致しました。

現在は、四年目に、佐藤、高階。三年目はなく。二年目に田中せつ子。一年目に寺江則子、長谷川〇〇の五名が在部し、楽しい部生活を、そびえ立つポプラの並木のもと、手稲の頂きをはるかに眺めわたすこのなつかしい馬場、部室で夫々の思いのまゝに、味わっております。

試合参加などのこと

女子部員とし対外試合に初参加したのは、昭和三十二年夏、仙台に於ける東北・北海道馬術大会。女子貸与馬中障碍飛越競技の部に中村嬢が同好会の松尾嬢と共に出場なさったときです。試合は一チーム二名。二馬を用いて行われ、団体優勝及び各馬の最優秀選手賞を獲得するという輝かしい成績を収めました。これは、我が女子部の未来を暗示するもののように感じられました。

その年の秋、福島大学主催で開かれている関東北女子学生馬術大会に、中村、片山両嬢が初参加致しました。成績自体は満足すべきものでありませんでしたが、その後の女子部の活動、発展のために重要な意義をもつものであったといえましょう。この大会のレセプション会場で、北海道で女子の試合を開いて欲しいという声があり、北大側の気運も高まって、三十三年夏北大馬術部主催の女子馬術大会を開いて頂くことになりました。

これより先、三十三年七月、東北大学からの招待で、第一回北大対東北大女子オープン戦（仙台）が男子の定期戦と共に行われま

した。中村嬢が定期戦に紅一点として出場、オープン戦には片山嬢佐藤の二名が出場し、満点で優勝。さゝやかな勝利の喜びを味わいました。

八月三十、三十一日、待望の女子戦です。名称を、「第一回招待全日本女子学生馬術大会」とし、大会長を杉野目学長、副会長を太秦馬術部長にお願いしていただき、顧問、審判員の各先生方、O・B、学生委員など多くの方々のご援助とご協力のもとに、そのうぶ声をあげることになりました。団体戦は一チーム三名。一校二チームまで、個人戦は一校五名まで、と決めましたが、集まったのは、慶応大学二チーム、学習院大学二チームで、これに北大一チームを加え、計二十名で行われました。程度は、団体戦は障碍個数十個、最低六〇cm最高一〇〇cm。個人戦は障碍個数九個、最低六〇cm、最高一一〇cmです。両日とも天候に恵まれ、和気あいあいの内にプログラムは進行していきましたが、ホームグラウンドという強みもあってか、思いがけなくも団体優勝の喜びを手にすることができました。目にしみるような青空のもとに行われた閉会式。それに続くレプションの情景が、今でもはっきりと目に浮んで参ります。（出場者、中村、片山、佐藤、高階）

次いで十月二十六日、福島での第四回関東北女子学生馬術大会に四名参加し、青山、学習院などをおさえて、団体一位、二位を我が北大が独占しました。丁度雨が降って泥んこの馬場でしたので、「私たち、北海道特有のあの初冬のぬかるみの中で練習してきたから勝てたのね」と笑いあったものです。（出場者、中村、片山、佐藤、高階）

◇



（関東女子学生馬術大会に於ける
佐藤典子選手）

◇

翌三十四年、六月二十、二十一日に、第八回東北・北海道地区学生馬術大会、第四回対東北大学定期戦が北大で催され、これと同時に第二回対東北大女子オープン戦を行いました。一チーム三名で三馬の通し騎乗による障碍飛越競技を行い、少差でしたが優勝することができました。（出場者、片山、佐藤、高階）

八月八、九日、招待全日本女子学生馬術大会も第二回目を迎えることになりました。前回の大会では、女子部員はその運営に殆んどノー・タッチでしたが、今回は片山嬢を中心とする女子部員の協力。それに男子部員の全面的な援助があって、盛大に行われました。各校との連絡、当日のポスター作りなどには女子部員があたり、資金面、会場整備、馬匹、試合進行などの点では北大馬術部伝統（？）のナイトぶりを発揮して頂きました。

参加校も前回より増し七校二十五名、団体戦は六チームでトーナ

メントによって行い、個人戦は二十五名で六頭による通し騎乗を行って各馬の最優秀選手を選出、六名で決勝戦を行いました。程度は大体前回と同じでしたが残念ながら上位に喰い込めず、昨年のカップは慶応に持ち去られました。敗因は何といっても練習不足でしょうが、始めて大会運営に関係したことによる疲れも一因をなしていたのではないかと思われます。（出場者、片山、佐藤、田中）

参加校、学習院、成城、慶応、青学、東京、明治、北大

この年最後の試合、第五回関東北女子学生馬術大会（於福島、十月十八日）は、前年一、二位を獲得していますので、ぜひ団体の出場をと思いましたが部員の都合で不可能となり、結局カップ返還の必要から一名のみ個人戦に参加、三位となりました。（出場者、佐藤）

参加校、学習院、青学、東京、福島、東北、北大

◇　◇

三十五年、七月三十、三十一日、第三回招待全本女子学生馬術大会開催

今回も男子部員、女子部員の協力で、計画、実行されましたが、広告とりにも二、三まわってその困難さを少しばかり体験させていただきました。前回に続き多数の大学の参加を期待しましたが、大会期日が悪かったのか東京方面の大学の参加は一校もなく、東北大岩手大、北大計十名のみになってしまったのは残念なことです。しかも、個人戦では一、三位を占めることができましたが、団体で最下位というみじめな成績に終りました。昨年と同様、練習量の不足の他、チームワークがうまくとれていなかったことにもよるのではないかと反省しています。それとともに、私自身チーフとなって責任感とそれによる精神的重圧（？）とに大きく影響されていたように思えます。しかし、第二回、第三回と惨敗したことによって、不思議なファイトがわいてきました。（出場者、高階、佐藤、田中、吉村、寺江）

十月十五日、第三回対東北大女子オープン戦（於仙台）

秋晴れの朝仙台着、三名戦の予定でしたが二名しか遠征できなかったので、東北大に二チーム出て頂いてリーグ戦を行い、二勝〇敗で優勝できました。

私達が、「馬場と称する場所」に着いたとき、男子部員が障碍作りに金槌の音を響かせていたり、引き出された馬を見て女子部員が「あら、この馬で飛べるの」と尋ねていたりしたのはご愛嬌でした。試合というような固苦しい雰囲気は全くなく、アットホームな雰囲気の中で交歓できたのはさわやかな思い出です。

（出場者、佐藤、高階）

十月十六日、第六回関東北女子学生馬術大会（於福島）

本大会への北大参加も四回目。主催校や選手の方々にも顔なじみができ、声援して下さる方も、O・Bの樋口さん、前主将の大場さんのお二人だけでしたので気楽に試合にのぞむことができました。しかし、意気込みだけは相当もっていたつもりです。結果は、二度目の団体優勝となりカップと楯を頂いて、二年ぶりの団体優勝の味に胸のふくらむ思いでした。この勝利は、練習の際の男子部員のご指導や、前年に続いて監督、コーチして下さった大場さんの適切な忠告と同時に、選手二名の緊密なチームワークによることが大きかったと思います。（出場者、佐藤、高階）

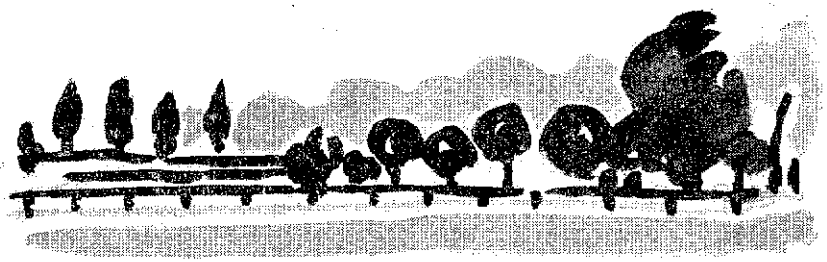
参加校、青学、群馬、福島、京北、北大

以上で女子部員の対外試合を通しての足跡を見て参りました。これからも見てわかりますように、まだ、女子学生云々と名づけられ、甘やかされたような存在の試合にしか出場しておりません。中央では馬場馬術、障碍飛越に女子の活躍があることですし、馬術は、男子の〝力〟に対して女子の〝柔軟さ〟ということがいわれます様に、後輩の方々に、全日本・国体を目標として一層の努力をお願いしたいと思います。

これに関連して直面している問題は、女子部員数が少ないということです。時間的制約、費用などの点もありましょうが、一度部に入っても退部される方があるのは、馬術部の魅力。馬に乗ること以外の何か。即ち、教室では見られない団結の強さ、ウマという動物に対する信頼と愛情。又、それが通じたときの喜びを充分感じとって戴くことができなかったのではないかと、私達の非力を残念に思います。

しかし、北大四年目になって初めて馬術講習会に参加し、「一年のときから入っていれば良かったわ」と嘆息する方もありましたから、今後もある程度意識的に女子部員募集の啓蒙運動を続けて、おいおいに馬術部の魅力を説き、一学年最低二名の女子部員を保持していきたいものです。

皆様のご意見、ご忠告などございましたら、幸に存じます。



散重念

半沢道郎

新しい車に乗って、今ではすっかり近代化された室蘭街道を通る度に、ガタ馬車や幌馬橇に揺られ、後になっておんぼろのT型フォードが唯一の交通機関であった、あの懐かしい月寒街道を探している自分を見て、部の発展と共に過ぎたこの三十年の歳月の間の大きな変転をこの道筋にしみじみ感じる。月寒の名もツキサムと呼ぶ人が多くなり、聯隊の跡にも当時の建物は少なく、北大乗馬会や初期の馬術部時代を思い出す実在する物は殆んど無くなって、今では当時の思い出は先輩や古い仲間の心の中に温められているに過ぎない。部の揺籃時代の姿は馬術部十年史に遺されているが、あれから後の二十年こそ本当に大変な時代で、十年史を作った苦心と較べて年月も長く変遷も大きく編集に当る諸君の苦心も容易でなかったと思う。

多くの人々の努力と厚意とのお蔭で、北大の馬術部が日本の学生馬術界に輝かしい歴史と存在を誇り得る事は、部を創り、部を育て、部を身近かに半生を送って来た私にとって何事にも代えられない悦びであり感激である。昭和三年の一月に当時の北大馬術部に入ってから今日まで三十四年、おそらく私が一番長く部の傍で生きて来た人間であろう。その間の限り無い思い出は、幾多の体験と共に自分の性格を構成する重要な要素であることをつくづく感じる。然し、振りかえって部の為に為す処少なく、却って楽しみを与えて貰う許りで誠に慚愧に堪えない。馬術部後援会の仕事も中途半端で部員にも、先輩諸兄にも多大の迷惑をかけている始末で誠に申し訳けが無い。

北大も杉野目学長のお蔭で年毎に急速に拡充され、新しい建物が出来て、さすがに広い校庭も狭くなり、農学部の敷地も次第に浸蝕されるに至り、現在の第一農場の厩舎や馬場も何時まで現在の位置に置かれるか解らない。溌溂な青年期にある馬術部の為に、立派な厩舎を新設して世界的な大学の馬術部にして、北大否日本の名物とし度いと念願する。幸に学長は乗馬を好まれ、学生部長は馬術部こそは学内の学生クラブ活動の模範として一層の拡充を望まれ、学長も農場長も学内敷地の使用に就て遠大な構想を持って居られる。更に牧場長は部の大先輩であって、事馬に関しては万事その手中にある。全く好機である。唯問題は費用であるが、これとても国家として畜産振興が新しい角度から進められ、馬事関係の事も軍馬や役馬の時代から競馬を通して社会産業に貢献し、乗馬馬術を盛にして健全なスポーツを普及し国民、特に青少年の身心の陶冶に資せんとすることが有識の関係者の間に考えられていると聴く。幸に日本競馬会、道の畜産関係、道会、市会に学生馬術に理解の深い馬術同好の士が多く、先輩も居る。近い将来にこの理想が実現されて、今後十年、二十年の間にわが馬術部が益々発展し、馬術部五十年史を出す頃には、世界に誇る北大馬術部の姿がこの北大の一角に輝いていることであろう。出来得ればこの眼で見度いものである。

今日　此の頃



街乗の記

原　重一（農三）

魅力に包まれたあの雄大なポプラ並木もなにか物寂しく、訪れる訪問客もとだえ、そこには早くも北国の冬の訪れを感じさせる頃、国民体育大会で、はるばる九州まで出向き、大活躍の御馬達も我家に落着き、ほとんどの公式戦も終りを告げるのである。残り少なくなった我馬術部の行事の一つ、部員達が楽しみに待っていた街乗はこんな時期に行なわれるのである。この街乗には、春以来一年間試合は勿論、日々の練習に、春夏の合宿にそして馬術部独特の作業、当番等、四年目を始め一年目の部員にいたるまでそれぞれの馬術部生活も、冬に入ると雪のため思うような馬場での練習も出来ず、まづは一年の乗納めという意味もあるようである。これより先、来春、部生活を去る四年目の方々は修学旅行と称して御馬の背にゆられながら、一泊旅行に出かけるのである。この一、二年は定山渓へ出かけるのがお定まりのコースであるが、御馬達の食糧を、あらかじめオートバイかなにかで運び、あとから勇躍出かけるわけである。今年はあいにくの雪、雪、そして雪の札幌地方、それでもアノラック姿に身を固め、馬の背の先輩諸兄はうれしそうである。

さて街乗は四十数名の部員の希望を満たすため一週間にわたって行なわれる。現在月曜日が馬体休養日、土曜、日曜が北大乗馬同好会との合同練習のため実際の馬術部独自の練習は四日間である。街乗には三年目をチーフとして、各人が都合のよい日を選ぶわけである。この日ばかりはいつも馬場で部班運動に、各個乗りに、汗水たらしている部員も、普段、部屋にとんと御無沙汰している部員にも実に楽しい一日となるのである。

東京以北随一をほこり、ビルラッシュも盛んな札幌市、最近は人口五十万突破を祝った北の都も西の方は以外に静かである。何十年もの煤煙にうすよごれた民家が立ちならんでいる。馬上から更ためてみると屋根の急勾配の型の悪い家である。逆に円山方面は四方に伸びつつある住宅街の一つ、色取りどりの家が公園とマッチして並んでいる。我々の馬はこんなところをも進むのである。

朝九時過ぎから手取れを開始、十時頃に出発、大体二時間～二時間半くらいの予定で円山方面に出かける。札幌市も年々の発展はすばらしく、したがって交通量も相当に激しく、慣れない馬を乗りこなすのも街乗ならではの馬術（？）である。街往く馬も少なくなった現在、馬上の我々の存在はやはり物めづらしいのであろうか、道往く人々が振り返る。大体のコースは農学部の裏から演習林苗畑を抜け、植物園を背中に西へ向い、円山公園に入る。あとはチーフの判断で適当に我々を楽しませてくれる。馬での登り、草競馬等々。

元旦の札幌神社への初詣（…冬休み中のため在札部員のみ…）以外、時々蹄鉄屋に行くぐらいしか街乗の気分を味わえない我々ではあるが、相手が生きもの、しかも老令馬ぞろいで無理はさせられないと解っていても、街乗の醍醐味を満喫する機会にもっと接したいと思うこと切である。

拙ない街乗の記の最後に、ある部員の楽しかった街乗の日の日記

をちよっとのぞいてみようと思います。

十二月×日。各人、馬の手入れもすみ、〝引綱〟も用意する。玉沢さんの「さあ、行こうか」で、北楡号を先頭にしんがりに朝清号をしたがえて厩舎を出発。今日のコースは知る人ぞ知る。はたしてチーフは我々をどこえ連れていってくれることだろう。演習林…こんな所に演習林があるのを今まで知らない奴がいる。その演習林を出て踏切にさしかかると馬の奴、若干驚いている。先日来の雪も、今日の暖かさで道が悪く氷上鉄もこれじや、役に立つまい。石狩の原始林のおもかげを今に残す植物園。サボってはダベリに、ゴロリとしに、足繁く通った植物園も今は静か。冬の眠りに入るところだろうか。我々の馬は軽快な足どりで西へ向っている。普段と違って一段と高い空間を行く街の雰囲気は又受ける感じが大分違うものだ。やがて円山公園にさしかかる。馬の奴は頭がいい、もう道順を知っている。街乗も三日目、いつもこの道を通ったのだろうか。札幌神社の鳥居をくぐり、道路と別れ、道なき道を進む。林城号などはそろそろ生れ故郷の味を想いだしてきたのだろうか。さらに神社の裏側に出る。この辺は札幌市民のいこいの場所、動物園あり、野球場あり、世界スピードスケートの選手権をやった陸上競技場等々それぞれ完備している。さらに奥には荒井山のスキー場へと続く。しかし今日あたりは十二月も初旬、スキーには早く、といって秋の散策には時期はづれ、全く静か、我々六名、六頭の馬のみ。静けきを味わった後、円山を目ざす。札幌にきて以来、その名は聞くが未だ登ったことがない。その円山をいっきに馬でやっつけようというわけ。それにしても馬力はすばらしい。なんだ坂、こんな坂と乗っている我々は木々の枝に上体をあっちに、こっちにと曲げ、首つりを懸命にさけているのを知ってか知らずか、はく息もはげしくどんどん登り進む。頂上からみわたす札幌市は、例の煤煙も未だ少なく、すみきった空に実にきれいに画きだされている。馬に好物のニンジンを与える。普段馬場で重い人間を背に、横足だ、斜横足だとさては一米以上もの障害を飛ばされ、あげくのはてに拍車だ！　鞭だ！　でいじめられる御馬共自身にとっても、自然に接し、本能に近いことが出来る街乗は楽しいのではないかと勝手な想像をする。下りは足元が滑るので、馬をおり、ゆっくりと動物園の入口まで徒歩で来る。今度は幌見峠へ。さあ駈足!!待ってました、とばかり林チャン、ベス君のはりきること。時間の関係で途中で引返さなくてはならず残念。ここでもどの馬が速いかで一服しながら語り合う。短距離なら「ベス」だ。北嶺も以外に馬力があるぜ。北斗は年だなあ。帰途は各人馬を乗り変え、並足と軽速歩で厩舎に向う。二時間余りの街乗は愉快だった。大分新しい経験も積んだ。又明日出かけなければならない御馬達を念入りに手入し、無事今日の街乗は終りをつげた。

☆　☆　☆

☆　☆

自馬繋養管理の現況

廣岡暢夫（農四）

現在馬術部では八頭の馬を繋養しているが、その馬も、正しくは北海道大学の馬、つまりは国有財産なる馬を、農学部附属第一農場の絶大な支援のもとに管理しているということである。この農場とは、馬術部員としての四年間、全く無関係で過すことは不可能な位密接なものがある。どれ程密接かということは、退屈でも、この文章を最後迄読んでいただければおわかりになると思う。

そもそも馬術部というからには、馬に乗らなければお話にならない。現在、我々が使用している馬は、前記の如く八頭で、全て農場に所属し、既舎も同じ農場の一つを専用に使っている。いわば、家つきの馬ッコ共を部が管理しているというのが現状である。この「管理」というのが大変で、馬は飛行機、自動車、その他の乗物と違って常に物を食べさせ、柔らかい藁のふとんを与えねばならない。この日々の世話をするものを決めておかないと、一食抜きなどということにもなり兼ねないし、また、餌をやらないでおいたりしたら、自分のタテガミや飼桶をバリバリやり出す馬（昔、日高の牧場で実際にあった話らしい）もいるそうであるから、ここに、まる一日の間、部員が二人一組になって馬の世話をする「当番」なるものが、部員の第一の義務として発生したのである。この当番の一日の仕事はすすけた部屋の壁に高々と張出された次の如き掲示通りに行うことになっている。

当番日課

前日夜
当番交替
夏期　午後六時三十分
冬期　午後五時三十分
水飼投草
午後八時三十分～九時三十分

当日朝
既舎内外馬房清掃、寝藁作業
水与飼付（八時三十分迄に終了の事）
夏期青草刈り

昼
水与飼付（十一時―一時）
寝藁を裏返しにする

夕
寝藁作業
水与飼付
既舎内外の清掃
水槽へ水を満す
部室清掃
備品員数点検

日誌記入

右終了後交替のこと。

以上。

少し補足するならば、夏期には朝五時十五分頃には練習の為に部員が集って来る。従って手入れ開始の五時半迄には、全馬に水を与え、ボロ出しを完了し、馬繋柱に馬をつないでおかねばならない。これが意外に時間をとり、遅くとも五時、朝の練習に出ようとする為には四時半には起きなければならない。また青草刈りも丸太棒の如き鎌で、大八車に二台分の草を刈るとなると、切るというより、草をなぎ倒して強引にこれをかき集めるという事の方が手取り早くなる。これも馬術部に入ってこそおぼえられるものであろう。これら当番たるものの附帯条件の一つとして、午後十時以後の外出禁止、並びに部室での飲酒、勝負事を禁止するというのがある。だから一年、二六五日の間、夜十時以後の部室には必ず部員が二人居り、上下二段の清潔な柔らかなベットから、馬臭い面をつき出して、タバコの灰をふり撒きながら、或いは書を読み、或いは互につばきを飛ばしながらダベっているという事になっている。もっとも酔っぱらって厩舎で馬と一緒に寝ているのと合わせて、三人が泊ったこともかってはあったとかなかったとか……。朝の寝藁作業というのは、馬糞と藁を分け、濡れた藁を干すことであるが、一年目の頃は頭のシンに突きさすようなアンモニアの臭いに悩まされるが、慣れるとまた楽しからずやで、そのまま坐り込んで睡眠不足を補いたくもなる。しかし、この位になると、身体中に臭いがしみ込んでしまい、電車やバスの中で奇怪な臭いに悩まされ、ふと自分の服をかいでみたら源は自分自身であったということにもなるのである。当番日課表中の投草、飼付、寝藁等の原料となる乾草、燕麦、燕麦稈、デントコーンその他は農場から支給されている。我々としては多くもらえれば、それにこしたことはないのであるが、農場には、農耕馬、緬羊、豚、鶏もいることだし、我々の願いが思うように通る訳ではない。しかし、飼料、寝藁の大半を学校より支給されるというのは他の大学には余り例を見ず、この点では非常に恵まれているといえよう。

「当番」と共に、部員の義務の大きなものとして「作業」なるものがある。「作業」の第一は、農場で生産された乾草や燕麦稈等を厩舎迄運ぶことである。牧草は一番刈りが乾いて乾草になった頃、即ち、夏休みの三回の合宿時に行われ、「乾草上げ」と称されている。この時は農場の馬車を借りるのであるが本州出身者の多い現部員には馬車に馬をつける方法がわからない。またフォークなる超大型の食事用フォークのようなもので乾草を馬車に積み、厩舎の屋根裏に上げる段になると、労多くして効少し、という言葉通りの結果に終る。しかし、馬術部で一応のことが出来るようになると、乾草上げに関しては普通の牧場に行っても結構通用するらしい。今年も日高の実験牧場で部員に手伝ってもらおうかという話もあったそうだから、万更嘘ではあるまい。次に寝藁にする燕麦稈は、九～十一月に脱穀されるので、その頃土・日曜日を利用して寝藁運びをする。

この外作業としては、障碍の修理、パドックの杭打ちから厩舎の屋根葺きに至る迄、土方一般何でもあるが、特にシーズン中は、試合のハコ番として、また試合があれば当然障碍が壊れるものとしてその修理作業を覚悟せねばならず、何やかやで四～七月の日曜の大半を農場で過すことになる。だから馬術部員にはリーベが出来ない

のだどとぼやく部員もいるようだが、事実はそれ程でもないらしい。当番や作業の時に使う器具の大半は農場の物を共同で使わしてもらっているが、水槽のポンプの柄(鉄製)を折ったり、曲る筈のないカッター(乾草を切るのに使う)のシャフトを曲げて叱られたり、フォークを無断借用したり、農場の人には色々迷惑をかけている。これも全て可愛い馬の為にするという大義名分があるが、その元締めたる馬に飼料や寝藁を与えるのだから、農場としても始末におえんと思う事であろう。もっとも寝藁にする燕麦稈は、例年八月には皆無となり工学部裏側の芦を刈り取って使っているが、ある時などは、領界を越えすぎて侵略したとかで、工学部からお目玉を食ったこともあるそうだ。馬にとっては良いとは思われないが、タダで寝藁らしきものを手に入れるのはこれ以外には現在のところないようである。近所の農家に馬糞をやって、代りに寝藁をもらおうかという話も出たが馬糞は農場で使うし、ボロといえども国有財産であるとかなんとか、その話は立消えになっている。燕麦は六月には農場支給のものがなくなるが、これは買う以外に手はなく、出来るだけ安くというので、糠やデントコーンの粉砕したものを燕麦と配合して使っている。数年前の映画ロケのような大きなバイトもない現在、如何にしてこの費用をヒネり出すかが、ここ一、二年の部の最大の課題となっている。次に飼料、寝藁の年間使用量とその内訳けを示す。(昭和三十六年度)

燕麦	二百十八俵
農場支給	百十俵
馬術部購入	百八俵
乾草	十トン
その他	
デントコーン(撓き潰り)	五四袋
米糠	五四俵
食塩	百二十kg
青刈デントコーン	一反歩
寝藁	
農場支給	十屯
馬術部調達	一屯

尚参考迄につけ加えるならば、四~十月迄は一週の内五日間は午前一時間半(障碍飛越を含む)、午後一時間半(部班運動のみ)他の一日は午前一時間半(障碍飛越を含む)の練習時間で、残りの一日を馬体休養日としている。また十一月~三月の冬期は一日一時間半の各個乗りで週一日を馬体休養日としている。そして前記の燕麦量は、夏期は一日6キロ(六升)、冬期は一日3キロ(三升)として八頭分の計算である。

最後に馬術創設以前より農場に務めておられ、幾世代にもわたって馬術を観察して来られ、現在も尚、陰の力となって馬術部の為に尽力されている宝賀氏の話を加えて文を結びたい。氏の話では、古い先輩達は馬に乗る為に旭川迄合宿に行ったそうだし、部の創設以前にも二、三人の馬好きな人が乗りに来てたそうである。当時、馬術が正課だった畜産学科の人は余り熱心でなく、他の学科の馬術部の人の方が熱心だったとか。特に、現在、札幌に居られる岡田先輩程熱心な人は見たことがないといっておられた。これら先輩達の闘志のおかげで、現在の馬術部に対する農場の受けが良いのだと感謝している。しかし、言葉を返せば、現在の部員はファイトがないと

いうことにもなろうか。とにかく戦前にくらべて馬が少くなり馬術が衰退したことを歎く宝賀氏を始め、多くの善意ある人々に見守られながら、現在の馬術部は健在である。それに、苦しい作業といえども、乾草を山積みにしてフォークを針ねずみのようにさした馬車に乗って、観光客を見下して通るポプラ並木にまさに天下泰平。春夏秋冬、朝から晩迄、手綱の変化を眺めていて現在の部の生活は苦しい中にも楽しい思い出として残るであろう。だが、しかし、現在の馬術部がその殆んどを農場に依存し、また、ものこそいわぬが人間と同様馬も食うし、年々老いて行くことなど考えると、我々にはまだ何かなすべきことが残っているような気がする。



（飼付風景）

最近の練習状況

小山 毅（教育 四）

◆はじめに

この一年間を中心に、最近の練習状況の概略を述べ、更に皆様からの御批判を仰ぎたく若干の検討を加えてみた。三十五年度は責任自馬制は採用せず、どんな馬に当っても常に平均した実力が出せるよう各馬に平均して騎乗し、片寄った馬ばかりに乗って片寄った技術の習得を極力避ける事を主眼とした。しかしながら上級生には各々得意とする自馬があり、夫々各馬の調教には暗黙の内に責任を持っていた。練習には常時、十名から二十名が参加し、騎乗の機会は試合競技会等を控えておらぬ限り一年目も四年目も、公平に与えられた。兎に角、この一年間の主眼としたものは「四年目だから……」「一年目だから……」というような階級差別を全く抜きにして、少くとも練習の機会だけは全部員等しく平等に扱われ、与えられたと思う。

(1)年間の概要

四月　馬場の使い初め
　　強化練習（七日間）
　　合宿（十日間）

厚い雪にとざされた馬場も、半年振りの土の香を胸一杯吸いながら馬場を使い始める。冬期間、なまっていた身体をほぐし、忘れかけた騎座感覚をとり戻す。又新入生を対象とした馬術講習会に備えて、人馬共にコンディションを調整する為に、特に強化練習を春休みの間に設ける。講習会後の合宿には、新入生を除いて殆んどの部員が参加し、愈々、本格的シーズン・インとなる。練習内容は部班運動を主体とする。

五月～六月　部班運動を主体とし、小障碍から中障碍（B）程度の飛越を始める。

そろそろ、春の各種定期戦も始められ、全本日学生王座争覇戦に連る東北・北海道学生馬術選手権大会も、この時期にあるので練習にも熱が入ってくる。

七月～九月初旬　合宿（三回、合計三十日間）

夏季休暇をはさんで、帝大戦をはじめ各種遠征試合がこの期に集中する。新入生にも、この期の合宿から参加を認められ、初めて鞍にしがみつきながらも、小障碍を馬に、飛ぶというよりは、またいで(?)もらう。上級生のレギュラーも各種遠征試合を目前にして実戦的な中障碍（B）程度の飛越を行う。

九月中旬～十月　各個乗りを主体とする。

国体、全日本に備えて遠征人馬の為に特に、特別調教の目的で「各個乗り」となり、各自の技術の程度に応じた研究期間となる。

十一月～三月　馬場外に於ける道路騎乗の各個乗り。冬期練習様式（各馬一日一鞍）

国体、全日本遠征より帰ると、不完全な北大馬場は殆んど使用不可

能なシーズンに入る。従って馬場外に於ける各個乗りとなり、自馬の健康管理の面からも、夏季シーズン中酷使された(?)馬体を充分休養させる意味からも、単に冬期間の運動不足を補う程度の練習を、各馬、一日一鞍宛許される。このシーズンの各個乗りは馬場外の為、上級生がいつも立会う事も不可能である。従って、一年目でも全く独自の研究をするシーズンであるが、良い面も、悪い面も、この練習に出て来るようである。

他に、夏季シーズン中、毎週木曜日の午前の練習を「特別練習」として、二年目、三年目が隔週毎に参加し、学年別を対象とした練習の指揮を四年目が当り、実施している。又、各種試合の前、一週間位を選手候補(十~十五名位)による強化練習も従来通り行った。

(2)練習時間

〈午前之部〉五時三〇分、集合、馬の手入れ、其の他準備。
六時~七時三〇分、練習、
七時三〇分、帰厩、馬の手入れ、後始末等。

〈午后之部〉三時三〇分、集合、馬の手れ、其の他準備。
四時~五時三〇分、練習。
五時三〇分、帰厩、馬の手入れ、後始末等。

以上は夏季シーズン中のもので、練習時間は午前、午后共に正味一時間三〇分(特別練習のみ二時間)で時間厳守とした。又、一週間のうち、月曜日は馬体休養日として、人馬共に練習は休みとする。火曜より土曜日迄は、夫々、朝夕二回の練習としたが、但し土曜日の午后は「北大乗馬同好会」との合同練習として、日曜日は大会、競技会がない限り前記「同好会」の練習日として現役学生部員の練習は遠慮している。十一月以后の冬期練習は、午前九時~十一時三〇分。午后一時三〇分~三時三〇分迄の間に、各自の都合の良い時間に練習を開始し、正味一時間三〇分以内の騎乗時間としている。

(3)馬場運動の重点

部班運動に於ては、概ね力の等しい者同志で、その都度グループを作って騎乗させた。

一年目に対しては先ず何よりも鞍に慣れる事が要求される。同時に平衡を保ち、安定した無理のない強い騎座を作るのが第一目的とされる。馬上における正しい姿勢、鞍の中央部に身体から無益な力を抜いて座し、鐙を正しく踏み、正しい手綱の保持等も、上級生の乗っている時に良く見て憶える事であり、実際に鞍上にある時には、自分でそれを真似てみて、上級生の指示を素直に受ける事が重要である。勿論、鞍上にあっては、ある程度の緊張は必要であるけれども、兎に角、楽な気持で鞍について行かなくてはならない。自分にとっては乗り易い方法であっても、この時期に於ては独創的な技法は厳に慎しまなくてはならない。常に経験豊富な上級生の指示に従ったオーソドックスな御法を先ず習得し、馬術というものを頭ではなく、感覚によって読み取らなくてはならない。そこに初めて馬術を習い出した者に対して、非常にデリケートな難しさがある訳である。先ず「感を養う事が第一義である」という事を常に頭に入れて練習に臨む事である。そして兎に角、「馬に慣れてもらう事」であり、乗馬する事がどんなものであるかを各自の感覚で味合ってもらう事である。勿論、一年目の諸君にも狄迄には発進、停止、後退の扶助、簡単な内側姿勢等上級生に教えてもらって、兎に角、馬

を自分の思う方向に三種の歩様で、真直ぐに歩かせる事が要求されるのである。

二年目に対しては、基礎運動に於て馬を自分のものとする事が主目的である。即ち、馬を手の内に入れる事に専念されなくてはならない。例えば部班運動などの場合に、各自が勝手に運動を行ったり、馬が勝手に号令者の声で運動するようであってはいけない。乗っている人間の方が、たとえいかなる時にも主導権を握っておらなくてはならない。いかに自分一人の運動が正確に、きれいに行えたとしても、他の人達の運動とバラバラになっているのでは何もならない。部班運動は団体運動なのであるから、全体として調和のとれた美しさがそこに要求されるのである。三種の歩様による発進、停止、後退、巻乗り、半巻きETC・の基礎的運動を各自正確に行う事は勿論、必要なのではあるけれども、それと同時に部班運動を行っている他の人達の運動に遅れたり、あるいは速くなったりする事のない、秩序ある運動を行う事が要求されて来る。それにはどうしても、「馬を手の内に入れる」必要性が生じて来る。又その為には安定した上体と騎座、強力なる脚の推進、柔軟な挙、これらが決して力学的理論にのみ依って習得されるのではなく、自己の感覚に依って受け取らねばならない。この期に、この「感」を自分のものとする事が出来るか否かで、その人の学時代四年間に、水準迄達するか否かが決定されて来るのではないかと思われる。其の他細部についてつけ加えると、三種の歩様に於ける発進、停止、後退。そして完全に内側姿勢をとらせて回転、旋回。所謂、基本馬術を完全に自分のものとしてもらう事が、この期の重要課題である。又、内側姿勢の応用、あるいは更に発展させた運動、二蹄跡運動を常歩によって練習する。

三年目に対しては、過去二年間に習得した基本馬術を確固たるものとして、それを更に発展させる事が要求されて来る。過去二年間に習得した個々の扶助を集大成し、その上に「扶助の一致」という非常にデリケートな問題を要求されて来る。この期の目標は一応、乙馬場程度とされるが、実際の練習には自馬の能力からして、現状では〝練習〟には無理な自馬が多いのは甚だ残念に思われる。しかし二蹄跡運動も速歩程度位迄は、大低の自馬はやれるので、先ずその点に練習専念される。そして基礎的な運動に関しては、下級生の者に指導を与えるよう、立場を変えた基本馬術の習得が課題となる。即ち、これ迄は上級生に指導してもらう〝生徒〟の立場から、逆に下級生を指導する〝教師〟の立場で、これらの運動を見ていかなくてはならない。従って、これ迄は正しい姿勢、扶助の操作に専念するのみで良かったのが、この期になると、正しくない、間違ったそれについても注意を払い、犯し易い過誤については適切な矯正を即座に出来るよう日頃、心懸けなくてはならない。

四年目になると、最上級生徒として常に指導的立場にあらなくてはならない。下級生の〝範〟たり得ねばならないのである。これも適当な指導者に恵まれない、現在の北大馬術部では致し方ない。又自馬の調教についても、四年目が全責任を負い、わずかな経験を頼りに、細々と調教に専念する。しかし、最終学年ともなると、卒論就職試験等と大きな問題を控えているが為に、余り練習にも以前のようには顔を出せなくなって来るのが現状であり、又部の運営面に於ても、実権は三年目に譲られ、四年目は所謂、〝長老格(?)〟として残るに過ぎない。しかし時間の許す限り、夫々の技術を磨く事

に努力する。この期に至っては、過去三年間で、先ずは乙馬場というものがどんなものであるかを理解する段階に迄来ているので、それをこの期に完成させる事を第一目標とする。即ち、馬体の収縮という事が要求されて来る。この収縮姿勢の習得を目標にはするが現在の自馬に於ては、それを実感として味合うには程遠いようにも思われはしまいか。各自の技を磨く一つの目標をこんな所に一応は置いてはいるが、現実の問題として、それよりも下級生の指導、自馬の調教の方が急務とされ、以前のように時間に余裕もなくなって来ては、各自の技術も、むしろ停滞してしまうのが現状のように思う。勿論、人によっては更に一層、自己の技術向上を目指して、精進される方もあるにはあるが、大勢からして極くわずかであり、それを期待するのも無理ではないかと思われる。しかしながら、そうあって欲しいと願うのは、単に私一人の感慨でなかろうと思う。

以上が各学年別に見た馬場の練習目標であり、現況のいくつかである。そして午前之部は殆んど部班運動を根幹として実施し、午後之部の練習も、夏期シーズン後半以後になって、「各個乗り」の練習となり、夫々の目標に向って精進しているのである。



（馬場での練習風景）

(4)障碍飛越の重点

障碍飛越だからといっても、その基本的御法に於ては、馬場運動の時と本質的には何ら変りはない。基本馬術さえしっかり身についているならば、後はそれの応用に過ぎない。だから取り立てて、障碍飛越についての各学年の目標等は、馬場運動の時のそれと等しいものではないかと考える。しかし、特に障碍飛越に関してのみ書くとすれば、「前傾姿勢」、「誘導」、「随伴」等があげられると思う。

一年目に対する障碍飛越の練習も前述の如く、七月の合宿の頃から始められる。先ず正しい前傾姿勢よりの強力なる推進力を養う事を第一段階とする。具体的にいえば、部班運動に於て前傾姿勢をとらしめる事より始まる。そして、その前傾姿勢を崩さずに馬を人間の意志通りに誘導する事も、この部班運動中に要求される。次に飛越に当って、馬の動きに対する随伴であるが、地面に十～十五米間隔で横木を平

行に置き、それを最初は常歩、次いで速歩で通過させる。この通過に当って騎乗者は、いかなる運動を行い、その反動が、いかに騎乗者に感ぜられるかを味合ってもらう。そして次には横木を三十～五十センチ位に高めて、速歩通過を実施する。障碍個数も直線上に並べた三～四個位のものである。この様な事をくり返し、要はこの時期に於ては、馬が飛ぶのに馬の運動を邪魔せずについて行く事。即ち、あまくで鞍に慣れる事が主目的である。そうして結局、一年目の秋頃迄には、一米位の高さの垂直単一横木障碍の飛越に騎乗者の身体が遅れずについて行けるようになる。

二年目頃になると障碍の程度もやや難しいものとなり、練習もいくらか、ハード・トレーニング化されて来る。即ち、障碍も垂直障碍からの幅のある平行二段横木、あるいはレンガ、石垣等の箱障碍が飛越の対象として加えられる。障碍程度も高さ、幅共に多くの場合一米前後である。ここで特に留意せねばならぬ事は、障碍直前での強力な推進を、一層騎座と脚に求められる事である。しかし、この段階に於ても、あくまで、馬に障碍を飛んでもらうのであり、馬の運動を邪魔しない楽な体勢に馬体を持って行くよう、留意せられなくてはならない。より安定した平衡感覚、堅固なる騎座を養う意味で、〃鐙上げ〃での障碍飛越も、時には実施される。障碍の配置も、直線的なものより、実戦に備えて経路を組んで飛び始めるが、障碍個数は五個前後である。

三年目以上となると、直に実戦に連るような飛越練習が大半を占めるようになる。障碍経路も、大体、中障碍（B）程度が日常の練習であるが、試合の直前に於ける強化練習等では、中障碍（A）クラスの障碍飛越も行う。この時期に至っては、連続障碍等のやや難しい経路も組まれて来るので、「誘導」の問題が極めて重要となって来る。障碍に馬を素直に誘導するに当って、どのような経路を進むのが最も有利か。又、飛越し終った後の馬の処置も、次の障碍に大きく影響して来る。即ち、この時期では、いかなる障碍経路中にあっても常に、自分の手の内に馬を入れる事が第一条件である。その為には、正しい衝受けと、強力なる騎座の推進力を完成させなくてはならない。この時になると、国体、全日本の出場のチャンスも出て来るが、その頃の各自による特別調教期間に於ける練習は、全くその人独自の研究、鍛練に依るものとなって来るので、色々な書物、写真、フキルム等によって研究する事となって来る。

以上のように一応、学年別に分けて、その目標を記してみたが、しかし、障碍飛越に当っては、五十センチの障碍も、一米五十センチの障碍も本質的には何ら変っている所はないと思う。従って学年別に云々するのもナンセンスのように思える。馬場運動にしてもしかりである。前記の如く、段階を一段一段と踏んで来るのではあろうが、障碍飛越に関しても、日頃の基本馬術の一日、一日の集積が実って来るのであって、最初は地べたに転がした横木をまたぐ時から、一貫した一つの練習であり、その時の基本の一つ、一つの積み重ねが、ひいては大障碍飛越に連るものである事も堅く信じている。実際の練習に於ても、学年別の練習目標はあるが、決してそれは制度として存在するものではないので、何ら個人の練習を規制、束縛するものではない。練習に立ち合っている主将はじめ、上級生のトレーナーの判断で、適宜、その人の習得し、身についた技術に応じて、夫々の段階を踏んでもらうのであり、「一年目だから、やってはいけない。」とか、「二年目だから……。」というような事は

余り厳しくはやっておらないのが現状です。良い言葉で云えば〝才能教育〟とでも云うのでしょうか、それが為に、練習にも何ら厳しさが感じられず、練習に盛り上りのないものに終ってしまったように思えます。

◆おわりに

以上が三十五年度、一年間の練習の概略ではありますが、特に三十五年度から試みたというような、新鮮味のあるものは何一つございません。又、日頃の不精から、参考にすべき記録もないため、この一年を振り返って、記憶の糸をたどりながら、思いつくまま記したものです。従って、練習の全容を詳細には御報告申し上げられなかったと思います。何分、現役の私共が指導している現状ですので、底も浅く、ここに申し述べた事に関しても、甚だ具体性に乏しく、やや抽象的傾向になってしまった事は申し訳ないと思っております。しかしながら、現在私共が、一体何を考えながら、日頃の練習に精進しているのか、その一端でも御理解いただけましたなら、幸甚に存じます。この一年間を振り返ってみて、僭越ながら私共の感想、反省を附記させていただきたいと思います。

1　基本的訓練をもっともっとみっちりやる事。そして、学年、男女の別なく、もっともっとハード・トレーニングの必要がある。

2　部活動はあくまで団体生活なのであるから、秩序を乱すような言動は厳に慎しみ、もしもそのような者が出た時には、主将なりがビシビシその処置を断行しなくてはならない。

3　毎日の練習にもっともっと真剣さが欲しい事。

4　障碍飛越の練習に際し、ある程度の力の有する者には、馬場運動に「各個乗り」がある如く、「乱飛び」等やらせてみてはどうか。

5　部員を、その人の技術に応じて階級別に分類し、その練習内容もそれに応じて変えてみてはどうか。過去におけるペナント、モノグラム制度の復活等も一つの方法であると思う。

6　主将を中心とする部員の統一と団結。それに主将をはじめ上級生の実力に裏付けされた指導力の高揚。

拙文を結ぶに当って、折を見て先輩諸兄の適切な御指導、お待ち申しております。

あの日あの時

――昭和三十五年度部日誌より――

志水一允（林産 三）

有為転変は世の慣いとか、三十年以前の姿とは厩舎、馬場等もすっかり変わってしまっていることでしょうが、そのふとした片隅に昔日の俤が、ささいな痕跡となって刻まれている様に、現在の馬術部生活を通して、先輩方々の青春の姿を今一度思い浮べていただけることと思います。心の故郷である馬術部生活という絆をつうじて、私達は先輩諸兄と一層の親交を深めていきたいと思っております。部日誌から、其日其日の断片を追って、その生活の有様を描い

てみたいと思います。

一月某日

今日の当番は全くひどかったぜ。吹雪の中で、ポロ出し作業をせねばならぬし、井戸が凍って水が出なくなるし、ポンプの柄は折れるし、ほんとについてないね。井戸の水を、決して落し忘れるな。布をまいて湯をかけたり、炭をおこして積み重ねたりして、ポンプを暖めること、二時間の長きに及んだ。

一月某日

当番に当る度に、色々な話が聞ける。二人で当番するということは、普段気のつかない相手の性格、生い立ちを知ることが出来て有意義である。

冬の日は激しい寒波と吹雪、それに重く低く頑迷にのしかかる雪に、やる瀬のない無聊に気のめいる日が続く。殊に黄昏は冷く、わびしく、うつろに、厩舎の軒を風がヒュウヒュウと鳴る時、その身は、そぞろうらぶれて悲しい。窓の外、部屋の灯と照らし出されて静かに雪の舞う時、暖かく燃えるストーブに、誰もがしめやかな感傷のムードに耽り、つつましやかに、昔の恋の溜息を、少年時代の回想を語り始める。他人から見れば漫画でしかない恋も、彼には貴重な体験であったのだろう。幾重にも、そっと積もっていく雪に、夜も更けて、お互の心の琴線に触れ合うのも、この時なのだ。

冬の間の練習は馬場が、積雪で使えないので、理学部から恵廸寮迄の道路が使われる。練習時刻は制限されていないので、各人暇な時にやってきて乗る。各馬一日一鞍と決っている。道巾もたいして広くないので、充分な練習も出来ないが、それはそれなりに楽しいものである。

二月某日

新馬到着

北標死亡の後、念願かなって、新馬がやってきた。子をはらんでいる。北涼号となづける。その色鮑くまで、鮮やかにして、眼球、ガラス細工の如し。その性、鮑くまでおとなしくして容姿瑞麗と云わんか。

二月某日

追コン兼半沢先生帰国歓迎会。六時より鍋万で。

卒業生、森本悌次、田中紀介、佐伯雄二、本橋幹夫、長谷川邦夫、片山静子の各先輩。

去りゆく先輩方々の、或時の馬上姿を、或時の談笑の顔を……

今しばらく、さようなら。折しも、厳しい寒さに雪が激しく吹きつのっていた。

そして三月。踏みかためられた氷の下から、ほのかに漂よう春のいぶき。楡の木々を吹きとおる微風は、花の微韻。枯木に日ざしが暖い。純白の雪も薄黒く汚れ、美しきものかく衰えて、春は近づく。雪解の滴がしきりと軒下の雪を削る。

三月某日

新馬北涼号の妊娠経過至って良好。出産予定は四月初旬。尚原因不明の跛行をしているので、オスミン静注故、当分騎乗停止のこと。

乳房と乳頭の色の区別がまだつかないが、乳頭が黒光する様になったら、出産が近いそう。難産の恐れがあるので、朝夕食前に二十分程の運動を必要とする。

三月某日

各馬、尋常鉄に改蹄し、馬場、厩舎周囲の雪割り作業をする。何か月ぶりかの、黒土の感触に、せっせっと春の歓びが、身にしみてきた。

北涼の出産が近いので、今夜から当番は交替で起きていること。

三月某日

本日より強化練習。

弱ったことには、エンバクが近いうちに、切れる。農場の在庫もなくなりそう。飼育係殿、緊急の処置をお願いします。

四月某日

今日は入学式なので、講習会員募集の為、構内デモンストレーションを行なう。募集人員は四十名の多きを数えた。

四月某日

牡馬誕生。八時頃いつもと変わらず、投草を食んでいたのに、九時頃陣痛をもよおし、九時二十五分安産。半月も予定が延びたがこれで世話のやけた北涼妊娠事件も幕。奇しくも、部創設以来初めての、自馬による出産が今日に当るとは、我々当番は幸せである。

此頃になると、雪の足跡も手稲の山をのぼり、大地は雪解の水を充分に吸い込んで、黒々ともりあがる。自然は至る所で、生命の旋律を奏で、人も馬も自然に呼応して、馬術部活動も盛んになる。ポプラ並木にかかる朝霞に、春の情は尽きて、浅春の若き恋の日に、静かな情感の響きは胸を打ち、胸の旋律は青春の愁いを歌い、咽び泣く青春の息吹きは歓びに酔う。馬場の横の鉄道の枕木の下から、つくしんぼうが芽を出して、さわやかな郷愁を訴える。

四月某日

新入生講習会開始す。

先に募集した者を、朝五時半から七時までと、午後三時半から五時までの二組に分ける。トレーニングパンツの者、Gパンの者、さまざまなスタイルで、長ぐつをはいた、いつに変わらぬ講習会風景

四月某日

部主催の映画会。会場読売ホール。

「泥棒成金」と「もず」を上映する。成績は、たいして芳しくなく映画の選定を誤った感がある。次の時は、もっと線の太いものがよさそうだ、皆さん御苦労様でした。

五月某日

春季合宿。ゴールデンウイークを利用して行なう。今回は二年目以上で、新入部員は除外してある。場所は農場の農機具倉庫に畳を敷いての仮宿。炊事当番と厩舎当番の割ふりは黒板に書いてあるから各人注意せよ。又合宿中の日課は次の通りである。

4時半　起床　三十分間体操の後、馬の手入れ。
五時半　練習開始　練習時間一時間半。
7時　練習終了　後三十分間、馬の手入れ。
八時　朝食
九時　作業
十二時　昼食

一時　作業
二時半　厩舎前集合、三十分体操、三十分間手入れ
三時半　練習開始、練習時間一時間半
五時　練習終了、三十分間手入れ
六時　夕食、午後九時まで自由時間
九時半　消灯
又合宿中は麻雀を禁止する。この合宿中は、パドック、障害修理鞍の手入れ、サイロ整理、馬場に炭ガラ撒入の作業を行なう。
円山公園は桜の季節だとて、鐙上げにも不平は云いますまいぞ。

五月某日
合宿打上げ東西対抗障碍飛越競技
西軍大差を以って勝つ。
対同好会春季定期戦　於北大馬場
北大（—91）↑↓同好会（—151.25）
対札鉄春季定期戦　於北大馬場
北大（—57）↑↓札鉄（—92.5）
出場選手　大場、河原、鶴見、千葉、湯浅、吉田、小山、森、広岡、市川、玉沢。
今季初の対外試合に勝利を収め、合宿アケ、コンパも又格別の味であった。

五月某日
畜大戦の為の特練、午前のみとする。
部室を整頓するのは、当番の任務である。しかしその努力を嘲笑するが如く、長靴はこっちへ、上衣はそっちへと放り出されるのは、誠に残念である。部員諸兄の協力を乞う。

五月某日
札幌市乗馬リクレエーション大会
参加団体　市内高校生、札鉄、同好会、OB、札幌医大、競馬場の各チーム。

五月某日
対帯広畜大春季定期戦　於畜大馬場
シニア戦
帯畜大（—62.25）↑↓北大（—74.5）
出場選手　千葉、小山、吉田、大場、河原、鶴見。
ジュニア戦
北大（—7.5）↑↓畜大（—45）
出場選手　森、伊藤、恩田、広岡、玉沢、市川。

五月某日
春季部内競技大会
パン喰い競争、立乗り競争、東西対抗競技、スプーンレース、等のゲームに全部員が、楽しく興じる。この後、新入生歓迎会を中央食堂で行なう。その席上、札幌市体育連盟より、我が部が優良スポーツ団体として表彰され、そのトロフィーと賞状が披露された。

五月某日
NHK、TV、「歌は生きている」に自馬、部員が特別出演。北涼の子、腸カタル気味により、青草を食わず、母乳だけをやるようにに。よくその様態を観察して獣医に報告すること。

そして青草の季節がやってくる。毎朝の青草刈りが当番の日課となる。鎌の露に濡れた手許から、夏の甘美な香気が立つ。草を褥に

大地のしなやかな感触は、ゆるくかすかに人の胸に夢を呼び覚す。雑草の中に、三々五々と咲くタンポポの黄は恋情の思いか。かっこうの声は、さわやかな愁いを帯びて、朝の馬蹄の響きに和す。田の畦に続く大八車の轍に、新鮮な朝の空気は横溢する。ポプラの種子は雪とまちがう程に、飛び交う。

六月某日

学生選手権東北北海道地区予選　於北大馬場

予選通過者　千葉、吉田、大場。

六月某日

部員の大半は安保斗争デモ参加。当番もやむに止まれぬ気持から飛び出し、迷惑をかけてすみません。国の危機を憂えて飼付に間に合わず。

六月某日

王座決定戦東北北海道地区予選　於畜大馬場

1位　帯広畜産大学　三勝

2位　北海道大学　二勝一敗

3位　東北大学　一勝二敗

4位　岩手大学　三敗

5位　福島大学　予選で失格

北大は畜大に紙一重の苦敗を喫し、王座決定戦進出の貴重な一戦を失なった。斎大の進境著しいものがある。

六月某日

青草の刈ったのが田圃の中にあるから、大八車で三台程運ぶこと。農場のおばさん曰く。「草を刈る人は、刈る時間より、鎌をとぐ時間の方が長い」と。自分の鋸の歯の様な鎌を見て、俺も、〝そは真実の言なり〟と思った。部員諸兄心せよ。

各馬に虫下し飲ませる。北拳鼻血を出すが別に異常なし。

七月某日

四年間の厩当生活を僚友吉田君と語り合い、古し日を懐しむ、さに感慨無量！　いつの日か共に此の部屋のベッドで、語り合える日の来るであろうことを切に期する。末長く、馬を可愛がって下さいネ―。

パドックにつなぐとき、北櫛を道路の近くにつながぬよう。今日も一人観光客がやられました。

主将の座も四年目から三年目にタッチされるとともに、当番の仕事も此頃から、四年目は免除される。名実共に馬術部運営は新しい人達の手に置かれる。

七月某日

夏季前期合宿

この合宿は一年目を対象として行なわれる。合宿中の時間割は春季合宿の時と同じである。参加人員二十三名。昼の間は乾草上げの作業と上級生による、馬学あるいは自馬飼育管理上の問題等の名講義も行なう。

七月某日

夏季中期合宿

前期の合宿期間中は期末試験で参加出来なかった二年目を対象として行なわれる。又見学旅行等から帰えってきた三年目もこれに加わる。参加者二十六名。

合宿中は勿論、自炊であって、三十人近くの一日三食の副食代が八百円（〃）だから、多くは望めないが、各炊事当番は腕によりをかける。楽しい食事の一時は、部屋の前の露天で、にぎやかにすごされる。

又この合宿中に、冬の為の厩舎の二階の倉庫に乾草を運び上げる作業が行なわれる。厳しい労働ではあるが、真夏の太陽の下での乾草上げは、夏の風物詩である。乾草を満載した馬車で、ポプラ並木を行く時のすがすがしさは、限りない思い出の一頁を綴ることだろう。何にもまして、楽しいのは合宿であり、作業なのだ。冷い牛乳が実に旨い。

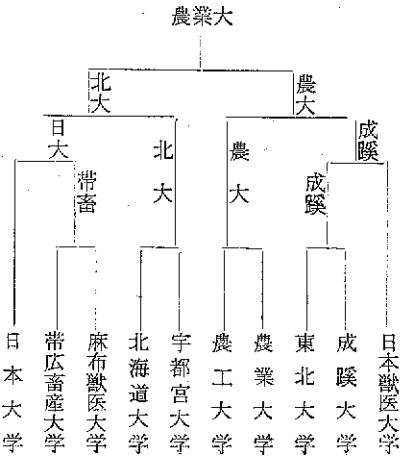
合宿が終ると、日に焼けて、多くの者が帰省やら、旅行やらに出かけて、部屋は嵐の後の静けさの感を呈する。酷烈な太陽の照りかえる下で、当番におおいかぶさるは、真夏の憂鬱／蝉の声さえ、暑苦しく空虚に響く。涼しい夜になっても、部屋の電燈に、蚊、蛾、それに名の知れぬ小さな虫が苦ほしく舞う。馬場は乾ききって、砂ぼこりがあがり、時折、水をまいても、透明な強い日ざしに、たちどころに蒸発してしまう。そして八月下旬の後期合宿にとつながっていく。陽炎燃えた馬場にも、いっとはなしにひたひたと秋風が寄せてくる。夕方のヒグラシの声にさえ夏の終りの淋しさが、そこはかとなく感ぜられてくる。

八月某日
第三回招待全日本女子学生馬術大会
一位　岩手大学　一勝一引分
二位　東北大学　一勝一敗
三位　北海道大学　一敗一引分
個人戦
一位高階（北大）　二位高橋（東北）　三位佐藤（北大）
参加校　岩手大学、東北大学、北海道大学
出場選手　佐藤、高階、吉村、田中、寺江。

八月某日
夏季後期合宿
ひときわ部屋もにぎやかになった。今日から夏季三度目の合宿を行なう。参加者十七名。主な作業はもう終ったので、楽しく馬に乗りましょう。

九月某日
対東北大定期戦　於東北大工学部グランド
北大（—333.5）↑↓東北大（—555.0）
出場選手　大場、玉沢、千葉、市川、湯浅、鶴見（北大）
小島、稲村、青野、武田、今野、和地（東北大）

九月某日
東日本学生選手権　於農工大馬場
出場選手　市川、千葉、鶴見、湯浅、玉沢、大場。
東北大定期戦から、直接のこの試合に旅の疲れもとれず、又東京の暑さにも慣れ切らずコンディションはよくなかったとはいえ、よく戦ったが、決勝戦で敗れたのは、無念であった。



九月某日

北斗、北涼、下痢まだ止まらず。デントコーンに慣れない為らしい。

全馬の伝貧、血液検査を行なう。

暮方の気持よい冷気、部屋に流れ来て、人の心を郷愁の気につつむ。ああもう秋ですね。

北国の秋は早い。朝夕の冷えこみも厳しくなって、いつの間にか蟬の声も途絶え、赤トンボがヒ弱な羽で、風に漂う。農場には、唐もろこしが、豊かに稔って、その上に仲秋の名月がしらじらとさえわたると、秋の感慨ひとしおである。暮方の街路に漂よう唐もろこし売りの労しい香は、札幌の秋の風情をものがたる。

青草もデントコーンに変わり、茎の甘い汁が、馬の歯ぐきに浸み入っているようだ。

九月某日

北海道馬術大会　兼国体予選

一位　六段飛越　北嶺号　千葉裕記

四位　複合馬術　北嶺号　大場善明

九月某日

部内競技大会

第一日　馬場馬術　第二日　障害飛越競技珍プレイに珍賞、ポコイ人間のポコさ加減が報われた一日でした。

九月某日

対帯畜大秋季定期戦

シニア戦

畜大（—477）←→北大（—492）

出場選手　市川、小山、玉沢、広岡、鶴見。

ジュニア戦

畜大（—645）←→北大（—733）

出場選手　恩田、清水、小出、岡田、堀川。

畜大に惨敗を喫し、北大馬術部あえなし。尚この試合から北春（旧名林城）が、長い調教ではあったが公式戦初めての出場をし、弱い四肢もふらつきがちであるが、一生懸命跳ぶさまは好感が持てる。結局この北春が穴馬になってしまったのであるが、良く跳ぶ。

対同好会秋季定期戦

同好会（—425）↑↓北大（—443.5）
出場選手　市川、小山、玉沢、清水、鶴見、恩田。
この日の三試合に一矢も報いること出来ず、嗚呼我、日誌に向いて云うことなし。

九月某日
北潭（旧名シラカワ）との記念写真撮影。
北潭とポプラ並木　多くの人の写真にとられ、カレンダーにまで載った名優彼女の最後の写真も、部員とともにポプラ並木で。明日を知る由もない彼女の元気に草を食むを見て、心なき当番も哀れを感じた。

先日の人馬転以来の傷も癒えず、北潭廃馬となる。そして十月三日7年間、住み慣れた厩舎を後にしたのだった。痛ましい程に高くなった声高に幾多の戦績を残し、首低く歩ゆむ姿、いと哀れを誘う。デントコーン畑のざわめきも、ひとしお悲しく痛ましい。知るや知らずや浮世の嘆き。秋風淋しき馬場での落馬、老馬は去りゆく。

九月某日
小野さんから新馬寄贈さる。名前はまだない。
狸小路商店街秋季大売出しの為の宣伝パレードに全馬参加。一頭につき二千五百円の報酬を受ける。

十月某日
国体遠征馬貨車積込む。北楡（旧名アップディール）、北嶺（旧名ヨシタカ）健斗せよ。
部屋にストーブつける。冬将軍も真近かに迫まる。

十月某日
第二回講習会　女子部員募集の為に企画されたのだが朝の六時からでは、辛いらしく、二人しか応募してくれなかった。後は男が二十数名におよぶ。

馬場周囲の草木も種々の色合を呈して、手稲の紅葉が朝日に輝く。馬場にも、枯葉が綿を織りなして秋は深まる。デントコーンの刈入れも忙しい。時には霜が降ったり、みぞれまじりの雨が降り、枯木にカラスが群がって、不吉な程、寂漠とした晩秋は無為の悲哀を語るのか。脆く、はかない美の情調は、人生の哀調を歌うのか。刈りとられた畑も、晩秋の下、さびさびと広がる。こんな時、待ちに待った朗報がやってきた。

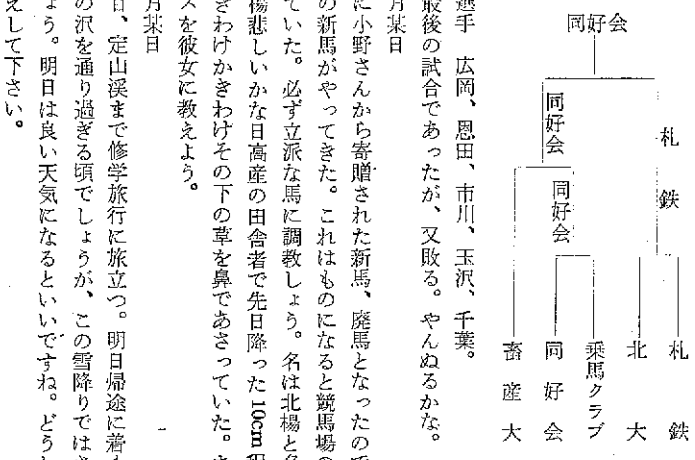
十月某日
国体開かる。
一般自馬中障害　優勝　北嶺号　大場善明
六　段　飛　越　三位　北嶺号　千葉裕記
大いに祝おう、志るこで乾杯だ。

十一月某日
北涼の仔馬帯広に発つ。健やかに育て。帯広の冬は寒いぞ。よく慣れたおとなしい奴だったのに。

十一月某日
寝ワラ及び障碍運搬作業。
パーラー石田屋で六時半より、国体優勝祝賀会。これからの前進のためにも、不振気味な部の空気をうち破るためにも、さあ諸君!!

十一月某日

北海道団体選手権　於札幌競馬場



出場選手　広岡、恩田、市川、玉沢、千葉。

今年最後の試合であったが、又敗る。やんぬるかな。

十一月某日

九月に小野さんから寄贈された新馬、廃馬となったので、日高から九才の新馬がやってきた。これはものになると競馬場の高橋さんがいっていた。必ず立派な馬に調教しょう。名は北楊と名づける。この北楊悲しいかな日高産の田舎者で先日降った100cm程の雪を前肢でかきわけかきわけその下の草を鼻であさっていた。まず都会的なセンスを彼女に教えよう。

十一月某日

四年目、定山渓まで修学旅行に旅立つ。明日帰途に着く予定。今頃は藤の沢を通り過ぎる頃でしょうが、この雪降りではさぞつらい事でしょう。明日は良い天気になるといいですね。どうかお馬も無事にかえして下さい。

十二月某日

街乗。

街乗は気分転換、不注意の事故の起らぬ様注意しましょう。馬を大切にすることは、馬術上達の第一歩ですから。雪の降る町の中、毎日馬もつらいことでしょう。

十二月某日

学生選手権　於後楽園

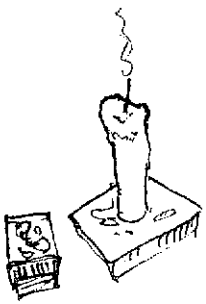
参加選手　千葉裕記　大場善明

乗権　吉田　亨

今年最後の試合だ。北大馬術部に栄光あれ。

こうして又、沈黙な冬がやってくるとともに一年は終る。馬と共に、自然の情懐に心ゆくまで浸りつつ、友と尽きぬ歓びを共にしたい。この恵まれた美しい四季の情景の中で、魂を自由に飛翔させつつ、過ごすことは決して無意味ではあるまい。

この部生活が心の故郷として、断えざる友情の泉として、又青春の礎として、長く存続することを願って筆を置きます。



合宿参加の記

荒木伸也（教養2）

「ジリジリジリ」と目ざましが鳴り「起きろオ！」という声にふいに夢を破られて、眠い目をこすりながら戸外へ出ると、東の空が白々と明るみ始めていた。早朝の空気がひんやりと肌にしみる。時計を見ると四時半だった。「集まれーっ！」という威勢の良い号令と共に駆け足で馬繋場に集った。番号をかけてみると一人足りない。その内に一年生がのこのこやって来たが、「おいこら！何をぼやぼやしとるか！」と早くもトレーナーから一喝を喰わされた。元気よく体操が終って、ポプラ並木へ向ってマラソンだ。

かくて、「馬」と「作業」と「エッセン」の十日間が始った訳であるが、僕等一年生にとっては見ることなすこと全てが珍しく、馬術部ならではの合宿を体験した。夏休みを間近かにひかえた七月も半ば、農機庫の二階に二十人程のたくましき男子たちと過した模様を書き綴ってみたい。

この合宿に僕等が一番期待したのは、拍車の使用が初めて許され、障碍飛越の練習が始まることだった。練習時間は六時から七時半までと三時半から五時までで、午前には「障碍飛越」、午後には巻乗り・蛇乗り・前進後退・駈足発進等の「基本馬術」の練習が行なわれた。

拍車の使用が許された朝、ぼくは親父が聯兵式かなんかで使ったというギザギザのない円い拍車を、これ又おさがりの、膝の上までもある長い軟胴の爪先きがチョンと曲っているへんてこな長靴に付けて、これでほんとの馬術部員に成れたという気になり、嬉しさで胸がわくわくした。さて乗馬してみると、つい先日まではゴム長の踵でぽんぽん蹴ってもあまり動こうとしなかった馬が、ほんのちょっと足首をひねるだけで敏捷に動き出したり、一方、調子よく動いていても、拍車を当てた途端に停止したり、また「前へ！」の号令のときじりじりと後退し始めたりする場合もあって、拍車を付けて一人前になったつもりでいたが、馬を操るという点に於いてはまだまだ駄目だと思った。

「朝清号」に乗って初めて障碍を飛んだときは、三十センチの高さの丸太のバーが接近するにつれ頭にカーッと血が昇り、ふわりと宙に浮かんだ瞬間なんにもわからなくなり、気がついたときは朝清号の太い首の上に落馬寸前という恰好で引掛っていた。以後の二、三日間も同様で、馬が飛越に踏切った瞬間に平衡感が全く失われ、着地するとき其の衝動も作用して、鞍からとび出して首にかじりついたり、重力の法則に従って落下したりだった。まもなく飛越時の感覚をどうにか体得して危っかしさは無くなったが、部班運動の体形を解き、一頭ずつ障碍に向う練習を始めてみると、こんどは飛ばせること自体が如何に難しいかということもわかった。ともあれ、障碍に対するときのあの名状し難い緊張感と、ひらりと宙を飛ぶ瞬間のあのスリルは何にもまして好きなものとなってしまった。

午後の練習は、基本馬術の修得を目的とするため殊に激しかったが、中でも鐙上げでの軽速歩の辛かったこと！　土ぼこりを巻きあ

げながら馬場を数周するうち、下半身の筋肉が麻痺して来てつい怠慢すると「〇番！　腰を上げろ！」と思わぬ場所から上級生の声が降って湧き、一瞬たりとも気を緩めることは禁物であった。此の鐙上げも初めのうちは単なる〝逍遥なもの〟であったが、ひとたび騎座を剝いてしまってからは地獄の責苦と一変し、その痛さ、骨身を削る苦しさは言語に絶する。そのうえ顔じゅうにふりかかる土埃りの中に在っては、涙なんかは黒い塊となって目もとにこびり付き、ただ歯をくいしばってひたすら耐えるほかなかった。

作業も、午前と午後の二回あったが、ほとんどが重労働の乾草上げだったこれら練習と作業の繰返しによって我々の胃袋は日に何度も容易に空になり、エッセンのときはコゲ飯もネッコ飯も空腹を充たすには文句いう者なし、ジャリも一緒に飲み込んでしまう程だった。

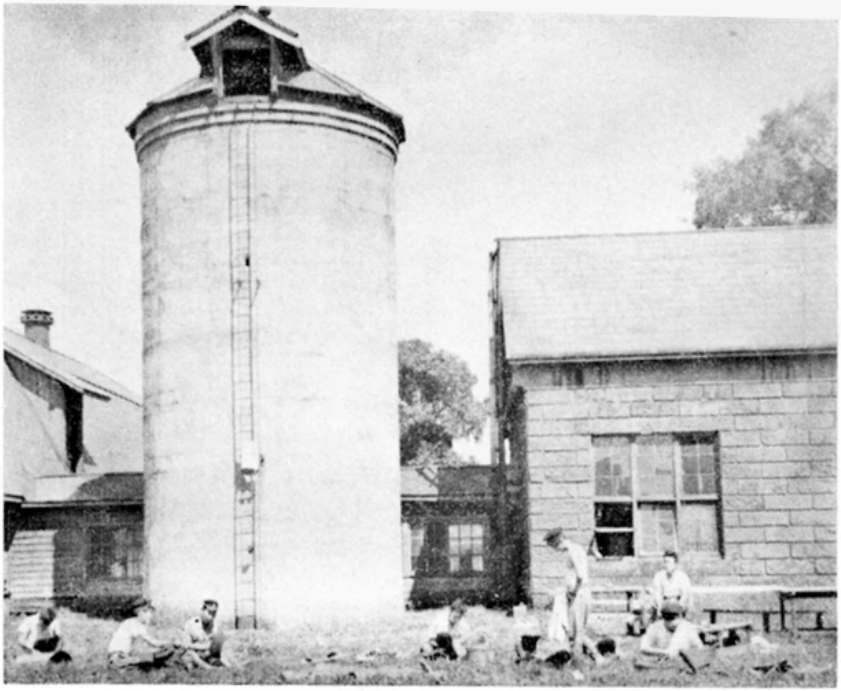
馬術部の合宿には、以上のように練習だけでなく作業もある上、更に上級生による馬学の講義なるものがあって、合宿で学校の講義をエスケープする大義名分が出来たと思ったら、合宿の講義で逆に逍耗した。黒板を使って懇切に解説してくれる上級生にはまことに申し訳ない事だが、講義中、睡くて仕方がなかった。連日、早朝からたたき起され、練習と乾草上げの〝しごき〟を受けるので、皆少々グロッキーになっており、涼しい風の吹き抜ける屋根裏の畳の上では、知らぬ間に船をこぎ出す者が多かった。講義は合宿の前半で終了したが、居眠りのたたりはその後の練習にてきめんに現われて、脚足発進など理論が解っていないのでどうしてもうまく出来ないことが続出し、成程、馬術というものはただ乗るだけでなく、馬の知識を体得し頭を使わなければ上手にならないものだと悟った。

さて、ぎっしり組まれた一日のスケジュールの中で、自由時間と言えばエッセンの後だけであるが、日中はもっぱら眠ることに熱中したから、ほっとした解放感と一緒にほんとうに寛いだ気分になれるのは、晩飯が済んで消燈までの三時間余である。薄暗い裸電球の下で、来襲する蚊をピシャリピシャリ叩きながら「おれ、おまえ」で語り合うことは楽しかった。話題はあらゆる経験談に及ぶも、勿論馬に関するものが一番多かった。しかし最初のうちは、この愉しみもそっちのけで、英語のリーダーを辞書片手にせっせと読んでいる者もいた。「頑張るなあ」と一上級生が声をかけると、それに呼応するかのように、「俺たちゃ学問はやらんことにしとるぜ」という声が隅の方から聞えた。「合宿のときだけは頭を空っぽにしたいね」と誰かが合槌をうつと、「んだが、そうできればいっぺが、ほんとはできねえべえ。今やんねえとやるときが無かっぺよ」とKは出身地の方言まるだしでいった。しかし三日目にもなると、勉強家のKも歓談の魅力には抗しきれなかったとみえて、語り仲間の一人となり、皆と寮歌をどなったり（彼の「ち声」の喧々たるやポプラ並木の向うまで響いたそうな）バカ話でふざけたりもした。そのバカ話にこんなことがあったっけ。

七日目の夜であったか、例のアタックに出かけたTが息をはずませて階段を駈け昇って来た。Tは昼ま偵察しておいた林の横の通称野菜市場（？）目指して出かけたそうである。すべり出しは順調にゆき、ものの二分も仕事（？）を続けたとき、辺りに人の気配を感じたのでひよいと顔を上げると、あらぬものを見てしまった。豪傑Tのショックたるや！「北楡号」の覚えめでたく「こ」の字型の洗礼を肩のうえに受けたときの比にあらず。びっくり仰天、アタック

の菱物も放っぽり出して息も切らさず走り帰って来たのである。Tの異常な興奮は堅根農の全住人に感染したが、同輩の僕等に最も強く作用して、それが九時の消燈後も一偶で「ヒソヒソ……」と続いたのが、「黙れッ！」という副将の大喝で終幕となってしまった。

乾草上げには、練習とは違った青春の謳歌を感じさせる生の歓喜と言うべきものが有った。農場の「潮海」や「初勇」をひき出して馬車をつけると、二米もある三岐のフォークを手に二台に分乗して牧草地へ向う。ポプラ並木にかかると、頭の上から「カッコウ、カッコウ」と聞えてくる。馬車の荷台から足をぶらつかせながら鼻歌をうなっている三年生。部班連動のとき馬場の中央でギョロリと大きな目を光らせ、僕等を震撼たらしめるあの〝馬場の鬼〟でさえ、「どーだ、この気分は……ロマンテイックだろう。」と、無上の感興にひたりつつ、まるで夢見る人の如く遙か三角山の方を眺めやっている。馬車の行く道に沿って両側に立ち並ぶポプラの木々は、真直ぐに天を突いて聳え、目もさめるばかりの濃緑に輝きわたっている。乾いた風がサラサラと音をたて白い葉を翻返して吹く。僕等の目の前に在るのはまぎれもない北海道の夏なのだ。あの夢にまで見た夏のポプラ並木だ。ぼくは、レモンの花匂う、南国九州の古ぼけた田舎の我家で、壁に貼ったポプラ並木の色刷り写真に見入ってはどんなにか北国への憧れに胸を躍らせたものだったろう。今、このポプラ並木に在って現実の幸福感に陶酔するの余り、自分があの写真の中の人物のような錯覚にさえ陥るのである。ポプラ並木に続くあかしや並木を通り抜けて五〇米ばかり行くと、目的の牧草地に着く。白っぽい地面に黒々と影を下して乾草の堆積が連なっている刈込みの済んだ夏の牧草地。そこには強烈な日光と熱気が溢ち溢ち



（鞍の手入、部室前にて）

ている。さあ！いよいよ仕事だ。

ドン・キ・ホーテの恰好よろしく、フォークもろとも奇声を発して突進する者がいるかと思えば、モビィデイックの背なに憎悪をこめた銛を打ち込むエイハブ船長を演ずる者も現れた。真に迫って形相もすさまじくザクリ、ぐさりと突き刺すけれど、この平原の大怪物たるや潮を吹くわけでも血を流すわけでもなく、ましてこちとらが五体の一部をもぎ取られる心配はさらさらない代物で、包囲攻撃の前にやがてあえなくも壊滅してしまう。

地上の乾草の山が低くなるにつれ、馬車の上の乾草はだんだん高くなっていく。しかし馬車への積込み方が仲々難しいらしい。とにかく辺り一面乾草だらけなので、どこからどこ迄が馬車の台だかわからぬし、盛んに上級生が「前荷」だとか「後に積みすぎた」とか言っているところをみると、相当技術を要すると思われた。その馬車の上のまとめ役を古強者の四年生がやったとき、どうした狂いか荷台から大きくはみ出したのに気づかず地面の上にまでどんどん積み重ねていったので、いざ馬車を出してみると半分ばかりそっくり元の場所に残ってしまった。また或る二年生がやったときは出発して十米も行かぬうち、馬車がカーブしたはずみに荷台だけがぐーっと傾いて全部の乾草がひっくり返ってしまった。一年生のM君、「してやったり！」と鼻高々の上気嫌で乾草の上に揺られて行ったが、あに計らん、踏切りを横切る瞬間どっとばかりに崩れ落ちた。あんまりくやしいので、彼氏、三角形の石頭で鉄道線路を「コチン！」とどやしつけてやったそうな。しかし〝苦有れば楽多し〟で、うまく積み終えて厩舎へ向うときの気分はまた格別によい。快い疲労感と共に乾草の上に深々と横たわって青い空を見る。日光はまともにぶつかり顔に熱く、時折、冷いあかしやの梢がサッと頬をなでて過ぎる。そんなとき、今まで慣れっこになっていた乾草の芳をふっと意識するが、この水気の失せた草のかもし出す一見ほこりっぽく、しかしその奥にすっぱいような一抹の清涼味の感じられる淡白な香の中には、からりと晴れあがった夏そのものがある。そうやって馬車に揺られながら「ことこと」という音を聞いていると、いつの間にか睡くなってしまうのである。

やがて無事厩舎に着くとパンザイとなり、それからこれを牧草地でやったと同じ要領で十尺ぐらい高い厩の二階へ上げるのであるが、牧草地でやるときと違い、ここでは息もつまるばかり乾草の屑を頭から被り通しとなった。二階の入口に陣取った者は受取った乾草を更に小屋の奥へと送り込む。もうもうと乾草の屑の舞う薄暗がりには、手拭いの覆面で武装した者がおり、送り込まれる乾草を、全身で圧迫し「ギュッ！ギュッ！」とつめ込む。こんな訳だから、やっと一日の乾草上げが終ると臍の穴に迄、乾草の屑を発見した次第である。

農場の仕事を手伝ったときの乾草の「堆積」造りも亦爽快だった。我々の仕事は、広い牧草地を縦横に掻き廻して行く畜力レーキが無数に作る乾草の溜りを、フォークで農場のおっさんのいる所まで運ぶのであるが、農場のおっさんは、それを地面近くの直径が四米もあろう見事なドーム型の山に築いてゆく。その手さばきの鮮やかさ、みるみる出来上がった乾草の山の単純な均勢美、これこそ熟練のたまものだと感服した。

合宿あけの当日は合宿の成果を試す競技会が開かれた。東京を中

心に東西二軍に分かれると、両軍とも十人前後のメンバーになった。記録係りが騎手と騎乗馬名を大声で呼ぶと、颯爽と入場した選手は先ずは左右の巻乗りなどで軽く足習しをやり、ここ迄は大選手なみに貫録十分である。しかしその後がうまくいかぬのが人の常らしい。練習では雲の上の妙技を見せて僕等の羨望を集めていた上級生も、この日ばかりは「それまで！」と無情に響く主将の審判の声と共にすごすごと陣屋にひき下る者多きを数えた。ぼくは「北翠号」に乗ることに決めていた。十日間も当番としてめんどうを見て来たので、ぼくの顔を覚え、よく慣ついてくれたようだった。〃翠〃の青い大きな目をじっと見ながら《俺の心意気をくんで見事に飛んでくれるだろう》と喜ばしい期待で胸が躍った。

いよいよ五番目に入場し、スタートを切って第一障碍に向った。脱兎のごとく突進すると思いきや、〃翠〃はあい変らずコツコツと極度に短縮した速歩をふむばかりでいっこうに駈足にならない。拍車をぶち込んだら、白く目をむいて首を彎曲させ尾をくるりくるりと廻すのみで、増す増すぎこちなくなった。すっかり期待が外れて「しまったっ！」と思った。がすぐ気を取り直して《ここが腕の見せどころ》とあらゆる扶助に熱中した。ところが練習では相当うまく出来たはずの推進が、むやみに馬の腹をしめつけたり胸をつき出すだけで思わず顔を赤らめたほどまずかったし、悲しいかな！固定しょうと懸命に努力する挙すら上体と一緒にぐらぐら揺れた。そうこうしているうち、膠着をつづけながらもやっと「笹」の前まで来ると、〃翠〃はたじたじと後退を始め、審判の声が「拒否！再行！」と響いた。その時からぼくはもう「扶助」のいかなるものかも忘れてしまって、めちゃめちゃに拍車を使い始めた。入部当初、ひらりひらりと鮮やかな飛越をやる上級生を見ては、それが拍車のせいによるものだとばかり思いこみ《拍車さえ当てれば必ず飛ぶものだ》とひとり決めてしまったが、あの最初の印象による間違った考えがいま再び頭をもたげて来たのである。その結果ぼくは顔をまっ赤にして拍車をぶつけることに没頭し、〃翠〃の膠着更に甚だしく、果せるかな二拒避失権と相成った。

ぼくは皆の所へ引返して来ると、いかにも当然らしく「翠はばか馬だからそんな事をしたらコチコチになって飛ばないよ」と言った。するとTさんが「おまえ、鞍の上でがたがたすりやどんな馬だって飛ばないさ」と笑って言ったが、それを聞いて、「術」の未熟さをことさら馬のせいにしょうとした自分の根性が急に恥かしくなった。自分の期待に反して駈け出さなかった北翠号に「こん畜生！」と腹を立て、ただ痛みつけさえすればとび出すだろうと、馬を一個の機械としてあしらった自分が恥かしかった。「俺のかわいい奴」などと呼んで多少とも馬と心が通じ合っていたつもりでいたのも、実は「愛馬心」とは程遠い浅薄な愛顧趣味の為せる業にすぎなかったのだ。ここに於いて、ぼくは馬術の難しさ奥ゆかしさを「人馬一体」という語の中に改めて痛感させられ、馬術の本義にはじめて触れたような気がした。

夕方、サイロの前の野外食卓の上には駄菓子の山が並び、ささやかながらアルコールも少々配給になり、合宿打上げのコンパが開かれた。例年のことだろうが、合宿のうちに僕等新入部員にはみな愛称が出来てしまっていた。ケロちゃん、お父ちゃん、PRのS、ねいもうのN、消耗のK等であった。特筆すべきはPRのSで、草地へ

馬を縛ぎに連れて行くときポプラ並木で観光客が記念写真を撮っているのを見つけると、Sはそばへ裸馬を乗りつけ「撮りませんか！」と呼びかける。そして北海道で馬に触ることですっかり有頂天の旅行客と一緒に馬上雄然と写真におさまり「出来たら送って下さい」と〝北海道大学馬術部〟の肩書きのついた名刺をさし出すのである。さすがは「北大馬術部の名を数多くの国民に知らしめん！」と豪語する厚顔無比のSのこと、いつも女学生ばかりには目がなく、ちゃっかり〝ラブ〟をPRに乗せているようであった。ねいもうのN、消耗のK、獰猛のTは合宿中一番多く使われた流行語（？）に由来する。乾草上げでぐったり疲れて「あー消耗……」と言い、そんなとき先輩から一人一個の酪農アイスクリームの差入れがあると「快調！快調！」と小躍りした。又、めしのとき炊当が「まだ釜に残ってます」と言うのを聞いてあたふた盛りに立つ者は「ねいもう！獰猛！不埒！」と、耳をつん裂く罵声をあびて一瞬ひるむのであるが、その声たるや何を隠そう「俺の胃袋には底がねえ」と自負する食欲の権化、当の〝獰猛のT〟の必死の絶叫なのである。さてしてぼくは〝むつつり剣豪のA〟である。ぼくは生まれ落ちた時から唖とつんぼの女中の「おスエしゃん」に育てられたおかげで、相手の表情と動作を知ることに長けており、口を開いて確かめる必要がない。それに言語を使って表現するとなるとなかなかの努力を要するため、最少限の言葉を最大限に活用することをモットーとしている。これが「むつつり」の真相であり、また読んで字の如くぼくの先祖は、かの剣豪、荒木又右衛門だ。かような訳でむっつりに加えて「剣豪」までもいただいた次第である。

涼風に吹かれ菓子をかじりつつ、苦しくも愉しかった十日間を想いしばし歓談がうち続くうち、あたりはほの暗くなって来た。日焼けした皆の顔は夕闇にとけこんで朦朧となり、半袖シャツと歯の白さが非常に印象的である。四年生のOさんが「ねごと」の話を一同に披露された。或る夜、ふと目を醒ましてOさんは「ムニャムニャ……」という声に耳をそば立てた。するとその声はつづいてはっきり「パカパカパカ！パカパカパカ！」と調子良く繰り返した。Oさんは四年間の合宿を通じて、夢の中で歌を唱う先輩などずいぶん変り種にもお耳にかかったが、こんなのは初めてなので闇をすかしてよく見ると、さもあらん！寝言の主は三年生の〝T坊や〟だった。また別の夜、「おーい」と耳もとで叫ぶ声に一ぺんに目が醒めて、みると隣りに寝ている一年生のSが「おーい待ってくれ！フォーク、フォーク！」と早口に言ったと思ったら、ガバとはね起きて手さぐりで暫くゴソゴソと音をたてていたが、やがてドサリと倒れるとまたすやすや寝入ってしまったというのである。Oさんのこの話に皆はどっと笑った。〝T坊の夢〟は内容はともあれ馬と部員の「絆」の堅さを如実に証明した。それにしてもSのは一体何だろう？それについて続いてYが述べたところによると、その日の乾草上げのとき、奥でつめ込みをやっていたSが「おい、フォークを注意してくれよ」と真剣に頼んだにもかかわらず、不慣れなYのフォークがSの体を二度も突いてしまったそうだ。Sが夢にまで見たのは「恐怖のフォーク」だったのである。Yはほんとに罪なことをし出かしたものだ。

いよいよささやかな宴も終りに近ずいたとき、僕等一年生から合宿の感想を述べていった。皆の発言は種々雑多で、巻乗りが上達したと喜んだり何にもうまくならなかったと悲観したり、長い鐙上げ

で軽速足をやらせた上級生に怨みごとを述べたり、ひとりが乾草馬車の上に寝ころんだときの詩情を〝忘れ難いもの〟と評せばもうひとりはいやおれは乾草を「エイ！」と持ち上げる瞬間のエネルギー感が好きだと言い張ったりした。しかし、皆が言おうとしていることは結局は同じことなのだ。馬術の面白さと同時にその難しさを知ったこと。馬が心から好きになったこと。これが僕等が得た合宿の最大の成果だった。合宿中改めて知った「馬」についてぼくは「人間の言うことを素直にきくところが非常に好きだ」と言ったが、それは、あのおとなしい北斗にひっかけられてポプラ並木で落馬しそうになり、一馬力の威力を実感し、また飼付けのとき突然胸を噛みつかれて以来近寄り難かった北楡が、手入れの後鼻をすり寄せて来たことがあり、荒々しい野性の中にも純情・素朴さの有ることを知ったからである。ぼくはむしろ「馬の馬たるゆえん」が好きになった」と言うべきだったのかもしれない。ところで「成果」について言うなら、もう一つ忘れてならないものがある。それは、激しい練習のさなかに、また作業の合間の短い会話や裸電球の下でのしんみりした語らいのうちに幾多の上級生の中に僕等が常に発見したものであり、馬という「生きもの」を愛することによって得たものである。ぼくについて言うなら、人も馬もほっとした気分になるあの練習後の手入れどき、馬の体温を額に受けながら汗ばんだ体を拭いてやり、肢を抱えて蹄を洗ってやるときなど一番強く感じられたものである。僕等の誰も強いて口にしなかったけれど、合宿の十日間を通じて終始心の奥底に感じたもの。それは

「新入生よ、お前達は従順で用心深くあるばかりではならぬ。純情であることは単純な人間になることとは違うぞ。馬の一体の生活の中に悦楽を得よ。而して蝙蝠の眼をした物質主義者に決してなるな！　野人たれ、更に野人たれ！」

と秘かに呼びかける〝反逆の精神〟に外ならない。

——終り——



諸記録

自馬紹介

戦績表

カップ写真

モノグラム・ペナント・メダル贈呈者名簿

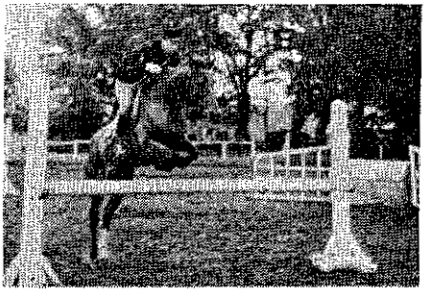
モノグラム・ペナントについて

北大馬術部規約

住所録

^^自馬紹介^^

玉沢一晴（薬四）



◇北澤号◇　彼女は一白が際だって白い形の良い美しい馬です。繋養馬中一番と云って良い馬格を有し、仲々良い顔をしています。体高は一米五十五糎くらいで後駆がよく発達し前軀も美しくよく釣合を保っています。大きな鞏甲をもち中ようを得た腹を持っています。惜しい事には稍細目の良くのびた首の保持が悪く、いつも水平より少し上方へ伸したきりで首と項に収縮を求め得ない。というのは部で繋養するようになって間もなく鞏甲に鞍傷を起したそうです。前後橋ともに高い軍鞍のような逍遙鞍を彼女には用いていたのですが、鞍がなれていなかった為かと思われます。その傷が重大化し、とうとう神経まで切らねばならぬような大手術を受けた為です。

そのような欠点はありますが、全日本馬術大会に入賞した事でもわかるように、満点馬と云われていました。綜合馬術の馬場程度なら首が悪いにせよよくこなし又二跨跡運動も覚えています。

部員が新入の頃は誰でも先ず彼女に障碍飛越の要領を教えてもらいます。馬体の手入れの時等はまるで猫のようにおとなしく、新入部員にとっては全く安心して近づける馬で、常に女子部員の責任自馬です。

一寸困った癖をもっています。何かの拍子で放馬した時には(自分で綱をとくやうな事はありませんが)なかなかつかまえる事が出来ません。つかまえに行くと、もう一歩で手がとどく所まで近づくまでゆうゆと周囲の草を食べています。そこまで近づいた時に突じょ後肢旋回をして二十米ぐらい逃げて、人が近づくまで又草をのんびりとたべています。こんな事を何度となく、くりかえし、エンバク、飼桶等でごまかそうとしてもそうはいきません。一人で朝から昼まで追回していた事があります。昼餉の時に同輩が手助けしてくれてやっとつかまえました。もっとも昼餉の時間だったからでしょうが。

亀の甲より年の功とはよく云ったもので、このような要領の良さを持っています。その上、カメラを向けるとちゃんとポーズをしてくれます。写真家やカメラ狂にとってはまことにありがたいかぎり

で、いつもポプラ並木の観光客やカレンダー作りのモデルさんのお相手などをさせられます。

したがってずいぶんと高令であるので、試合の時にも一昨年は一日に二回位しか使用出来ず、昨年はほとんど使用していません。練習にもひかえ目に使用しています。さすがの名馬も寄る年波には抗いきれず、一昨年あたりからめだって能力が落ちて来ました。

一昨年の夏に馬転して以来二カ月ほど全く障碍を恐がっていました。何度彼女もこれまでかと思った事だろう。昨年は少々飛びましたけれど試合での使用はさしひかえていましたが、九月の部内競技会で、馬場が少し軟弱であった為に馬転して胸を強く打って、バレーボールを半分に切ったくらいの大きさにはれてしまい、それ以来ずっと休ませております。

近々彼女は長年住みなれた厩舎を去らねばならぬので、まことになごり惜しい所です。

北潭号

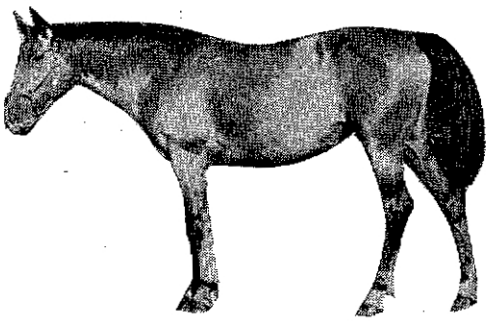
（旧　シラカワ）

中半血・牝・鹿毛	流星・左後一白
昭和17・5・10生	父　昭　山（アノ系）
北海道石狩町産	母　第二白川（　）
成績	
第10回全日本（東京　昭和32・11）	中障A（生田　勝一）　5位

◇北檣号◇　昨年は総体的に不調に終りましたが、繋養馬中随一の優秀馬です。それだけに乗ってはなかなかむずかしい馬です。馬場を踏ませたら北斗に優るとも劣らぬ馬で北斗のような短切な歩様ではなく、なめらかなゆったりとした歩様をもっています。反撞は軟かで乗り心地が極めて良く、左右がほぼ均斉な柔軟さをもっています。乙馬場が少々無理かなと思われる程度に調教されています。障碍は一米三十程度なら十分に飛越する能力を有しています。が前軀の屈げが不充分でいささか流しかげんです。街乗の時は一番楽で、物を見ずにどんな所でもどんどん進んで行きます。

馬格は少さい方ですが、サンショハコップデモの口でぴりっとしまっています。そして一番の美女である。その上気位が高い。だからきれいずきで馬房をやたらとよごしたりはしない。又、彼女の馬房の前でボーッとしているといきなりかみつかれる。飼を食べている時に近ずこうものならそれこそひどい目に会わされます。部員の誰もが彼女のキッスマークの一つや二つは記念としていただいています。

夏にポプラ並木見物のお客さんが、連れの女性に一つ良い所を見せようなどとフラチな気持で草をもったり又は何ももたづに近ずこうものなら、気障ないけすかない奴とばかりに、全く無視するか時にはもうれつな勢でかみついていきます。そういった並木見物人の



一人で新調したての背広をやぶられたとベソをかいていたのをみた事もあります。

と云って、彼女とてやたらに人をかんだりけったりするわけではありません。本当に愛する心をもって接する者にはとてもよくなつき、何でも云う事を聞き、いたずらもそういう人の眼の前にはぴたりと止めてしまいます。

彼女はロープをとく名人です。食物がなくなりたいくつしてくると実に巧みにロープをといて一人で散歩と洒落込みます。馬繋柱に何頭もならべてつなぎ手入を行うのですが、その時も一生懸命にロープをときにかかり、時にはとなりの馬のロープをといて上げます。きっと本性は気の良い親切な馬なのでしょう。

◇**北斗号**◇　最高令馬の一頭です。馬場運動は繋養馬中一番正確で、最もよく調教された馬です。少しばかり馬が動かし得るようになった頃斜横歩、肩を内へ等のまねごとをしてみるのもこの北斗号に於いてです。

しかし北斗号はやや歩度が短切にすぎるようです。その為少々乗れるようになった一年部員によく乗られる馬で、結局調教がよく崩される馬です。

北斗号の昨年（三十五年）の体調は、生田先輩、森本、先輩の頃よ

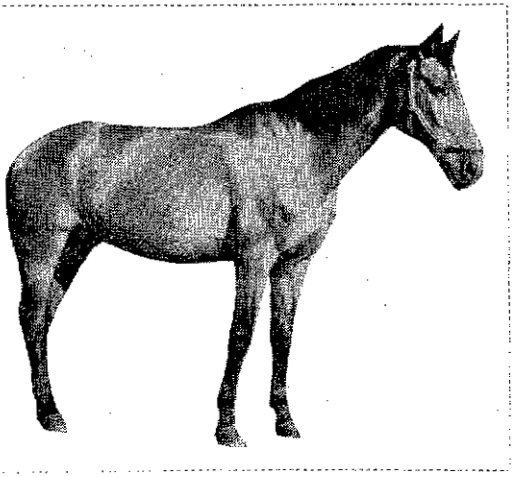
北楡号

（旧　ミス・アップデール）

アノ系・牝・栗毛	後二白
昭和21　生	父　勇　進（　）
北海道浦河郡産	母　小　岩　井（アラ雑）

成績

第13回国体（富山　昭和33・10）	総合（千葉　幹夫）	1位
第1回全日学（京都　昭和33・10）	総合（千葉　幹夫）	3位
第1回全日学（京都　昭和33・10）	中障（千葉　幹夫）	2位



北斗号

（旧金花）

中半血・騙・鹿毛	
昭和17・6・13生	北海道静内町産
	父　森　金（中半血）
	母　第二ジューラス（アノ系）

成績

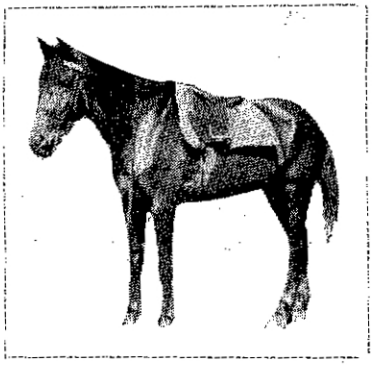
第8回全日本（川崎　昭和31・11）	中障（鎌田　正人）	4位
第1回関東馬術（仁川　昭和31・11）	複合（樋口　正明）	5位

りずっと悪いようです。一段とやせ、脊が凹み、全体的にどことなく若々しい張りが失せたようです。岡本先輩（31年卒）が過日来部された折、つくづくと「昔の面影がないなー。」と云っておられました。

われわれ部員の技術を一応考えないものとしても、障碍の拒止、逃避等一段と上手になった感じです。それでも技術の秀れた先輩や、そういった人がのるとまだよく飛越しますし、国体等で活躍出来るのではないかとも思われ、とにかくわれわれヘボにとっては、つくづく馬術のむづかしさ、よく調教された馬になればまたそれだけむづかしいと云う事を感じさせられます。

北斗号は飼養馬中のボスで、他の馬が近よって来ると尻を向けたり、かみついたりで、勇ましい事かぎりなしです。その上張り綱をとくのが上手で、時々放馬してしまい、そこで「こやつ！」と思ってこんどはとけぬように結ぶと、「何のこれしき」と思ってか、首をふって、頭絡をうまくとってしまい、好きな所へいって好きな事をします。土の上に脊をこすったり、はねたり、草をたべたり、水を飲んだり。全く感心するやら、忌々しいやら……。

北斗号もなかなか頭がよくて、「こ奴は新米だな」と見抜くと、手入れをするときに、その人間様をからかいます。こわごわ蹄を持ち上げ洗いにかかると、人間の顔色や態度を見ながら肢を一寸うごかして楽しんでいます。そうかと云って、人をからかってばかりいる性悪ではなくて、人にはむしろ親切で、街乗等の時は新米を安全に運んでくれます。又障碍の飛越をこんせつていねいに教えてくれます。たとえ人がどんなにグラグラしてようとも。



◇北慄号◇　ホクヒョウでもホクピョウでもなくホクビョウです。中央の大会等でもなかなか正しくホクビョウと呼んでくれず、ホクヒョウだのホクピョウだのと呼ばれ、全くがっかりします。姓名学上からこの名前を判断すると、馬の名前としては全くこの上なき良い名前だそうで、それにはじず実に優秀な馬でした。

と云うのは、一昨年（三十四年）十一月十九日に思わぬ事故で他界させてしまいました。今にしてますますなつかしく思い出され、一昨年国体大障碍での佐伯先輩との人馬一体の活躍ぶり、合宿等で馬脊被上の人間の落しぶり等つきぬ語り草の種はありあまるほどです。

繋養馬中一番能力のあった馬でした。栄養が良くなると連銭が出て、つやつやと黒光を発し、その輝光はどんな宝石も遠くおよばず、全く生き物のみがもつ美しい光です。首、鼻柱あたりにサラブレットの面影がみえるような気がする、そんな馬でした。又、手入れの時にも頭絡を使用せずともじっとおとなしくしていましたし、呼べば応えてついて来ました。なつかしさがつもり、あまり多くを書きたくありません。

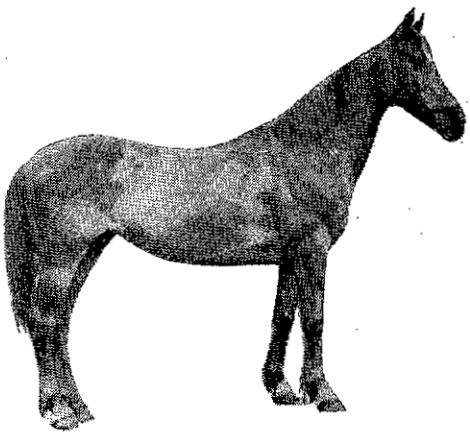
北慄号

（旧　ミストクシマ）

中半血・牝・鹿毛	父　ローライト（アノ系）
昭和20・4・5生	母　北　進（サラ雑）
北海道浦河町産	

成績

第10回全日本（東京　昭和32・11）	中障（生田　勝一）	5位
第13回国体（富山　昭和33・10）	大障（生田　勝一）	4位
第14回国体（東京　昭和34・10）	大障（佐伯　雄二）	4位



◇北嶺号◇ 首と軀間が長く大きな軽甲とよく発達した後軀をもったバネのある馬です。一見駄馬の感のある体でありながら、繋養馬中一番活躍している馬で、日本の数ある障碍馬のうち、十指に数え得る名馬であると自慢しています。

「嶺」は大きな大会の雰囲気を感じとり、自から進んで一つやってやれという気力、乗手にとっては心から馬を信頼しきれるそういった気力を持っています。左記の戦績をみてもわかるように、障碍馬としてはよくこなされた、巧みな馬ですが、体の作りの関係上馬場運動は良い点数が得られないうらみがあり、斜横歩、横歩は常歩、速歩では何とかやるようですが、馬場馬術も行うとすれば綜合馬術の調教審査(日馬連の規定での)程度がせきのやまのようです。

しかし、乗ってみると、反撞は大きいけれど柔かく実に気持がよく、ちょうど、晴れた夏の日の海で沖に出て大きな波に豊にゆられている感じです。もっとも、新米にとっては、つらいことつらいこと、十分ものれば下りたくなります。

手入の時にも非常におとなしく、左の前肢が終ると、左後肢を上げ手入れしやすいようにしてまっています。片手を怪我して使えない時でも、片手で十分踏を洗ってやる事が出来ます。

実に可愛らしい顔をしていて、特に上唇がよく発達していて、えん麦、ニンジン、青草などを持って行くと、ただ単にばくりと食いつくのではなくて、その上唇をすーとつぼめてもそもそ動かします。その顔の何と愛嬌のある事でしょう!

ただ一寸困る事は、貨車で輸送すると立ちばれを起すこと、一寸ぬかる路だと後肢をすべらしがちな事くらいで、それからもう一つは、これはもう人間の方が悪いのですが、新入部員などが装勒しようとしていて、一寸ゆだんしたり、ゴキゲンの悪い時、しばらく乗られていなくてハッテいるときは頭を高く上げ衛身をかけさせません。まごまごしているうちにお馬さんはイヤケがさして逃げだしてしまい、首には手綱がかかったままなのですから、勒はひとたまりもなくずたずたになってしまいます。どんな馬でもそうですが装勒のさいは十二分に注意し、馬にいやがられないよう工夫せねばならぬと思いました。このようにして放馬してしまうと、もう一寸やそっとではつかまりません。こんな事が年に二、三度はありますが、しかし、人間がボーとしているのが一番罪作りの原因です。

北嶺号

（旧ヨシタカ）

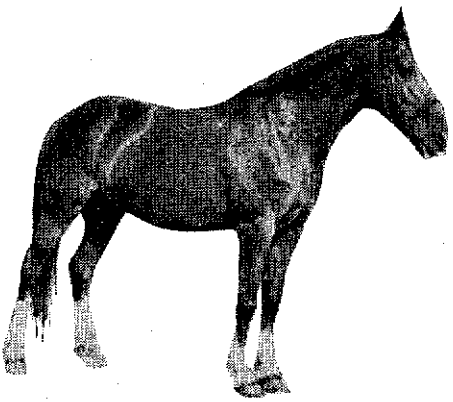
中半血・牝・栗毛　流星・右前後半白

昭和19・5・13生　北海道大樹町産

父　オンブラージュ（アノ系）

母　白　梅（中半血）

成績	
第10回国体（川崎　昭和30・11）	六段（宮沢　寛）	3位
第10回国体（川崎　昭和30・11）	大障（大久保利彦）	5位
第8回全日本（川崎　昭和30・11）	六段（大久保利彦）	2位
第11回国体（宝塚　昭和31・11）	六段（山本　智）	5位
第1回関東馬術（仁川　昭和31・11）	六段（山本　智）	1位
第10回全日本（東京　昭和32・10）	六段（樋口　正明）	2位
第13回国体（富山　昭和33・10）	六段（生田　勝一）	4位
第14回国体（東京　昭和34・10）	六段（森本　悌次）	1位
第12回全日本（東京　昭和34・10）	六段（森本　悌次）	5位
第15回国体（熊本　昭和35・10）	中障（大場　善明）	1位
第15回国体（熊本　昭和35・10）	六段（千葉　祐記）	3位



◇北翠号◇　首が太さの割には短かいようですが美しい馬です。常に一番張り切っているのが「翠」で、女性専用馬とされていました。美しいものは全て神経が細やかなのでしょうか、とにかく一番の恐がりやで一寸した事にすぐおどろき、首を高く上げ、鼻口をふくらませ、目をおどおどさせ、さも恐ろしげに恐怖の感情を表現します。昨年（三十五年）の夏に水槽の置いてあるすぐ後の農場の厩舎の屋根が修理されましたが、屋根をなおすときのあのやかましい音と、キラキラ光るトタン板にすっかりおびえてしまい、修理が終ってしばらくたった後でも、水槽に近づくのをこわがりました。

二十九年に先生方、先輩各位の御努力の結果自馬となった六頭の中では、一番調教の遅れた馬ではないかと思われます。

口がかたく誘導のしにくい馬ですが、それさえうまくやれば、障碍の飛越振りは決して下手ではありません。馬の調教は口向きを作る事だと云いますが、その点で現在は失格ですが、衛身受けをうまく教え込めば、一米三十糎くらいは楽に飛越するのですから、中央の大会で十分良い成績をあげうるものと思っています。

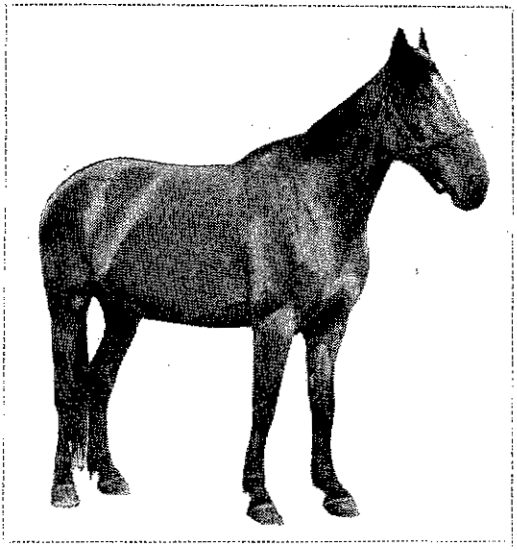
尤も、現在すでに十三才ですので、ここ一、二年のうちに名を成さなければ、単なる練習馬で生涯を終ってしまいそうです。

障碍練習中でもしょっちゅう左に逃げ、それが遠くの方から実にはっきり騎手に感じられる逃げかたをしますが、その時一寸馬と相談すれば事足るのですが、一年目、二年目の部員にはこなしきれぬようです。北翠が拒止又は逃避をする際の感じは、正にエンジンが焼き切れたと云う感じで、頭を上げ口をひんまげて目をむき尾をぐるぐる回し出すと、もう決して飛びません。結局の所、北翠は障碍が恐しいので、乗手は粗暴な挙をさけ、馬に充分信頼されればそれでよいようです。

以上六頭が昭和二十九年十一月から繋養している馬です。その年に団体があり、当時、先生方、先輩方が大いに苦心されて、自馬とされたように聞きおよんでいますが、そのへんの事情は、当然誰かが書かれる事と思いますのでここでは割愛いたします。

北翠号

（旧　エリザベス）	
種類不詳・牝・栗毛	流星・四白　　父　不　詳
昭和23・　生	北海道豊平町産　　母　不　詳



◇北春号◇　旧名林城号で北大日高実験牧場の産である事は左記の通りです。林城の林の字は、北春の生れた年の宮中の歌会の勅題であるそうで、その年に生れた馬には皆林の字がついているそうです

三十三年六月に当時の生田主将、鎌田先輩等、時の部の指導者の努力によって入れた馬です。

当時六才でしたがなんだか、やせて栄養失調のようで、頭と耳のやけに大きな奴で、名前が立派すぎる感じでした。六才にしては肩が弱いようで、くにゃくにゃして、さっぱりピリッと来る所がなく、口の悪い同好会のS氏はコンニャクコンニャクとよんでいたくらいです。今だに足腰は一寸弱いが、実にみちがえるほど立派になり北斗より大きくなりました。

部の厩に入れてまもなく肩をけられその年はほとんど物にならず、障碍の訓練を始めたのは昨年（三十五年）春からで、本格的に飛越調教を始めたのは昨年七月からでした。

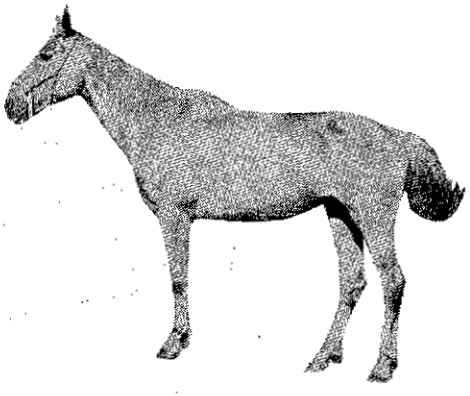
頭の割に首が細いようで後躯が外に開いていて、何となく腰が弱くて、どうもあまりパッとした所はありませんが、蹄は実にすばらしく堅牢なよい質のものです。

なかなか可愛い所のある奴で、いつも大きな大きな耳をまるで水牛の角のように水平に保っているその顔は、なにかとぼけた味があってすてがたいものです。昨年（三十五年）の春にはこんな事がありました。障碍の練習の最中の事ですが、北春君ササ障碍を飛ぶには飛んだが、平衡失って着地するや否や、にぶい音を発してみごとに転倒しました。乗り手はおどろいてすぐ下馬しましたが、我が愛すべき北春君は、立ち上がるより先に、横になったまま顔の回りに生えていた草を、さもうまそうにポリポリとやりだしました。その時の乗手の心配そうなきんちょうした顔と、馬ののんびりしたああやれやれうまかったわいと云わんばかりの顔とが、ひどく面白い対照をなし、しばらくは腹をかかえて笑いころげた事でした。

まだまだまずい所だらけの馬ですが、まったくゆかいな仲間ではあります。

北春号

（旧林城）



中半血・牝・鹿毛	父　ホシトロ（中半血）
生年月日　不詳	母　七三六（中半血）
北大日高牧場産	

◇北涼号◇　北標号を一昨三十四年十一月に失って、その代馬として、かって部員であった現在医学部医学科四年に在学の富山さんより寄贈を受けた馬です。昨年（三十五年）二月に厩に入れました。

その時は腹に仔が入っていた為に大きな腹をしていました。臨月近い大きな腹をかかえはるばる十勝国池田町の奥の高島より貨車にゆられて、馬にとっては大変な旅であった事でしょう。

きれいな栗毛で、ずっと黄色が勝っていて、夏毛は朝日をうけてきらきら金色に輝きます。黒い丈夫な質のよい睛をもっています。

性質は非常に温良です。仔が入っているのでさぞかしきかん気の馬であろうと、ばくぜんと想像していましたが、実際に会ってみておどろくほどおとなしいのには一寸気がぬけたくらいです。

四月の下旬に鹿毛のメンコイ仔馬を生み、げっそりとやせて腰角に帽子がかかるほどでした。八月には離乳させてしまい、十一月中旬には無事に仔馬を富山さんの牧場に送り届けました。

というしだいで、調教に入ったのは今年の八月からです。騎乗して、まあなんとか落ちついているのは常歩のうちだけで、速歩にすると、頭を高く揚げ、下顎をつき出して、もうれつに走り回るだけで、まったく手にあまる感がありました。最近はやや落ちついて来たようです。

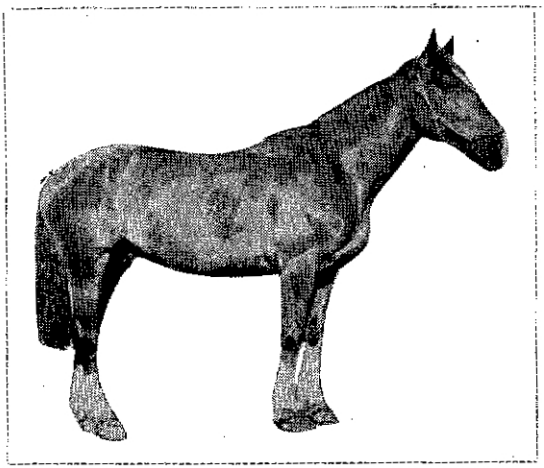
十月中旬よりぼつぼつ小障碍の飛越を、調馬索により行い、時には騎乗しての飛越も行っています。飛越ぶりは、なかなか見ごたえがあり、くびを充分伸し、脊を隆起させて、障碍物を飛び越えます。頭もかなり良さそうで、同一障碍を三回ほど試みると、三度目にはもう無暗と飛上る事もなく、上手に飛越するので、将来、良い飛越馬になるものと思われ、又そうなる事を願っています。

北涼は、人間に対しては、実におとなしいのですが、馬に対しては、なかなか強い所をもっていて、もとからいる古い馬を先駆として敬い、すみの方で小さくなってはいないで、もう十分にいばっています。部員の中には、後から来たくせに生意気だこんなやつはきらいだと云う者もいますが。

北涼号

（旧 第二グレース）

中半血・牝・栗毛	星
昭和27・4・21生	北海道河東郡産
	父 マンカツ（中半血）
	母 朗高（アノ系）



◇朝清号◇ 以上七頭の馬は厳密には学校の馬ですが、一応我々の馬としてあつかっています。しかし、朝清は北の字がついていない事からも想像されるように、農場の馬です。現在我々部員で飼育管理を行っていますが。

朝清の父方の遠い昔には、ブルトンの血が入っているとかで、どうみても乗用馬にはみえません。本来、農耕馬または馬車馬として使用するはずの所、農場側で、馬車馬としての調教に失敗し、もうれつにあばれて馬車をかけさせないので、使い道がなくなっていた所、その非凡な飛越力に目をつけて我々が借用している馬です。

外見は、みるからに重い馬ですが、一米四十糎は楽々と飛越し、六段飛越に使用しても、決して損色なしというほどの能力のある馬です。ただ、片口で左へ逃避する癖を持っているので、あの力でにげられると、一寸手の下しようがない馬です。

しかし、昨年（三十五年）は一番活躍しました。常にコンスタントな成績を上げ、悪い出来の時でも、未飛越障碍は、精々一個程度の忠実さを示してくれます。来年あたりからますます部を、せおって立つ馬でありましょう。

かって、人間にいじめられた為か、人にはあまり温良ではありません。だが実に正直な奴で、一たん駈歩を命じると、いつまでもそれを持続し、速歩又しかり、障碍に向けると乗り手がよほどポコイ事をしないかぎり、必ず通過します。又、非常に高貴な性質の所有者で、他の馬がたべるものでも、やたらと食べるような事はなく、常に自由を求めて止みません。例えば、馬場へ引き馬で行くと馬場の見える角までくると、急速踵を返し、厩舎へ向って突進します。馬場内で下馬して馬を保持するのが禁物なら、ポプラ並木での引馬、街乗の途中での下馬、引き馬等はさらに禁物で、一寸のスキにも、すごい力で逃げてしまいます。

一たん放馬すると、つかまえるのが一苦労で、燕麦等ではなかなかだましきれません。つかまえようとして、何人かでとりかこむと一番弱わそうな顔をしている部員をめがけて突進し、それも、まと

もにまっすぐに人に向かって行き、血路を切り開く術を心得た、ひとかどの兵法者でもあります。放馬したさいには、何とかして馬房へ追い込むか、さもなくば、飼付時まで自由を与え、心気のしずまるのをまち、飼桶かついで馬をだまして、つかまえるのが最上の策のようです。

夏の合宿にこんな事がありました。障碍の練習中に、騎乗者が落馬し、彼の朝清氏は、得たりや応と、得意の逃げ足で馬場を後に、スタコラサッサと三十六計をきめこむ。部員数人、燕麦をもつ者ロープを持つ者、まけてはならじと汗タラタラで追い廻すも、つい

朝清号

中半血・騙・栗毛	父　芳嶺（中半血）
生年月日　不詳	北大日高牧場産　母　七三六（中半血）

につかまらず。その内に練習も終る時間になり、馬がみんな整列した頃、時やよしと、朝清一人悠然と馬場へ再登場し、いつも已のならぶ所に到りて、ぴたりと不動の姿勢をとったので、楽につかまえる事が出来ました。思うに、「予、いかに逃げようと、終りの挨拶欠かすわけにはゆかぬ。終り良ければ全て良し。」と心得てか。一寸ふざけた野郎で追い廻した連中のおこるまい事か、中にいた連中は大笑いでした。

これが朝清の全てではありません。この他にも色々面白い事をしでかす奴です。

何か我愛馬共の悪い事ばかりを書きつらねてしまったので、ここらでほめておかねば、けられたり、かまれたりするような気がしてなりません。

「癖馬に悪馬なし」という位です、我愛馬共は、皆それぞれに名馬たる素質十分です。

これで繋養馬の紹介は終りますが、私の、まことに拙い文章をもって、我々の愛馬の面影の一端なりとも、お伝え し得たら、これにすぐる幸せはありません。

普段文を草する事なき者の、又、馬を見る目の悪しき者のなす紹介である事を、おふくみ置きのほどを。



戦　績　表

Ⅰ　全国帝大連盟戦（国立七大学馬術定期戦）（S12～35年）

Ⅱ　全国高校馬術大会（S 5～17年）

Ⅲ　東北北海道学生馬術選手権大会（S27～35年）

Ⅲ　対東北大学定期戦（S 6～35年）

Ⅴ　対帯広畜産大学定期戦（S26～35年）

Ⅵ　対札鉄馬術定期戦（S33～35年）

Ⅶ　北海道帝国大学予科対弘前高校定期戦（S11～18年）

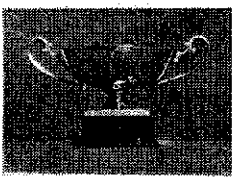
Ⅷ　対同好会定期戦

Ⅺ　其の他、年度別戦績（主に個人成績を中心とする）（S 3～35年）

編集委注　此の戦績表は「北海道大学馬術部10年誌」部報（Ⅰ号～Ⅴ号）、「北大馬術部記録ノート」（昭和28、29、30、32、33、34、35年度）を資料とし、その他岡田、斎藤(善)、両先輩より資料を提供していただいて作成したものである。採用した戦績は公式戦、あるいは、それに準じたものとし、その中でも成績の不明確なものは載せなかった。又、入賞者のない記録は努めて正確を期した積りであるが、誤報、脱落等ありましたら当部記録係宛、御連絡頂き、より一層完全なものとしたいと存じますので、皆様の御協力をお願い申し上げます。　（大場記）

I 全国帝大連盟戦

（国立七大学馬術定期戦）



東久邇宮盃

回数	昭和	大会地	成績	北大選手名	備考
1	12	学習院	優勝	松平悌、 樋本勝登、 高井久芳 山下正亮、 石川正吉、 石井昌長	
2	13	仙台	2位	池内武夫、 小田昇、 菅間威 石川正吉、 下条親、 西村雅吉 石井和彦、 山本義則、 竹中哲夫	優勝 東北大
3	14	旭川	2位	西村雅吉、 山本義則、 永倉寛 下条親、 菅間威、 石井和彦 福光幸彦、 中尾敦司	優勝 東大
4	15				
5 6 7 8 9				中止	
10	27	仙台	2位	古谷昌司、 後藤義英、 斉藤善一 永井重翁、 下飯坂隆、 榊原正人	優勝 東北大
11	28	札幌	2位	榊原正人、 加藤斉、 岡本洸 阿部晃一郎、 大久保利彦、 田中浩 正富宏之	優勝 東大
12	29	岡崎	2位	榊原正人、 加藤斉、 正富宏之 岡本洸、 大久保利彦、 加藤昌太郎	優勝 東大
13	30	京都	優勝	大久保利彦、 加藤斉、 加藤昌太郎 岡本洸、 千田哲生、 宮沢寛 荒川清	
14	31	札幌	優勝	宮沢寛、 荒川清、 樋口正明 榎本幸人、 山本智、 斉藤実	

15	32	仙　台	優勝	鍾口正明、鎌田正人、生田勝一 千葉幹夫、村山　哲、今田　哲	
16	33	東　京	優勝	生田勝一、千葉幹夫、村山　哲 森本悌次、佐伯雄二、田中紀介	北大 四連勝
17	34	名古屋	3位	森本悌次、佐伯雄二、田中紀介 本橋幹久、大場善明、	優勝 名　大
18	35	京　都	4位	大場善明、河原紀夫、湯浅正之 千葉裕記、玉沢一晴、鶴見好博 小山　毅、	優勝 京　大

（北　大　優　勝　5　回）

Ⅱ　全国高校馬術大会

回数	昭和	大会地	成績	北　大　選　手　名	備　考
7	5	陸　大	2位	藤原正武、加藤英夫、岩橋帰一 本田桓康	優勝 学習院
8	6	〃	4位	本田桓康、小笠原義顕、植村勘一	優勝 学習院
9	7	陸　士	6位	脇田代子郎、高杉直幹、小笠原義顕 滋賀秀明	優勝 広　島
10	8	陸　大	17位	池内武夫、渋谷周平、佐藤弘隆	優勝 二　高
11	9	〃	8位	小村達夫、前川静弥、石井昌長	優勝 一　高
12	10	〃	13位	石川正吉、西村雅吉、小池栄一	優勝 成　城
13	11	〃	3位	石川正吉、小池栄一、永田敏雄	優勝 一　高
14	12	〃	6位	山本義則、石井和彦、児玉堅造	優勝 成　城
15	13	〃	5位	永倉　寛、福本途夫、岡田光夫 小林誠平	優勝 成　蹊
16	14	陸　大	優勝	福本途夫、岡田光夫、小林誠平 山根乙彦	参加校数 26
17 18	15 16				
19	17	陸　大	2位	小林正英、安達　、羽鳥栄治 山崎　、宮崎利昭	

（予　科　優　勝　1　回）



北海道知事盃

Ⅲ　東北北海道学生馬術選手権大会

回数	昭和	大会地	成績	北大選手名	備考
1	27	札幌	2位	古谷昌司、後藤義英、斉藤善一 下飯坂隆、永井重喬	優勝 帯畜大
2	28	盛岡	4位	阿部晃一郎、加藤斉、榊原正人 大久保利彦、田中	優勝 岩手大
3	29	福島	2位	榊原正人、正富宏之、加藤斉 岡本洸、大久保利彦	優勝 福島大
4	30	帯広	優勝	大久保利彦、岡本洸、千田哲生 加藤斉、加藤昌太郎	
5	31	仙台		宮沢寛、樋口正明、榎本幸人 岡部満雄、荒川潜、斉藤実 生田勝一、千葉幹夫	優勝 帯畜大
6	32	札幌	優勝	樋口正明、渡辺俊弘、鎌田正人 生田勝一、千葉幹夫、村山哲 今田哲、	
7	33	盛岡	優勝	生田勝一、樋口正明、鎌田正人 千葉幹夫、村山哲、森本悌次	
8	34	札幌	優勝	森本悌次、佐伯雄二、田中紀介 本橋幹久、大場善明	当番校福島大なるも、都合により北大代行
9	35	帯広	2位	大場善明、吉田亨、河原紀夫 湯浅正之、千葉裕記、鶴見好博	優勝 帯畜大

Ⅳ 対東北大学定期戦

回数	昭和	大会地	北大選手名	勝
1	6	仙台	永松四郎、武田朝男、九鬼誠之助 伊達宗文、藤原正武	東北大
2	7	旭川	九鬼誠之助、伊達宗文、本田桓康 植村勘一	東北大
3	8	仙台	伊達宗文、滋賀秀明、森山武雄 大迫明徳、本田桓康	北大
4	9	旭川	高杉直幹、脇田代子郎、大迫明徳 吉見一郎、森山武雄	北大
5	10	旭川	吉見一郎、大迫明徳、小村達夫 石井昌長、前川静弥	北大
6	11	仙台	滋賀秀明、山下正亮、松平悌 高井久芳、桶本勝登、石井昌長	北大
7	12	旭川	前川静弥、高井久芳、石井昌長 山下正亮、池内武夫、小田昇	東北大
8	13	旭川	小田昇、菅間威、西村雅吉 山本義則、池内武夫	北大
9	14	旭川	山本義則、石井和彦、下条親 菅間威、西村雅吉、福光幸彦	北大
	15 16 17 18 19		中止	
戦後復活	27	仙台	古谷昌司、後藤義英、下飯坂隆 永井重翁、斉藤善一	東北大

	28 29 30		中　止	
1	31		宮沢　篤、荒川　清、榎本幸人、斉藤実 樋口正明、　生田勝一、　千葉幹夫	北　大
2	32	札　幌	樋口正明、　鎌田正人、　生田勝一 千葉幹夫、　村山　哲、　今田　哲 森本悌次	北　大
3	33	仙　台	生田勝一、　千葉幹夫、　村山　哲 中村美幸、　森本悌次、　佐伯雄二 田中紀介、　本橋幹久、　門奈　駿 （女子オープン戦）片山静子、佐藤典子	東北大 北　大
4	34	札　幌	森本悌次、　佐伯雄二、　田中紀介 大場善明、　吉田　亨、　原　邦男 湯浅正之、　千葉裕記、 （女子オープン戦） 片山静子、　佐藤典子、　高階嬉子	東北大 北　大
5	35	仙　台	大場善明、　湯浅正之、　千葉裕記 玉沢一晴、　鶴見好博、　市川瑞彦 （女子オープン戦）佐藤典子、高階嬉子	北　大 北　大

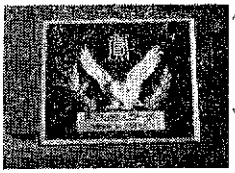
（通算成績　北大9勝6敗）

V　対帯広畜産大学定期戦

（S＝シニア　J＝ジュニア）



（シニア）北大学長盃



（ジュニア）畜大学長楯

昭和	季	大会地	クラス	北　大　選　手　名	勝
26	秋	札　幌		古谷昌司、　後藤義英、　下飯坂隆 永井重翁、　渡植貞一郎	北　大
27	秋	帯　広	S	古谷昌司、　後藤義英、　下飯坂隆 永井重翁、　斉藤善一	北　大
			J	髙野　保、　神原正人、　宮地 阿部晃一郎、　後藤義英、　大久保利彦	畜　大

28		帯広			畜大
29	春	札幌		榊原正人、 岡本 洸、 大久保利彦 正富宏之、 加藤 斉、	畜大
	秋	帯広	S	加藤 斉、 加藤昌太郎、 大久保利彦 岡本 洸、 宮沢 寛	北大
			J	榊原正人、 正富宏之、 千田哲生 宮沢 寛、 荒川 清、	畜大
30	春	札幌			北大
30	秋	帯広	S	宮沢 寛、 榎本幸人、 岡部満雄 荒川 清、 樋口正明	北大
			J	斉藤 実、 渡辺俊弘、 生田勝一 山本 智、 千葉幹夫	畜大
31	春	帯広	S	宮沢 寛、 榎本幸人、 岡部満雄 荒川 清、 樋口正明	畜大
			J	樋口正明、 渡辺俊弘、 生田勝一 山本 晴、 千葉幹夫	畜大
	秋	札幌	S	樋口正明、 今田 哲、 酒井直巳 生田勝一、 千葉幹夫	北大
			J	千葉幹夫、 村山 哲、 浅野 酒井直巳、 森本悌次	北大
32	春	札幌	S	樋口正明、 渡辺俊弘、 生田勝一 今田 哲、 村山 哲、 森本悌次	北大
			J	村山 哲、 今田 哲、 土井 敦 森本悌次、 佐伯雄二、 田中紀介	北大
	秋	帯広	S	生田勝一、 千葉幹夫、 村山 哲 今田 哲、 森本悌次、 佐伯雄二	北大
			J	森本悌次、 佐伯雄二、 田中紀介 門奈 駿、 長谷川邦夫、 本橋幹久	畜大

33	春	帯広	S	生田勝一、	千葉幹夫、	村山　哲	畜大
				森本悌次、	佐伯雄二、	本橋幹久	
			J	森本悌次、	佐伯雄二、	本橋幹久	北大
				田中紀介、	門奈　駿、	大場善明	
	秋	札幌	S	森本悌次、	佐伯雄二、	田中紀介	北大
				門奈　駿、	大場善明、	河原紀夫	
			J	大場善明、	河原紀夫、	吉田　亨	北大
				原　邦男、	湯浅正之、	高橋　陽	
34	春	札幌	S	森本悌次、	田中紀介、	佐伯雄二	北大
				本橋幹久、	大場善明		
			J	河原紀夫、	原　邦男、	湯浅正之	北大
				千葉裕記、	鶴見好博		
	秋	帯広	S	大場善明、	吉田　亨、	原　邦男	畜大
				河原紀夫、	湯浅正之、	千葉裕記	
			J	千葉裕記、	鶴見好博、	小山　毅	畜大
				玉沢一晴、	広岡暢夫、	森　弘聿	
35	春	帯広	S	大場善明、	吉田　亨、	河原紀夫	北大
				湯浅正之、	千葉裕記、	鶴見好博	
			J	千葉裕記、	鶴見好博、	小山　毅	北大
				広岡暢夫、	森　弘聿、	玉沢一晴	
	秋	札幌	S	小山　毅、	玉沢一晴、	鶴見好博	畜大
				広岡暢夫、	市川端彦		
			J	思田正臣、	堀川芳男、	清水　洋	畜大
				岡田征至、	小出秀達		

（通算成績　北大１７勝１３敗）



札鉄馬術部長盃

Ⅵ 対札鉄馬術部定期戦

昭和	季	大会地	北大選手名	勝
33	秋	北大	森本悌次、佐伯雄二、田中紀介 本橋幹久、門奈陵、	北大
34	春	北大	森本悌次、佐伯雄二、田中紀介 原邦男、千葉裕記	北大
34	秋	北大	大場善明、吉田亨、原邦男 河原紀夫、湯浅正之	北大
35	春	北大	大場善明、吉田亨、河原紀夫 湯浅正之、千葉裕記	北大

（通算成績　北大4勝0敗）

Ⅶ 北海道帝国大学予科対弘前高校定期戦

回数	昭和	大会地	北大選手名	勝
1	11	弘前	石川正吉、児玉堅造、下条親 中館	弘高
2	12		中館、半沢道郎、永倉寛 児玉堅造、石井和彦、岡田光夫	予科
3	13	弘前	永倉寛、関、岡田光夫 福本途夫、小林誠平、山根乙彦	予科
4	14		中止	
5	15			弘高
6	16	弘前		予科
7	17	札幌		予科
	18		中止	

（通算成績　予科4勝2敗）

対同好会定期戦

回数	昭和	優勝チーム	同好会選手名	北大馬術部選手名
1	31（春）	同好会	正富、岡本、渡楨、武田、滝沢、斉藤、下飯坂、佐合、田中(昭)、佐々木、松尾	
2	31（秋）	馬術部		
3	32（春）	引分け	半沢、岡本、正富、渡楨、滝沢、渡辺、松尾、松橋、田中(一)、小野、佐々木、内藤、武田、	樋口、渡辺、伊藤、生田、千葉、今田、村山、森本、佐伯、長谷川、町田、門奈、田中、
4	33（春）	同好会	松尾、小野、滝沢、鎌田、竹田、佐合、田中(一)、乾、岡本、	村山、生田、門奈、森本、本橋、千葉、佐伯、長谷川、田中、
5	33（秋）	馬術部	斉藤、滝沢、田中(一)、田中(昭)、西村、	門奈、佐伯、森本、本橋、田中、
6	34（春）	同好会	滝沢、佐合、松尾、正富、生田、乾、半沢、斉藤、田中(昭)、田中(一)、小野、	森本、本橋、佐伯、田中、大場、河原、湯浅、原、千葉、鶴見、小山、
7	34（秋）	馬術部	斉藤、松尾、田中(一)、半沢、田中(昭)、	大場、吉田、湯浅、原、千葉、
8	35（春）	馬術部	斉藤、正富、松尾、滝沢、佐合、小野、田中(一)、岡田、	千葉、小山、森、吉田、広岡、鶴見、市川、玉沢、
9	35（秋）	同好会	田中(一)、松尾、滝沢、正富、田中(昭)、斉藤、	玉沢、鶴見、小山、市川、恩田、清水、

XI　其の他年度別戦績

大　会　名	大会地	種　目	成績	選　手　名
昭和3年				
第2回北海道乗馬大会	旭　川	綜合馬術	1位	中野
		〃	2	岩垣
昭和5年				
弘前高校主催馬術大会	弘　前	団体	2位	（北大予科）岩橋帰一、藤原正武
昭和6年				
第3回全日本学生馬術選手権大会	習志野		1位	伊達宗文
東北乗馬大会	仙　台		1位	伊達宗文
第5回北海道乗馬大会	旭　川	大学専門学校対抗競技	1位	
昭和7年				
第4回全日本学生馬術選手権大会	陸軍騎兵学校		2位	伊達宗文
習志野乗馬大会	習志野	学生乗馬団体回数飛越競技	4位	本田恒康
		学生中障碍連続飛越競技	6位	伊達宗文
第6回北海道乗馬大会	旭　川	学生一般障碍	1位	植村勘一
		〃　綜合馬術	4位	伊達宗文
		全国大学高専対抗障碍飛越競技	1位	伊達宗文、本田恒康、九鬼誠之助
昭和8年				
習志野乗馬大会	習志野	学生中障碍	6位	伊達宗文
第5回全日本学生馬術選手権大会	習志野		7位	植村勘一
東北大主催馬術大会		団体	5位	伊達宗文、高杉直幹、脇田代子郎、森山武雄、大迫明徳、植村勘一
第7師団乗馬大会	旭　川	障碍	1位	吉見一郎
		〃	3位	久葉　昇
		綜合	1位	植村勘一
		〃	2位	高杉直幹
		〃	3位	吉見一郎
第7回神宮体育大会			2位	植村勘一

昭和9年				
北海道乗馬大会	旭　川	一般障碍 選手　〃 〃　〃 綜合馬術	2位 1位 3位 1位	高井久芳 高杉直幹 前川静弥 高杉直幹
全日本馬術大会			7位	渋谷周平
昭和10年				
北海道乗馬大会	旭　川	一般障碍 〃 大学高校対抗 〃	1位 4位 1位 2位	小村達雄 中尾敦司 石川正吉 菅間　威
昭和11年				
東北乗馬大会	仙　台	全国高専対抗	6位	石川正吉、西村雅吉、池田、永田敏雄
全日本学生馬術選手権大会	習志野		12位	前川静弥
北海道乗馬大会	旭　川	大学高専対抗 綜合馬術(団体)	1位	西村雅吉、石川正吉、小池栄一
仙台東京間長途騎乗大会			2位	荒野顧問
昭和12年				
全日本馬術競技大会	習志野	学生障碍 〃団体	1位 1位	石川正吉 (北大チーム)
東北学生馬術競技大会		団体	6位	桶本勝登、石川正吉、松平　悌
北海道騎乗大会	旭　川	大学高専対抗(団体) 〃　(個人) 一般障碍 〃 〃 〃	1位 1位 2位 3位 〃 〃	山下正亮、前川静弥、松平悌 山下正亮 山下正亮 石井昌長 前川静弥 池内武夫
軍旗祭25馬術大会		団体	1位	前川静弥、山下正亮、桶本勝登、高井久芳、松平　悌、石井昌長、池内武夫、小田　昇、西村雅吉、永田敏雄

昭和１４年				
全日本学生馬術選手権大会	代々木練兵場		1位	菅間　威
北海道騎乗大会	旭　川	団体	1位	菅間威、下条親、西村雅吉
明治神宮国民大会		学生中障碍	8位	菅間　威
昭和１６年				
東北乗馬大会		野外騎乗	3位	岡田光夫、小林五郎
全日本馬術大会			3位	小林五郎
昭和１７年				
全日本学生馬術選手権大会			5位	岡田光夫
明治神宮国民大会			5位	岡田光夫
昭和２９年				
第１回北海道馬術競技大会	札　幌	自馬之部 〃 貸与馬之部 〃 団　体 〃	2位 3位 1位 2位 1位 3位	大久保利彦（北嶺号） 榊原正人（北斗号） 岡本　洸 加藤　斉 北大ＯＢチーム 北大現役チーム
第９回国民体育大会	札　幌	自馬中障碍 〃　綜合馬術	4位 7位	岡田光夫（ＯＢ）（北斗号） 榊原正人（北斗号）
全日本学生馬術選手権大会	東　京	複合馬術	11位	榊原正人
昭和３０年				
第２回北海道馬術競技大会	札　幌	貸与馬の部 〃 団　体	1位 2位 1位	加藤　斉 岡本　洸 北大ＯＢチーム
第１０回国民体育大会	川　崎	綜合馬術 中障碍 〃 六段飛越 大障碍	11位 8位 11位 3位 5位	加藤　斉（北斗号） 大久保利彦（北嶺号） 榊原正人（北斗号） 宮沢　寛（北嶺号） 大久保利彦（北嶺号）
第８回全日本馬術大会		中障碍 六段飛越	4位 2位	榊原正人（北斗号） 大久保利彦（北嶺号）

昭和３２年				
第４回東日本学生馬術争覇戦	東　京	団　体	１位	樋口正明、鎌田正人、生田勝一、千葉幹夫、村山　哲、今田　哲、森本悌次、佐伯雄二、
東京馬術大会	東京パレス	特殊障碍飛越	６位	鎌田正人（北嶺号）
		六段飛越	３位	樋口正明（北嶺号）
第１０回全日本馬術大会	東京馬事公苑	乙馬場	３位	鎌田正人（洋孝号）
		中障碍（Ａ）	５位	生田勝一（北標号）
		〃　〃	８位	岡本　洸（北斗号）
		〃　（Ｂ）	８位	千葉幹夫（北楡号）
		六段飛越	２位	樋口正明（北嶺号）
		綜合馬術	５位	鎌田正人（洋孝号）
		〃	８位	岡本　洸（北斗号）
		〃	９位	千葉幹夫（北楡号）
第８回関東学生自馬大会	東京馬事公苑	綜合馬術（個人）	６位	千葉幹夫（北楡号）
		〃　〃	７位	鎌田正人（北斗号）
		〃　（団体）	２位	鎌田正人（北斗号）樋口正明（北嶺号）千葉幹夫（北楡号）
第４回北海道馬術大会	札　幌	貸与馬中障碍	１位	西村雅吉（ＯＢ）
		〃　〃	２位	本橋幹久
昭和３３年				
第５回東日本学生馬術争覇戦	東　京	団　体	１位	生田勝一、鎌田正人、樋口正明、千葉幹夫、村山　哲、森本悌次、佐伯雄二、田中紀介、本橋幹久、大場善明
第１回招待全日本女子学生馬術選手権大会	札　幌	団　体	１位	中村美幸、片山静子、佐藤典子
		個　人	２位	中村美幸
		〃	５位	佐藤典子
北海道学生馬術選手権大会	帯　広	個　人	２位	佐伯雄二
		〃	３位	森本悌次
第１３回国民体育大会	富　山	綜合馬術	１位	千葉幹夫（北楡号）
		〃	４位	鎌田正人（洋孝号）
		国体馬場	３位	鎌田正人（洋孝号）
		六段飛越	４位	生田勝一（北嶺号）
		大障碍	４位	生田勝一（北標号）

第１１回 全日本馬術大会	名古屋中京競馬場	綜合馬術	1位	鎌田正人（洋孝号）
		〃	9位	千葉幹夫（北楡号）
		乙馬場	4位	鎌田正人（洋孝号）
		中障碍(B)	11位	千葉幹夫（北楡号）
第１回全日本学生自馬選手権大会	名古屋中京競馬場	団体	4位	鎌田正人（北斗号） 生田勝一（北標号） 千葉幹夫（北楡号）
		個人障碍	2位	千葉幹夫（北楡号）
		〃 綜合	3位	千葉幹夫（北楡号）
第４回関東北女子学生馬術大会	福島	団体	1位	(北大Aチーム) 中村美幸、片山静子
		〃	2位	(北大Bチーム) 佐藤典子、高階嬉子
		個人	4位	佐藤典子
昭和３４年				
北海道学生馬術選手権大会	札幌	団体	1位	森本悌次、田中紀介、佐伯雄二、本橋幹久、大場善明
		個人	2位	本橋幹久
		〃	3位	佐伯雄二
第６回 北海道馬術大会	札幌	自馬複合馬術	1位	鎌田正人(OB)（洋孝号）
		〃 〃	3位	大場善明（北嶺号）
		〃 六段飛越	2位	佐伯雄二（北標号）
		〃 中障碍	3位	佐伯雄二（北標号）
		貸与馬中障碍	2位	千葉裕記
		婦人、少年障碍	2位	佐藤典子
		〃 〃	3位	片山静子
		老年障碍	2位	半沢道郎（OB）
		〃 〃	3位	高杉直幹（OB）
東北北海道馬術大会	札幌	団体（婦人）	2位	片山静子、佐藤典子
		個人（〃）	1位	佐藤典子
北海道団体選手権大会	帯広	団体	3位	大場善明、原 邦男、河原紀夫、湯浅正之、吉田 亨、
第５回関東北女子学生馬術大会	福島	個人	3位	佐藤典子
第１４回 国民体育大会	東京馬事公苑	自馬六段飛越	1位	森本悌次（北嶺号）
		〃 大障碍	4位	佐伯雄二（北標号）
		貸与馬中障(団体)	3位	北海道チーム （千葉裕記出場）

第12回 全日本馬術大会	東京 馬事公苑	自馬六段飛越 〃　〃 〃　中障(B) 〃　〃	5位 7位 8位 12位	森本悌次（北嶺号） 原　邦男（北標号） 鎌田正人（OB） （セントベル号） 大場善明（北嶺号）
第31回全日本学生馬術選手権大会	東　京	複合馬術	11位	本橋幹久
昭和35年				
第7回 北海道馬術大会	札　幌	自馬六段飛越 〃　複合馬術 〃　〃	1位 3位 4位	千葉裕記（北嶺号） 鎌田正人（OB） （セントベル号） 大場善明（北嶺号）
第3回招待全日本女子学生馬術大会	札　幌	個　人 〃	1位 3位	高橋嬉子 佐藤典子
東日本学生馬術争覇戦	東　京	団　体	2位	大場善明、湯浅正之、千葉裕記、鶴見好博、玉沢一晴、市川端彦
第6回関東北女子学生馬術大会	福　島	団　体	1位	佐藤典子、高橋嬉子
東北・北海道学生馬術選手権大会	札　幌	綜合馬場 〃 〃	1位 3位 4位	大場善明 千葉裕記 吉田　亨
第15回 国民体育大会	熊　本	自馬中障碍 〃　六段飛越	1位 3位	大場善明（北嶺号） 千葉裕記（北嶺号）
第13回 全日本馬術大会	岡　山	総合馬術	2位	鎌田正人(OB)（洋幸号）
第3回全日本学生自馬選手権大会	小　倉	総合馬術	12位	大場善明（北嶺号）

招待東日本学生馬術争覇戦（東京農工大主催）

（昭和３２年・３３年保管）



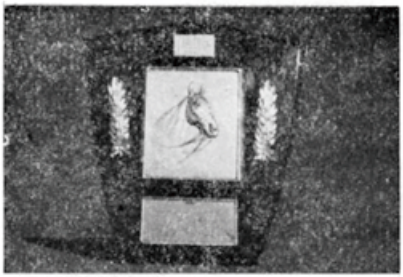
農工大学長杯



朝日新聞社杯



府中市長杯



日刊スポーツ社楯（昭和33年獲得）

関東北女子学生馬術大会（福島大主催）

（昭和３３年・３５年保管）



福島県知事楯

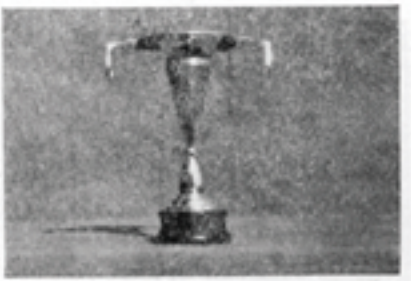


福島民友社杯

招待全日本女子学生馬術大会(北海道大主催)
(昭和33年・36年保管)



北大学長杯



銀鞍クラブ会長杯(昭和33年獲得)

国立七大学馬術定期戦
(優勝副杯)



銀鞍クラブ楯(昭和31年獲得)



日刊スポーツ社杯(昭和33年獲得)

第8回関東北学生自馬大会
(団体準優勝)



読売新聞社杯(昭和32年獲得)

第16回東北北海道学生馬術大会
(優勝副杯)



北海タイムス社杯(昭和32年獲得)

モノグラム贈呈及授与者名簿

番号	氏名	
贈	中村虎太郎（乗馬会会長）	
贈	大塚貞次郎（乗馬会副会長）	
1	沢田鶴松	
2	平山常介	
3	真鍋雅彦	
4	中野友二郎	
5	中谷勝紀	
6	三谷秋三（旧姓河崎）	
7	松本久喜	
8	岩垣泰弘	
9	酒井寛一	
10	藤井金太郎	
11	九鬼誠之助	
12	武田朝男	
13	半沢道郎	
	以上北大乗馬会	
14	永松四郎（昭和五年）	
15	藤原正武（同）（退部）	
16	岩橋帰一（同）	
17	加藤秀夫（同）	
18	愛甲慶寿家（同）	
19	東園基文（旧姓伊達宗文）（昭和七年）	
20	本田恒康（昭和七年）（退部）	
贈	永井一夫（第一代部長）（昭和七・五・七）	
21	植村勘一（昭和七・五・七）	
22	小笠原義顕（同）	
贈	杉本一也（文武会庶務）（昭和七・六・二）	
23	脇田代子郎（昭和八・四・二五）	
24	高杉直幹（同）	
25	吉見一郎（同）	
26	滋賀秀明（同）（退部）	
贈	高松正信（第二代部長）（昭和九・五・五）	
27	森山武雄（昭和九・五・五）	
28	渋谷周平（同）（退部）	
29	大迫明徳（同）	
30	福光幸彦（昭和一〇・五・三）	
31	前川静弥（同）	
32	山下正亮（同）	
33	石井昌長（同）	
34	小村達夫（同）	
35	高井久芳（昭和一一・五・二）	
36	桶本勝登（同）	
37	石川正吉（同）	
贈	黒沢亮助（第三代部長）（昭和一一・九・一六）	
38	松平悌（昭和一二・四・二七）	
39	池内武夫（同）	
40	小田昇（同）	
贈	荒野寅雄（顧問）（昭和一三・一・二二）	
41	西村雅吉（昭和一三・一・二二）	

馬術部ペナント贈呈者名簿

	氏名	部科別	ペナント号	卒業年次	贈呈年月日
	永松　四郎	農・畜(一)	二五九三	昭和七年	七・四・二四
	九鬼誠之助	農・化	同	昭和八年	八・一・二六
	半沢　道郎	理・化	同	同	同
	武田　朝男	農・畜(一)	同	同	同
	伊達　宗文	農・農	二五九四	昭和九年	九・二・一
	植村　勘一	農・畜(一)	二五九五	昭和十年	十一・二・四
	高杉　直幹	理・化	二五九六	昭和十一年	十一・一・二三
	脇田代子郎	農・化	同	同	同
	吉見　一郎	農・経	同	同	同
	大迫　明徳	理・化	同	同	同
	滋賀　秀明	医	二五九七	昭和十二年	十二・一・二三
	森山　武雄	医	同	同	同
	松本　久喜	先輩(農畜一)	二五九八	昭和六年	十三
	山下　正亮	農・畜(二)	同	昭和十三年	十三・一・二三
	前川　静弥	理・化	同	同	同
	小村　達夫	農・生	同	同	同
	高井　久芳	農・畜(一)	同	同	同
	石井　昌長	農・化	同	同	同
	桶本　勝登	農・経	同	同	同
	松平　悌	農・農	同	同	同
	黒沢　冕助	第三代部長	二五九九		十四・一・二五
	池内　武夫	農・畜(二)	同	昭和十四年	十四・一・二五
	小田　昇	農・畜(二)	同	同	十四・一・二五
	福光　幸彦	理・植	同	同	同
	西村　雅吉	理・化	二六〇〇	昭和十五年	十五・二・三
	菅間　威	農・畜(二)	同	同	同
	下条　親	農・畜(一)	同	同	同
	中尾　敦司	工・鉱	同	同	同

42 菅間　威（同）
43 永田　敏雄（同）
44 小池　栄一（同）
45 下条　親（昭和一四・四）
46 中尾　敦司（同）
47
48
49
50
51
52
53 岡田　光夫

メダル番号（戦後復活より）

番号	氏名	部科別	卒業年次
1	古谷昌司（昭26・27主）	農畜	昭和二十八年
2	下飯坂隆	農畜	同
3	渡植貞一郎	農畜	同
4	後藤義英	農獣	同
5	意野保	農畜	同
6	永井重翁	農獣	同
7	田之上家久	農水	昭和二十六年
8	斎藤善一	農畜	昭和二十八年
9	長井晴男（旧姓梶谷）	農水	同
10	佐藤巌	農畜	同
11	鈴木敏夫	農畜	同
12	鎌田正人（旧姓榊原）（昭28・29主）	農畜（獣）	昭和三十年（昭和三十四年）
13	正富広元	理勤	昭和三十年
14	大久保利彦（昭30主）	獣	昭和三十一年
15	岡本洸	農生	同
16	加藤昌太郎	理物	同
17	加藤斉	獣	同
18	斎藤成俊	農経	同
19	千田哲生	獣	同
20	宮沢寛（昭31主）	農林産	昭和三十二年
21	荒川清	経	同
22	榎本幸八	理植	同
23	岡部満雄	農畜	同
24	斎藤実	経	同

※記録保存不備の為モノグラム・ペナント・メダルに関する記録を不本意ながら完全なものとすることができなかったことを深くお詫びいたします。

□馬術部モノグラムについて□

従来モノグラムは他の賞品メダルの類とその性質を異にし、云はば馬術部の有巧章とも称すべきものであって、これを授与された者の光栄は非常に大きいと云うべきであろう。ここにおいてその栄を受けた者はその意義を熟慮し、モノグラムの精神的価値を低減しない様努めるべきであると思う。

（資料は十年誌より）

□馬術部ペナントについて□

馬術部ペナントは、昭和七年一月二十九日開催の幹事会二回にわ

たる協議の結果、馬術部卒業生に贈る記念品とし、また在部当時を偲ぶよき思い出のメモリアルとしてその作製が決議された。そして当時の幹事及び先輩は、かく年々の記念品を統一して、馬術部ペナントなる記念品を定めこれに次第に歴史的価値を持たせて一層意義深い贈物としようと計った。但し馬術部卒業生全員に之を贈る事は部の財政上許されない為、このペナントを馬術部モノグラム授与者に対する卒業記念品と限定した。そしてその卒業生とは、学部卒業まで部員としてその責を全うした者である。但しこれは原則であり、例へば大いに部の為に尽し、モノグラムを授与された部員で真に同情すべき理由の為に退学する場合（または単に退部する場合）、或いは不幸にして在学中に友に先立った者等その事情を斟酌して定める事ができる。また部長顧問等の役員退職にあたって贈呈する事もできる。そしてペナントにはその卒業年号を皇紀年代で書き入れるのである。

尚馬術部にはその原品となる文武会馬術部の年を定め、皇紀二五九〇年の年号を入れたペナントを保存し、これと共に年号用教字原形（半紙に描いてある）を代々の主任が保管する慣しである。

尚この製作は三越運動部（札幌支店運動部扱ひ）が当っている。

（資料は十年誌より）　（牧竜子責）

北大馬術部規約

第一章　総　則

第一条　本部は北海道大学体育会馬術部と称す。

第二条　本部はその事ム所を本学第一農場内馬術部々室に置き自馬の飼育管理をなし練習場として馬場を管理する。

第三条　本部は馬術の向上、運動精神の涵養に努めると共に、併せて馬事に関する研究を行い、広く馬事思想の普及に務むるを以て目的とす。

第二章　部　員

第四条　本部は体育会通常会員中の有志を以て組織す。

第五条　部員は本部則並びにその他の諸規定を守らなければならない。

第六条　部員は入部時に部員名簿に所定事項を記入し、入部費を納入し、又毎月部費として所定の額を納めなければならない。

第七条　凡て部員たる者正当な理由なくして退部することは許されない。退部の承認は主将がこれを行う。

第八条　部員にして健康上の理由その他やむを得ない事情により六ヶ月以上部員としての活動不能となりし者はこれを休部としてその間部費は所定の額の半分とする。

前項の休部者が六ヵ月を経ずとも復部することが出来る。但しこの間休部とはみなさない。

第九条　如何なる場合に於ても部員にその義務の遂行能わざる

事由の生ぜし場合はその旨を書面にて主将に報告し、その承認を得ねばならない。

第十条　男子部員は厩舎当番の任につく義務を負う。

第十一条　部員は部室及び厩舎内外に於てよく火の用心、清潔整頓に留意し各自その義務を全うせねばならない。

第十二条　部室に於ける飲酒、勝負事はこれを禁止する。

第三章　厩舎当番

第十三条　自馬及び諸設備の日常の管理のため当番をおく。

第十四条　当番は馬の健康、部室厩舎内外の整理にたえず留意し飼付、日誌の記入その他定められた任務遂行に万全を期さなければならない。

第十五条　当番は引継なくして帰ることは出来ない。

第四章　練習及競技会

第十六条　練習方法、時間、場所は主将が決定指示する。

第十七条　練習に際しては主将の定めたところのトレーナー並びに上級生の指示に従って行動し勝手な行動は許されない。

第十八条　競技会出場の選手は主将がこれを決定する。

第五章　顧問及役員

第十九条　本部は学内教官及びOBより部長一名顧問若干名を推薦する。

第二十条　左の役員を置く

主将、副将。マネージャー、会計、飼育、庶務、

主将は部員総会に於て選出される。

役員の任免は主将が決定する。

第二十一条　役員会は本部運営のための執行機関である。役員会は一致して部運営の指針をたて正常なる部の運営、部内の秩序の維持、馬匹の健康増進に努力しなければならない。

第六章　経　費

第二十二条　本部の経費は左に掲ぐるを以てす。

1　内部費及び部費

2　体育会より補助金

3　その他不定時収入

第七章　諸　則

第二十三条　部員総会及び役員会は主将が必要に応じて召集する。

第二十四条　部員として義務を怠たり部内の秩序、運営に重大な影響を及ぼす行為のあったとき役員会で会議し、主将採決により除名処分をも行う。

第二十五条　本部に二年以上在部し、卒業時に部員としての義務を全うせし者には卒業記念品としてメダルを送り、裏面に番号を彫り、そのリストを部が保管する。

第八章　附　則

第三十六条　本部々則の改正変更は総会の議決によるにあらざれば行うことを得ず。

第三十七条　本部々則は昭和三十二年四月一日より之を施行する。

住　所　録　（昭和36年3月現在）

名前		現住所	備考
永井一夫	第1代部長	北大名誉教授 札幌市南2条西12丁目	〒2—2435
高松正信	第2代部長	北大名誉教授 東京都世田ヶ谷区松原町4の294	
黒沢亮助	第3代部長	北大名誉教授 札幌市北1条西22丁目	3—1057
太秦康光	現部長	北大理学部教授 札幌市南1条西21丁目	3—0781

名前	卒業年度 学部	現住所	備考
中野友二郎	昭和 4 農農	県立長岡農業高校（長岡市曲新町 475 新潟県高田市南城町1の33	
平山常介	4 工機	飯野産業K・K 舞鶴送船所 舞鶴市北吸 966	
真鍋雅彦	5 農畜	長崎市役所 長崎県諫早市原口町 675	
中谷勝紀	5 工機	飯野重工業舞鶴工場長 東京都杉並区清水町 216	
間克市	6 農畜	農林省十勝種畜牧場 十勝国河東郡音更町	
岩垣駿夫	6 農農	福島県園芸試験場長 福島県信夫郡平野村	
河崎秋三（昭5・主任）	6 農畜	東京都競馬組合八王子牧場 東京都八王子市高倉町1の553	（八王子）191
松本久喜	6 農畜	北大農学部教授 札幌郡手稲町富丘 195	現馬術部顧問
永松四郎	7 農畜	新生興業K K 東京都太田区千束町 771	

藤居金太郎	7 農 化	実業 ブラジルサンパウロ	
武田朝男	8 農 畜	千葉畜産工業KK専務 千葉市幕張町千葉畜産工業KK内	千葉(3)9161
半沢道郎	8 理 化	北大農学部教授 札幌市北6条西12丁目	現顧問 2—2286
東園基文 (伊達宗文) (昭7主)	9 農 農	宮内庁侍従職参事 東京都渋谷区八幡通2の23	231—1111 461—6567
田畑武夫	10 医 婦	田畑産婦人科病院 札幌市南5条西2丁目	
植村勘一 (昭8主)	10 農 畜	山本マーク工業KK取締役 東京都目黒区鷹番町 45	2821—4766 712—0390
久葉昇	10 農 畜	兵庫農科大学助教授 兵庫県多紀郡城篠山町郡家875の1	
本田桓康	10 工 機	プレス工業KK技術部長 東京都千代田区紀尾井町4の11	043—3511 332—5524
加藤英夫	11 医 産	朝日生命札幌支社 札幌市南大通り西7丁目	
大迫明徳	11 理 化	ケミ•ダイズ•リミテッド 藤沢工場長 東京都世田ヶ谷区世田ヶ谷3の2560	211—2631
吉見一郎	11 農 経	雪印パーラー株式会社 東京都杉並区神戸町 114	271—7271 398—6927
高杉直幹 (昭9主)	11 理 化	札幌テレビ 札幌市北7条西13丁目	4—3720
脇田代子郎 (昭10主)	11 農 化	モンサント化成工業KK四日市工場加工部長 四日市大字赤城2の4	
滋賀秀明 (昭11主)	12 医	大同製鋼診療所長 東京都港区芝白金三光町 364	901—4169 441—7844
渋谷周平	12 農 畜	玉薬品興業KK 東京都渋谷区代々木1の22	291—5887

前野正久	12 農畜	森永乳業中央研究所長 東京都目黒区中目黒1の921	712—9706
黒沢良雄	12 農経	日本長期信用銀行 茅ヶ崎市小和田 4333	231—3391 066—8676
森山武雄	12 医	国立岩木療養所長 青森県南津軽郡浪岡町	
石井昌長	13 農化	東京通商産業局石岡アルコール工場長 茨城県石岡市元真池 273	
小笠原義顕	13 工電	日本電機KK玉川製造所電波工業部 川崎市宿河原2223	721—4201 048—3609
小村達夫	13 農生	岡山大学理学部教授 岡山市津島岡山大学同上内	
桶本勝登	13 農経	人事院東京地方事務所長 東京都杉並区上荻窪1—197	581—1731 371—7741
高井久芳	13 農畜	北海道仙美里農業講習所 北海道中川郡本別町仙美里同上内	
前川静弥	13 理化	日本製鋼室蘭製作所 室蘭市茶津町社宅番外79号	
松平悌	13 農農	日本ビール目黒工場製麦課長 東京都渋谷区景近町 561	
山下正亮 (昭12主)	13 農畜	広島村農業共済組合家畜診療所主任 札幌郡広島村字広島	
池内武夫 (昭13主)	14 農畜	中央競馬会総務部長 東京都世田ヶ谷若林町 266	591—5271 414—0361
小田晃也	14 農畜	実業 静岡県熱海市伊豆山182番澄旅館内	熱海 3441
中尾敦司	15 工鉱	住友ビル大日本鉱業KK 東京都杉並区大宮前2の605	
西村雅吉 (昭14主)	15 理化	北大理学部助教授 札幌市南21条西11丁目	

木谷清喜貞	15 農 実	瓦土建自営 金沢市古寺町12	
秋吉照忠	16 農 林	北海道合板協会東京事務所 (東京新銀座ビル内) 東京都杉並区馬橋2の225	
石井和彦 (昭15主)	16 農 畜	鳥取大学農学部助教授 鳥取市湯所町い住宅2号	
伊関悦郎	16 工 鉱	函館水産高校 函館市宮前町 213	
河原清作	16 工 土	小樽市忍路郡塩谷村	
熊沢洸	16 農 実	北東農産化学工業KK 十勝国河東郡士幌市街同上内	
関義人	16 医	関内科小児科医院 秋田県湯沢市字西松沢 392	
高木史郎	16 工 鉱	県立水戸工業高校 茨城県東茨城郡茨城町駒渡1	
中曾根賢	16 農 実	道庁農務部畜産課 札幌市菊水上町46	
半沢宏	16 工 機	北大工学部助教授 札幌市北6条西12丁目	2—2286
福光幸彦	17 医	福光小児科 札幌市南7条西4丁目	3—1843
岡田光夫 (昭16主)	17 工 土	札幌市役所建設部土木課長 札幌市南7条西23丁目	
白取善三	17 農 実	大成軽ブロックKK取締役社長 弘前市大字薬師堂字熊本19の2	
山根乙彦	17 農 畜	鳥取大学農学部助教授 鳥取市立川町2丁目県営アパート1号	
大戸進	18 農 林	三井木材砂川工場 北海道空知郡砂川市北本町 三井木材社宅	

平井宏知	18 工 電	日本電機ＫＫ 放送器工業部 技術部放送機器課 東京都町田市南大谷字玉川学園641	721—4201
小池栄一	18 工 土	北海道電力ＫＫ土木部計画課 札幌市南14西９	5—1111
稲葉恵一	19 農 化	日本油脂ＫＫ但工場 大阪府高槻市南園町 337	
大手英夫	19 理 化	日華油脂ＫＫ銀座営業所 東京都新宿区西大久保２の219	571—5681
福岡邦泰	19 農 農	北海道総務部開発企画本部 開発調査課計画係長 札幌市北10条西１丁目	
小林正英	20 農 畜	東京都江東地区農業改良普及所長 東京都中野区鷺の宮１の293	651—0167 385—6241
羽島栄治	20 工 土	日本国有鉄道大阪工事局 停車場課長 兵庫県西宮市松山町国鉄甲子園 アパート	
宇津見千之助	21 農 畜	栃木県小山市横町2206	
宮崎利昭	22 工 機	第一物産ＫＫ機械輸出部 在ペルー（東京都北多摩郡狛江 町和泉2618三友住宅155号	
和田晴	22 農 畜	帯広家畜保健衛生所長 帯広市西１北１	
武田裕幸	25 理 地	国際航業ＫＫ研究室 東京都北多摩郡国立町西区 251 国際航業社宅	
田之上家久	26 農 水	北大水産学部 函館市千代ケ岱町１の１梅川方	
後藤義英	28 農 獣	札幌市西保健所 札幌円山西町２の97	
斎藤善一	28 農 畜	北大農学部 札幌市南５条西15丁目	
佐藤厳	28 農 畜	自営 札幌市南16西８の580	

下飯坂　隆	28 農　畜	北大日高実験牧場 北海道静内郡静内町御園	
鈴木敏夫	28 農　畜	美幌高校 網走郡美幌町東2条北1丁目森方	
渡植貞一郎	28 農　畜	北大農学部 札幌市北26条東2丁目	
鳥野　保	28 農　畜	北海道農業試験場根室支場 北海道標津郡中標津町道農根室支場内	
永井重翁	28 農　獣	雪印乳業KK久慈工場 岩手県久慈市中の橋	
梶谷晴男	28 農　水	大阪魚市場KK 牧岡市四条町四条	
古谷昌司 (昭26・27主)	28 農　畜	古谷製菓東京工場 埼玉県浦和市別所西野台 1210	浦和 (0881) 5273
吉本　正	28 農　畜	宮城農業試験場 仙台市原町小田原桝江29同上内	
福島　務	29 医	北大産婦人科教室 札幌市琴似町 225	
阿部晃一郎	30 工　鉱	住友金属鉱山鴻之舞鉱業所 紋別市鴻之舞清明寮	
鎌田正人 (榊原) (昭28・29主)	30(34) 農畜(獣)	鎌田牧場 北海道浦河郡浦河町西幌別	
田中　浩	30 工　治	神戸市葺合区神戸製鋼所溶接棒事業部 同上内	
正富広之	30 理　動	北大理学部動物学教室 札幌市北8条西18丁目	
石塚和夫	31 獣	北海道新冠郡新冠村農業共済組合 同上内	
大久保利彦 (昭30主)	31 獣	雪印乳業KK 岩見沢市8条西2丁目工藤幸市方	1094

岡本　洸	31 農　生	十条製紙ＫＫ研究所 東京都文京区雑司ケ谷61-十条製紙雑司ケ谷寮	911—5101(内90) 941—4728
加藤　斉	31 獣	神戸市立王字動物園 神戸市兵庫区熊野町５丁目19の５	
斎藤成俊	31 農　経	北海道信用農協連岩見沢支所 岩見沢市４条西５丁目　及川方	
加藤昌太郎	31 理　物	防大応用物理学教室 横須賀防衛大学内	浦賀 740 { 内 449
千田哲生	31 獣	日本中央競馬会保健研究所 東京都世田ケ谷区弦巻町３の621	421—1951
小長谷善高	水　産	ＮＨＫＴＶニュースカメラマン 札幌市南21条西８丁目　源新方	
荒川　清	32 経	札幌トヨタ自動車ＫＫ 札幌市南８条西24丁目	
榎本幸人	32 理　植	北大理学部植物学教室 札幌市北大理学部植物学教室s108	学内 { 264 255
岡部満雄	32 農　畜	道庁　宗谷支庁	
斎藤　実	32 経	不二越鋼材工業ＫＫ 福井市下北野町	
宮沢　寛 (昭31主)	32 農　林産	日本揮発油（四日市市） 三重県四日市市同上内	
伊藤　亮	33 獣	農林省中国種畜牧場 広島県賀茂郡河内町入野同上内	
乾　直道	33 理　動	徳島大学医学部病理学教室 徳島局区内徳島蔵本町同上内	
栗原　康	33 工　鉱	広島鉱山保安監督部支所 山口県宇部市上宇部猿田 公務員住宅１号	
松田　桜	33 医　薬	札医大病院薬局 札幌市北15条西８	

渡辺俊弘	33 工 応化	北海道炭鉱汽船ＫＫ石炭化学研究所 東京都杉並区天沼１の292 荻窪北友寮	 391—2607
柴田久男	34 工 電	北電滝川発電所建設所電機課 滝川市西町107 北電和光寮	
生田勝一 (昭33主)	34 経	読売新聞社美唄通信部 美唄市東１南１ 登喜和旅館内 同上内	
菅原照雄	34 文 哲	北大文学部研究室 札幌市北18西４	
樋口正明 (昭32主)	34 法	東京都品川区役所税務課 東京都世田ヶ谷区上馬町２の13	 491—0151 (内15)
千葉幹夫	34 獣	中央競馬会中山競馬診療所 船橋市古作町210 中山寮	 073—3511
土井敦	34 農 畜	ホクレン農業協同組合連合会酪農部 札幌市北４条西１丁目 同上内	
山本智	34 水 増	沓形中学（利尻郡利尻町沓形 字日ノ出町 同上内	
長沢美幸 (中村)	34 経	 東京都中野区鷺の宮６の782	 991—4149
村山哲	34 経	北海道電力ＫＫ北見支店営業課 北見市美芳町 北友寮	
粟津健太郎	35 水 増	岡山県水産試験場 岡山県玉島市乙島	 玉島 2529
片山静子	35 文 英	静修高校講師 札幌市北２条西23丁目	
佐伯雄二	35 農 畜	森永乳業ＫＫ目黒工場製造課 東京都太田区馬込東２の1113	712—3141 771—7820
田中紀介	35 農 林産	木材会社 静岡県清水市宮代町６	
長谷川邦夫	35 法	岩崎通信機ＫＫ総務課 武蔵野市吉祥寺290 浅原方	 391—2231 0222—2787

本橋幹久	35 農畜	トウサン牧場 在ブラジル(鳥取市上町20の1)	
森本悌次 (昭34主)	35 農林産	松下木材KK開発部 東京都葛飾区新宿区3の593	281—2546 691—5270
大場善明 (昭35主)	36 文国史	北大文学部 札幌市北17条西2丁目	
吉田亨	36 工衛	高砂熱学工業KK技術部 東京都中野区鷺宮1の201	251—7121
湯浅正之	36 農畜	伊藤忠商事KK 東京都武蔵市西窪字耕地 伊藤忠商事独身寮	
河原紀夫	36 理地鉱	アジア航空測量KK 東京都芝田村町5の7 同上内	
稲垣修一	36 理化	大同製鋼KK 愛知県知多郡横須賀町大字加木屋字南鹿持18大同製鋼知多寮内	加木屋126
佐藤典子	36 医医	北大医学部 札幌市北7条西13丁目	
高階嬉子	36 医医	北大医学部 札幌市北23条西4丁目 長岡方 (鎌倉市十二所三三)	

氏名	学年 学部	現住所	帰省先
小山毅	4 教育	札幌市北8条西9丁目 桑園寮	東京都太田区田園調布 1の1322
玉沢一晴	〃 医薬	〃 南16条西8丁目	同左
千葉祐記 (昭36主)	〃 農畜	〃 北8条西1丁目 上野方	空知郡上砂川町朝陽台 2の28
鶴見好博	〃 理化	〃 北8条西9丁目 桑園寮	静岡市太田町43
広岡暢夫	〃 農畜	〃 北6条西12丁目 稲垣方	寝屋川市香里淀見ヶ丘964 (156)
森弘聿	〃 工精	〃 北17条西3丁目 岩田方	愛知県碧海郡高浜町 高浜段留66
四柳智久	〃 医薬	〃 南18条西1丁目 広崎方	神戸市須磨区須磨浦通 4の89

伊藤公一	4 医医	〃 南25条西12丁目	同左
木塚信次	〃 農畜	〃 北18条西3丁目 直江方	下関市長府町前八幡
市川瑞彦（昭37主）	3 現物	〃 北7条西13丁目 進修寮	上川郡美瑛町西町4の1
岡田征至	〃 法	〃 北17条西3丁目 小南方	根室市松本町4の1
恩田正臣	〃 理類	〃 北8条西12丁目 会津寮	郡馬県山田郡毛里田町 矢田堀
小出秀達	〃 医医	〃 南4条西8丁目 奥山方	大阪市阿部野区美章園 1の88
実吉峯郎	〃 医薬	〃 北8条西5丁目 本多方	東京都渋谷区長谷戸町46
清水洋	〃 農畜	〃 北12条西2丁目 汝羊寮	大阪府泉南郡岬町淡輪865
志水一允	〃 農林産	〃 北29条西8丁目 荏井方	東京都江東区深川三好町 2の16
田中セツ子	〃 農工	〃 北8条西1丁目 北楡荘	〃 目黒区柿の木坂824
原重一	〃 農農	〃 北14条西3丁目 喜多方	〃 文京区大塚坂下町99 941—3301
堀川芳男	〃 農畜	〃	〃 中野区上高田1の96
宮崎健	〃 文	〃 北32条西4丁目 谷年正方	大阪府南河内郡狭山町 西池尻437
高木佑太	2 理	札幌市北17条西8丁目 恵迪寮	愛知県瀬戸市西蔵所町3
小島武	〃 〃	〃	茨城県土浦市東崎町754
三浦清一郎	〃 理	〃	土浦市荒川沖591
八木正己	〃 理	〃 北14条東1丁目 武蔵方	夕張郡長沼町24区
荒木伸也	〃 水	〃 北13条西2丁目 塚田方	熊本県下益城郡城南町 隈庄532
田村雅英	〃 理	〃 南大通り西17丁目 山崎方	函館市杉並町46
寺江則子	〃 〃	〃 大通り西23丁目	浦河町大通り5

長谷川　一　子	〃　〃	札幌市北8条西1丁目 北楡荘	
守　屋　　正	1　理類	札幌市旭町11—63 中村方	横浜市神奈川区上反坂 2の22の1
大　木　誠　示	〃　理類	札幌市北7西7 山崎信次郎方	室蘭市常盤町61番地
吉　田　孝　男	〃　理類	札幌市南19西9 大久保方	兵庫県伊丹市本町5丁目 506
滝　沢　迪　子	〃　文類	札幌市北11西5 ④—9394	学内 398
滝　沢　南海雄	〃　理類	札幌市北26西8 林越子方	旭川市外神楽町419
水　野　佑　亮	〃　理類	札幌市北15条東4丁目 加藤方	名古屋市東区東外堀町 2の3
大　北　順　二	〃　理類	札幌市南4西22 321 松田方	大阪府池田市西本町2791
岡　沢　尹　大	〃　理類	札幌市南19西5	京都市左京区下鴨北園町42
内　藤　充　裕	〃　理類	札幌市北13西2 塚田一明方	名古屋市瑞穂区白竜町 1の50
松　永　武　彦	〃　理類	恵　迪　寮	静岡県焼津市港町225
横　田　　肇	〃　理類	恵　迪　寮	名古屋市千種区池園町 2の21
野　田　行　文	〃　理類	札幌市南6西16 小倉文作方	熊本市京町2の104
牧　　竜　子	〃　理類	札幌市南1西19 ③ 0575	同　左
小　川　東　二	〃　文類	札幌市南4西23 立花方	岐阜県大垣市神田町 2丁目
菅　野　　弘	〃　理類	札幌市北24東3 棚橋方	東京都世田ヶ谷区玉川奥 沢町3の61
桂　　直　樹	〃　理類	札幌市北5東25 竹田方	大阪市東住区矢田住道町 864
長谷川　辰　雄	〃　水産	恵　迪　寮	名古屋市中村区則武町 5の39
宮　下　紀　子	4　農生	札幌市北23西4 長岡方	長野郡上田市丸堀6247
入　沢　雄　機	1　水産	恵　迪　寮	埼玉県大宮市吉敷町 2の60

荻原雅典	1 文類	札幌市南4西20 宝鏡方	高松市兵庫町
入江喜美子	2 理類	札幌市北27東4	同左
御坊田賢一	1 理類	恵迪寮	

物故者

氏名	卒業年度 学部
辻村憲吉	元配属将校
沢田鶴松	昭4. 工 鉱
愛甲慶寿家	6. 農 実
九鬼誠之助	8. 農 化昭6.主任
岩崎帰一	10. 工 電
富堅稔	14. 農 実
永田敏雄	在学中死去
下条親	14. 農 畜1
石川正吉	在学中死去
管間威	15. 農 畜
佐藤誠亀	15. 農 実
山本義則	15. 理 化
佐藤誠	15. 農 実
永倉寛	16. 工 土
坂崎愛男	16. 農 実
小林誠平	17 農 化 昭17主将
福本途夫	17 理 化
山村亨	19. 農 農
安達信一	23. 医 医

※ この名簿 、北海道大学同窓会名簿、工学部名簿、農学部名簿、在京ＯＢ会名簿、及び部保存の鞍数表を参考にして努めて改正、補充したつもりですが、不備な点、或いは変更等ありましたら当部宛御一報下さるようおねがい致します。 （責 小島武）

編集後記

馬術部三十年史作成の声を聞いてから、数年後にしてようやく我が部の生立ちを一つのものにまとめ上げることが出来た。

その間の経過については、昭和三十年頃より計画があったと聞くが、具体的には、同三十二年、当時の樋口主将のもとに編集委員が設けられ、年史作成の準備に当ることになった。その後、試合やその他の仕事に追われ、資料も思うように集まらぬ状態のまま、私が一応この仕事を引継ぐことになったのであるが、そのような事情で実際に手をつけたのは昭和三十四年末になり、当初の計画より大部遅れることになった。そして、新たに、三浦小島両兄を編集子に迎えて、資料の整理、編集計画等についての準備に着手した次第である。しかし、戦後の馬術部中断や部記録管理の不備等に加えて、手綱をペシに持ちかえての幼稚な編集者であった為、予想外の種々の困難に逢い、予定通り進まなかった。その為原稿の依頼やその他の点で、皆様に度々御迷惑をおかけしたことをお詫びしたい。昭和三十六年始め、どうやら原稿も七割近く集まり、編集内容についても大体の見通しがついたが、学窓を去るに当たり、責任を感じつつ私の後任として、大場、三浦両兄にお願いして現在に至った訳である。

本誌の内容については、前半にいわゆる年報について、主に各年度の主将の方々に執筆をお願いして、或る程度の客観性を持たせ、次の、往年の試合参加記等で、当時の部生活の一端なりを紹介するよう努めた。また後半の現在の馬術部活動については、やや重きをおいた感がないでもないが、三十年目の馬術部を知って戴く上にも、更に現部員諸君の要望もあって、敢てスペースを取った次第である。従って、必ずしも一般的年史の性格に欠ける点があるかも知れないが、この中から、馬術部史の一片なりを読みとって戴ければ幸いである。

本誌の発刊に当っては、私の中途半端な仕事を厭わず引継がれ、完成に迄こぎつけた大場、三浦両兄を始め、直接間接に、物心両面について援助下さった諸先生、先輩、並びに部員諸君の御尽力によるものである。ここであらためて、年史完成を喜ぶOBの一人として感謝致します。

（吉田　亨）

◆　◆

私が吉田君に編集の任を申し出たのが35年の秋。正式に引継いだのが暮かあるいは年が明けてからだったかもしれない。良くもこんな大任を憶面もなく吉田君に申し出たものだと今思えば赤面の至り。この年史編集の企画がなされたのが私の入学年度。昨秋、卒業を間近かに控えた吉田君の仕事を受継いで、当初の意図通りのものを完成出来るのも、今となっては私一人のみ。こんな自•惚•れが私をしてこの編集にたずさわる破目になった次第。引受けたものの山積された原稿用紙にビックリ。良くもこんなに集めたものと驚く。これでも未着の原稿ありと云う。それを何んとか執筆者の御気嫌を伺い乍ら集めるのが当面の仕事。私は敢えてあせらず、持久戦(?)に出るも全く能率悪し。先に御送附いただいた方々から、「どこかの国のお役所の如き督•促•状しきり。すでに原稿送ったがまだ出来ないのか！」とのお言葉。まさに穴があったら入りたし。空しく原稿用紙の山とニラメッコする事数ケ月。これじゃいかんとビッチを上げたのが、今年の夏だったろうか。三浦君と編集方針について検討し、出来るだけ当初の意図通りのものに出来るよう、前任者吉田君の構

想を三浦君に伝え、実際には三浦君がやってくれたのが大部分だったろう。結局、私はこの仕事を吉田君に申し出ており乍ら、ただ単に三浦君に橋渡しした恰好になって、吉田君、三浦君には申し訳ない。ただこの間、私のやった編集分に関して註釈を加えると次の通り。

㈠歴代部長の原稿を載せたかったが、三代目部長、黒沢先生が折悪く健康思わしくなく原稿をいただけなかったのは残念である。

㈡「年報」の内昭和17・18・20・21・33年度の項は諸々の条件で原稿がもらえず、我々が代筆したので不備な点もあると思われる。なお19年度の小林氏の稿は17年度を我々が希望したのであるが、内容から見て19年度に入れさせてもらった。

㈢「自馬紹介」に於ては、すでに玉沢君にこの稿を依頼してから、足かけ二年になるので現在の北大繋養馬とかなり異なっている。具体的に述べると文中、北源、北斗、北標、北春の四馬はすでに繋養しておらず、代って北楊、北翔、コウセイの三頭となっている。

―以上―

（大場善明）

資金獲得の経過

三十年誌発刊の企画は、かなり以前から、着手されていたのですが、それに要する金額の問題に関しては、35年の春、原稿が集まり始めた頃始めて、それでは資金は、ということになり、36年一月中旬に役員会を開き、そこで資金集めの方法を検討したのですが、当初の見積りでは八万円ということでしたので、映画会を二回主催すれば、楽観的観測から二月初旬と、五月中旬に催すことで、その時は一応落着いたのです。しかし二月初旬の映画会の純益も、えん麦に跡片もなく消え、賛否両論の意見のあった広告掲載に止むなく踏切り、春休みを利用して市内の商社を部員一同、広告集めに奔走して、三万円余の広告代。その内、予算額は八万円から、十二万円に上がり、五月の映画会の利潤もえん麦に変わって、もう部員では、如何ともし難く、八月に、樋口先輩に相談して、東京の先輩方の商社をまわって一万円。同時に、斎藤、樋口両先輩を通して、先輩各位に趣意書を配布していただき、御寄附を仰ぐことになり、資金だけは我々の手でという、計画は脆くも崩れてしまったのでした。その後競馬場でのアルバイト等の金を集めて、十月も末に、六万円の額に達しましたので、それをもって、札幌印刷部へ原稿を持参したのでした。その後、印刷は順調に進んで、年内に発刊可能な状態にまでこぎつけましたが、装禎や紙質の点で資金面に負担が加わり、当初の十二万円より上まわり（結局総額は十四万円）、資金面では、先輩各位には多大の御迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、斎藤、樋口両先輩の御尽力に深く謝意を表します。又千葉、市川両兄の御助力を感謝します。（志水一九）

何もわからぬ一年坊主から始めた編集も最後のしめくくりをつけて、しんがりの責務を果すことができた。こうして雪の舞う師走の札幌に完成の喜びを夢みて歩く。それは曲りなりにも、創造の喜びであり、義務を全うしたという感慨でもあり、又意地を張り通したことへの誇りでもあろう。

三十年史発刊の事業は、その活動の中ですべての馬術部員の協力を得ることができた。吉田、大場両先輩を初め、参加されたすべての人々に厚く謝意を表する次第であります。

（三浦清一郎）

昭和三十六年十二月二十日　印刷
昭和三十七年一月一日　発行

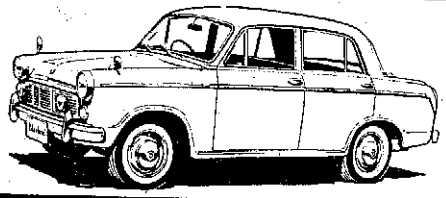
【非売品】

発行責任者　北海道大学体育会馬術部
札幌市北八条西五丁目

編集責任者　吉田亨

印刷所　札幌印刷部
札幌市東苗穂町四八四番地

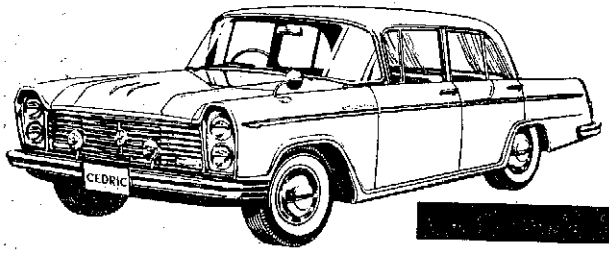
ニッサン セドリック



5人乗	45馬力	1000cc	¥ 719,000
	55馬力	1200cc	¥ 729,000
	〃	〃 デラックス	¥ 783,000

ダットサン ブルーバード

6人乗	スタンダード	(71馬力)	¥ 913,000
	デラックス	(〃)	¥ 1,086,000
	カスタム	(88馬力)	¥ 1,321,000



国際レベルを行く

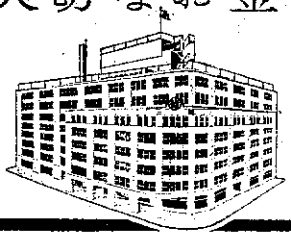
画期的乗用車！

NISSAN 北海道日産自動車株式会社

札幌市北六条西五丁目　T ②5121 (代)

室蘭・苫小牧・滝川・小樽・倶知安・美唄・岩見沢・東京

大切なお金で上手なお買物



札幌
三越
4局3131（大代表）

＊新しい……
ホーム
ドリンクス

チョットすっぱくて
ウットリする程おいしい！
それに牛乳の
栄養がたっぷり……
5〜6倍にうすめて
みんなで楽しめます。

雪印ラクチス

札幌市白石町中央53

庄内歯科医院

歯科医師　庄　内　貞　夫

T ③二五〇四

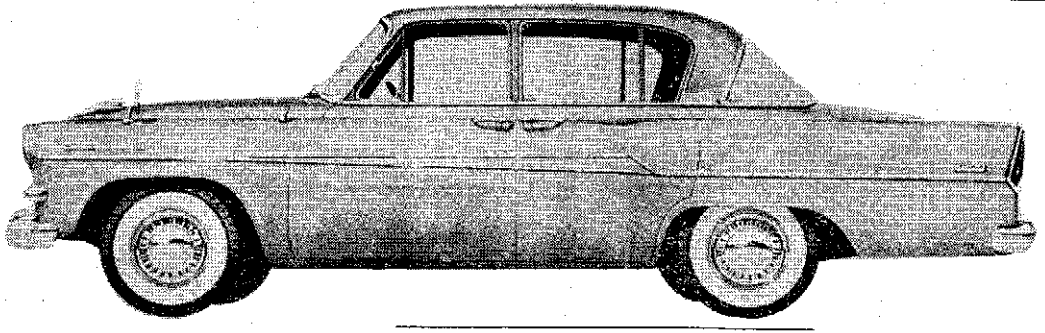
より豪華に　より美しく

トヨペット・クラウンにいちだんと強い力とスピードをプラスしたクラウン1900シリーズが誕生…使いやすさもグンと高まりました。しかも物品税の改正を機会に魅力ある新価格を採用しました。

クラウン1900　新設計1900cc.80馬力エンジンの搭載で発進加速性能がいちじるしく向上しました。

クラウン1900デラックス　90馬力エンジンと国産車で唯一のオーバードライブ（自動増速装置）をそなえ、最高時速は国際級の140キロに達します。

クラウン1900　デラックス〈トルコン付〉…クラウン1900デラックスに、クラッチのいらない自動変速装置を搭載した国産最高級サルーンです。



トヨペット
クラウン1900
クラウン1900デラックス

札幌トヨタ自動車株式会社

本社　札幌市北5条東2丁目　T(代)②3181②8191　支店 室蘭・滝川　営業所 小樽・琴似・岩見沢

創業90年

お買物は
皆様の㊕で

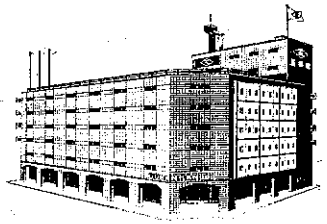
東京でも御利用出来る ㊕ の商品券

札幌
㊕ 今井

電話大代表⑤1151

道内各支店 …… 小樽・函館・旭川・室蘭

明るいサービス 楽しいお買物



贈って喜ばれる
商品券

御便利な小口商品券も御利用下さいませ

五

札幌
五番舘

電話 代表 (5)0151番

北海道紙及パルプ工業協議会

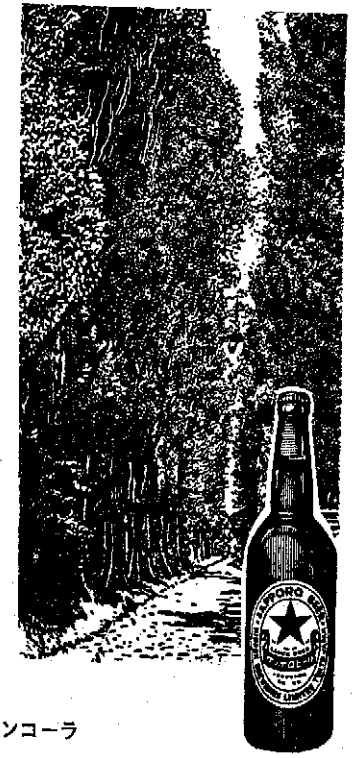
王子製紙株式会社苫小牧工場札幌事務所

札幌市北一条西一丁目　TeI ② 1200 ② 4953

王子製紙株式会社苫小牧工場
国策パルプ工業株式会社旭川工場
十条製紙株式会社釧路工場
北日本製紙株式会社江別工場
本州製紙株式会社釧路工場
大昭和製紙株式会社白老工場
北海製紙株式会社小樽工場
函館工場
札幌製紙株式会社琴似工場
北見パルプ株式会社北見工場

北緯45度の味！

●世界のビール三大名産地●
ミュンヘン
サッポロ
ミルウォーキー



★ 本場の味 サッポロビール

姉妹品　リボンシトロン・リボンジュース・リボンコーラ

エレクトロニクスの

綜合メーカー

NEC 日本電氣株式會社

本　　社　東京都港区芝三田四国町２番地
札幌支社　札幌市大通西５丁目１１番地
電　　話　札幌５局０１７１～４（大五ビル）

温く

強い

オヤコわた

白崎繊維工業株式会社
・直販店・
白石店 白石駅前 T ②3788
美園店 美園一区 T ④6682

あらゆる
スポーツ用品
スポーツ服装

書籍・文具・楽器・運動具
札幌十字街 富貴堂
TEL 3—195

PRESS

営業種目　鉄道車輌用・自動車用
プレス製品・その他の製品

プレス工業株式会社

ress

社長　山本藤助

本社　川崎市塩浜町1番地　電話川崎③3511(代)

藤沢工場　藤沢市遠藤字石川境2100番地　電話藤沢②7191～2

いつでも フレッシュ



●保存のきく粉末クリーム・・・

いつでも　どこでも　新鮮なクリームの味と香りが楽しめるよう　森永では粉末クリームを発売しました　ゆたかなコクとマイルドな味が　ご家庭でもお手軽にご利用いただけます

コーヒー 紅茶に

クリープ

森永 インスタント クリーム

森永乳業